
羽

れいちえる

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

羽

【Nコード】

N1679I

【作者名】

れいちえる

【あらすじ】

今よりもはるか未来のお話。巨大な陸地が空に浮き、人の背中には羽がありました。空の陸地は「ハイランド」、大地は「アース」と呼ばれています。アースに住む羽のある人と、羽のない人はお互いに助け合って生きていましたが、ハイランドとアースは関わり過ぎないようにしていました。

これはアースのとある小さな町に生まれた一人の少年のお話です。その少年は、他の人と少しだけ、けどとても違っていました。いつまでも変わらないように思われていた世界が、少しずつ、し

かし大きく変わっていきます。

その中で生きる、やさしく臆病な少年が触れた物事の、ほんの少しを、みなさまへ。

【第三章】墜ちたハイランド「ゴンドワナ」が各地に侵攻を始めた。幻獣を従えた「ゴンドワナ」の冷酷な攻撃に屈したエマ。止めることができなかったウインは、今一度立ち向かうために決意を新たにする。

そして「ゴンドワナ」との戦いの火蓋が切って落とされた。

第一羽 「片羽の少年」

この世界には二種類の人間がいる。

羽のあるものと、羽のないもの。

もともと人間には羽が無かったという。だけどはるか昔に羽のある人が生まれ、そして今のようになった。空を見上げれば鳥が気ままに飛び交うだけでなく、鳥よりもずっと大きな、羽を持つ人間も忙しそうに空を行く。

僕にも羽がある。だけど空を飛ぶことはできない。

空を飛べる羽ありがうらやましくはないか、と聞かれたら、当然うらやましいと答える。だけど僕はこれでもいい。たとえ片羽で飛べないからといって、人として幸せでないということではないから。

僕は、これだってかまわない。

「くやしかったら飛んで見せるよ、飛べない羽あり」

「羽があるのに歩いてるのかよ」。羽ありっていうより、羽蟻だな」

空を見上げる少年を、上空から同じくらいの年の少年たちが見下ろし、蔑んでいる。地に立つ少年は何かを言いたそうだが、うまく言葉にできないようでくやしそうに口を固く結んでいた。口を閉ざした少年は涙をこぼし始めた。肩が震えるのを懸命にこらえている。「やーいやーい、泣き虫羽蟻、涙でおぼれて死んじまえ」

うれしそうにはやし立てる。自分の残酷さを理解していない子供特有の無邪気。それに耐えかねた少年が後ろを向いて涙を拭い、歩いてその場を去っていった。歩く少年の背にも、空を舞う少年たちと同じように羽があった。ただし左だけ。振り返って空を見上げるが、これでは叶わない。

「おかえりなさい、ウイン」

ぼんやり空を見つめたかったから出かけていった野原で、深く心を傷つけて帰ってきた。口を閉ざしたままの息子を見て、彼の母も寂しげな顔をしたがすぐにいつものようにやさしい顔で息子を出迎え、抱きよせた。

「…やめてよ」

「どうして？」

「何でもない。やめてったら…」

明確な答えを持たないウインと呼ばれた少年は、ただ母の優しさも拒絶し一人になりたかった。

母の腕から離れ、自分の部屋に入りベッドにうつぶせになった。背中の中だけの羽がぱたと動く。右を下にして横になり、左の羽を広げて自分の目の前にかざし、右手でその風切羽の先端に触れる。

「どうして片方だけなんだろう」
ベッドの上で彼がつぶやいたのは、ただ一言だけだった。

いつしか少年は眠っていた。扉を叩く音で目が覚め、母の声で今がいつごろなのかを知った。部屋を出てテーブルにつき、家族が一同にそろう。

父、母、祖父、祖母、兄、姉、そしてウイン。全部で7人。家族構成としては普通。多いこともなく、少ないこともない。大抵この家庭もこのくらいの人数だ。和やかな食卓で、笑顔も多い。

「母なる大地、父なる天よ。今日もまた我らが一日を過ごし、ともに集まることができたこと、一日の糧を与えられたことを感謝し、祈りをささげます。どうか、また明日も変わらぬ喜びに満ちた日であることを」

祖母の落ち着いた祝詞を、家族全員が手を合わせ、目を瞑って真摯に聞く。毎日毎日特に変わることがないが、だからこそこの祈りがあってやっと普通の一日が終わる。それが当然。祈りがすみ、食事に手を付け始めた。

「…まーたイジメられてきたわね、ウイン」

「…そんなことないよ」

「ウソ言っちゃって。目が真っ赤なのは何？」

「やめなさいエディ」

父に制され、姉が物足りなさそうな顔で、はーい、と返事をした。

「お前は弱いなあ。どうせまた羽ありのガキたちだろ？ 石でも投げてやればいいじゃんか」

「…やりかえされたらイヤだもん。たくさんいるし…」

「だけど羽ありだろ？ 俺たちの方が身体強いんだから平気だって」「ジユド兄が特別強いんだって。ウインってひ弱じゃん。見るからに」

兄と姉が母に叱られる。だが悪びれる様子もなく笑っていた。もともと悪意や傷つけるつもりで言っていない。いつもいじめられ

心を痛めている弟を励まし、元気付けようとしただけ。それをわかってるので家族の誰もが語気を荒げることはない。

食事が済んでも家族がすぐにばらばらになつて部屋に行つてしまふことはない。何をするでもなく皆が一緒にいる。時々笑い声がある。だが少年の顔はまだ晴れない。そんな少年が口を開いた。

「…どうして、僕には片方しか羽がないの？」

「片方だつて、あるんだからいいじゃんか」

「そういうことじゃないよ…。みんなと同じがよかったのに…」

ウィン以外の家族には羽のあるものはいない。

羽ありと羽ありの子は羽あり。

羽なしと羽なしの子は羽なし。

羽なしと羽ありの子はどちらになるかはわからない。

二世代にわたつて羽なし同士の家系であるにもかかわらず、ウィンのように羽ありとして生まれる子供は極めて珍しい。この町でも100年以上そのような子供は生まれてこなかった。そして彼のように、片翼の者は見られたことがない。また羽ありは羽なしよりも身体、特に足腰が弱いのが普通だ。だが少年の身体は羽がある以外、羽なしと同じだった。

「羽ありで、羽なし。それでいいじゃろ」

「…結局どっちでもないんでしょ。やだよ、そんなの」

「いいんだよ。儂らにはウィンでしかないから」

祖父と祖母の言葉は、少年に言葉を詰まらせた。

「…わかつてるよ、そんなこと…」

しばらくあつた無言の後、顔を背けて吐き出すようにそう言った。

「ウインが寝てるって言うから、俺たち入れなかったんだぞ。これから一人で早く帰ってきてても占領するなよ」

「あたしはお母さんの手伝いがあつたから気にしないけど。ジュド兄だつてもうじき気にしなくてよくなるじゃない」

「それはそれでな」

子供たちは全員同じ部屋で寝ている。一番上の兄はもうそろそろ独り立ちをしなくてはいけない時期だ。三人一緒にいられなくなる時が来るのも遠くはない。

「ねえ」

少年が二人の方に視線を向けないまま声を出した。

「…おかしいよね、やっぱり。気になるよね」

「何が？」

「僕の背中」

窓からの月明かりの中、兄と姉がお互いの顔を見合わせしばらくして答えた。

「うん」

弟が二人に背を向けたまま、小さくなった。

「どうして俺たちと何も変わらないのに、小さくなってんだ？」

横にしていた身体を起こし、兄が続けた。

姉がベッドから下りて弟のベッドに腰を掛ける。

「あたしは、好きだよ。ウインの羽。とってもかわいい。片方だつて、飛べなくなつて。」

…両方あつても、片方だけでも、どっちだって一緒だもん」

弟の羽をやさしくなでる。羽がぱたと少しだけ動き、姉の手を

払った。彼女は嫌な顔一つせず、弟の背中にむかつて微笑んだ。

「羽なしか羽ありか、どっちかしかダメだ。誰がそんなこと言ったんだ？」

そんなことを言うやつがおかしいのさ。だから、今度は石のひとつでも投げつけてやれって。お前らとどこが違う！ ってな。」

兄が自分の右腕を左腕で叩き、威勢よく弟に檄を飛ばす。姉は弟のベッドの上で両膝を抱え、窓の外を見ながら穏やかに言う。

「きつと羽ありなのにくくなのじゃない人は、いつもお空から見下ろしてるから偉くなった気になってるのね。せっかく立派で素敵な羽を持つてるのに。」

…絶対そうならないウインは本当に素敵だと思っな」

あいかわらず弟は兄と姉の方に顔を向けようとしない。むしろ一層頑なになってしまった。

「…まーた泣いてんのか」
「泣き虫ウインちゃん」

とてもやさしい声だった。

第二羽 「幼い日の記憶」

「おい、置いていこうぜ。俺たちの方が速いもん」

「そーだな。じゃ、後になつてもいいからちゃんと来いよ」

羽ありの男の子たちが羽なしの女の子を残して早々と飛び去った。

「…歩いてじゃ行けないくせに」

不満そうな顔で見送る。

背中 of 羽で空を舞う。ただそれだけで自分達が選ばれた民と感じる者は多い。それは子供において特に顕著だった。そして空を舞う羽をねたむ。それは子供において特に顕著だった。

だが、地で踊る足をうらやむ羽ありはいない。それがどういうことなのか、考えたこともないからだ。

— 2 —

「ウイン、お遣いに行つてきてもらえる？」

母から買い物かごとメモを預かり、少年は外に出た。以前は母と行っていたのだが、今は一人で行くようになった。

「あら、ウインちゃん。今日はまだいい野菜たくさんあるわよ。買つていけない？」

「おう、片羽のポーズ。今日は謝天祭だろ。親父さんとじーさんにいい酒買つて行ってやれよ。安くしとくからよ」

店々で声をかけられる。少年も笑顔で答え、用事のある店で買い物をしていった。とても普通の、どこの町でも見かける光景だ。

彼の住む町には羽ありはあまり暮らしていない。農地が広がる地方のほとんどがそうだ。純粹に羽なしの方が向いている。自分たちの得手不得手は長い歴史の中で自然と理解され、そして忘れ去られた。

「謝天祭、か…」

買い物帰りの道、幼い日のことを思い出していた。

少年が生まれた時、彼は奇跡の子と呼ばれた。そして奇異の目で見られた。人々の視線を幼い少年は理解していなかった。そして自分の翼が左だけしかないということも意識していなかった。

母に手を引かれ町に出て、店の外で買い物から戻る母を待っていた時だった。その日も謝天祭の日だった。

「おいお前、羽ありなのか？ 羽なしなのか？ どっちだよ」

唐突に声をかけられた。彼よりもずっと年上で、強気で不遜な感じのする少年が立っていた。その少年の背中にはとても立派な羽があった。まるで一枚の絵画かのように神々しく、そして美しかった。さらにその上を見上げると、太陽を遮ってはいるが巨大な陸地が町の上に浮いている。

「羽あり？ 羽なし？」

それまで外に出るときは必ず母と一緒に、そしてそれまで家族から聞かなかった言葉を聞いて少年は尋ねた。

「ばかだな、お前本当に。どっちかって言ったら羽なしだな」

そう言い捨てて羽を広げて飛び去った。彼が飛んでいった先には空に浮かぶ乗り物があった。車輪も、風車のような羽根車もついていない。それに乗り込むとどこかに行ってしまった。

「お母さん。羽あり、羽なしってなに？」

「買い物を終えた母と家に帰る途中、どうしても気になっていたことを聞いた。」

「背中に羽のある人が羽あり、羽のない人が羽なしよ」

「羽ありには羽があつて、羽なしには羽がない。それだけ？」

「そうよ」

「それじゃあ僕は？」

「そうね… そういう分け方をしたら羽ありかしら」

「でも、僕はばかだから羽なしだって…」

「……」

「羽ありと羽なしって、羽があるのとないのの違いじゃないの？」

「…そうね。そういう分け方ができないって教えてくれているのが、あなたじゃないかしら。ね、ウィン」

「若い少年は母のその言葉をよくわからない様子で、ただ悲しい、割り切れない顔をして聞いていた。」

……

…

「…僕は、結局どっちなんだろう」

「いまだ答えを得ていない少年が空を見上げて歩きながらつぶやく。視線の先にはとても大きな陸地があり、農地に巨大な影を落としていた。」

「この世界にある二種の陸地、すなわち海に囲まれたアースと、空

に漂うハイランド。アースには羽ありと羽なしがともに暮らすが、ハイランドには羽ありしか居ないという。行く手段が羽なしにはないからだ。だが、アースの羽ありもハイランドに行くことはほとんどない。

「空に住むのは、そんなに威張れることなのかね」

太陽を遮り、巨大な日陰を作っている陸地を見上げ、麦わら帽子を被った羽なしの老農夫がぽつりとつぶやいた。ハイランドとアースの関係は決してよくない。

第三羽 「いつか来る時」

月が高く上り、辺りをやさしく照らし出す。皆が我が家に戻ってそれぞれの窓から暖かな光が漏れ出した。街路に伸びるやわらかな影は、ささやかで静かな、共にいるだけという贅沢を道行く人々に伝え、その足取りをわずかに速めた。耳を澄ませばどこからか笑い声が聞こえる。今日という日を祝福し、変わらぬはずの毎日がいつまでも続くことを祈るかのように。

— 3 —

「謝天祭はいい。いい酒を開けてもステイナに何も言われない」

「ほんにほんに。あれは小さな頃から意固地な娘じゃったからな。ダメと言いだしたら絶対聞かん。父なる天様様じゃ」

カップを手にウインの祖父と父が上機嫌に話している。苦笑いを浮かべ母が持ち帰った食器を片付けている。それを姉と弟が手伝う。兄は祖父と父の近くで小さなカップを手に、祖父が注ぐ酒を受けていた。ウインが買ってきた物だ。

「明日からは自身の力で生きていくのじゃぞ。じゃが、父なる天、母なる大地に感謝の心を忘れることなく、な」

謝天祭を境にその年十九になった男児は育った家を離れ、自分で生計を立てていく。たった一人で暮らす者、家族から離れたもの同士とともに暮らす者。暮らし方は異なれど一人前の大人となるために生きていく。

それがこの町の決まり。

「…アンタもあと六年か」

手伝いながら居間を見ていた姉が顔を戻し、まだ背の低い弟を見た。寂しそうな顔だった。

果実の香りに満ちた息を大きく吐いて、少年の兄は深々と頭を垂れた。

子供たちの部屋。すでに兄の荷物は片付けられ、残っているのは彼の寝具だけだった。いつもならすでに全員寝ている時間だというのに、まだ誰一人として眠りにつくことなく語り合っていた。

うれしかったこと
たのしかったこと
いがみあったこと
つまらなかったこと

そのどれもが懐かしく、温かった。

「謝天祭なんか来なければよかったのに」
弟が言う。

「そうだよね……」

それに同意する妹。

「…何言ってるんだ」

窓から差し込む月明かりは、兄のようにやさしかった。

少年の兄は、明日からはもういない。大人となるため翼を広げ、巣立っていく。

家庭を支える母と、家族を担う父。両者への感謝を胸に。

収穫の時期に行われる謝天祭は、農作物をはぐくむ陽の光をたたえる行事。この世界の多くの土地で行われているが、地域ごとに行われる時期は異なり、年によっても前後する。祝い方にも町々に特徴があり、お祭り騒ぎが夜通し続くところもあるが、ウインの暮らす町では特別派手な催し物が行われることはない。日が落ちた頃教会などの集会場に人々が集まり、祈る。そして各家庭で作った料理を持ち寄り、それを皆にふるまい、同じ町でともに生きていることを感謝しあう。ささやかな行事だった。

そして、育った子供たちを送り出す節目。

子のある家庭には寂しくもあり、だが受け入れなくてはいけない大切な儀式。皆がそうして長い長い年月をやってきた。子供たちにとっても辛く、そして期待に胸を膨らませる時。これからもずっと、人々はそうやって生きていく。

兄の去った部屋を見て、ウインは何か言いたかったが、言葉が出なかった。

寂しさもあった。激励の気持ちもあった。

そして、いつか自分にも来るその時への不安の思いも強かった。

そつと自分の片方だけの羽に手を伸ばし、そつと触れた。

第四羽 「丘で見上げて」

ハイランドがその巨大な影をアースの町に落とし、去っていく。浮き島を見上げ、少年たちが目を輝かせている。走って追いかける子供もいる。

「すっげー！」

「待て待てー！」

「オレ、いつか絶対あそこに行くんだ！ で、あそこで暮らすんだ！ きつとすっげー気持ちいいんだろーなー！ 雲になったみたい

に、どこでも自由にいけるんだ！」
夢に目を輝かせる子供たちとどこまでも対照的な大人たちの目。それは特に注意を払うでもなく、興味もない。洗濯物が乾かない、作物に陽が当たらないのは困る、早く太陽を遮らないところに行かないか。

みんなが忘れてしまった。

— 4 —

ハイランドの移動速度は決して遅くない。しかし陸地自体がとても巨大で、速度を落とさないままでも通過するのに一時間以上かかる。大抵浮き島が町の上空にあるとき、それは速度を落とす。そして訪れる。物資の調達や観光をして、気まぐれにハイランドの技術を与えていった。

浮き島に住む羽あり達はとても知能が高いと言う。彼らが作る様

々な機械と、それによつて成り立つ、大地の人々とは異なる彼らの生活。体力に劣る彼らは食料の生産も機械に行わせ、自分達を補っていた。

「アースの羽ありとは違うわ。わたしたちはわたしたちだけでやっていけるもの。体力だけの不粋な羽なしと生きていくなんて考えられない」

それが多くのハイランドの羽ありの声。たとえ口にしなくとも、伝わる。

ハイランドの技術は高く、その恩恵にあずかるアースの町も多数あった。しかし押し並べて傲岸な浮き島の民に対する不快感が強かった。それぞれを隔てる空の距離より深いかもしれない溝が、天と大地の間に横たわる。それは、かつて見ていたものを見えなくするのに十分だった。

片羽の少年の住む町にもハイランドがたびたび通り過ぎていく。農耕地方であるこの町は維持するだけの技師がいなかったため、ハイランドの技術はほとんど提供されていない。むしろ逆で、ハイランドが農耕におけるデータを採取し、それを浮き島の機械に取り入れていくことが多かった。

一方的な搾取と考える住人は少なくなかった。実害を伴うことはなかったので争いになることもなかったが、お互いに交流がなされることもなく、いたって事務的な関係だった。また、年にいくつかのハイランドが上空を通り過ぎるのだが、特に収穫時期の謝天祭にあわせるようにして現れる浮き島があった。それをみなが嫌っていた。

「アンタたちに感謝してるわけじゃないのに……」

父なる天に感謝を示す祭事のときに訪れる、望まぬ天の来訪者。ずれた両者の思いが重なり合う時は、おそろくない。

少年の兄が家を離れたその日、少年は丘の上に立つ一本だけの木の木陰に座って浮き島を見ていた。特に何も考えていない。ただ浮き島が視線の先にあるだけで、ぼうつと座っていた。収穫の頃合とはいえ日中はまだ少し暑い。広げた羽で扇ぐ。

「すごいな…」

どれだけ時間が経ったのだろう。唐突に声に出した。

「あんなに大きな陸地が浮いているなんて…」

当たり前すぎて大人たちは改めてそれを考えたりしない。自分が生まれるはるか昔から、羽のある人が生まれるよりも以前からそうだったと言う。

どうして空が青いのか。なぜ陽が暖かいのか。それと同じで考えることは無駄であり、ただそうである。答えなど要らない。それだけで十分。いつしか誰もがそうなっていた。

ハイランドが速度を上げ始めた。だが巨大なその浮き島が落とす影が町を覆わなくなるまでもうしばらくかかりそうだった。少年の視界には小さな点がいくつか動いていた。その点は浮き島を目指していた。それらには羽ばたく羽がない。かつて彼が見たものと同じだろう。

「どうして飛べるのかな…」

ぼうつとして、答えを期待しているわけではない感じだった。そして無意識に視線が下がる。視界にあったのは少年の持つ白い羽。何も言わずにため息をつくと再び空に目を向け、去っていく陸地を見送った。それを追って飛び去る点はひとつ、またひとつと空の大地へと消えていった。

町を覆う影が完全に離れた頃、少年は腰を上げて少し伸びをした。

両手を上に伸ばすのと同時に、背中の翼も大きく広がる。さあっと強くない風がそよぐ。

「…あなたが、噂の子ね」

突然声をかけられ、驚いたようだった。きよろきよろと見渡す少年の右手、立っているところよりも少しだけ下ったところに一人の女性と、彼女に手を引かれたまだ小さな子供がいた。二人とも羽なしだった。

「驚かせてしまったかしら、ごめんなさい。だけど、あんまりきれいだったから声をかけずにいられなくて。…最近この町に越してきたの。夫の仕事の関係でね。夫は羽ありなんだけど、少し前に怪我で飛べなくなってしまった。たまたま仕事には差し支えないけど、とても落ち込んでいて…」

突然身の上話をされて、少年は少しだけ困った顔をした。あまり視線をあわせようとしない。

「だけど、あなたに会えてよかったわ」

逸らしていた視線を思わず合わせてしまった。羽なしの女性は微笑みながら片羽の少年を見ていた。

「あなたは生まれつき片羽で、飛べないんですって？ 悩んでるでしょう。だけど、あなたの翼はとってもきれい。それはきっと、あなたが真っ直ぐできれいな心をしているからね。

…そう。たとえ飛べなくなってしまうても、あの人はあの人。決して変わるものじゃない」

少し無言ができた。僕は、と少年が言いかけたが、羽なしの女性が彼女の子を抱き上げて続けた。

「あなたのきれいな羽、大切にしておいてね」

その笑顔を見て、少年は言いかけた言葉を飲み込み、代わりに礼を言つて家路に着いた。少年の代わりに親子が木陰に立ち、彼の背中を見送る。

「本当にきれいな羽……。あの人も、生きていたらきつと……。飛ぶ必要なんか……」

葉擦れの音がさわやかな丘の上で、抱き上げられた羽なしの子供がぬれた母の頬をなでた。

第五羽 「冬の農地で」

「おい、こつちあつたぞー」

「ほんとー？ あ、すごーい。こんなにたくさん湧いてるのはじめて見るー。おい、こつちよー」

声の主は空に浮かぶ二つの小さな人影。まだ少年と少女の区別のはつきりしない十歳前後の喉から出る響きが枯れ草の間をすり抜けた。その音の流れをさかのぼるように草間の影から道具を担いだ子供達が現れ進んでいく。

「よーし、はじめー！」

号令と共にその手に持つ道具で地を穿っていった。

— 5 —

そこは町の農地の一角だった。地からほのかに煙がたゆたっている。いまだ冬の寒さが厳しいこの時期、この地域で見られる風物詩の一つであった。何人かの子供達の手でその煙の立つ地面が掘り返されていき、乾いた大地に少しずつ穴が開いていく。よくみると確かに農地は乾いているのだが子供達のいる辺りだけ草は枯れきっていない。

「おい、このアワホヅツ、中にホシジルシがいるぞ」

「ほんとだー、珍しいね。そんなにあつたかいのかな」

アワホヅツとはこのあたりでは決して珍しくない雑草の一種で、冬には枯れてしまう一年草。茎の中心がその名の通りに筒になって

いる。そしてその茎の中に時々越冬するために昆虫達がこもることがある。この地から立つ煙は折れたアワホツツの茎から立ち上っていた。

「おーい、ホシジルシー。そこから出てって春を呼んでこーい」

男子の一人が虫が息を潜めて耐えているところを、筒の外側から指で弾いて無理やり起こそうとする。ホシジルシは春先から秋の終わりごろまで幅広く見られ、その背中には星に似た模様を持つ小さな甲虫だ。ホシジルシが見かけられ始める頃が春の種まきの時期と重なるため、ホシジルシは春の使いと呼ばれていた。

「やめなよ、かわいそうだよ。まだ寒いよ」

その少年の背中には他の子供達と異なり羽があった。空に浮かんで地に立つ子供を呼び寄せた二人のように。

ただし、片羽。

「なんだよウィン、だったらお前が呼んでくれるのかよ」

「きやははは、むりよ、むりむり。かたっぽじゃこんな風ふうに風に乘れないもん」

空から地から、少年に言葉が刺さる。しかし少年は何も言わずに耐え忍んだ。

「はいはい、もういいだろ。さっさと掘る掘る。たくさんみつけないと作らなきゃ」

一番年長と思われる地を踏みしめる少年が場を取り仕切り、子供達はめいめいが持つ道具で地面を掘り返していった。空を舞う二人の子供は次の煙の立つ場所を探して宙を行き来していた。

掘り始めてしばらくすると地面の様子が変わってきた。少しずつ少しずつ湿り気が増し、掘り返す土が重たくなっていく。

「出てきたよ！」

確認のためにもう一度一番深い部分を掘ってみるとじんわりと水が染み出してきた。

「よし、もうちょっとだ。もっと広げていくぞ」

掛け声と共に子供達がせっせと穴を掘り広げていく。地を踏みしめる足腰が物を言う。

穴を掘り始めて一時間くらいしたところだった。子供達は皆ズボンの裾を膝までまくり、靴を脱いで作業していた。誰の足も水に浸かっている。こんな時期では非常に辛い作業だろうと思われるが、子供達の誰一人としてそのような顔をしていない。子供達が立つ水面からは煙が上がっていて、彼らの顔はほんのり汗ばんでいた。

「このくらいでいいだろう。それじゃあ次に行くぞー。チコリとドマとリーフェンで仕上げを頼むよ。おい、アハト、ユーリ、今度はどうちだー？」

子供達が上がった後、なみなみと湯をたたえたその穴は深さが大人の膝丈ほどの小さな池になっていた。三人を残して一個小隊が次へと向かっていく。この地域は地下水が豊かで、一部が温水となっている。大抵はこのような浅い部分にまで上がってこないのも無闇に掘り返したところで小さな貯水池にもなることは無い。だが冬の時期だけは別だ。根の深いアワホツツの茎から立ち上る湯煙と、周囲と異なりわずかに目立つ緑が教えてくれる。上から見ればよくわかる。

春が来る前から農地の手入れを始めるこの地域、広い枯れ草模様の中での作業は非常に身にこたえるもの。ところどころに子供達が作る温泉がなければとても続けられないだろう。

いくつかの泉を作った後だった。今日の作業を終えて、子供達が背の高い枯れ草の間で遊んでいる。この一個小隊のほかにも部隊はいるが農地はとても広大で、一日や二日で泉を作っていく作業が終わるようなものではない。それに遊びたい盛りの子供達がずっと仕事をしていたらわけもなく、今日の分が終われば後は自由にしようとしていた。

ウインの部隊は鬼ごっこをしていた。鬼ごっこと言っても視界は草に覆われ、お互いがどこにいるかもわからない。そこで鬼は空の子と協力して相手を探すのだ。搜索隊の羽ありから身を潜め、追跡者の羽なしから逃げる。高度な遊びに羽あり羽なし関わらず夢中になった。

「ねえ、ウイン。一緒に逃げよ？ オレが周りに注意するからウインは上見てて」

羽なしの男の子が共同作戦を提案する。ウインと居るとなかなか捕まらない、またはウインが鬼だと空からの目がなくても捕まってしまうと言う奇妙なジンクスがあるからだ。さすがに常勝ではないが。

二人で鬼を警戒し、空の目をかいくぐりながら逃げ延びる。だがやはり子供であるので集中力も長い時間は続かない。しばらくすると疲れが見えてきた。ウインが空を、もう一人が周囲を見張りながら鬼から逃げていた。

「あ！ やった、安全地帯発見！」

相方が声を上げる。疲れてきた二人にはこの上ない朗報で、そこから向かう歩調が自然と早まる。それと同時に周囲への注意が途切れた。

視界の草が切れたと思った次の瞬間には友達の姿が消えていた。次いで自分の足が地面を捕らえる感覚がなくなり、そのまま下へと転げ落ちていった。

「……うー」

体を起こして辺りを見る。周りが土の壁で覆われ、空が少し小さくなっていた。どうやら地割れに落ちてしまったようだった。地震であつたり、地下水が枯渇し出来た空間に地盤が崩落したためであつたりと、原因は定かではないが広大な農地の中、まれにこのような地割れができる。

作つた温泉のところでは鬼に捕まらないというルールがあつた。当然温泉の周囲は草が刈り取られて土地が開けている。草がないから安全地帯だと思い込んだために、そしてまれにしか出来ないと言うこともあつて、二人の子供は落とし穴にかかってしまった。

落ちた時にあちこち体を打っていて痛みが走るがたいしたことはなかった。先に落ちた友達を探すと、すぐ近くに倒れていた。意識はある。抱え起こすと悲鳴をあげた。

「痛い、痛い！ 足が痛い…… 立てないよ、歩けないよお」

痛みと怖さから泣きじゃくる友達を前に、ウィンも自分がどうしたらいいのかわからなくなっていた。穴の底は日の光も届かず、冬の寒さをそのまま残していた。

声を上げて助けを呼ぶが、誰かが気付いて穴をのぞきこむような様子は全くない。不安を押さえきれずに右往左往する彼のかじかんだ両手は胸のあたりで握られていた。上を見上げれば狭くはなつたが空が見える。下を見ると足を抱えて転がったまま泣く友達と、自分の左だけの白い羽が視界に入った。

「なんで飛べないんだ」

くやしそうに吐き捨てると握る手に力が入った。そして彼らを囲む土壁を見る。

「ウイン、無理だよ… 止めときなよ…」

何をしようとしているのか察した少年は、泥で汚れた白い羽に向けて言った。だがしばらく迷っていた片羽の少年は上を見上げ、息を吐いた。

「…無理じゃない」

自分に言い聞かせるように言った後、壁と向かい合う。

「助けを呼んでくるよ、待っててリーフェン」

少し震える声で倒れている友達に声をかけ、固い土壁に手をかけた。崩れることはない。そのままよじ登っていく。

それを見つめる羽なしの少年は痛みと不安に耐え、友達の片方だけの翼に祈りをかけていた。

第六羽 「少年の勇氣」

「子供達は今日も元気。何より、何より」

大きくため息を付いた後、靴を脱ぎ膝まで裾を捲くつた羽なしの農夫が呟いた。両足は湯に浸かっていた。彼が足を休めていた泉の周囲には背の高い枯れ草は無く、広く開けていた。代わりに小さな小山が数ヶ所あつて、木枯らしが吹くとその山からさらさらと音を立てて乾いた葉が舞つていく。

「さて、と。そろそろ続きをしますかね」

腰を上げて濡れた足を拭き、口元にマスク代わりのスカーフを巻き、帽子を被る。丈夫な作業靴を履いて歩き出し、少し離れたところにおいてあつた道具を手にとつた。その先は大きな三日月形をしており、立つた姿勢で持つとその三日月が丁度草の根元に来るように柄の部分^へが曲げられて調整されていた。

ブウン、と唸るような音がすると、先ほどまで鈍色をしていた三日月の縁^へがかすかに光っている。それを使って非常に軽い手さばきで農夫は背の高い枯れ草を刈つていった。

子供達の高らかな笑い声が風となつて、草むらの間をすり抜けていく。

「この子は誰が何と言おうと、私とハミルの子です」

羽なしと羽なしの子は、羽なし。その律を破り生まれてきた片羽の子を目にした誰もが妻の不義を疑った。だがこの町に生まれた大抵の女子は、男子と異なりこの町から離れることなく成人し家庭を持つ。幼い頃からずっと知られたステイナは、道理にそむくことを決してしない、はつきりとした女だった。器量もよいステイナに好意を寄せる男は少なくなかったことも事実だったが、彼女は皆を信じ、そして皆も彼女を信じた。

その赤子はウィンと名付けられ、他の兄弟と変わりなく育てられた。羽ありとしてではなく、そして羽なしとしてでもなく。

ひとりの子供として家族の愛をその身に受けて。

……

…

高い土の壁を必死に登る。途中までは順調に登っていたのだが、やはり高くなるにつれて顔に浮かぶ疲労の色が濃くなっていく。日中たくさん穴を掘っていたことも併せてみれば、それほど時を経たずして、少年の腕に残った力が自身の重さを支えられなくなることは明らかだった。

真上に進むだけならば比較的容易だっただろう。だが地上がもともと農地だけあって上に行くにしたがって柔らかくなり、崩れる箇所が現れた。左の羽を広げて壁の土を払う。土の奥に隠された固そうな場所を探して横に移動しながら上を目指す。体力も時間も浪費される一方だった。

結局頂上までたどり着く前に少年の腕力は限界に達した。壁にしがみついていることがやっと。残りあとわずか。子供の背丈くらいの距離なのだが、見上げる者には途方も無い道のりに見えた。そして手の届く範囲の土はどこも崩れやすく、加えて腕は痺れてこれ以上上がることが出来ない。

できることは、空に向かって大きく声を上げ続けることだけ。ここまで登ってくればきつと届くはずと信じて助けを呼び続けた。空からも見えるようにと、もともと白かった薄汚れた片羽を精一杯広げる。本当に今にも落ちてしまいそうだった。崩れやすい土壌の中でほんの少しだけ固い、不安定なわずかな部分に身を委ねるしかない状況は、肩で息をしている少年の体力と心を容赦なく削り取っていた。

実際はわずかな時間だったかもしれない。しかし少年にとって極めて長い、永遠とも言えるような過酷な期間が過ぎていく。目を閉じたまま幾度も幾度も叫び続け、だめかもしれないという弱音を振り払い続け、近くの誰かが見つけてくれることを祈り続けた。

「ウインだ！ みんな！ 誰か！ 大人の人を呼んできて！ ウインが地割れに落ちたよ！」

空から子供の声が響き渡る。地の裂け目に引つかかった少年には、必死に続けた自分の叫び声しか聞こえていなかった。息継ぎのために声が途切れた時、初めて自分の方へ声が近づいていることに気がついた。

…

…

「やっぱりあなたはお母さんの子、お父さんの子。良く頑張ったわ」
白く美しく輝いていた羽も泥まみれにし、身体のあちこちに擦り傷や打撲を作ってきた。だがその代わり、怪我をした友達を助けることができた。

我が子の勇気を称えない母があるうか。怖かった、と泣く息子をなだめ、日の暮れた寒空の下で冷えた体に着せて帰路につく。たまたま家にいて一緒にいてきた姉が、家につくまでの間ずっと、弟の汚れてしまった羽の羽繕いをしてくれていた。

家族に包まれ、皆に愛され。時に心無い無邪気に打たれながらも、強く根付かせ育つ若木。

少年は少しずつ葉を広げる。いつかたくましい大樹となる日を夢見て。

第七羽 「燃える岩山」

「落ちるぞ!!」

冬の終わりの頃だった。その時はまだ昼間で、少々寒かったがたくさんの人が外に出ていた。一人の大人があげた大声に、周囲の人間すべてが驚き、あたりを見渡した。

「あ! あそこ! たいへん!」

一人の羽ありの女性が屋根ぐらいの高さにまで飛び上がり、農地の上空を指差す。羽ありも羽なしも、すべての人間の視線がそちらに向いた。

――

大きな岩の塊が徐々に高度を落としていく。必死に速度を落とす、アースに突っ込まないようなるべく水平を維持しようとしていた。できることならば、以前のように空へと戻ろうと。だが、叶わないそれを悟った者達が次々と離れていく。無数の羽を持たない小さな点があわてるように飛び去った。まもなくして地と天が揺れ、わずかな間を置いてものすごい轟音が響き渡った。

はるか昔に空へと旅立ち、それがいつまでも続くかと思われていた浮き島が、誰も知ることがないほどの時を経て、大地へと帰った。その光景を目にしていた人々は、かつて空にあった物を毛嫌いしていたことも忘れ、言葉を失い、急いで新しくできた岩山へとかけていった。

その様はあまりにひどいものだった。巨大な、岩と土でできた島には無数の亀裂が入り、崩れ落ちていた。裂け目からは煙が上がり、広くえぐれたところから覗くパイプのようなものは火を噴いていた。道路を進むと行き止まりとなった。突然現れた壁は人の背丈よりもはるかに高く、その壁からまた新しく道路が続く。家屋らしい家屋は見当たらない。不思議と地を覆う屋根のようなものは多くあった。むき出しになっている岩肌に、多くの機械が動きを止めて転がっていた。まだかろうじて動いているものもある。だがその動きは傷つき苦しむ生き物のようで、とても痛々しかった。

一つの大きな作業用と思われる機械が横倒しになり、細い通路を塞いでいた。

「駄目だな」

「ああ、どれもこれも見たことも無い。羽ありで、構造を知ってる奴でないと動かせないな」

「…仕方ない。他を先に当たろう」

ハイランドに住むものはすべて羽ありと言われ、この地が崩れ去る前に逃げ出すことができただろう。しかし逃げ遅れたもの、何かしらの理由で逃げられなかったものがいるかもしれない。大人達と一緒に少年も探し続けた。

あちらこちらから大きな声で呼ぶ声がする。だがそれに答える声はない。時間が経つにつれて呼ぶ声が減っていく。無事だった建物の入り口から出てきた大人と、外で無事な者を探していた大人が顔を合わせると、出てきた大人は首を横に振った。出てきた大人が無言のまま外で探していた大人と目を合わせると、外にいた大人も首を横に振った。上から探していた大人の一人が降りてきて、やはり同じく首を横に振った。日暮れも近い。

もう、誰も居ない。いたとしても、見つけられない。

火を噴き、崩れ落ちた岩山を歩いていた少年は自分の力の無さに

言葉を失っていた。背中羽も力なく垂れ下がり、風切羽は地面に擦っていた。自分が今この場に行ったところで、自分に何かできることなどない。はじめからわかっていた。大人たちでさえ何を何とかできるはずがない。しかし、放っておけなかった。

「ジユド兄さんだったら…」

その日の夕食のあと、食器の片付けを終えると椅子に腰掛け、つぶやいた。

「何、ジユド兄がどうかした？」

洗い場から戻ってきた姉が席に着き、テーブルに両肘を着いて組んだ手の甲に顔を預けて、弟の顔を見ながら聞き返した。少年がうまく自分の言葉にできないでいると続けた。

「ほーんと、ジユド兄のやつ、どうしてるんだろ。手紙の返事もよこさないでさ！」

…何の音沙汰も無いけど、手紙が送り返されてくるってこともないし、きつと生きてるんだろうけど。もう三年よ、三年！ さすがに顔のひとつでも見せに来なさいってことよ。ねえ、母さん！」

台所で紅茶をいれていた母に同意を求める。そうねえ、と心配そうに笑顔を浮かべて、人数分のカップとジャムの入った瓶を盆にのせて戻ってきた。盆にのっていた小皿にはクッキーが並んでいた。いただきまーす、と誰よりも早く少年の姉が手を伸ばす。

「そういえばさ、どうだったの？ アンタ行ってきたんでしょ、落ちたハイランドに」

少年は頷き、どう話そうか考えた。皆が待った。
「ひどかったよ、信じられないくらいに」

そして、彼が見たままを話した。残っていた人がいたとしても誰も助からなかっただろうし、誰一人助けられなかったことも。

「…迷惑な話だ。よりによって地禮祭の前だというのも…。ここらの農地をかなりダメにされた。今年の収穫がすでに心配だ」

「でさ、ハイランドってどんなだった？ わたし達行ったことも、話を聞いたことも無いからさ。やっぱこの町と全然違う？ ああ、ボロッボロに崩れちゃってるんだっけ。ちょっとはマシに残ってるところって無い？」

少年は首を横に振るだけだった。そして母の方をちらりと見て、視線をカップに落とした。父は祖父と祖母に、姉は特に誰に対してでもなく話を続けていた。

「ジウド兄さんだったら、どうしたんだろう。何かできたのかな」
ゆらゆらゆれる紅色の水面に映った自分を見ていた。とても小さな声で、隣で黙って皆の話を聞いていた母にしか聞こえていない。やさしい目のまま、息子の頭を撫でる。

「そうね。できたこともあるだろうし、できなかったことも多かったでしょうね」

小さく薪がはじける音とともに、壁に映る皆の影がやわらかく揺らめいた。

第八羽 「朝焼けの岩山にて」

「ふざけるな！」

「別にふざけてなどおりませんし、あれは事故です。それに我々もあの地で生活していました。ことが落ち着くまでこの周辺に臨時居住区を作らせていただきたい、そう申しているだけですのに」

「ただでさえお前達のせいで今年の収穫が危ぶまれているんだぞ！

その上土地を分けるだと？ 手前勝手にも程があるだろう！」

やれやれ、と羽を有した三人の老人がため息をついて肩を落とした。その様子を見て、テーブルを挟んで座っていた羽のない老人が周囲の者を諷める。非礼を詫びた上でこの地の長として姿勢を正し、口を開いた。

……

……

「今日のところはこれで失礼させていただきます。が、我々空の民もあなた方と同じく生きていることをお忘れないよう。三万の民を生かさなくてはなりませんからな。平和のうちにお互いの道を歩みたいものです」

五人の男の羽ありを護衛につけた老人の一人が顔色一つ変えずにそう述べた後、町役場の外に停められた球体に乗り込んだ。羽あり達を乗せた球体は小さな高い音をわずかに立て、宙に浮かび上がると闇夜へと消えていった。

「脅しのつもりか」

「……困ったことになった」

地に残された大人たちはめいめいに眩き、散っていった。

— 8 —

次の日の明け方、まだ太陽の出ていない時間に目を覚ました。実際はほとんど眠れていなかった。昨日目にした、自分が何をすることもできない現実が横になって目を閉じるたびにまぶたの裏に浮かび上がり、眠りに落ちるのを妨げたから。そしてそのつど母の言葉が繰り返し響く。何かが変わるわけでもない。それはわかっていた。ただ、足がその方に向いた。それだけだった。

まだ春は遠く、吐く息も白い。外に出ている人は他にいない。日が昇る前の身を切るような寒さは和らいできているがまだ十分すぎる。わら束の上にも、道の脇に生えている草の上にも霜が降りていた。舗装の行き届いていない農道を行き、東の空が紅く焼ける頃、新しくできた岩山に着いた。その岩山の光景は昨日目にしたときとほぼ変わらない。幾分か噴き出す炎の勢いは弱まったかのように見えた。

「そうだよ、わかってた…」

日が姿を見せ、明るく照らし出されたが何も変わらない。むしろよくわかる。少しの間その光景を見つめた後、もと来た荒地を引き返すことにした。

「あら、あなた羽ありなのにこんなところを歩いて？」

突然上の方から声が聞こえた。下ろしていた目線をあげ、声のしたほうを見るとそこには女性が一人、翼を大きく広げて羽ばたいて

いた。宙を舞っていたその羽ありは少年の目の前に降り立ち、その羽を閉じた。

「あ… 君、片羽なんだ」

「…」

少年は答えなかった。その一言を聞くのは本当に久しぶりだった。少しだけ口を強く閉じた。

「ひどいものよね…。戻ってみただけど、どうすることもできないわ」

「おばさんは、浮き島の人なんですか？ ごめんなさい、何もできなくて」

「え？ ああ、気にしないでいいわ。どうしようもなかったもの…。こちらこそごめんなさい。農地だったんでしょ？ このあたり一帯の土地をひどく荒らしてしまった。わたしが謝ったところでどうにもならないけど…」

二人は昨日まできれいに均され、枯れ草に覆われていた土地の方に振り返った。

「…でも、ひとつだけ気にしてほしいな」

少しあった無言の後、一対の羽を持つ者が言った。

「おばさん、って年じゃないのよ。まだまだね」

少年は思わず吹きだし、そして申し訳なく苦笑いをした。

「…素敵ね」

少年は聞き返していた。今まで聞いたことがない。

「わたしたち、こんな荒れたところを歩くことなんてできないわ。すぐに痛めてしまうし、何より飛んだ方が楽で早いもの。…だから、考えたことなんてほとんどない。自分が生きている大地がこんなにもわたしたちを試して、自分の力で乗り越えることの大切さを教えてくれているってことを。つついっい楽な方を選んでしまうものね、人間って。あなたは辛い道を飛び越さず歩いて渡る。背中に羽はあるけど、誇らしい羽なしだわ」

「そんなこと、ないです」

一度だけ浮き島の民の方を見て、また瓦礫の塔を見上げた。

「僕はただ片方しかないから…。両方あったら、きつとみんなと同じです。僕に出来ることなら、きつとみんなも出来るはず」

そう言い切る少年を見て、女は息を呑んだ。子供が口にするような青臭い正論ではあったが、片羽という現実はきつとこの少年に多くの苦難を与えたにちがいないと想像させるに難くない。だが少年の横顔は慢心にも卑屈にも染まっておらず、澄んでいた。女も岩山の方に向き直り、今度は落胆したようにため息をついた。

「……ダメね、わたしたちは。思い知らされちゃったわ。ハイランドって一体なんだったのかしら。あそこが無くなってしまったら、わたしたちみたいな脆弱な体で生きていけるのか…。不安で仕方ないの。あなたたちの土地を荒らしてしまった罪悪感よりも、自分の身にこれから突きつけられる現実への不安の方がずっとずっと大きい。そんな羽あり達ばかり。…わたしを含めてね。嫌になっちゃうわ」

少年が身体の向きを変えた気配を感じた羽ありの女は首だけで少年の方を向き、そして少年の目を見て話しかけた。

「…ねえ、わたし、あなたのことをもう少し知りたいな。わたしはここにまだ残ってるはずの物を探しにきたの。ちよつと付き合ってもらえる？」

唐突な申し出に戸惑った少年を余所に、羽ありは小柄な羽なしを抱えて瓦礫の山へと飛び立っていった。朝の太陽はいつものようにまぶしく、少しずつ温まってきた空気とともに新しい一日を祝福しはじめていた。

第九羽 「浮き島の奥」

目線の先には大地が無く、足元に目をやれば自分よりも遙かに巨大な岩々が小さく映る。体に当たる風は、自らの重みを両足に受けていた時には感じたことが無いほど力強かった。

いつも見ている世界が考えたことも無いほどの速さで流れていくのを見て、少年は言葉を失っていた。

「…そっか」

少年の脇に両腕を通し、少年の胸の辺りで両手を組んで彼を抱えている女性が顔を少し覗き込んだ後、風の音にかき消されないよう少年の耳元で呟いた。

「これが、羽ありよ」

少しずつ高くなっていく太陽が、二人の影を眼下の荒地に落とすていった。

— 9 —

羽ありの女性に抱えられたまましばらく飛んでいった。あまりに崩れ方が激しくて、地上からは上がれそうにない崖のようになったところが多かった。そのため昨日は全容が知れなかったが、今上から見下ろすと十分な広さを持つ平地も数多く残っていることがよくわかる。ただ、建築物と思しき物は何一つ無事に残っていなかった。背が高かったであろう物は半分に折れ、周囲に瓦礫を撒き散らして

いた。瓦礫の間からわずかに煙が立ち上っているところもある。

見たことの無い白い石のような壁を持つ、継ぎ目の無い箱のような背の低い建物があった。継ぎ目が無いとはいえ無数のひびが走っている。その壊れた箱の目の前で羽ありは高度を下げていった。少年を下ろし、再び二本の足を地につき、羽をたたむとしゃがみ込んだ。

「…ちょっと疲れた」

いつもよりひとり分重かったことは、女性の羽ありには相当な負担だったと想像するに難くない。その様子を見て片羽の少年が大丈夫かと声をかける。

「ごめん、嘘ついた。大分疲れた」

少年が返答に詰まった瞬間の顔を見て、女性は声を上げて笑い出す。一通り笑ったあとで冗談に決まっている、と笑顔を見せて立ち上がった。笑顔だったが、まだ息を切らせている。

「…寒かったから丁度いいくらい、て思えばいいかしら」

その白い建物の入り口は透明な板で出来ていた。あのような墜落の後だと言うのに、多少の亀裂や白い筋が入っているが、砕けることなく形を保っている。手をかけるところがなく、少年が色々と触れてみたが開け方はよくわからなかった。軽くノックしてみると、ガラスとは違った音と手触りがする。その様子を見ていた羽ありの女性が少し離れた壁を叩く。叩いた壁の一部が開き、開いたところに彼女が手を入れる。が、何も変化が無かった。

「…だめか。じゃあオートロック外して手動に…」

色々と操作をしていたが開く気配がない。

「ミスリル製だから生体自動認証と精神感応回路は生きてると思うんだけどなあ」

少年が聞いたことの無い単語を呟きながら女性は操作を続けた。だが最終的に開けることが出来ないという結論に達したようで、こ

の日何度目になるかわからないため息をついて操作盤から手を離れた。

「…動力伝達系が完全に故障してるだけじゃなくて扉がゆがんでるのかしら。鍵を外せても開けられないんじゃないわ…」

他の入り口を探そうという提案を受け、少年は羽ありの女性とは別に建物の周りを見て回った。一枚の岩をくりぬいたかのように継ぎ目の無いその建物も、落下の衝撃で無数にひびが入っている。広くひび入った壁に少年が手を添えたとき、地面が大きく揺れた。後に続いた大きな音から地震ではなく、この落ちた浮き島のどこかが大きく崩れた振動のようだ。その揺れに驚いた少年が壁から手を離し一歩飛び退いた時、壁の一部が崩れ、人を迎え入れるように新しく口を開けた。

「あ… えーつと…」

その時気が付いた。まだお互いに名を知らない。

「大丈夫だった?！」

上から突然影が射す。見上げた少年のもとに羽を広げた女性が降り立った。怪我はないかと少年の体に触れる。

「よかった。でも早くしないとここも危ないわね。えっ…と」

羽ありも同じことに気が付いた。

「わたしは、エミユール・ビネ。エマでいいわ。改めてよろしくね、すてきな羽なしさん」

…

…

「え? あなたの二親だけじゃなくて、お二人の二親も羽なしなの?」

大口を開けた箱の中に入り、ある部屋の中で少年が見たことも無い道具をいじりながら羽ありは考え始めた。墜落の衝撃からだろう、部屋の中の棚はすべて倒れ、物は散乱していた。

「0.02%以下？ お父さんとお母さんの出会いを含めればすごい確率ね。たしかに羽なし同士の子供でも確率としては百人に四人くらいは羽ありが生まれるけど、分布率から考えればもつと減ってくるし……」

口元に手をやって考え事をしている女性の顔を少年は覗き込んだ。それに気付いた羽ありは少年と目を合わせ、さらに解説を続ける。

「知ってる？ 羽のありなしを決めてる遺伝子は2種類からなつて、それは同一DNA配列上にあるのよ。それも近い位置に。羽なしの遺伝子は劣性だから、羽なし同士婚で羽ありが生まれるとしたら両親ともがもともとヘテロで羽遺伝子を持つか、遺伝子の組み代わりが起きないと」

少年がぼかんとしているのをみてエマは苦笑して話をやめた。

「遺伝子、DNAってわかる？」

少年が首を横に振る。それを見て彼女は左手で髪をかき上げた。柔らかなで繊細な黒い絹が女の細い指の間からあふれでる。一呼吸置くと流れをせき止めていたその指で黒く美しい川の流れを導き、軽く頭を振って少年の目を見る。

「簡単に言えばおじいさんおばあさんの代で羽ありがいなければ、まず生まれ得ないのよ。両親が羽なしでありながらあなたのように羽がある、っていう子は。きつと片羽ということもそれと関係があるんじゃないかしら」

さして広くない部屋の中で何かを探してあちこちを見て回り、一つの机の上に埋め込まれたような機械のところに行き着いた。エマが触れると一部が光り、文字が浮かんた。しばらくしてなんとか動くことを確認した彼女はふたたび機械を操作し始め、それと同じくして口を開いた。

「それに対してハイランドには羽ありしかないからね。必ず羽あ

りしか生まれないのよ。そこまではいい？」

少年が縦に頷くのを確認し、エマは続けた。

「羽ありの方が道具、とくに機械を巧く使えてるでしょ？」

やはり縦に頷く。

「その答えがね、羽ありの持つ遺伝子にあるんだ。ミスリルに感応しやすいの。羽ありの方がね」

そう言つてエマは機械の操作を中断し歩き出した。彼女の向かう先の壁の一部がうつすらと光っている。その淡い光を放つプレートに手を添える。一瞬彼女の手のひらを中心にプレートの全域に赤く光の筋が走つて消えた。

「ちよつと歴史の話をしましょうか。きっとアースの方には伝わっていないと思うから」

彼女の話が途切れたその時、壁が二つに分かれ道が開けた。

第十羽 「空の民の希望」

かつて人の背には羽は無く、かつての空に日を遮る陸は無し。
今は昔のことなれど、あまねく人は大地に在り。

高き塔が地を埋め尽くし、迷える者々を彼の地に縛り
塔より瞬く光の前に、夜空の星々はその身を恥じて闇へと消ゆる。
決して絶えぬ塔の光。されど沈まぬ陽など無し。

かつて人の背には羽は無く、かつての空に日を遮る陸は無し。
空を行くのは鉄の鳥、海を渡るは鉄の鯨。
鉄の馬に跨りて、人は大地を駆け抜けけり。

鉄の獣は水の代わりに油を飲み、飼葉の代わりに雷を食らい、
息とともに煙を吐きて、母なる大地を汚しけり。
されど人は獣を好みて大地は怒り、母なる恵みを絶やしけり。
数多なる塔は崩れ、絶えぬが如き煌きも失せ、
数多なる民の嘆きの声が空を満し、
見兼ねし天は、争うことなく父の元へ参れと人を呼び給へり。

銀をつくりし人の業、一つの大地を二つに分けて
一つに多くの人を乗せ、父なる空へとその身上げる。
鉄の獣は空に上がれず、鉄の鳥は地に降りられず、いずれも命を
落としけり。

— 10 —

「光子炉」

対の羽を持つ背を向けたまま、女性は語り始めた。

「それが今のこの世界の始まりだったと言われているわ。羽のある
人と海と空に陸のある世界を作った、人の力」

壁が開いた先にある明かりの见えない暗い通路は、少年に一抹の
不安を与えるのに十分だった。黒髪の女性は振り返った時に見たわ
ずかに顔を曇らせた少年の頬に手を添えた。少し驚いた少年の背筋
が伸びる。

「…大丈夫。何もこの先にあるのはパンドラの開けた箱、ってこと
じゃないわ。それに光子炉が悪者ってことでもないの。それが無け
れば、人は遥か昔に滅び去っていた。ここはわたしのいた研究所。」

ミスリルを精製するための触媒が残ってるはずなの。賢者の石、エリクサーがね」

微笑んだ羽ありの女性はきびすを返すとそのまま壁の隙間に入っていた。慌てるように少年は彼女の後を追う。

「いきなりだけど」

振り返ることなく問いかける。少年は暗がりの中彼女を見失わないようにについて行くのに必死だったので返事を忘れていた。

「当たり前のようにミスリル、ミスリルって言ってきたけど、何か知ってるよね？ 人の意思に反応する金属。正式名は伝説にちなんでミスリル銀。それを加工して作られた道具は普段は冴えない光を失ったような色をしてるのに、作られた目的に使用する時生きた人間が手にすれば輝きを取り戻して機能する。農耕地帯のあなたの町にも少なからずそんな道具があるんじゃないかしら」

ミスリルという単語は今日始めて聞いたが、思い返せば町に在る農具にはそのようなものがいくつもある。温泉作りのときに子供達が持たされるようなスコップは違うが、馬や牛に牽かせる鋤や、大人用の草刈鎌などは倉庫に在る時と使われている時では輝き方が違うことに気付いていた。特に地禮祭の時に掲げる幟のぼりを織る機織はたおりは遙か昔から町にあると伝えられ、依然として現役で使用されている。使うことが出来るのは決まって大人の羽ありであり、機織が使い手を選ぶとまで言われ、子供達には使うことはもちろん、触れることも禁じられていた。

「しかも太陽光を動力源にすることもできて、単純作業に限るけど人の意思を込めればその通りに働くオートマターも出来ちゃう超便利な金属なの！」

はじめは気づかなかったが壁の足元のあたりにわずかに光を放つランプがついている。その光が仄ほのかに照らした、拳を肩の高さに揚げて大人気なく興奮した様子の彼女の後姿に、少年は失礼でない程度に愛想笑いをした。

「…ハイランドでは当たり前のように精製して、当たり前のように

使われてきた金属だけど、アースでは貴重な金属なのよ。精製の際に必要な触媒のエリクサーを練成する技術がないはずだから」

目が慣れてきたがほぼ闇の中で通路の壁に手を添えながら、羽ありの女性に手を引かれて歩き続けた。幾度か通路の角を曲がった。少しずつだが下へ下へと下っている。その中でわずかに光が見えてきた。

「光子炉はハイランドを空に浮かべていた動力炉。エリクサーはその光子炉から生み出され、それが与えてくれたミスリルはわたし達ハイランドの民の生活を支えてきた。突然これら無くして生きていくなんで、怖くて出来ないの。だから探しに来た」

二人は闇の中で光を生み出している崩れ去った岩山の底に辿り着いた。扉の隙間から漏れる光を頼りに、女の羽ありは扉の傍の壁に手を添えた。赤い光の筋が壁を伝わり扉全体へと広がる。音を立てて扉が開くと共に、それまで少年を取り囲んでいた闇が取り払われた。

それはまるで古の語り伝えにある、開かずの匣はこに入っていた一筋の明かり。

「…いらつしゃい。ここがこのハイランドのすべてよ」

瑠璃に眩い結晶が一面に広がる。それは姿を映した者のすべてを見透かす水晶のように澄みわたり、少年の喉から出る音の一切は、それに吸い込まれてしまったかのように出てこなかった。

第十一羽 「いにしえの世界」

瑠璃色の世界に高く澄んだ金の音が穏やかに響く。どこから来るのだろうと少年が耳を澄まして見渡していると、青い水晶に一筋のひびが入った。ひび入るのと同じくして澄んだ音が広がる。

「もたないのね、やっぱり…」

床一面に広がる瑠璃は時が経るに従い薄くなり、その上に大きな塊から生まれる青い粉雪が降り積もる。幻想的なまでに美しく、はかない景色がそこにあった。

— 11 —

それは遙か昔。すべての大地がまだ海に囲まれていた頃。人々は皆、自らの足で歩いていた。都市は遙かに巨大で、数えることが愚かしいほどの人がそこに居た。空は狭く、夜も眩く、昼夜を問わず人が地を埋めていた。

固い石で覆われた地面がどこまでも続き、牽く馬や牛のない四つの輪をつけた乗り物がたくさん走っていた。それはどんな獣よりも速かった。

その頃の空にもちいさな鳥が羽ばたいていた。そして巨大な、それはそれは巨大な羽ばたきと無く空を飛ぶ翼を持つ鉄の塊が影を落とした。

海には船が浮いていた。空を行く鳥が見れば船ではあったがあまりにも大きく、そのふもとから見上げれば建物が海から生えているようにしか見えなかった。

栄華を極めた人々も自らの繁栄が永遠ではなく、それどころか支払っている代償が大きいことに言わずとも気付いていた。少しずつ汚されていく地と水と空。季節が巡ったわけでもないのに森の緑が茶に変わり、いつしか川の底は見えなくなり、天気がいいにも関わらず空にはもやがかかっていた。

世界中で農作物が十分に収穫されなくなり、無害だった昆虫が増えすぎ、あるいは毒をもち、住処を追われた野生動物が人を襲い、嵐や大水、地震や干ばつの規模は増す一方。数多くの民が犠牲になったが明らかに有効と言える手立ては無く、緩やかに衰えの足音が聞こえていた。

当時の栄華は、大地の上に自らが作った小さな星をいくつも上げた。そしてその時の人は星を上げた天空の遥か先にある月にも行けたと言う。小さくとも星を作ることが出来るのなら、一番近くの星に行けるのなら、今ある大地を離れ、その星で暮らせばよいと考えた。だが、それは叶わなかった。人は大地から離れられなかった。例え人を許さぬと言う者の上だとしても、そこでなければ生きられなかった。

恐れた人はわずかでも自分たちを守るためにいがみ合い、すこしでも以前のような安穩を求めて互いに争った。

……

「……そんな感じだったはず。歴史は専攻してないから細かくはわからないんだけどね」

話をしながらエリクサーと呼んだ青く透明な結晶を、手袋をして容器に入れていく。

「僕たちが教わる唄にすごく似てます」

少年は小さな欠片を素手で拾い上げた。空気に溶けるように小さくなって、最後は光の粒となって少年の指の間から流れていった。

「あー、直接触れないでね。害は無いけど人が触れると分解が急速に進むから」

「ごめんなさい、と謝る少年に向けて笑顔を見せる。

「もともと薬として使われてたのよ。でもとても不安定で、ここで安定化して保存することを研究してきたの。大分手技としては進んだけれど、それでもこれが限界ね」

一つ目の容器が一杯になったので、次の容器を開けた。

「…ふーん、アースには唄で伝わってるのね。じゃあハイランドが出来たことも歌詞にあるのかしら。もしそうならアースとわたし達との間の見解の相違とかが見えてきて面白いかもしれないわね。よかったら聞かせてくれない？」

少年は目を伏せ、二度深く息をすると口を開いた。

かつて人の背には羽は無く、かつての空に日を遮る陸は無し。
今は昔のことなれど、あまなく人は大地に在り。

それは歌というよりも詩に近かった。伸びやかで、嫌味のない高音が部屋に響く。周りからはそれに合わせるかのように澄んだ金の音が立ち、心地よい残響が少年を包んだ。

銀をつくりし人の業、一つの大地を二つに分けて

一つに多くの人を乗せ、父なる空へとその身を上げる。

鉄の獣は空に上がれず、鉄の鳥は地に降りられず、いずれも命を

落としけり。

少年が穏やかに息を整え目を開くと、静寂がその空間を支配していた。水晶に亀裂の入る音が時折立つ。

「僕はここまでしか…。全部を知っている人が居るかもしれませんが、町では聞いたことがありません」

静かに頷きながらも女は容器に詰めていく。すでに五つ目に封がされていた。

「魔物を使うようになった人が母なる大地を怒らせたので、人は罰を受けました。それを哀れんだ父なる天が魔物を滅ぼして、過ちに気付き誠意をみせるようになった人を許して、恵みをお与えになってくれるようになったと。あの…。こんな話で面白かったですか？」

もちろん、と返事をして対の羽を持つ者が立ち上がった。

「すごく興味深かったわ。続きを是非とも聞きたいものね。さて、と。手持ちの容器はもういっぱいだから、続きは他の人たちを連れてきてやることにするわ。宝の山を後にするのは後る髪引かれる思いだけど、運が良ければまだしばらく残っていてくれるはずだからそれに…」

丁度その時、部屋全体がかすかに揺れた。またどこかが崩落したのだろう。

「命あつての物種だしね」

瑠璃の世界を後ろに残し、上に向かって歩を進める。女が壁に手を当てると赤い光の筋が走り、ゆっくりと閉まっていく。女は再び少年の手をとり、先を歩いた。少しずつ少しずつ、暗がりを照らす青い光が弱まっていく。

周囲のほとんどに闇が広まった刹那の後、世界を閉ざした音がした。

第十二羽 「迷いと不安と憤り」

家に帰つてくると家族が総出で出迎えた。もう昼に近い。彼を見かけた町の人間がこぞって家族が心配していたことを伝えていたの
で、帰宅の挨拶の次に彼の口から出たのは謝罪の言葉だった。

無事ならば良い、だが誰もが彼の身を案じていたことを忘れるな。そう家長である父から諭されたが一人納まらない。

「心配したんだから！ 本当に心配したんだから！ 昨日あんなことがあつたばかりって言うんだから悪いことしか考えられないわよ！ もし人質にされてたりなんていたら、あたし……」

並ではない姉の動揺を見て、そして予想だにしていなかった一言を耳にした少年は聞き返していた。

「ホンツツトに信じらんない！ 何なのよハイランドって！ どうしてあんなのが父なる天に在ってあたし達を見下してきたの！ 落つこちたのはいい気味よ！ どうせなら海の底にでも行けばよかったのに！」

少年の姉は荒げた声を抑えることもなく二人の部屋の中で怒りを撒き散らしていた。少年はいつものように羽を広げ、隣に座る姉を包んだ。いつものように怒りながらも姉は羽に優しく触れ、そして少年はそれをなだめながらただ聞いていた。だがいつものようにうなずくことが出来なかった。

「ホント、ハイランドって言われてたとおりおかしな連中なのね！ やっぱり羽ありばかりだか…… あ」

そう言ったとき少年の姉は口をつぐんで声を出すことは無く、体を横たえ自分の右に座る弟の膝の上に頭を預けた。

「……浮き島の人も、不安なんだよ」
姉の髪を撫でながら少年は答える。
「僕たちと一緒に、人だから」

― 1 2 ―

暗い通路を登りきり、二人は乱雑な空間に戻ってきた。再びパネルに手を当てると壁がゆっくり閉じていく。

「君の事を疑ってるわけじゃないけど、ね」

「そもそも使い方がわかりません」

もつともだ、と自嘲気味に笑みを浮かべながら少年の目を見た。しばらく目を合わせていたが、少年の方が先に視線を逸らす。その様を見てまた新たに笑みを浮かべた女が歩み寄り、自分よりも背の低い少年の頭に手をやった。

「ほら、あれ何だっけ。さっきのウインが教えてくれた唄の最初」

もう少し近づけばお互いの息遣いも聞こえそうな距離で対の羽の者が問う。家族以外の女性に慣れていない少年は、目線を泳がせしどろもどろになりながらも一度口にした。

「そうそう。えーっと、

かつて人の背には羽は無く、かつての空に日を遮る陸は無し。
今は昔のことなれど、あまねく人は大地に在り。

……それが当たり前だったってことよね。羽ありも羽なしも無く、
ハイランドだってなかった。今は昔のことなれど、か……」

そう呟いたかと思うと、突然少年を抱きしめた。少年の顔は女の
胸にうずまり、唐突のことと息が出来なくなつた少年は初め若干抵
抗したが、少しだけ女の腕が震えていることに気付いた後は力を抜
き、身を委ねた。しばらくして女が手を離し、少年は解放された。

「それじゃあ行きましょうか。当たり前の世界へ」

……

……

そこは一面がまばゆい光の世界だった。左側だけ羽の生えた者を
抱えた二枚の翼を持つ者が瓦礫の山から平地に下りる。抱えていた
者を地面に下ろした後、両の手を合わせ自分の吐く息で暖めていた。
終わりが近いとは言え季節はまだ冬。雲の無い良い天気とはいえ、
吹き抜ける風はまだ冷たい。

「それじゃあ、ウイン。わたし達ハイランドの民も次のことが決ま
るまでこのあたりにいると思う。機会があつたらまた会いましょう。
その時はさっきの唄の続きを教えて欲しいな。わたしからの宿題ね」
凍えて少し震える声に少年が縦に肯くのを見て、女は背中を羽を
広げ宙に舞った。

「あ、それから！」

空を見上げる少年にむけて少し大きめにした声を放る。

「あなた、やっぱりどっちかって言うと思つて羽ありに近いと思つたの！
また今度機会があつたら試してみしよう！ それじゃあまたね、
ステキな羽なしさん！」

少年も手を振り別れを告げる。女の背中が小さくなっていくのを見届けると、町に向けて歩き出した。

日の光を浴びながら積荷を背負った羽ありが眩く。

「…両方あればみんなと同じ、か。やっぱり飛びたいんでしょうね

…」

天高く舞うその背にある羽は光を受けて輝き、大地に小さな影を落としていた。

第十三羽 「少年の望み」

空が落ちて三日が経った。町の入り口に大人たちが大勢集まっている。腕組みをし、険しい顔つきで雲の流れを見ている者が多い。群集の最前列の中央に、杖をついた羽の無い老人が立っていた。目を閉じ、耳を澄ませ、ざわめく民を背負うように。

「……地禮祭まであと十日、か」

そう呟きゆつくりとその双眸を開き、他の大人たちと同じように空を見遣る。彼方より銀に輝く球体が近づいていた。

……

……

同じ頃。

「ステイナ、今日はいいい知らせを持ってきたよ」

「何かしら。期待しますよ」

帽子を被った初老を少し過ぎたくらいの羽ありの男が持っていた鞆を開けて、中から一つ、表に彼女の一家の姓が書かれ封をされた紙袋を手渡した。あつ、と言うような顔をし、受け取ったステイナはそのまま紙袋を裏返す。

「……。確かにいい知らせね。中を見るまで安心できませんけど」

訪ねてきた羽ありに笑顔で答えた。羽ありは鞆を閉めてから一旦帽子を脱ぎ、別れの挨拶をするとそのまま再び空に上がった。少しの間滞空し、次の家を目指す。その背中を見送ったステイナは家に入ると、ぱたぱたと少し浮ついたような足音を立てて棚へ向かい、中を探っていた。

その日の夕方。一同が同じテーブルにつき、いつものように祈りを奉げて食事を取り、食後のお茶を娘が用意していた時だった。

「さーて、みなさん。今日はね、とてもいい知らせがあるのよ」

一番初めに返事をしたのはカップを配っていた娘だった。母の勿体つけたような物言いにうずうずしているのがよくわかるが、自分の仕事の手を休めることは無い。しまっておいた今日届いた一つの封筒を取り出して皆に見せた。

「誰からだと思う？」

あて先の字に皆、心当たりがあった。

「… やつとか」

安堵の声と共に懐かしそうな笑顔を浮かべた少年の父は、封筒の中身を出し読み上げた。

「向こうでも元気にやっとなるようじゃの。何より何より」

「心配してたのが損みたいよ！ 無事なら無事でもっと早くよこせばいいのに！ … ってついこの前もそんなこと言ってなかったっけ、あたし」

「兄さん、技師さんになったんだね。こっちに戻ってこないかな」

「こつちには玄人の手が要るほどの機械がないからな…。多分向こうに留まるんじゃないか？」

「そうね…。寂しいけどあの子が選ぶのならそれが一番よ」

「嫁さんは向こうで見つけるのかい？」

「おばあちゃん、まだジユド兄半人前よ。三年しか経ってないじゃない」

「そうかい？　私らはその頃もう夫婦しとったけどねえ。ね、おじいさん」

「……どーじゃったかな、覚えとらん」

いつものように明るい家庭に、今日はさらに一つ明かりが灯ったようだった。日を追うごとに寒さが和らいでいるが、夜は依然として身に堪える。暖炉にくべられた薪から時折爆ぜる音が立ち、揺らめく炎が壁に彼らの影をやさしく映していた。

「……それはそうと、浮き島の奴らがいよいよ強行に出るかもしれない。自分たちの要求ばかり押し通そうと、こちらの条件を聞こうともしない」

「もういいじゃない、相手しなくても。何にもしないで放っておこうよ」

「そう言うわけにいかないだろう。向こうには三万も居るらしい」「三万人っ？！」

全員が口を揃えて聞き返した。無条件に受け入れることなど到底無理な話と、誰もがたやすく理解できる数だ。この町は豊かな農耕地帯で毎年十分な収穫が得られる。この町の住人を飢えさせることなど百年以上なく、かつ収穫された農作物を近隣の地域にも供給できるほどの恵まれた土地だった。前年も同様で、貯えは十分にあった。しかし突然今の人口の五倍にも及ぶ民を無期限でまかなうことなど出来はしない。

「連中、事の重大さがわかってないらしい。浮き島が落ちて困っているのは自分たちだけだと思い込んでるみたいだ。くそ、農地があるの岩山に変えられたんだ。今年だけじゃない、この町がこれから今までの通りのように立ち行かなくなったらってことを気にも留めちゃいない」

少年の父は眉をひそめ、今日の昼間の集会でのことを家族に話した。誰もが言葉を発しないまま穏やかに時が流れていく。

「…地禮祭が近いの」

祖父の声に全員が無言でうなづく。

「父なる天は何をお考えか…。母なる大地がまたお怒りにならねば良いのじゃが…」

窓越しに星空を見上げながら呟いた。月明かりに照らされた雲は空高くにあり、地に立つ人の憂いなど届かぬようだった。

「……かつて人の背には羽は無く、かつての空に日を遮る陸は無し」
片羽の少年が沈黙を破った。皆が少年の方を見る。

「一つただけけど、大昔に戻っただけじゃないのかな。…羽は無くならないけど」

ぱたぱたと小さく羽ばたきながら皆に尋ねた。

「あれって続き無いのかな。人が母なる大地に罰を受けて、父なる天が魔物を滅ぼした後、どうやって今みたいになっただんたろうって思っ」

「ウイン、あれは忌み唄よ。人がまた同じような間違いをしないように、って戒め。あまり口にするものじゃないわ。確かにずいぶんと中途半端に終わってるけど、わたしも知ってるのはそこまで」

祖父と祖母もうなずいている。少年はそのまま父の方を見た。自分の番か、と察した少年の父は、口元に手をやり若干顎をあげ、天井に視線を向けてしばらく思い返していた。

「父さんの育ったところには伝わってなかったな。越してきたこの町で母さんから教えてもらったくらいだ。昔話で聞かされたのも似たような感じだ。続きなのはわからんが、母なる大地で羽ありと

羽なしの間で争いが起きて、羽なしに負けそうになった羽ありが羽なしの手が届かない浮き島に逃げていった、とか言う話もあったな。…今じゃ空の方が偉そうにしているけどな。…でもどうして急に？」
ちよっと気になって、と言葉を濁して少年は話を打ち切った。

姉弟の部屋のベッドの上で、少年はぼつりと呟いた。

「ねえ」

「うん？」

「どうして、仲が悪いままなのかな」

「…浮き島とあたしたち？」

「うん」

「…向こうが見下ろしたまま、何も聞こうとしないからでしょ」

「…本当にそれだけなのかな」

「…知らない。ね、今日いつもより冷えるからそっち行っている？」

弟の返事を待たずして姉はベッドに潜り込んできた。

「あー、ウインの羽ふかふか。おやすみー」

「……」

「おやすみー」

「あ、うん。おやすみ」

しばらくすると背中側から寝息が聞こえてきた。

「…こんな風に、できないのかな」

背中に柔らかなぬくもりが伝わってくる。ころりと寝返りを打って向き合つと、そつと羽を広げて包み込んだ。

第十四羽 「母と娘」

「ただいまー。あー、疲れたー」

戸を開けて入ってくるや否や、何も置かれていなかったテーブルに持ち物を放り出して、椅子の上にあぐらをかいて座り込んだ。靴を脱いだ素足をさすっている。

「おかえりなさい、エディ姉さん。母さんはまだ出かけてるよ」

「あれ？ ウインは今日行かなくてよかったっけ？」

「矢倉の準備だったらお昼までだよ。明日地ならしの仕上げで、組み上げるのは明後日からだったかな」

地禮祭が近い。町中が一丸となつて準備に勤しんでいた。謝天祭同様、この祭事も地域地域に特色がある。この町では一大イベントだった。農耕地域である以上、母なる大地に恵みを分けていただくという意識が強く、毎年華やかで賑やかな祭りを催していた。

「で、どうだったの？」

椅子の上であぐらをかいたままテーブルの上で伸びている姉に問う。少しわくわくしたような、期待するような顔つきだった。

「んー、次点。南区のアネーシャが今年の地姫つちひめよ」

「そっか…、残念だったね。そのアネーシャさんって僕の知らない人？」

「そーねえ。顔見たら、ああゝってなるかも。…ほら、南区の用水路のところにある酒蔵の子よ」

少年がやや渋い顔をしながら少しだけ天井の方を見ているのをみて、姉は含み笑いをしていた。

「まあ当日見たらいいわよ。正直あたし、地姫に選ばれてもちよつと困っちゃうから丁度よかったよ。天士てんしに選えびたい人も無いし」

そう言つて大きいため息をついた後、再びテーブルの上に突っ伏した。視線だけを弟の方へ向け、そして大きく息を吸い、額をテ-

ブルにつけると再び大きくため息をついた。

— 14 —

家族がそろい食卓を囲み、いつものように祈りを奉げてその日の糧を口に始めた。

「奉納する幟のぼりもそろそろ全部出来上がるわよ。トウーさんも今年までで、来年からはお弟子さんの子がやっていくみたいね。小さいの染めも今日のもう終わりだから、あとは飾っていただけかしら」

昼間の集まりに出かけていたステイナが皆に報告する。この町の地禮祭の特色として町中の通りのあちこちを色とりどりの幟が飾る。そして天に感謝し地を讃える絵柄を色鮮やかに織り込んだ巨大な織物が祭事を中心となる矢倉に掲げられ、三日三晩を通して皆で春の到来を祝い今年一年の豊作を祈るのであった。

「あたし無理！ 別にいいじゃない、あつたかくなってから作って次の年の地禮祭に使えば！」

「つめたーいきれいな水じゃないと鮮やかに染まらないのよ。来年からはエディもやるのよ。あなたも今年十九なんだから。地姫を境に大人の仕事を覚えないとダメよ」

ぶーぶー文句を絶やさない少年の姉は始終母にたしなめられていた。その様を見て家族全員が穏やかに微笑を浮かべる。この町では十九歳を境に、子供は成人として扱われる。謝天祭に成人となった男子が送り出されるように、地禮祭が終わってから成人となった女子は大人の仲間として町の役目を担う。

「ざーんねーんでしたー。あたし今年の地姫じゃないもん」

「十九になった羽なしの女はみんな地姫でいいのよ。代表を選べるだけなのよ」

「…ステイナも同じこと言っとったねえ、おじいさん」

「かえるの子はかえる。間違いない」

一同が声を出して笑う。春が大分近づいたために暖炉に宿る炎は以前に比べて小さくされていたが、それでも十分な暖かみが部屋に満ちる。笑いが途切れた頃、母が聞いた。

「もし地姫に選ばれてたら、あなた天士に誰選んでたの？ 天士と地姫って結ばれるって言うじゃない？ そういう人いないの？」

「羽ありなんて好きにならないもん！」

娘がむきになって反論する。

「エディの羽あり嫌いは治らないな…」

「嫌いじゃなくて好きになれないだけ！ 空から見下して偉そうにしてるのがヤなの」

「羽なしは羽なしで、彼らが出来ないことをすればいいだけだろう？」

「向こうはそーゆー風に考えないじゃない！ ご近所付き合いは普通でも腹の底でどう考えてるかなんてわかんないわよ。あーあ、気ままに空を舞ってるだけで良いなんてうらやましい」

「……」

話している間、一度も弟の方を見ることは無かったが、彼が複雑な表情をしていることはわかっていたらしい。すぐ隣に座る少年の頭を抱き寄せ、頬ずりしながら髪を撫でた。

「でも、ウインは別。あんたはホントいい子に育ったわよね。見習いなさいよ、ねえ」

「…ちよつといい？ エディ」

母が娘の正面の席につき、一つ大きく息をついて真剣な表情のまま話し始めた。誰もが口を挟むことなく、彼女の話聞いた。

「確かにあなたが言うように、何か一つでも自分が他の人よりも得意なこと、他の人が出来ないことが出来ると、まるで自分だけが天に選ばれたような気持ちになる。でもそれは決して悪いことではないわ。自信を持って、前向きに生きる原動力を得る。あなただって経験あるでしょう？」

でもそれは永遠ではないわ。人である以上いつか自分では出来ないことがあることを必ず知るの。でもその自分では出来ないことを、他の誰かは出来るのかもしれない。

羽なしが機械を使えなくても羽ありは操ることができる。

羽ありが耕せなくても、羽なしは育むことが出来る。

そうやって力を合わせて生きてきたのよ、人間はずっと。人間は変わるのよ」

いつしか弟の頭を離して、ばつが悪そうな顔で母の言葉を聞いていた。ちらちらと顔つきを覗うのだが、しっかりと目を合わせようとはしない。

「羽ありは自分たちのことだけしか考えていない、なんて事はないわ。あなたが今まで見てきた羽ありはみんな子供じゃないかしら。まだ自分が何でもできると信じてるだけなの。あなたも本当はわかっているんじゃない？」

大人達は小さく頷きながら聞いていた。しばしの沈黙が流れる。

「…はい。言い過ぎました」

やはりばつが悪そうにぼそりと呟いた。その一言に母は表情を崩し、腕を伸ばして娘の頭に手をやった。

「やっぱりお母さんの子だ。今日からあなたも、一人前の大人よ」

「…ばあさんに怒られつつたステイナが目の前に居るようじゃの。何から何までよく似とる」

そう言つ祖父を前にして、ばつが悪そうな顔がもう一つ増えた。

第十五羽 「伝承の魔物」

「よし、そのまま引き上げろー」

「下のチーム、持ち上がった柱を支えろー。しっかり支えないと落ちるぞ」

支柱の先に結わえられた数本の綱を数人の羽ありが掴み、羽ばかりあがる。横たわる柱が少し大地から離れたところへ、金属製の棒が差し込まれた。その棒の中央には柱が収まるくらいの樋とのような器が設けられていて、そこに柱を乗せると両脇に立つ何人かの羽なしが掛け声をかけて柱を押し上げていった。

「あ… 何だろ、あれ」

綱を引く羽ありの少年の一人が気づいた。太陽とは違う方角で何かがきらきらとわずかに光る。よく目を凝らしてみると、少し大きめの物体が岩山の方へと向かって飛んでいくところだった。

「おーい、アハト。綱緩んでるぞ」

「あ、ごめんなさーい！」

空に行くそれが何かとても気になったのだが、祭りの準備の方がその時は大切だった。

— 15 —

地禮祭を三日後に控え、準備も最高潮だった。町中を飾り付けるのは子供達の役目で、今日は矢倉の組み立て作業がなかった片羽の少年は何人かの同年代の仲間と共にその指揮を執っていた。

「はあーい」

聞き覚えのある声がした。振り返ると見覚えのある黒い髪をした羽ありの女性が今まさに空から降りてきて、地に足をつけたところだった。

「片っぱし羽の無い子を見かけたからね。今日は野暮用でこの町に来ただけど…」

わらわらと子供達が集まってくる。

「わー、知らない羽ありのおばちゃんだ」

「ウインのともだちー？」

「変な服ー。どうして体にぴったりくっついてるの？」

群がる子供に振り回されても追い払うことのない女性を見て、ウインは申し訳無さそうに笑顔を見せた。

「そうそう、あの唄の続きわかった？」

ウインが首を横に振るのとほぼ同時に膝元で羽ありの女の子がエマの手を引き、尋ねる。

「おうた？ なんのおうた？」

「えっとね、この町に昔から伝わってる唄らしいんだけど。かつて人の背にはくって」

「ぼく知ってるよー」

「あたしもー。前先生にならったよねー」

「あー、もう。みんな歌いだした。何が何だかわかんないわ、こりゃ」

頭に手をやり、困った表情のまま唄を聞いていたが、無理に子供達を止めることはしなかった。無邪気な声が周囲に満ちる。そしてしばらくして同じところで止まる。

「…はいはい、みんな上手上手。それじゃ戻って戻って。お姉さん困ってるでしょ」

片羽の少年が手を打ち鳴らし、歌い終わった子供達に解散するように指示する。蜘蛛の子を散らすように通り中に広がっていき、作

業を再開した。羽なしの子は街路の柵を飾り、羽ありの子は道沿いの建物に幟を立てる。そのほほえましい作業を見ていた浮き島の女性が隣に立つ少年に聞こえるように呟いた。

「…やっぱりあそこまでのね。なんかすごく意味深で気になるけど…」

「祖父も、祖母も知らないと言っていました。別の町に伝わっているのか、それとも…」

仕方ない、と呟くと持っていた荷物から何かを取り出した。小型の機械のようだ。左手に持ち、右手でボタンをいくつか押して数秒後、ウインに手渡した。

「この中央のパネルに手のひらを当ててね」

他に特に説明もなく、ただその指示に従って少年は機械に触れた。少しすると機械から音がし、エマが手を伸ばしてきたのでそのまま機械を渡す。

「え？」

もう一度手にしている機械を操作し、手渡した。そして同じことを繰り返す。

「……ん…じゃあ…」

今度は自分で試してみる。

「…違う。故障じゃないの？ それじゃこれ…」

少しの間考え込み、一つの確証とともに少年の手をとり嬉々として声を上げる。

「ウイン、あなたすごいわ！ どちらかと言えば羽ありに近いって言ったけど、近いとかそんなレベルじゃない！ いやー、すごい人材かも！ 精神感応率341%って、一般の羽ありのおよそ七倍よ！ 羽なしは20%、高くて30%くらいだから規格外も規格外だわ！ っていうかパーセントなのに100越え？ どうやったらかんな算出になるのかしら…」

喜ぶところなのかわからない少年は手を握られたまま、最初に聞きそびれていたことを尋ねた。

「え、ああ、そうそう。…今日ね、わたし達の代表が町長さん達と会議に来ただけど…。わたしはその付き添い。乗ってきたピークルで待ってるって言われたんだけどね。抜け出てきちゃった。今頃話し合いの席についてる頃だと思うんだけど…」

…

…

その頃、祭事を中心会場には町の大人たちが集まっていた。晴天の下で民がざわめく中に四人の羽ありを従えた一人の年老いた羽ありがやってきた。それはハイランドが落ちてから何度かやってきた老人の一人だった。会場の空気が張り詰める。

「みなさま、改めまして。私、ハイランド『ロディニア』議長、エミリオ・ビネと申します。この度は大変ご迷惑をおかけいたしました。過去幾度か話し合わせていただき、そして十分お時間をとってもらいました。今日はそのお答えをいただきに参りましたのですが…。いかがですか？」

最前列の中央の、杖を持つ羽の無い老人の両脇に立つ羽ありの男性と羽なしの女性が一步前に出て、それぞれが返答する。

「技術提供、農作業の協力を条件に、それに見合った食料の提供をいたします。が、こちらも余裕が十分にあるわけではなく、無期限とは行きません。三ヶ月、これが限度です」

「さらに浮き島の墜落が与えたこの町の収穫への影響は甚大です。軽く見積もっても三割の収穫減。その中で町の収益を保ち、あなた方への分を確保することは困難。そのような中で土地の譲渡は出来かねます。居住区はあの、元浮き島、限定としていただく。こちらの条件は変わりません」

毅然とした態度であつたが、よく見ると二人とも腕と脚が少し震えている。この町はこのようない国とも言える相手に政治的な対応をしたことがない。だが弱腰で足元を見られるような対応を取り、今後も搾取されるような事態を招くわけにはいかなかった。

「…ならば、仕方ありませんね」

年老いた羽ありの声を合図に、大きな箱状のコンテナをつけた銀色の乗り物が飛来し、空中でハッチを開けた。大きな何かがそこから放り出され、地鳴りと共に大地に降り立つ。

「本意ではありませんが、我々にも余裕がありません。ご理解下さい」

丁寧な物腰の羽ありの老人とはまた別に、地に落とされた物体から声が響いた。

「陸戦用制圧兵器、最新鋭ミスリルゴーレム、『ヴァルナ』ビートだ！　ちつばけなんだよ、お前らアースなんてな！」

「魔物だ…　鉄の魔物だ…」

伝承でしかなかったはずの存在を目にしたアースの民は皆が戸惑い、目の前に現れた悪夢に声を飲み込まれていた。立ちすくむことしか出来なかった人々の前に立つ銀で出来た巨大な人形が一步を踏み出し、群集に迫る。進路上にあつた完成目前の矢倉をいとも容易くなぎ倒すと材木が周辺に散らばり、飛散した物の一部が町の民の何人かに当たった。その痛みが現実を引き戻す。人々は拭った血を見、悲鳴をあげて逃げ出した。

その喧騒は矢倉から遠く離れた町角にまで届いた。地響きが伝わり、通りいっばいに展開していた子供達の不安そうな声があちこちです。空から羽ありの子の何人かが指さしていた。

「あつちに銀色のへんなのがいる！」

「みんなこつちに逃げてくるよ！」

まとめ役の少年達が子供達に道具を片付けて集まるように指示する中、何が起きたのか察した浮き島の女性が、子供達が指差していた方角へ飛んでいった。走って逃げる町の民は、自分たちの流れに逆らい空を飛んでいく一つの影があることに気がつかなかった。

息を切らした黒髪の羽ありが四人の羽ありに守られた年老いた羽ありのもとに駆け寄る。

「おじい様、何てことを！ 抵抗手段も無いアースの一般人にゴレムを持ち出すなんて！」

「仕方あるまい。我々とてあのキャンプで一万の民を過ごさせるわけにはいかないのだ。食料の有余も無い。我々の受け入れを断るというのなら押して通るしかない。わかつてくれないか」

「わかるわけ……わかつたわよ、もう！」

このままでは対話にならないまま時間だけが過ぎていくと悟った女は背を向けて飛び去った。引き止める声が下から聞こえた。

「わかつてるでしょ、止めに行くのよ！」

ひととき大きな声で返答し、全速力で飛翔した。

第十六羽 「人々の抗い」

広場から戻ってきた大人たちがめいめい大声で叫ぶ。それは自分の家族の名であつたり、人々の避難を誘導する声であつたりした。地でも天でも人があわただしく動く。まさに未曾有の出来事だった。男達の一部が農具や工具などを手にして道を引き返す。しかしそれらがはたしてどれほど期待に沿うのか、不安を拭うことが出来た顔をしている者は誰一人いなかった。

— 16 —

破壊された矢倉を尻目に、銀の巨人が市街に迫る。その足で踏みしめるたびに地を鳴らし、跡を深く残す巨人がもう少しで町中に入ると言うところでその足を止めた。進路の先から雄叫びが聞こえる。徒党を組み、武装をした羽なしと羽ありが何人も向かってきていた。散開し、ある者は上を飛びまわり攪乱し、またある者は下から執拗に攻撃を加えた。しかし巨人はそれを一切意に介さず、再び前進を開始した。

進路を阻むように何人かの羽ありがその眼前を飛び回る。いい加減邪魔に思ったのだらう。銀の塊がその無骨な腕を振った。威嚇程度のつもりだったのだらう。羽あり達に直接当たることはなかったが、あれほどの大きな塊があゝの速度でぶつかろうものならばその身は無事ではすまないことが知れた。威嚇は十分な効果を示し、飛び

回っていた者たちは距離を置いた。足元を攻撃し続けていた羽なし達も、その巨大な足の下敷きにならないように離れるしかなかった。

その中で果敢にも巨人に立ち向かう羽ありがいた。払う腕をかくぐつて後ろから頭部にしがみつき、身に着けていた頑丈なロープを首にあたる部分に巻きつけた。先端に付いた杭を利用し、解けないように縛り付ける。ロープの反対側の端を持って巨人の背面に降り立った。

「今だ！ 引け！」

立ち向かっていた者全員で綱を持ち、力の限り引く。突然後方へ力をかけられた巨人はわずかにたじろぎ、倒れぬようバランスをとった。その微かな隙に別の羽ありがまた綱をかける。時間と共に集まってきた若く力のある町の男達がさらに引く。とうとう巨人を地に引き倒した。同時に歓声が立ち、何人かの羽なしが無骨な巨大な人型の上が上がって、腹や胸に農具や工具を振り下ろす。だがしかし町にある希少なミスリル製の道具であっても十分な傷をつけることは叶わなかった。

横になっていた巨人が再び動き出し、体を起こし始めた。登っていた者達は慌てて離れ、他の者は先と同じようにまた綱を引いた。巨人も同じ轍（うづ）を踏まぬよう、上体を起こした後に腕を回し、首から背面に伸びたロープをつかんだ。つかんだ掌が赤く輝きを増したように見えた次の瞬間にはロープが焼け落ち、綱を引いていた者達は全員仰向けに倒れ、呆然としたまま悠然と立ち上がるそれを見ていた。

「みんな離れろ！」

声のした方には銀色のラッパのような形状をした大きな道具がそ

の口を巨人に向けて設置されていた。それは収穫の後に余った藁束を中に入れて、それを灰にするための道具だった。火種を必要とせず、もし雨が降ったとしても一度付いたその火は中の藁束が全て灰になるまで消えることがない。本来はその口は天に向いていて、穏やかに煙を立ち上らせるこの町の秋の風物詩のひとつ。

察した人々は散り散りに射線上から離れていく。巨人とラツパを結ぶ直線上に誰一人いなくなったところで、台に乗っていた羽ありがラツパに手を当てる。暗い管の中にわずかな赤い光の筋が走った次の瞬間、砲台となったそれが向いていた方向にあった物すべてが火に包まれていた。

「……どうなった？」

期待と不安がない交ぜになったざわめきが広がる。眼前の燃え盛る炎の中で動く物はなかった。時間と共に人々の顔に明るさが戻ってくる。これだけの火に包まれてしまえば例えばあのような異形と言えども、ひとたまりもないはず。それは希望ではなく確信に近かった。ざわめきは再度歓声に変わっていった。

胸を撫で下ろす民衆の一人が気付いた。炎の中で動く物があつた。それは見間違いではなく、確かに何かがうごめいている。それを皆に知らせる言葉を発する前に、周囲に冷気が広がった。燃え盛る炎は全て治まり、銀色の人型が灰と霜の中心に立っている。言葉を失った人々は力なく立ち尽くしているだけだった。へたり込んでしまふ者もいた。

「……まったく、カスかと思ったが思った以上に盾突くじゃねえかよ。こんなところで無駄に使わせるなよな」

巨人から声がする。巨人の胸の辺りが開いた。羽ありが二人、座

っていた。

「これでわかっただろうが！　アースに残ってる力じゃゴーレムに勝てねえってよ！　諦めて条件を飲めよ、簡単だろ？」

上の段に座っていた羽ありが立ち上がって叫ぶ。

「人間だ…　人が本当に魔物を扱うだなんて…」

「ああ…　おしまいだ…　母なる大地のお怒りがまた…」

「天よ…　父なる天よ、どうか…」

人の手には余ることを悟った者達が一人、また一人と跪いていく。彼らにはもう忌み唄の伝承にすぎり、天に祈ることしか術はなかった。そんな中、また大きな地響きが立つ。

「あーあ、いらねえって言ったのによ。まあこれでわかっただろ？　1体ですら止められなかったお前らがもう1体のゴーレムを何とかできるわけねえ。はいはい、降参しろよ？」

先程降り立った巨人が立ち上がり、町へ向かって歩いてくる。

「…あ？　翼^{よく}付きだと？　何でフリーユーゲル送ってきてんだ？」

再び胸部装甲を閉じた操縦席の羽ありが巨人の中で呟く。近づいてきた巨人は背中に銀の翼を背負い、彼らが乗っている物よりも一回り小型の物だった。軽量で機動性を重視した空戦可能な機体は一般人の集落を制圧するのに必要ない。訝^{いぶか}しんで当然だった。だがそれ以上気に留めなかった。

並んで立つほど十分近づいたところで翼付きが最初に降り立った巨人の背後に立った。

「どうだよ、兄弟。アースの連中、何もできやしねえ。これなら他のハイランドにだって負けたりなんか」

意気揚々と無線通信をしている同胞のことを気にもせず、小柄な巨人は目の前の巨人を抱え、風を巻き起こして突然飛び立った。突風にあおられ、町の人々の何人かは吹き飛ばされてしまったが、目

立つた被害はない。

「てめえ、何しやがる！ 所属と名前を言え！」

味方と思っていた者の思いもしない行動に動揺した操縦者が叫ぶ。
「エミユール・ビネよ。部隊所属は…どこかしら。強いて言うなら
光子技術開発局ね。ゴーレムだってわたし達の開発品なんだから。
こんなことに使わないでよね！」

市街から遠く離れ、建物などが一切ない平地に翼のない巨人を放り捨てる。

「いい加減にしなさいよ！ こんなこと、なんの解決にもなりやしないんだから！」

風を操り空に立つ。それを大地から見上げる銀色の巨人。

「あいにく見下ろされるのは大嫌いなんでね。議長のお孫さんだからねえけどよ、アンタのしたことは議会決定事項違反で重罪だ。アースに引きずり下ろしてたっぷり反省させてやるから覚悟しろ！」

彼方に対峙する両者の姿を、民衆は全員息をするのも忘れて見守っていた。

第十七羽 「折れかけの希望」

天空に向かって赤い光が走る。その手から赤い光を幾筋も放つのは、大地に立つ巨大な銀色の人形だった。その巨人が見上げる先にはもう一体の翼を背負った銀色の巨人がいた。風を操りかなりの速度で地面からの光を避けて飛び回る。空の巨人も機を見て地の巨人に向かって紫の光を落とした。移動しながらであるためか、その場を動かない地の巨人に命中することなく、その傍らの地面を穿っただけだった。顔を出し始めた牧草の若芽がこげている。

何度か同じような攻防があった後、空を舞っていた物が地に立つ物に突如急接近し組み付いた。その勢いのまま押し倒そうとしたのだが地の巨人は受け止めたまま体をねじり、力尽く相手を後方に投げつけた。大きな音を立てて大地に落とされた空の巨人はなかなか立ち上がらなかった。

――17――

「ちくしょー…　ひとりで両方やるのはきつついのよ…　わかってたけどさっ！」

翼を持つ巨人の中で黒髪の羽ありの女性がぼやく。空席のもう一つの操縦席をちらりと見、再び正面のモニターに向き直った。仰向けに倒れているらしく、画面の大半には空が、そして天と地が上下逆に映っていた。さかさまになった翼のない巨人が一步步近づいてくる。

「無断で無理やり乗ってきたから仕方ない！　さあ立って！　もう

一回行くわよ」

女の声に応えるように巨人は身を起こし、再度風を操って空に立った。それとほぼ同時に通信が入る。先程言い合った男の声だった。

「なあ、エミユール。お前、そん中一人だろ？ 女のクセにすぎえな。だけどよ、だいたいわかってんじゃねえか？」

見透かしているような相手の口調に舌を鳴らし、顔を歪める。

「うるっさいわね。正規パイロットか知らないけど、実戦経験も無いくせに行動基本原理を一から組み上げたわたし以上にゴーレムの動かし方を知ってるっていうの？ 笑わせないでよね！」

「威勢のいいお嬢さんはクライじゃないぜ、あんた美人だしな。だけどな、設計者の一人ってことはなおのこと知ってるんだろ。一人でどうやってやるんだよ。機体の中でぼろぼろにされる前に投降しな。議長にも報告してある。お咎めなしにしてくれるって言うてる今がチャンスだと思っぜ？」

「ありがと。…でも貴重な実戦経験になるから投降して欲しくないんでしょ、どうせ。言われたってしないわよ！」

急降下して両足で蹴りを入れる。さすがにその威力は抑え込みきれず、翼の無い巨人も大きく飛ばされた。蹴った時の反動を利用して上空に飛び上がった巨人は宙でターンし、大地に横たわった物の上を旋回しながら先と同じ紫の光を下に向かって何度も放った。

「まったく、なんて動きだよ。おい、出力上げてくれ、できる限りな」

「させるわけないでしょ！ そのまま一気に行動不能よ、残念！」
相互通信のまま戦闘が続く。降り注いだ紫の雷いかずちの影響で大地は土煙に覆われ、蹴倒された巨人の姿は見えなくなっていた。しかし空の巨人は迷うことなく地面に向かって速度を上げる。乗っている彼女が見ている画面には、土煙の奥で地に横たわった姿の輪郭が映し出されていた。

「熱源はごまかせない！」

姿勢を変え、踏みつけんとしたその瞬間、一気に土煙が晴れて半球状の光の壁が現れ、空の巨人はそれに跳ね除けられてしまった。横たわった物は悠々とその銀色の巨体を起こし、再び地に落ちた巨人に近づいていった。まだ相互通信は続いており、翼付きに乗った者のうめく声も相手に伝わっていた。

「ほらな。防御もままならねえ。それじゃあ回収用カーゴ呼ぶからそのまま寝てな」

自身を包んでいた光の防壁を消し、倒れていた空の巨人の足をつかみ上げようと腕を伸ばす。だが倒れた者は諦めず、風を起こして自分自身を吹き飛ばした。

「あー、そうかよ。んじゃあブチ壊して起動不能にしてやる。もう知らねえからな」

往生際の悪い姿に辟易^{へきえき}したのだろう。舌打ちをして通信回線を閉じた。それを聞いた息を切らせた黒髪の羽ありが小さく吐き捨てた。「みんなを敵に回したのに、いまさら乗ってくれるわけないじゃない……そうだ！ でも……」

空に戻って相手との距離を取っていたが、再び地面に立つ巨人の攻撃が始まった。懸命に避けていたが赤い光が一筋その左足に命中し、足は炎に包まれた。冷気を集中させて鎮火させる。行き着いた発想に迷っている暇を与えてくれる様子はない。

「……ごめん」

搭乗者の顔は晴れないまま、翼を持つ巨人は相手に背を向けて市街の方に飛んでいった。

第十八羽 「少年の勇氣 2」

遠く離れた農地の方で、二体の銀色に輝く魔物が争っていた。一つは大地に足をつけ、一つは羽毛の代わりに光の粒を散らす翼を背負い、互いに色の付いた光を放ち、その巨体をぶつけ合っていた。

「あつ！ お空の方が投げ飛ばされちゃった！ ……また立った！がんばれ！！」

「翼の方は… 俺たちのために戦っているのか？ ……父なる天からの遣いか？」

「ばか、よせ。よく見ろ、両方とも鉄の魔物じゃないか。俺たちのためだろうと関係ない。かつて父なる天に滅ぼされた、魔物なんだよ」

「…そうね。どっちが勝ったって私達は母なる大地に見放されてしまふのよ。何度でも同じ罪を繰り返す人間が、何度も許してもらえないはずがないもの」

「だけど、翼のが負けたらどっちにしる…」

「がんばれ！ こわいのをやっつける！」

「…そうだな。人間じゃ、魔物に敵わない。許してもらえないかわからないけど、今は信じよう」

片羽の少年は、市街から少し離れた丘に建つ教会の敷地から北の農地で戦う巨人達の様子を見ていた。ここは何か災害が起きた時の避難所としても使われていたので、一緒に地禮祭の支度をしていた子供達をここに誘導してきた。だが逃げてきたのは当然子供達だけ

ではない。人数が多すぎて屋内に入りきらず、大多数の者が建物の外で巨人の戦いを見守っていた。

何が起きているのか理解できず、不安で泣いている子も多い。やさしく声をかけてなだめていたが、慌てふためいて戻ってきた大人達の様子も相まって、波立つ不安は留まるところを知らず周囲の者達を飲み込んでいく。轟音が響き、空気の裂ける音が立て続く。突如として訪れた季節はずれの嵐に、人々は恐怖のあまり頭を抱えて縮こまるしかなかった。

わずかに静寂ができた。それとともに人々は顔を上げ、二体の魔物の戦場の方を見た。翼を背負った巨人が一気に攻勢に出る。もう一方を圧倒し、空から紫の雷を地に落とし続ける。もうもうと土煙が上がり、倒された巨人は其中で動く様子はなく勝利したように見えた。町の者達が力を合わせて町に伝わる数々の道具を手にして戦っても全く敵わなかった大地の魔物も、これまでかと思われた。少しずつ歓声があがり始め、勝負を決めに出た空の勇者を称えていた。しかし倒れた巨人を飲み込む土煙が突如現れた光の球に払われ、空に立つ巨人がその壁に跳ね除けられて再度地面に叩きつけられた時、周囲に広がる声は、急激に落胆へと変わっていった。

「…お空の、負けちゃうの？」

子供達からそんな声が上がる。大人達ははつきりと声に出さなかったが、三度空に上がった巨人が大地の巨人の放つ赤い光に追われている姿を見て、いよいよその覚悟を強く目に映すようになっていった。

「こっちにくるぞ！」

逃げるかのように、農地から市街の方に向かって翼の魔物が高速で飛翔してきた。混乱の極みに達した人々は少しでも遠くに離れようと、めいめい散り散りに逃げ出した。

早く逃げると、遠のいていく大人達が声をかける。どこに逃げても同じだと知っていたからか、それとも足がすくんで動けなかった

だけなのか、もしくは怯えて逃げられない子供達をなだめ、守らなくてはいけないと奮い立たせていたためか、片羽の少年は退かずその場に残っていた。町の上空を飛ぶ巨人から、女の声が大きく響く。

「ウイン！　お願い、こつちに来て！」

誰よりも驚いたのは名指しされた少年だった。巨人が飛んでいるところから今いる教会は離れたところに在るが、その聞き覚えのある声は明らかに自分を呼んでいた。

「ウイン！　助けて欲しいの！　あなたならできる！」

巨人は市街の建物を壊さないよう慎重に広場に着陸した。胸部の装甲が開き、中に乗っている人物が身を乗り出して呼びかける。

「…お願い。この町を守るのは、わたし一人じゃできない。だからお願い！」

無言で自分の周りにいる子供達の目を見る。皆が同じ目をして、うなずいていた。自分の胸に手を当て、息を落ち着けると、一度大きく左だけの純白の翼を開き、広場に向かって駆け出していった。

第十九羽 「輝ける翼」

「フリーズ解除。メインパイロット、エミュール・ビネ。サブパイロット、男性アンノウンにつきフォーマツト後システム再起動。エリクシルリアクター出力20%にて維持後活動再開」

黒髪の羽ありが早口で指示を出す。数秒後、操縦席内の明かりが消え、小さく響いていた唸りのような音も一瞬消えた。片羽の少年は戸惑い手狭な空間の周囲を見渡す。わずかな静寂の後、先程まで響いていた小さな唸りが聞こえ出し、少しずつ明かりが戻ってきた。それとともに黒髪の羽ありが先とは異なりややゆっくりと語りかける。

「いい？ ゴーレムの基本操縦はわたしに任せて。ウインはゴーレムの動力、エリクシルリアクターを大出力のまま安定させることに専念してちょうだい。操作は座席の両サイドにあるインダクションコンソールを使うんだけど……。そう、その指を入れる穴が開いてるヤツね」

言われるがまま少年は手を伸ばし、おそろおそろ左右それぞれ五つ開いた穴に手袋をはめるかのように指を入れた。人肌に触れるかのようなぬくもりが伝わる。

「そのまま握りこんで、自分が楽に持てる位置まで引き上げてオツケーよ。……結構しつくりくるんじゃない？ 後は考えるだけでいい。意識を集中して、モニターのゲージが常にその緑の部分の上限に来るように調節してね。ゲージが赤く点滅し始めたら上げすぎよ。その状態が続くと制御が利かなくなるから戻す。まずそれだけやってくれたらいいわ。……ひとりじゃ操縦と制御を同時に行いきれない。わたしとあなたがそれぞれの役目を果たさないと、わたし一人だけだったさつきまでと同じことの繰り返しよ」

初めて見る物、初めて触る物、初めてする事に囲まれ、守らなくてはいけない。少年の顔は強張り、鼓動が無用に速くなる。

「大丈夫。あなたのミスリルとの精神感応率は一般の羽ありの七倍なんだから！自分を信じて。ウィンならできる」

穏やかに、そして力強く。迷いのない声が室内に満ちる。少年は目を閉じ、大きく息を吸って少し止め、ゆっくりと長く息を吐く。その後ろ姿をやや上方に位置する操縦席から見ていた女性は優しく微笑み、その後正面を向いて凜とした表情を作った。

「ミスリルゴーレム・タイプ・フリーユージェル、オルガ「ブラウ起動」！」

室内が一気に明るくなる。二人の目の前にあるモニターは外の景色を映し、小さく響く唸りの中に風の音と辺りの喧騒が混ざりだした。

「さあ行くわよ、ウィン！がんばってね！」

— 19 —

その声と共に自分の体が押し上げられるような感覚に支配される。眼前の光景が流れ始めた事で、自分の乗った人形が飛翔したことを知った。自分の目の前には外の景色が映し出され、そのやや右上に円形の、全体の三分の一ほどが緑色に染まった図形がある。微妙に緑の帯が伸びたり縮んだりしている。言われたことを思い出し、慌てて自分の役割を果たし始めた。

「あなたが翔ぶのはこれで二回目ね」

後ろから声がかかる。右の羽を持たない少年は小さくあつと声を出し、自分も一緒に翔んでいるのだということに今さらながら気が付いた。

「相手もこっちに向かって来てるだろうけど、まだ少し時間があるわ。そのうちにエリクシルリアクターの制御に少しでも慣れておいて。無茶な上げ方下げ方をしても、短時間ならある程度は大丈夫よ」

巨人を操る女性はあえて低速で飛ばせているようだ。声は落ち着き、少年を安心させることに努めている。その声に応えるように少年はひとつひとつできることをしていった。単純な動力の増減ならさして難しくないように感じられた。

「それから、もう一個注意してて。戦闘が始まったら…めっちゃくちや揺れるから。安全ベルトは多少きつくても緩めちゃダメよ」

普段から飛びなれていないこの少年がどれだけ耐えられるだろうか、一抹の不安を飲み込み、速度を上げた。それに合わせて少年も出力を上げた。

モニターの正面に捉えられている翼のない巨人の姿が大きくなる。インダクシオンコンソールと呼ばれた機械を握る両手に力が入った。同時に男の声が飛び込む。

「よう、エミユール。あえて待っててやったんだぜ？ 追いかけてそのまま再起不能にしてやってもよかったけどよ、女の尻追いかけるようなマネは性にあわねえからな」

「へえ、さっきは捕まえられなくて随分と悔しそうだっただけど？」
「はっ、さっきまで俺にいいようにされてヒイヒイ言ってたろうが。それと、いいこと教えてやる。反乱分子ってことでもうお前の戻るところは無くなったんだよ。命乞いしてもよがり狂って死ぬまで止めねえぞ」

「残念ね、こつちにはアンタ達よりずーっといいオトコがもういるのよ。そっちに帰れなくなっても結構よ！」

速度をそのままに、少年の乗る巨人は急激に体の向きを変え、すれ違いざまに左足で大地に立つ巨人に蹴りを繰り出した。何らかの攻撃を予想していた相手の方も右後方に飛び退き直撃を避けた。直後右手を前に出し、掌からまた赤い光を乱射する。しかし目標に当たらない。速度を全く緩めず垂直に上昇し、上空で旋回したのち三本の紫の雷を落とした。防御姿勢を取る地上の巨人に向かって軌道を左右に振りながら急下降する。落下していく間にも数筋の紫電を放ち反撃の手を抑えこんだまま、身体の正面で両腕を交差して突っ込んでいく。

「歯ア食いしばる！ 踏ん張って！」

想像以上の機体の揺れに耐えながら出力操作に専念していた少年に指示する。少年は考えることをせず、ただ言われたようにした。

直後凄まじい衝撃が全身を貫き、体が二転三転したような感覚が続き、どちらが上でどちらが下なのかわからなくなっていた。しかし彼の乗る巨人が動きを止めたような気配はない。何が起きたのか理解できていなかったが、握ったその手を離すことなく自分の役目を果たし続けた。

「なんだ、あの動き… こつちが押されてるだ…？ エミュール！ そのフリーゲルに何しやがった！」

「別に何も？ アンタ達なんかよりずーっといいオトコが乗ってるだけよ。ラブよ、L・O・V・E。わかる？」

バカにしやがって、と吐き捨てる男の声が小さく響く。

「勘違いしないで。パワー重視のギガンテに出力で勝てるわけないわ。…それにさっきまでわたし一人で両方してたんだから。そんな不安定な出力状態じゃ尚更よ。今はリアクター最大で回してくれるパートナーがいる、それだけよ」

見違えるような動きを見せた空に立つ巨人が地に伏せたままの相手を下ろす。

「だから言っただでしょ？ わたし以上にゴーレムの動かし方知ってるの？ って。その結果がこれよ。もうあんな優勢に立てるなんて思わないことね。…ウイン、大丈夫？」

何とか、と返事を返す。しかし実際は信じられないほどの旋回の連続の影響で、静止しているはずの彼の目の前の景色はずっと揺れ続け、胃から酸っぱいものがこみ上げてくるのを何とか抑えているような状態だった。

「…っ！ よりによってガキかよ… なめやがって…」

相互通信が一方的に切られる。倒れていた巨人が立ち上がりその少し後、先程のような光の半球を纏った。少年の後ろから、ちつ、と舌打ちが聞こえた。

「また手出しできなくなったわね… にしても、あいつらわかってんの？ もうあれだけしか残ってないのに」

操縦桿を握ったまま片羽の少年が後ろを見上げた。それに気付いた黒髪の女性が微笑む。あの光に包まれている間は向こうからも何もできないから、今のうちに息を整えておくように伝えた。操縦桿から右手を離し、目に手のひらを当てて軽く頭を振る。続いて心臓の位置に添え、何度も深呼吸をした。

「…いい感じよ、ウイン。こんなに上手くやってくれるなんてね。あなた、本当にミスリルとの相性がいいみたい。本当なら全身のエネルギー配分までできるとエリクサーの無駄がなくなるんだけど、今はいいわ。アンチマテリアルフィールドが消えたら一気に行くわよ」

女性が正面に向き直ったのと共に少年も再び右手に銀のグローブをはめた。しばらくすると光球の中で巨人が両腕を左右に大きく開いた。巨人を包む光が少しずつ縮んでいく。

「…来るわ」

少年の体にも緊張が走る。出力をゆっくり上げていき、安全域の最大にまで達するとそれを維持した。光が消える寸前、大地に立つ巨人の腕と脚の装甲が開く。

「まさかつ！」

声の主に問う前に少年は体を大きく振られた。

「舌嚙むわ！ 気をつけて！」

最大速度で飛翔する。直後大地に立つ巨人から、後方に煙を吐き出す無数の槍が放たれた。その槍は赤い光線とは違い、空を舞う巨人の背中を追って軌道を変える。高速で飛び回るが槍は目標を見失うことなく追尾していった。

「やられたっ！ 全弾ロックオンするための時間稼ぎだったのね！
ウイン、しばらく揺れるから！ 堪えて、お願い！」

動きを止めることなく槍を振り切る。旋回しすれ違う瞬間に雷を放って何本か破壊した。誘爆を逃れ、急下降した巨人を追っていった槍は地面すれすれで急上昇した目標に向かって方向転換する前に大地に突き刺さって炸裂した。しかし放たれた槍の数は多く、未だ追う物は二十を下らない。

地道に避けては破壊し、を繰り返していくが雷の命中精度も落ちていく。高速戦闘がもたらす疲労は想像を超え、健闘している羽ありの息も切れていく。それとは対照的に機体の揺れに慣れてきた少年は少しずつ各部へのエネルギーの配分に意識を回せるようになっていた。翼への動力伝達と紫電を放つ両手への流量を優先し、わずかでもパートナーの負担を軽くする。その時だった。

…
…
…
…
。

「…え？」

極限の集中の中で、何かが聞こえた。

…
…
…
て。

「え？ 何？」

「なにになに？ どうしたの？ ちょちょ！ あーもう、しつこい！」
息を切らせたパートナーの声ではない。微調整をしながら聞こえる声に耳を傾ける。

手のひらに集めて。全部

何のことかわからなかったが、やってみた。ゲージが警告を表す赤へと変わったが、かまう事無く出力を上げる。翼への供給も断ち、全てを両手に注いだ。当然急激に速度が落ちる。驚いた操縦者は反射的に機首を上げる。それと共に翼に受ける空気抵抗が増してさらに減速し、そしてわずかに浮き上がった。背中を追っていた槍が、足元を高速で通過する。目の前の危機は寸での所で回避したが、一瞬目標を見失った槍が再び進路を変えて突っ込んでくる。正面から相対した状況だ。

「ウイン！ ちょっと、ウイン！ 何してるの？！」

「エマ！ 受け止めて！」

おそらく平常だったら却下しただろう。しかし疲労した中での突然の提案に羽ありの女性は戸惑いながら従った。巨人の腕を前に出し、掌を大きく広げる。そこには光球があった。その光球に吸い込まれるように槍が全て突き刺さった。

…炸裂しない。

紫の雷に撃たれた時のように爆発もしなかった。ただその光球の

中に留まり、動きを止めていた。

「何…？ これ…」

「今だ、飛んで！」

呆けていたところに少年から声がかかる。慌てて風を起こす。自由落下していた巨人は姿勢を整え、緩やかに大地に戻った。大地に足を下ろすと両手に抱えていた光球が消え、動きを止めた槍はバラバラと地面に散らばった。再び動き出す様子はない。

「やるじゃねえか。でもな、これで終わりだぜ？ タイプ・ギガンテ最新鋭のヴァルナ・ビートが最大出力で撃つたらかすっただけでも只じゃ済まんだろうな」

再開された相互通信に、二人の意識が翼のない巨人の方に向けられた。両腕が光り、右足をやや後方に引いて対シヨック体勢を取っている。背中から光の粒があふれ出し、輝くその姿は神々しくもあった。

「パニツシャー？！ 何考えてんのよ！ なけなしのエリクサーをこんなところで！」

「チャージは十分だ。もう避けられねえ！」

ひととき輝きが強まった次の瞬間、光の砲が大地をめぐり二人に放たれた。

「…ごめん、ウイン。避けられない。こんなことに付き合わせて、本当にごめん」

上の操縦席に座る黒髪の羽ありはインダクションコンソールを持ったままうなだれていた。下の操縦席に座る片羽の少年もインダクションコンソールを引いたまま、正面を見据えていた。圧倒的な力を見せ付けながら光が迫る。

その時、少年には声が聞こえていた。

その声が導くとおりに、彼は巨大な人形と心を通わせていた。

「嘘だろ…？ 何が起きてるんだ…？」

翼のない巨人に乗った二人の男は眼前の光景に、自身の目を疑っていた。彼らの放った光は正面にいる翼を背負った巨人をなぎ倒して彼方へと消えるはずだった。ところが現実とは異なり、巨大な光はその先へ進むことも戻ってくることもなく、真正面から受け止められたまま行き場を失っていた。少しずつ小さくなっていく。

光を受け止めた巨人の中、自分の体に何も変化が起きていないことに疑問を持った黒髪の女が顔を上げる。モニターには眩い光しか映し出されていないので画面を切り替え、今の機体の状況を確認する。

「まさか… 超伝導磁場？！ そんな機能、どのゴーレムにもないわよ！」

驚いて思わず声が大きくなる。

「まさかこれ、ウインがやってるの…？」

極限にまで冷却された機体に電流が流されていた。受け止められた光球は巨人の身体の中の部位にも触れず、宙に留まっている。目の前の光景に言葉を飲み込まれていた女性の耳にアラーム音が届く。確認すると動力源であるエリクシルリアクター格納部の装甲が開い

ている。受け止められた光はどんどん凝集されていき、青く澄んだ結晶となってリアクターへと吸い込まれていった。

「まるで光子炉… このオルガ「ブロウ全体が、小型の…」

青い結晶をすべて回収し終わると緩やかに空へと上がり、緩やかにもう一方のほうへと向かっていく。最大の攻撃を放った後の相手は、それを去^いなされてしまった光景に呆気に取られてしまい、逃げるでもなくそこに佇^{たたず}んでいた。

翼のない巨人の胸に掌を添える。決して破壊するような力ではなく、そつと触れた。途端に光を失い、動きを止めてしまった。

「くそっ！ 何しやがった！ 動かねえ、まだエリクサー切れじゃねえぞ！ おい、エミュール！ 何なんだこりゃあ！」

「わたしだつて… 何が起きてるのかさっぱりよ…」

ただ一人、片方だけ羽を持つ少年が穏やかな顔で、巨人の内側を優しく撫でていた。

第二十羽 「空と大地をつないだ手」

ぼん、ぼぼん、と爆ぜる音が晴天に響く。色とりどりののぼりに飾られた街路には屋台が並び、毎年のように訪れる旅芸人達が魅せる楽曲と演芸が華やかに町の空気を彩った。堪えきれない子供達が地を走り、空を駆けていく。

謝天祭の頃も町の外から人が集まるが、このような活気に包まれてはいない。訪れるのは農産物や織物、酒など、ここの特産品を買い込むのが目当ての商人ばかりで、町の取引場ばかりが人の声に満ちていた。

この町の地禮祭は有名で、近隣の町からも見物に訪れる人が多い。もちろん商売目的でやってくる者も多く、立ち並ぶ屋台のほとんどが普段は他所^{よそ}で稼業を営む人間の物だ。しかしこの町の間人はそれを歓迎する。他所との交流がさして無いからこそ、祭りの時期のふれあいが貴重で、そして楽しみでもあった。

いつもと変わらない活気にあふれる町並みの中で、ひとつ大きく違っているところがあった。

式典会場の中心に毎年立てられる矢倉は、今年は結局建てられなかった。しかしこの町の地禮祭の象徴でもある巨大な織物は今年も柔らかな春風にたなびいている。前後左右、計四枚の織物を、背中合わせに立つ二体の巨人がその身に纏って立っていた。

動きを止めた大地の巨人を監視するかにように、銀に輝く翼を背負った巨人が正面に立つ。空の巨人から片羽の少年が降り、町の方へと走っていった。

「何だったの、さっきの… ゴーレムにはあんな防御機能はないわ…」

中に残った黒髪の羽ありが呟く。設計者の一人であることが更に疑問を強くする。モニターを見る。彼女の視線に合わせて画面が動き、少し離れたところに転がっているものが拡大されて映し出された。

「ガエボルグを止めた」

そこに散らばっているのは執拗に二人を追いかけていた鈍く銀に輝く槍。そして大地を抉って作られた真新しい土の道が一直線に伸びる。

「パニッシャーを受け止めた。あまつさえそれをエリクサーに戻して吸収…」

考えても答えが出ない。この巨大な人型の兵器が作り出されてからも様々な実験が行われたが、このような機能が発揮されるようなことはなかった。今日の実戦にいつものテストと異なっていることがあるとすれば、

「… やっぱりあの子、あの子に何かあるんだわ。あの異常なまでに高い精神感応率もそうだけど… きつと良いヒントが…」

口元に右手を当てたまま、羽ありの女はずっと思考をめぐらせていた。

「エマや」

考え事に集中していた彼女は呼ばれたことに気付くのに少し時間

がかかり、間の抜けた返事をした。再び聞き親しんだ声が届く。

「おじい様…」

「お前は一体どうしたいのだ？ 空を離れ、我々を見捨てるつもりなのかい？」

その声に彼女は顔を曇らせた。自分の行いが行き場を失った空の民に与えた動揺が計り知れないことは想像するのに難くなかった。最高機密であり最高戦力の一つを強奪され、しかも拮抗する存在をもつてしてもそれを止めることができなかった。彼らの叡智の粹がもたらしてくれるはずの優勢は脆くも砕け散り、彼らの叡智の粹によつて与えられた空の民の絶望の深さは言わずともわかつていた。

だが、だからこそ彼女は伝えたかった。

「おじい様… わたし、気付いたんです。ううん、前から感じてたんだと思う。わたし達は勘違いしていたのよ」

一言一言をはっきりと口にする。それは自分自身に言い聞かせるためでもあるように見えた。

「力仕事が苦手なら、それは機械に任せれば良い。危ないことは機械に乗ってすればいい。便利になるようにいつも機械を作つてそれを自分達の手足にしてやってきた。それが間違っているなんて思わないけど… ハイランドの民は決して自分達だけの力で生きてきたんじゃない。機械に頼つて、機械に支えてもらつて、やつとのことです生きてたのよ。」

だからこれからのわたし達は、アースの人々に支えてもらつて生きていかなければいけないと思うの。そのかわりに、わたし達も彼らを支えていかなくちゃいけないわ。

…でもそれは、人間として当たり前のことなのよ」

「…ハイランドは屈してはならないのだ。旧時代より続く絶対の科学力を受け継ぎ繁栄してきた我々が、その誇りを地に落とすような醜態をさらすわけにはいかんのだよ。か弱い肉体でありながら連綿

と続く人類の歴史を守ってきた我らが叡智を、その威光を揺らがせるわけにはいかんのだ」

音声のみの通信であるため、相手の顔色はわからなかった。しかしその声は決して居丈高ではなく、苦渋の色が見え隠れしている。巨人の中にいる女もその言葉が老人の私心ではなく、公のための決断であることを感じていた。

「どうしてわからないの？ …いいえ、わかっていないの？ 無意味な争いに勝ち負けなんてないのに。お互いを傷つけるだけで、失うものしかないのに。旧時代には、ハイランドなんて無かった。人の背に翼だつてなかった。それが当たり前だったんじゃない。今わたし達は、その当たり前の世界に戻っただけ。それに、ハイランドが墜ちた時点でわたし達の今までの歴史は一度終止符が打たれていると思う。」

わたし達の力、機械はミスリルで作られてた。光子炉がなければエリクサーが得られず、ミスリルは精製できない。すでに失われた威光にすがっても、衰退するのは時間の問題でしかないわ。それなのにどうして自分達の力だけで生きていけると信じているの？ 一緒に生きてくれるパートナーがいなければ、いずれ滅んでしまうだけなのに。」

…おじい様、それに議会の皆様も本当は気付いていらっしやるんでしょ？」

無線の奥からの返事はなかった。しばらく待っていたが、一向に答えが返ってくる様子もない。無言のまま待つ黒髪の女性の目の前の画面に小さく人影が映った。それに女が視点をあわせると拡大された映像が別枠で表示された。その人影には羽があったが、それは左側だけだった。未だ老人から何か言葉が届くことは無い。少しずつ大きくなってくる片羽の姿を確認すると、羽ありの女はゆっくりと口を開いた。

「おじい様。アースの人達は、ミスリルがなくても機械が無くても笑顔で生きているわ。それは羽のあるなしに関係なく手を取り合っ

と一緒に生きているからだと思うの。あんな風にゴーレムを持ち出して無理強いすることなんて、必要なかった。一緒に生きていく道を探せるなら……」

再びお互いに無言の時間がしばらく流れた。だが次に口を開いたのは女ではなく、老人の方だった。

「……おそらくほとんどの民が納得しないだろう。本日中に、もう一度そちらに赴く。エマ、話し合いの席を設けていただけるよう、説得しておいてもらえるかい？　だが皆が現実を受け入れる時間は、どうしても長くかかるだろう。そこは理解して欲しい」

ゆっくりと、噛み締めるように、そして穏やかに語りかけると通信を切った。黒髪の羽ありは操縦席に座ったまま深く頭を下げる。しばらく頭を垂れたままだいと、今度は外から彼女の名を呼ぶ声がする。目を開け頭を上げると、巨人の足元に片羽の少年が立っていて、彼女が座っているであろう所を見上げて、大きく右手を振っていた。

いまだ幼さを残した少年の、まだこの先大きくなるであろうその手のひらを見つめる。

やさしく微笑むと胸部装甲を開放し、差し込む強い日差しに若干目を眩ませながら翼を広げて大地へと降り立った。

……

…

その日、周囲が橙色に染まる頃、町役場の外に銀色に輝く球体が

停まっていた。度し難い緊張に包まれていたが、決して怒号が飛び交うことはなかった。暴力はすでに為され、これ以上を望む者はどこにもいない。

空と地の隔たりはすでになく、そこにあつたのはこの星に生きる民の、共に生きていくための道を探したいという共通意思。

辺りに夕闇が広がりきつた頃、正面に向かい合って座っていた年老いた羽なしと年老いた羽ありの両者が席を立った。互いの手を握り合い、言葉を交わす。

互いが互いを知らなかったがゆえの齟齬^{そご}を拭い、支えあつていくと。

第二十一羽 「地禮祭 冬の終わり」

「いらっしゃい！ オオウロゴモリフライだよ！ アツアツの特製ソースに浸して食べるとヤミツキだよ！」

「アロエヤシのジュースはいかが？ 今ならサルビスチエリーの蜜漬けもトッピングしちゃう！」

「ナビア牛のカバーブだよ。今年もいい肉に育ったから絶品だよ」

絞った果実から立ち昇る甘い香り、あふれ出る肉汁が炭火に落ちてはじける音、くつくつと弱火で煮立つ鍋からたゆたう湯気。目抜き通りに所狭しと広がった屋台からそれぞれ特有の匂いを立てて、店主や女将が通りを行く人に声をかける。

手を引く父親の方を見上げて羽なしの子供が問う。

「ねー、今年はフユカヅラ飴のお店は無いの？」

「さーて？ 探しにいったおいで。お昼には戻ってくるんだよ」

父親から銀貨を手渡されると満面の笑顔を浮かべて走り出す。少し離れたところで思い出したように振り返り、お小遣いを握り締めたままの小さな手を振って、人ごみに紛れていった。

片羽の少年の家に、一人の羽ありが増えていた。帰る場所を無くしたという黒髪の羽ありは町長からの薦めもあり、事が落ち着くまでの間、少年の家族の世話になることになった。少年の祖父母、両親は家を離れた長子がいた頃と変わりないということそのまま受

け入れた。ひとり渋ったものが居たが、周りの説得で容認したようだった。

「ウイン、せっかくだから地禮祭にエマを連れて行ってあげたら？」
昼食の後片づけをしている時に少年の母が出したその提案を耳にした少年の姉は、皿を拭いていたその手をわずかに止めた。平静を装っていたが眉をひそめている。そんなことに気付くはずもない少年は、はいと返事をして黒髪の女に声をかけにいった。

いい加減弟離れしなさい、と言う母の声に返事せず、つんとしたまま淡々と片付けていく。隣に立つ母から、小さくため息が聞こえてきた。

「そんなに大きくない町なのに… こんな雑踏になるのねえ。すごいな」

半ば呆れるような声を漏らす。隣の少年がこの時期だけだと答える。近くの町や集落からも人が集まり、これからの農作業の無事を祈り、母なる大地への賛美を皆でする。

「だから、みんな活気付いてすごく楽しいんだ。これからもっと暖かくなってくるから、さあまた頑張るぞ！ って」

祭りでにぎわう通りの様子を嬉しそうに見ている少年の姿を見て、羽ありの女も笑顔になった。その後顎に手をやって小さく呻く。

「うーん… うちのところじゃ大きなお祭りはなかったなあ。建国記念の式典はあるけど、こう言う賑わいはねえ。人口も今じゃ三万二千人までだから移民も制限されてるし」

人口が定められていると言う事実には驚いた少年は聞き返していた。はつとした後、女はわずかに表情を翳らせたが、すぐに、大丈夫、と呟く。自分たちにとっては至極当たり前だった事がここではそうではないと言う当然の事実に変更して気がついたのだらう。一呼吸お

いて少年の顔を見て話し始める。

「ハイランドはどこもそうだと思うけど、土地が限られてるからね。コロニーって言うのはサイズに応じて養える人数ってのが大体決まってくるの。居住区の高層化で、単位面積当たりに住める人の数は格段に増やせるけど、食料や水の問題よね。うちのハイランドはハイランドが作られた当初のように自給自足を原則としてたから、アースから供給してもらってことが無かったし。技術開発に専念して、食べ物全部アース頼みってしているハイランドもあるけどね。でも、かなり反発が強いみたい。技術提供だけじゃ納得してもらえないってことね」

彼女の顔には先のような翳りはすでに消えていた。楽しそうに話しながら歩く二人の横の方から声がかかる。

「ウイン！ …え？ 何お前… いや… え…？」

それは少年の男友達の人だった。それに続いて同じくらいの年代の少年少女が仲良さそうに雑踏の中からやってきた。皆がほぼ同時に片羽の少年が大人の羽ありと一緒にいる光景を見た直後、少女の一人が大きく声を上げる。それとともに体格のよい羽なしの少年の一人が片羽の少年の肩に手を回し、人通りのやや少ない沿道のさらに端のほうへと連れて行く。黒髪の羽ありはきやあきやあと騒ぐ羽ありと羽なし少女に挟まれ、なにやら苦笑いをしている。そんなんじゃないのよ、と言う彼女の声は周りの喧騒にかき消されてしまい、片羽の少年を連れて行った少年たちの中には届かなかった。

「おい、ウイン、どういうことだよ」

「どう言っつて…？」

「とぼけるな。あの人のことだって。めっちゃうらやましいよ！」

さすがに察した片羽の少年も釈明する。しかし顔は赤らみ、一気に洩れた喉から出てきた返事はつかえつつかえでたとどしかつた。

「え、えつと、あの人はエミュールさんって言って、う、浮き島の……」

「浮き島？ 浮き島って……前落ちた奴？」

少年が失言に気付き、一瞬ためらった後に首を縦に振って肯定すると、羽なしの少年は顔色を変え、回した腕を離して沿道に残った少女たちを連れ戻しに行った。楽しく喋っていた少女達が遮られた事に文句をつけると、険しい顔をしたまま少年が声を上げる。

「いいか、この羽ありは前落ちた浮き島から来たんだ！ あれのせいで町はめちゃくちやにされたんだぞ！ 親父はあの騒ぎで怪我もした！ 何でそんなことがあったっていうのに町長の一声で、はい仲直り、なんて……できるわけないだろ！」

羽なしの少年はそのまま黒髪の羽ありの女に詰め寄っていく。少年の方が背が高く、羽ありの女もたじろいだようだった。

「それなのによく出てこれるな。そんなこともわからないくらいおめでたいのか？ 今はお祭りだからみんな言わないだけなんだよ！ どうしてくれるんだよ、ああ？」

「違うってば！ そんなじゃないよ！ それにエマはこの町を守ってくれた！ あの翼の付いたゴーレムを連れて来たんだ！ たてえ自分があそこに居られなくなるってわかってても！」

羽なしの少年を押しつけて黒髪の羽ありの正面に立ちはだかったどけ、と罵られても退く事無く矢面に立つ。その騒動を中心に人だかりができて始めていた。いつの間にか片羽の少年の後ろに居る女性が落ちた浮き島から来たということが周囲に知れ渡っており、ひそひそと陰口が聞こえてくる。

「ありがと、ウイン。……でも、荒らしたのは間違いないわたし達よ。それにみんなを守ったのはわたしじゃなくて、間違いないあなた。皆さん、謝れ、っていうならいくらでも謝ります。でもそれじゃあ気が済まないでしょう？ ……だから、もう少しわたし達に時間を下さい。わたし達がしたことの償いを、必ずしますから」

黒髪の羽ありが丁寧に深く頭を下げると、ばつが悪そうに人だか

りが晴れていく。二人に詰め寄っていた羽なしの少年は鼻息荒くいまだ納まりが着かないようではあったが、一緒に祭り見物に来ていた仲間が懸命になだめながら連れてその場を去っていった。

羽ありの女が下げていた頭をゆっくりと戻し、乱れた髪を整えながら呟く。

「…こう言うことなのよね。わたし達にはこうやって周りの他の地域の人達と一緒に生きているんだ、っていう感覚が決定的に薄かった。そうじゃなかったら、あんな強行に出たりしない。…偉そうに言ってるけど、わたしだってハイランドが落ちるまで考えたりしなかったのよ。ワインに会ってなかったらあの時動くこともできず、今もまだ途方にくれてたかもしれない」

巧く声をかけられずにいた少年に、祭りの雰囲気をぶち壊しにして悪かった、と謝罪する。その表情にはどこか拭いきれない不安が残っているようだった。

地禮祭二日目。この日も空は澄み渡り、日に日に柔らかくなる空気が人々の心も陽気にさせる。毎年この時期この地域の天候は優れ、天も人々と一緒になって大地を祝福しているようだった。

二体の巨人が背中合わせに立ち、身に纏った四枚の織物を春風にたなびかせている。色鮮やかに景色を彩るそれらの足元の舞台では、子供達が賛美歌を唄っていた。

「おー。改めて観ると、本当に立派なものね。ちよつとごめんね」
見上げているだけでは物足りなかったのだろう。羽ばたきあがって、一枚一枚を上部の方まで順々に眺めていく。

「年に一枚ずつ新しいのを作っていくんだよ。今年のが正面、去年のが左側面、一昨年のが右側面、裏にあるのが一昨々年。四年前以上前の物は飾られないけど、どれも教会に奉納されているんだ」

賛美歌を邪魔しない程度に上空の羽ありに声をかける。羽ありは

大きく二度頷き、しげしげと眺めていく。再び地面に戻ってくると、今度は少年を抱えて再び飛び上がった。

「ねね、どの織物にも上部と下部に必ず人のような絵が織り込まれてるけど…ほら、これこれ。これは何？」

「ああ、上のが父なる天、下のは母なる大地だよ。一枚全体でその前の年にあつたことを表してるんだ。父なる天と母なる大地に守ってもらって、僕達は生きている。それを感謝して、この絵柄を織り込んでいくんだ。この四枚は全部トウーさんっていう羽ありの男の人が作つたんだよ。でもトウーさんのは意味深すぎて難しいって、父さんはばやいてたね」

二人で笑いながら空を舞う。空気は高く上がった陽に温められ、子供達の喉が奏でる爽やかな響きが呼んだかのような風が心地よい。少し気の早いホシジルシがいつの間にか少年の服に止まっていた。ゆっくりと地面に降ろしてもらうと、服に止まった甲虫をやさしく両手で包み、空に向かって手を開いた。刹那ののち鎧のように固い前翅を開き、かすかな羽音を立てて、太陽に向かって飛んでいく。

「もう春だね。今年がまた良い一年になりますように」

「…来年の織物の図柄はもう決まったようなものね。出だしであることになって、ホントにごめんなさい」

小さな虫が風に流されながらも懸命に飛んでいく。三枚の羽は大地に立つたまま、その小さな姿が見えなくなるまで見守っていた。

第二十二羽 「地禮祭 春の訪れ」

「明日は朝早いから、もうおやすみなさい」

夕食を終え、ゆるやかな火をたたえた暖炉の前で団欒のひと時を楽しんでいた六人に、家長の羽なしが声をかける。

「もうそんな時間かい？ まだこのお嬢さんに色々と話聞きたいんじゃないの。まあまた今度にするかの」

対の羽を持つ女が何かあるのかと尋ねると、少年がえつと、と語りだすのを遮るように羽なしの娘が口を開いた。

「朝から母なる大地へ奉げる地姫つちひめの舞台があるの。地禮祭の仕上げで、たくさんの人が集まるメインの催事よ」

地姫とは、と羽ありが尋ねるとまた少年が口を開く前に姉が答える。ため息が一つ聞こえたような気がするが他に話題に入ってくることはなく、羽ありと羽なしの娘を残してひとりひとり就寝の挨拶とともに寝室に戻っていく。羽ありの質問、羽なしの回答、そしてそれに対して羽ありが打つ相づち。他には炭となった暖炉の薪が崩れる音が小さく響くだけ。静かで穏やかに夜が深くなっていく。

― 22 ―

地禮祭三日目。

巨人の足元に備えられた舞台の上には二つの篝かがりが置かれている。まだ中の薪には火がついていなかった。時はあけぼの、東の空はまだしも辺りは暗く、風が吹くとやや寒さを覚える頃合だった。舞台

の周囲にはたくさんの人々が集まっていた。寒いこともあるのだろうが、羽あり羽なし関係なく身を寄せ合っている。舞台の正面は上がる者のために空けられており、人だかりはそこで二つに分けられていた。

小さな歓声が立つと、小さな拍手が続いた。一人一人の音はちいさくとも、大勢が集まり一斉に重なり合えば非常に大きな音になる。しかしそうはなかった。長い歴史の中で皆が理解している。代わりに太鼓の音が大地の底から来るかのように力強く、低く深く周囲に響く。大きなたいまつを持つ者が先頭に立ち、四人が支える神輿こしに乗せられた美しい羽なしの女性が花道を通って舞台の中央へと上がっていく。太鼓の音が止み二つの簀すいに火がともされると、幾重にも儀式装束を纏った羽なしの女性は神輿から降り、舞台の上で倒れ伏した。簀すい火の薪が爆ぜる音が小さく立つ。その音が集まっている者全員に聞こえるほど、静まり返っている。

壇上の空気が大きな簀すい火によって温められてきた頃、東の空から太陽が顔を出した。静かに、そしてしなやかに、衣擦れの音と共に地姫が身を起こす。太鼓の音が徐々に徐々に大きく力強く周囲を満たす。地姫が立ち上がって両の腕を大きく左右に開くと同時に、一際強く太鼓が打ち鳴らされ、瞬間、静寂が戻った。その直後目を閉じうなだれていた地姫が目を開き顔を上げる。同時に演奏が始まった。

体をいっぱいに使って、大きく重たい鮮やかな装束をなびかせながら舞い踊る。女性ならではのしなやかさに羽なしの力強さが相まって、あたかも大きな華が舞台全体に咲き誇っているかに見える。「すっごい……めっちゃくちゃきれいな。本当に春が呼ばれてきたみたい……」

黒髪の羽ありの女が感嘆を漏らした。

「エディ姉さんも選考に残ったけど、惜しかったみたい」

「へえ。エディの地姫も見たかったわね」

「あたしイヤよ。こんな寒いのに無茶言わないでよ。アレ、実は裸足なんだから」

三人がくすくすと笑う。舞台では優雅に力強い華が咲き続けている。紅をさした唇の間から白い息が吐き出され、舞い続けているために薄く化粧をした頬も紅潮している。その艶やかな姿に片羽の少年は見惚れ、心奪われていた。

「…ウイン、鼻の下伸びてる」

姉に凶星を指された少年はわずかに背筋を伸ばし、取り繕うかのように何か言おうとしていたが、傍からはあたふたと落ち着いていないだけにしか見えなかった。

「仕方ないじゃない、ウインもそう言う年頃なんだし。…って、わたしなんか怒らす様なことした？　ね、エディどうしたのよ」

しゅんとした様子の少年と、つんと顔を背けている少年の姉を交互に見遣って、怪訝そうに首を傾げて黒髪の羽ありはまた壇上に視線を向けた。太陽は完全に大地から姿を現し、すべてを明るく照らし出している。地姫が腕を大きく振り上げると儀式装束の袖が広がり、刺繍にあしらわれている金糸が光を受けて輝いた。その美しく神々しい姿におおつと歓声が上がる。地姫が腕を交差しながらしやがみ込むと同時に演奏が終わり、広がった袖は下ろした腕に伴われて緩やかに舞台上に広がった。観衆からは惜しめない拍手が巻き起こる。

立ち上がって笑顔で答え、肩で大きく息をする羽なしのもとに太鼓の音と共に神輿が花道を通ってやってきた。再び神輿に乗せられて舞台を去る地姫の姿が見えなくなるまで、拍手が天地を満たし続けていた。

「えーっと、あとお昼と夕方に一回ずつあるんだけど…」

帰り道で片羽の少年が黒髪の羽ありに話しかける。少年の姉は今

年の地姫の娘達で色々やることがあるとのことで、朝の舞台が終わると同時に行動を別にしていた。

「僕、そんな風に見てたのかな…」

黒髪の羽ありは一瞬何のことを言っているのかわからなかったが、若干落ち込んだ様子の少年を見て察したようだった。

「バカねえ。普通よ、ふ・つ・う。それが男の子だって。むしろ…」

あ、はあん。それでエディは… これはからかいがあるわあ」

「…？」

「こつちの話。うつふふふ…」

頭の回転が速い聡明な羽ありは含み笑いが抑えられないまま帰路に着く。片羽の少年は聞こえないよう気をつけて、エマって時々怖いな、と小さく呟いた。

……

……

昼食は出店の物で軽く済ませ、再び舞台の方へとやってきた。もうすでにたくさんの人であふれており、二人ははぐれないよう寄り添いながら前の方へと詰めていく。昼の部が始まるまでにはいままの時間があつた。まだこの町に慣れていない黒髪の羽ありは、世話になるようになってから毎晩そうしているように、片羽の少年に気になったことを色々聞きながら時間を潰した。今の空気は高く上った陽に温められ、夜明けの寒さが本当のことだったかとみなが疑う。気がつけば二人の後ろにもたくさんの人だかりが出来ており、そして人の熱気も相まって、舞台の周りは少し暑いと感じるほどだ。

舞台を取り囲む人が相当な数になってきた。朝と同じか、それ以上だろう。がやがやと騒然とした会場に、大きな銅鑼どらの音が鳴り響いた。ざわつきが治まってくるのとさらに連続して銅鑼が打ち鳴らされる。舞台の両袖に設けられている天幕から様々な装束に身を包んだ羽なしの娘達が壇上に上がっていく。彼女達は全員今年で十九歳の娘だ。四十人ほどだろうか。全員が円状に舞台に広がったところで再び静寂が訪れた。しばらくすると朝と同じように花道から地姫がやってきた。朝よりも薄くて軽い儀式装束を纏い、神輿に乘らず自身の足で舞台上上がる。傍らに一人羽なしの女性を従えていた。

「……？ あ！ あれってエディじゃない？」

小声で片羽の少年に問う。少年も驚いた顔をして何度もうんうんと頷いた。壇上に広がった娘達の中にいると思い探していたところだった。小さな桶を抱え、しずしずと歩く。

舞台上上がった地姫は、その手に持った深緑の葉をつけた枝を桶に入った清水に軽く浸し、舞台の上の娘達の頭に葉に宿った露を振っていった。一人ずつ丁寧にいき、最後の一人を終えると片羽の少年の姉は地姫から枝を授かり、清水の入った桶を手にして舞台袖の天幕へと入っていった。少しして今度は袋を手にして戻ってくると、それを地姫に手渡す。その後、輪へと加わった。

穏やかな演奏が始まると地姫が静かに舞いだした。その場を動くとしなない輪の娘達に対して地姫が見せる憂いの顔と対照的に、演奏が賑やかになる。輪の中心にいる者が空を見上げると、空から十人ほどの羽ありがやってきた。精悍な青年が一人、その他の者は若い娘達だった。中央の青年が地姫に手を差し出すとその手を取って抱きかかえられて空へと上がった。羽ありの娘達は宙を縦横無尽に飛び回り、地姫を抱えた天士は舞台の上空で緩やかに円を描く。晴れやかな顔を取り戻した地姫が腰に下げた袋を開き、中身を手に取り下へと蒔いた。蒔かれた種から芽を出すように、輪の娘達が一人、また一人と穏やかに動き出し、やがて全員が演奏にあわせて舞いだ

した。

命の息吹を思わせるやわらかな緑。

期待に胸をふくらませる淡い桃。

抑えられない情熱に燃える赤。

穏やかに猛りを鎮める水色。

活気を皆に分け与える黄色。

すべてをやさしく包み込む綿のような白。

舞台の上には様々な花が咲き、彩っていく。賑やかな演奏とともに舞台を取り囲む人々から上がる喝采はまさしく、待ち侘びていた季節を迎え入れる、母なる大地に生きる人々の喜びの声だった。

第二十三羽 「地禮祭 新しい道へ」

町並みに羽ありの数が増え、幾日経ったろう。農地では家畜が草を食み、四足の機械が大地を踏みしめ休耕地に行く。水路を流れる穏やかな水音を伴奏に、虫をついばむ小鳥達の歌声が広がる。麦の若芽が風になびき、形を変えながら流れていく綿雲の影が母なる大地に落ちていた。

冬の終わりに西の農地に出来た岩山の回りでは羽ありと羽なしがともに作業をしていた。機械に乗った羽あり、材木や工具を扱う羽なし。かつての諍い^{いさか}など忘れたかのように、皆が手を取りあっていた。

— 23 —

間もなく日が暮れようとしている。拍手と歓声に包まれる舞台に備えられた祭壇の最上段には地姫が座し、閉会の時を待っていた。先程までの力強い舞と、目を伏せ穏やかで麗しい微笑をたたえ休む今の姿は、まさに母なる大地を映し出したようだった。

ざわめきが治まらない会場に穏やかな声が通る。今年の地禮祭の終わりを伝える旨を述べる声の主は、この町の長である羽なしの老人だった。ただ不可解なことに老人は祭壇の正面に立っている。会場にいる皆が驚いた。その声はまるで隣に立つ者が語りかけているようにすぐ傍から聞こえているからだ。

「へえ… さすがおじい様、気が利いてるわ」

唯一平静のままの黒髪の羽ありが呟く。

「みなさん、驚かれていますようですね。これは先日不幸にも落ちてしまった浮き島の技術を貸して頂いておるのです」

会場のざわつきは治まるどころかより酷くなる一方だった。しか

し町長の声はかき消されることなく一人一人の耳元に届き、住人達に理解を求めていた。

「あのような混乱の中、互いを知らぬ者同士が手を取るなどできるはずがない。しかたのないこと、極めて自然といえば確かにその通り。せつせと蜜を集め蓄える蜜蜂の群れを、食料を求めた雀蜂が襲う。蟻には移動するさなか、違う群れが出会ってしまおうと互いを殺しあうような種類がいると言う。ですが、私達は人間なのです。背中の相違があろうとも、言葉を交わし理解することの出来る人間なのです」

ざわつきは次第に治まり、野次を飛ばすような者は居なかった。壇上の羽なしの老人は舞台の袖に向き直ると手を差し伸べた。一人の羽ありの老人が壇上に上がり、舞台の中央まで来ると皆に向って一礼した。非常に落ち着いた、毅然としたその老人は、落ちたハイランドの代表だという。墜落によって多大な損害と迷惑をかけたことを謝罪した。

「あのような中で困窮した我々が取った行動は、愚かでありました。ただ必死だったのです。指導者であった私も支持得ざるを得なかった。同胞の生命を守るため。他の手段を模索し選択する時間もなかった」

「それで俺たちの命を代わりにしよう、てか！」

そうだそうだ、と怒号が飛び交う。今にも飛び掛らんばかりに殺気立つものが増えている。話は中断され沸点に達しそうな会場の空気の中、ばさりと大きな音が立つ。音のした方を見ると、二体のゴーレムが纏っていた地禮祭の象徴である四枚の織物が大地に広がっていた。

一体がゆっくりと歩き出し、群集の方に向き直る。片羽の少年の隣にいた黒髪の羽ありはいつの間にか居なくなっていた。

「お願い… 最後まで聞いてください。もう、争うつもりはわたし達にもないんです」

羽を持つ巨人から彼女の声がする。あの強大な力を見ていた人々

はそれが暴発した時のことを恐れ、壇上の老人に飛び掛る者は現れなかった。怒号は治まってきたが、一触即発なほどに空気は張り詰めていた。

「我々は傲岸でした。我々だけで生きている、そう信じて止まなかった。だからあのような不幸な事故に見舞われたとき、それを受け入れられなかったのだと今になって思います。今でも同胞の中には自分たちの存在こそが優位だと疑わない者がいる。ただ空に住み、科学の探求に余念がなかっただけで、アースに住まう方々となんら変わりがないはずなのに。しかし、強行策を実行した私もそうだったと言わざるを得ない」

ざわめきはかなり落ち着き、今は全てのものが年老いた羽ありの言葉に耳を傾けていた。自分たちが同じように生活の場を追われ脅かされたとしたら、どうしていたのだろう。今までのように空の民を嫌い、排斥することが正しいことだろうか。

「我々のしたことを許して欲しい、とは申しません。我々も追い詰められていたことを理解していただければそれで十分です。これらの私達のあり方を見て、考えていただきたいと、思っております」責められる者はどこにもいなかった。日が暮れ夕闇が広がる会場は静まり返り、焚かれた篝火のゆらめく光が人々の顔を照らしていた。薪の爆ぜる音がやけに大きく感じられる。長い、長い時間が経った。

「隣に立つ巨人、彼らは浮き島から来た者達です。あの力を目の当たりにした我々は非常に恐怖し、嫌悪しました。しかし、この町を守ったのもまたあの巨人なのです。たとえ語り伝えにあるような鉄の魔物であったとしても、我々と心を交わし理解しあえば滅ぼしあうことは決してない」

言葉を継いだのは町長の羽なしの老人だった。あの時の恐れを誰よりも強く感じたのは町全体への脅威を目の前にした彼だっただろう。一人では守ることなど叶わず、束になっても退けることは出来ず、ただ蹂躪されるしかなく降伏も余儀なしと諦めかけた彼の胸中

は察するに余りあつて、彼の言葉に異を唱える町人はどこにも居なかった。

「怪我をした者もいる。農地を荒らされ、この町のこれからを強く憂う者が多いことも知っている。が、遺憾に思うだけでは解決しない。そのことはもう皆がわかってしていると知っています。だから、受け入れましょう。勇気を持って」

誰かが指示したわけでもなく自然と拍手が会場に広がった。羽ありの老紳士は深く深く皆に向つて頭を下げていた。

「今日が地禮祭の日で本当に良かった。誓いましょう、これからの我々の未来を共に開いて行かん事を。母なる大地、父なる天に感謝し、この世界に生きる者として」

それから半年以上が過ぎ、その年の収穫の頃合が近づいている。はじめの条件だった三ヶ月を過ぎても、浮き島の住人達は片羽の少年の住む町で暮らしていた。約束を違えていると言つのに声を荒げる者はなかった。

豊かなこの土地で代々行われてきた確かな農法と浮き島の機械を用いた更なる集約化によつて、西の農地が使えなかった今年も十分にむしろ前年よりも豊作が期待され、誰一人愚痴をもらすこともない。アースの民もハイランドの民も、口を揃えてこう言つた。

我々は共に生きていける、恐れることは無い、と。

しかし、いつまでもこの地に留まることはできないと言うことは浮き島の民も承知していた。新たな地へと旅立つ日が近づいている。

はるか昔に技術が失われ、再建不可能と思われていた光子炉はついに復旧の目途が立ち、彼らの要がよみがえることは空の民に強い希望を与えていた。修復不能なまでに破壊された浮き島に代わる新たなハイランドを作ることとは現実的に不可能だったが、空に暮らしていた者達にあつた大地で生きることへの不安はすでに消えていた。移住することのできる土地も見つかっている。

白い柵を両脇に備える農道に、羽ありが二人立っていた。一人は老紳士で帽子を被り、一人は若い女で艶のある黒髪をしていた。

「結局、あの騒動の後一度も帰ってこなかったな」

「…おじい様あ。わたし散々迷惑かけてきたのよ？ 格納庫開錠規定無視、隔離兵器無断使用、機密保持規約違反。しかも議会決定事項に対する不履行、反逆。どの面下げて帰ってきたらいいの？ 部署のみんなも迷惑に思ってるはずだし…」

黒髪の羽ありは片羽の少年の家を出たが、今では町で部屋を借り、機械工として生計を立てていた。これまでほとんど機械がなかったこの町も、機械の有効性を皆が実感した今、羽なしでも使用できる簡単な構造の物をハイランドから譲り受け、多くの人々が使うようになっていた。それに伴い機械の故障なども増えたが、この町には専門の技師がない。それゆえ機械に長ける彼女の力は皆に頼りにされ、彼女の人柄も相まって町にいち早く溶け込んでいた。

だが、彼女はハイランドを捨てたわけではなかった。

「そうだな…。だが、今では皆がお前の功績に感謝している。ゴレムを核にして光子炉を起動させる技術の開発。外殻とシステムを

復旧しても、光子を凝縮し励起させるエネルギーを得られない現在では起動不可能と考えられていたと言うのに……。まさかあんな方法があるとは誰も見出せなかった」

仕事が終わった後も彼女はよほどのことがない限り遅くまで机に向かい、何かの理論を検証していた。図面を引き、紙が黒く埋まるほど細かな計算式が並び、気が付けば朝日を見ることもたびたびあった。

「わたし一人の成果じゃないわよ。あの片羽の子。あの子がいなければゴーレムがあんなことをできるなんて誰一人知らなかった」

時々片羽の少年を連れて、羽を持つ巨人に乗り込み西の岩山に向うことがあった。色々な実証実験がなされ、そしてつい先日光子炉の起動試験が行われ、歓声がこだました。

「わたしがどれだけやっても同じことは起きない。あの子に乗っている時だけ特別なことが起きる。…あの子、ゴーレムの、いいえミスリルの声が聞こえるって言うの。非現実的だ、って笑う？ でもあの子と一緒にいると、本当なんだ、って感じざるを得なかった。

わたし達には聞こえないのに、彼には聞こえる。きつとそれは天賦の才のおかげだけじゃなくて、みんなと一緒に生きていることを知っていたから。だからあの悲劇の後こんな奇跡が起かせたと思うの。彼がいてくれて… 彼を育ててくれたこの世界に… …ああホント、言葉にできない」

歳の差を考えなさい、と諫められたがそう言うことではない、と少しムキになって反論された。いくつも皺が刻まれた厳格そうな顔つきがわずかにほころぶ。

「アースには本当にすばらしいことをいくつも教えていただいた。これからは我々もよりよく変わっていけるだろう」

「ええ…」

「…ゆくゆくはお前のした罪の数々を、光子炉の件の恩赦で相殺にする。戻ってこないかい？」

わずかな沈黙が流れる。しかし彼女の中にはもうすでに答えがあ

った。それを声に出す勇気を振り絞る時間が欲しかったのだろう。閉じていた目を開き、はつきりと言った。

「…わたし、そっちには戻らない。アースで、ここみんなと一緒に生きてみたいの」

そうか、と短く返事をした後、離れたところに止めてあった銀色の球体の方へと歩いていく。一度振り向き、いつでもいいぞ、と一声かけると取り巻きの羽あり達に守られながら乗り込んでいった。きいん、と金属音をわずかに響かせ飛び立っていくのを彼女は一人で見送った。

「さようなら、ハイランド… さようならロディニア、わたしの生まれた国…」

白い柵に背中を預け、しばらくの間空を見上げる。名残惜しそうであったが彼女の微笑には陰りはなく、町のある方に向かって歩き出した。

おまけ挿羽 「おしえて！エマ先生」 (前書き)

まあ、たまにはこんなのも…

忘れ去られてる「羽」の世界をもう一度ご紹介です。

おまけ挿羽 「おしえて！エマ先生」

「はいはい。みんな集まったわねー。エマお姉さんのお勉強会、はじまりまーす」

「え？ あたしも受けるの？」

「はい、今日一緒にやってきましたのは助手のエディお姉さん！ 筋金入りのブラコンお姉さんよ！ その僕！ ブラコンってわかる？」

「ちょー！ あんた！ 子供捕まえて何教えてんのよ！」

「ブラザーコンプレックスっていつてね、おと 痛い！ 羽むしらないで！ 年上を敬いなさい！」

「うるさいつつてんのよ！」

――おまけ――

ハイランドを離れた黒髪の羽ありは今日は学校を訪れていた。以前から度々やってきて授業をしている。もともとこの町でも読み書きや計算、社会のことや簡単な理科を教えていた。

暮らしに必要な最低限の内容は押さえられていたがそれほど高度な内容ではなく、機械の使用が増えるようになってきた今では特に理科の教育が必要と、彼女が名乗り出たのだ。

：ただいつもの彼女の恰好とは異なり、伊達メガネをかけ、改まった衣装を身に纏っている。

「いったあー。ホント暴力的よね。まあいいわ。今日はこのお姉さ

んに手伝ってもらって一緒に授業をします。この前はどこまで話したつけ。えーっと、そうそう、みんなが使うようになったミスリルの秘密ね、覚えてる？」

はい、はいと子供達が手を上げる。

「その元気な羽ありの女の子！」

「リユーです！」

「はい、じゃありユーちゃん。ミスリルは何をエネルギーにしてたかな？」

「光です！ あと、人の心！」

「うんうん、よくできました。そうですねー。ミスリルはお日様の光を受けて力を溜めます。光電効果って言うんだけど、かなり難しい体系を取るものでそれはおいておきます。」

あと、人の心。実際は人の心が力になるというより、人がきつかけになってミスリルに貯えられた力の放出量がコントロールされます。」

さらに、手にした人から少しずつエネルギーをもらっています。長い間、体温や体から出る弱い電気をもらっている、と考えられていたんだけど、そうじゃないことがわかりました。生体エネルギーを直接……」

黒板につらつらと図を交えながら書いていると、助手に背中をつつかれる。振り返ってみれば子供達がきょとんとしている。先走りすぎたことに気付いて一旦打ち切り、あごに手を当てて、天井の方を見て少し考えた。

「つまり！ お日様に当たって、みんなと一緒にいるとミスリルは元気になりまーす！」

「…そんなにいいの？」

「これくらい直感的なほうが親しみやすいじゃない。理屈はあとで付いてきたらいいのよ」

子供達の顔を見るとこれほどになく納得した、という晴れやかな顔をしている。羽なしの娘もその光景を見て肩をすくめて続きを促した。

「それでは今日は、ミスリルを使うようになった今みんなに是非知っていて欲しい歴史のお話をします。

かつてまだハイランドが存在しなかった頃、人は鉄を使って機械を作り、石油や電池と言われるエネルギー源を浪費してそれらを動かしていたと言います。

莫大なエネルギーを使って機械を利用して、今よりもはるかに巨大な文明を築き上げてきたのだけれど、その分大地や空を汚す毒を撒き散らしてしまっていた。エディ、それをスイッチオン！」

「けほっけほっ！　ちよつと、何この教材！　何で煙が！」

台車の上に乗せられた装置から響く重厚な振動音が講堂内を満たすのと同時に、その排気筒から黒煙が吹き出る。排気筒は意地悪くスイッチの真上に位置されており、何も知らない操作者は見事にその洗礼を受けていた。

「これは、かつて世界中で使われていたエンジンと言う装置の見本です。この中で燃料を爆発させて、その時に出るエネルギーでこつやつて歯車を回します。確かにすごいパワーで役に立っただけ、こんな風に煙を出して折角きれいだった星を汚しちゃうのね」

たまらずスイッチをオフにする。振動音が止むと、前後に動いて

いたシャフトや軸や車輪の回転が次第にゆっくりになっていき、やがて静止した。

何とか機械を停止させたが、煙を防ぐには片手では不十分だったようで顔にススが付いてしまっている。鏡がないため本人は気付いていない。

黒髪の羽ありはげらげらと腹を抱えて笑っていた。

一方の子供達はと言うと笑うことができるはずなどなく啞然としていた。

羽なしの女はいきなりのことと怒ることも忘れており、手の甲で額を拭うと額についていたススが若干広がった。やはり気付いていない。

羽ありの女は悪^{わる}怯^{おそ}れる様子もなく片手を挙げて謝罪し、続きを始めた。

「世界中で十分な農作物が収穫されなくなつて、このままでは増えすぎた民を賄うことが出来ないと気が付いたときにはもう取り返しのつかないほど汚染が進んでしまっていた。それじゃあ次はこれに入つて」

羽ありから手渡されたものをおっかなびっくり広げると、それはかなり大きな透明の半球状のテントのようなものだった。何かが入っているわけでもない単純な空間だったので、少し警戒してはいたが言われたように中に入つていった。

ぱたん、と黒髪の羽ありが入り口を閉めそのままパネルに手を当てると内部だけが僅かに暗くなる。ドームの中に閉じ込められ、えっ？ と戸惑う羽なしの女を無視して講義を続ける。

「それまで無害だった昆虫が有毒になつて数を増したり、住処を追われた野生動物が人を襲うようになったり、安穩とした暮らしが失

われていく」

「わ、わわ！ きゃー！」

「災害の規模も増す一方で、このままでは滅んでしまうだけと言う結論が出たの」

「きゃー！ 水が！ え？ なになに？！ た、たすけ きゃーっ！」

半球の中には様々な映像が次から次へと流れていく。

大小の虫が飛び交い、洪水が押し寄せ、青々とした木々は立ち枯れ、そして燃え盛っていった。

当然映像だけなので身体にダメージは全く無い。いい頃合で黒髪の羽ありは、パネルにもう一度手を当ててロックを解除し入り口を開け、中で腰を抜かしていた羽なしの娘を引っ張り出した。

息を切らせてちよつと涙目になっている。驚きすぎてやはり怒ることを忘れていたようだった。出してもらった事に礼まで言っている。

立てるようになった助手を席に着かせると講師の羽ありは再び教鞭を手にした。腕を前で組んで壇上に立ち、片手で伊達メガネの位置を直すとレンズがきらりと光を放つ。それを合図にするかのように子供達は皆また授業に集中し始めた。

「そしていよいよ、滅亡の危機に晒されていただけでなく当時全世界で使われていたエネルギー源が枯渇してしまうと言った時に、光子炉が発明されました。

世界に満ちる光子を集めて、ほんの少しだけ外から力を加えるだけで連鎖反応が進んで莫大なエネルギーを生み出す、夢にまで見た技術。

理論上太陽のような強力な光源さえあれば光子は尽きないから無

尽蔵でクリーンなエネルギー。

これが人類の直面したエネルギー問題を一気に解決しました。

しかもこの光子炉は一基でハイランドのエネルギー全てをまかなうことができるほどの出力があります。それじゃあ……」

羽ありの女がちらりと見ると、羽なしの娘は身構え、顔を強張らせた。しないしない、と笑いながら講義を続ける。

「それじゃあ、質問しまーす。ミスリル、正しくはミスリル銀ですが、作る時には何が必要ですか？ わかる人ー！」

やはり子供達が元気いっぱいに手を上げる。

「はいその羽なしの僕！ さつきも当てたよね！」

「リヒャルトだよ！」

「じゃありヒャルト君、何かな？」

「えーっと、エリクサー！」

「はい、よくできました！ で、ブラコンは？」

「え……ぶ、ぶらざーこんぶれつくす？」

「はい、せいかいひいいいい！」

突如悲鳴をあげて黒髪の羽ありが仰け反る。その背後で険しい顔をしたまま、無言で羽なしの娘が黒髪の羽ありの翼をむしる。むしる。むしりつづけた。堪らず羽ありの女は逃げ出し、講堂の外廊下に出て行ったそれを羽なしの娘が追いかけていく。

「それはもういいって言うてんでしょーがああっ！」

外から響く大きな声に子供達はびくつと体を強張らせ、青ざめた

顔を見合わせていた。

おまけ挿羽 「教えないで！エマ先生」（前書き）

前回の続きです。悪ノリしたエマに放置された教室では…

おまけ挿羽 「教えないで！エマ先生」

……

…

講師とその助手が出て行つて数分。残された子供達はお行儀よく座つていられるはずも無く、講堂は無法地帯となり果てていた。女子同士で勝手気ままなおしゃべりをし、男子達は追いかけていた。そして紙飛行機が飛び交った。羽ありの子がちょっとだけ羽ばたいてその紙飛行機をキャッチし、投げ返す。

そんな中、羽ありの女子が一人みんなに声をかける。

「しずかにしなよー、授業終わって無いよー」

「何だよマーサ、良い子ぶっちゃってさー」

「エマ先生だっていつもと違ってふざけてたじゃん、ここからは自習、ジシユー」

いつの世もそうであるように、男子よりも女子の方が早熟だ。だがいつも握られていた手綱を解かれた暴れ馬達を委員長系女子が制しようとするも巧くない。

「もー！ エマ先生の言うことしか聞かないんだから！」

「…ば、僕も座ってた方がいいと思う…」

気弱そうな羽なしの男子が同意した。

「何だどー。リュートのくせに生意気だぞ」

不快を隠さない子供の声に気弱な羽なしはすっかり萎縮してしまつて、それ以上何かを言うことはなかった。羽ありの女子は説得を試みるが、男子達は小うるさい彼女を無視して走り去っていく。

丁度その瞬間、どかんっ！ と勢いよく講堂の扉が開かれた。

—おまけ—

鬼の様な、と言うのが相応しい形相の羽なしの娘がそこに立っている。もともと整った顔立ちであるためそれでもそれなりに見えるのだが、原型を留めぬほど眉を顰め、彼女を知っている者たちが見れば全員が「なん… だと…」と言うほど口角を歪め、鼻息荒く、辺り一面に生き物を寄せ付けない殺気を放っていた。

騒いでいた子供達は全員動きを止め息を呑む。騒然としていた講堂は一瞬で静寂が支配し、凍りついた。誰か一人でも泣き出そうものなら連鎖反应的に号泣が広がりかねない。

大きく息を吐き出し、ゆらりと一步踏み出した。肩に大きな物を担いでいる。

教壇近くまで歩いてくると、手間かけさせんじやないわよ、と言発し肩の荷をどさつと放り出した。包んでいた袋を開く。

それは縄で手足を縛られ、猿轡やゐぐつわをされた黒髪の羽ありだった。伊

達メガネはずれ落ち、着衣も乱れ息を切らし、髪は振り乱され目は虚ろ。まさにぼろぼろと言う状態だった。子供達は再び息を呑んだ。涙をこぼし始めるのを辛うじて堪えている。

床に転がされた彼女の拘束を解く。猿轡も外して頬を軽く叩く。黒髪の羽ありは意識を取り戻すと（？）肩からずれた上着を羽織りなおし、すすり泣き始めた。メガネはずれたままだ。

「うっ、犯されちゃった… もうお嫁にいけない…」

悔しさに顔を歪め、伊達メガネを外して涙を拭う。

「子供の前でそういうこと言わんの！ ほれ、続きしなさい」

顔を赤くした羽なしの娘がぶんすかと怒り、左拳を軽く握って頭上に上げた。黒髪の羽ありはまた叩かれては敵わない、と両腕を顔の前でクロスし防御。振り上げられた拳は打ち下ろされることはなく、安堵した羽ありは立ち上がって埃を払い、着衣を全て整えて壇上に上がった。

講堂全体を見渡すと、子供達は啞然呆然としたままだった。「大人になつたら分かるわよ」とウインクしてみせると、離れた席からチヨークが飛んできて額に命中。

あいたつと軽く声を上げて命中したところを擦りながら飛んできた方を見ると、羽なしの名投手が右手にした手ごろな大きさの二、三本の白墨を弄んでいるのが目に入った。

ちっ、と舌打ちをして仕方ないと言わんばかりに咳払いを一つして、またその手に教鞭を取った。

おまけ挿羽 「詳しいね！エマ先生」

講師の羽ありが教鞭を手にしたのを合図に、席を離れていた子供達がわらわらと自分の席に戻っていく。全員が元通りに席に着いたのをみて、黒髪の羽ありは板書を始めた。

ふと思い出し、振り向く。

「センサーがないからって、勝手に遊んでちゃダメですよ。みんなには罰として宿題を出します」

えーっ、と抗議の声が上がる。お構いなしに続けた。…なにやら口元がにやついているのが気になった。

「今度の授業までに、S あいたっ」

名投手は今回も絶好調。如何^いわしい単語を言わせる前に、しつと空気を切ってチョークが真っ直ぐ額を射抜く。白くなった額を擦って講師は、また後で、と言葉を濁した。

—おまけ—

「光子炉が発明される少し前、世界で初めてミスリル銀が生み出されました。精製されたミスリル銀はそれまでの科学の常識では考えられない性質を持っていたの。」

さっき復習したとおり、エネルギーを貯え、人の意思に反応して

そのエネルギー放出がコントロールされる。人と生きるために生まれてきた金属、とまで言われました」

これがねえ、と言いたそうな顔をして羽なしの娘は教材として持ってきたミスリル製の薄い板をいじっていた。手持ち無沙汰に両端を持って曲げ伸ばししたり、団扇うちわのように扇いだりしてぼわんぼわんと音を立てて遊んでいる。

はっ、と殺気を感じ、斜め上を見上げる。いつの間に隣にきたのか、壇上にいたはずの羽ありにひょいと取り上げられ、角で頭を小突かれた。地味に痛かったようで叩かれたところをさすっている。取り上げたミスリルの板を見せながら話を続ける。

「さらにミスリルが触媒となつて、大地や大気を汚染する毒を分解することができるようになりました。エネルギーは消費されるけれどミスリル自体に変化は起きないし、ミスリルにエネルギーを与えるには人がそのミスリルと精神感應するだけでよかった。強い光もあればなおよし、ってね」

「センサー、触媒ってなに？」

「つと、そーねえ。お手伝いしてくれる物、かな。お母さんがお料理してるとします。みんながお芋さんの皮をむいたりお皿を準備したりすると、お母さん助かるよね？ でもみんなはお料理してるわけじゃありません。つまり、何かをする時、より簡単にできるようにしてあげる物のことを触媒、といいます。だから、ミスリルのおかげで毒を壊しやすくなった、という事です。いいかなー？」

はい、と元気な返事が返ってくる。

「ここで、とても大事なことです。世界が直面した事態を解決する救世主として期待されたミスリルだったんだけど、当時そのミスリルを精製するのに必要なエリクサーは、今では失われた非常に煩雑

で難しい技術でしか作れませんでした。

だから当然ミスリルは非常に稀少で高価。少ない量でも広い表面積を持たせ沢山作れる様にと蜂の巣みたいなハニカム構造や波状の中芯を入れた段ボール構造を取り入れて、軽いだけじゃなくてかなりの強度を持たせたりと、工夫が凝らされました。

この頃に確立したミスリルの加工技術は今も基礎として使われています」

難解な内容だったが、ハニカム構造や段ボール構造の図解を手早く板書し、難しいことはまた今度、とウインクして続きに戻る。

「それでも生産量は少なく、世界規模での使用は不可能と諦められていました。

ところが光子炉を動かしたときに出来る副産物がエリクサーと一致することが突き止められ、人類の期待を一気に実現できる、と科学者はみんな喜びました。もうホント、奇跡、運命としか言えないわよね！」

興奮して鼻息荒く、説明に熱が入ってきた。無意識に握られ目線の高さに持ち上げられた拳が視界に入り、我を忘れかけていることに気が付いた。そのままその手を口元に運び、自分を諫める様に咳払いを一つ。

「えー… 体制も整いミスリルを大量生産できるようになったのですが…」

羽ありの女の授業を受けている子供達はみんなしつかりと話を聞き、うんうんと頷いている。

「でもその時にはこの星は汚れすぎて、人々はもう大地で暮らして

いくことが出来なくなっていました。病に倒れ、食料も不足し、どんどん減っていく人口。コロニー…、避難場所を作り備えていても、毒に満ちた大地ではとても長くは生きられない。

大地は人を拒絶している。そう言った悲観が世界を覆っていました。

一刻も早くたくさんミスリルを作って、お日様の光をいっぱいもらって、毒を無くさないといけない。だげどいきなり世界中をきれいにすることはいくらなんでもできなかったので、みんなで一生懸命考えました。そこで、一つの答えを出したのです。

『新しく大地をつくろう。』

巨大な光子炉を作り、大地の一部を切り取っていくつもハイランドを作りました。

世界中は無理だとしても、空に上がった大地くらいの限られた分なら何とかできるかもしれない。ミスリルを作りながらお日様の光をもらって、いずれは世界中を移動しながらきれいにしていこう、と。

人は空に上がるしかなかった。ハイランドが人類の生き残る希望と言われていました。決して威張りたいたからお空にハイランドを作ったってことじゃないの。そうしないと人が滅んでしまう。最後の賭けだったんです」

はじめはその場の流れで聞いていただけの片羽の少年の姉もいつしか聞き入り、複雑な顔をしていた。

それまで毛嫌いしていた浮き島は一体どういうものだったのか、何故存在するのか。

町には誰一人知る者はなく、皆が言うからそれとなく自分も嫌っていた、いや知ろうとしていなかったと言うことに気付かされたからだ。

「全ての人をハイランドに乗せることは出来なかったけど、ミスリルのおかげでハイランドの環境が整い、人は生き延びることが出来ました。あとは世界全体の環境の清浄化が終わるまでハイランドと共に旅をして、いつかアースに戻る日を待てばいい。」

そうやって、長い長い歳月の旅が始まりました」

おまけ挿羽 「詳しいね！エマ先生」（後書き）

今回はちょっとマジメ。

「こつこつとこを見るとやっぱり」「羽」はSFなのかな…と思います。

こつなつたらサイエンスファンタジーってことでSFだっ！

おまけ挿羽 「おしいね！エマ先生」（前書き）

まだまだエミュール女史の授業が続きます。

ただのおまけのはずなのに、「羽」の世界観を補完するのに重要になってしまった”エマ先生シリーズ”。軽薄な感じのサブタイですが、至ってマジメ。

それではどうぞ。

おまけ挿羽 「おいしいね！エマ先生」

僅かな手綱の緩みも許さない暴れ馬達も、おとなしく椅子に座って壇上の羽ありの言葉を聞く。

仔細は難解ではあった。しかし聡明な黒髪の羽ありの手によつて、今まで誰も知らなかった、知りえなかった世界が紐解かれ、目の前に広がる。子供達は実に素直だった。

なぜ？ どうして？

生れ落ちた子供達は必ず両親に問う。
その両親も自身の親に問うた。

だが、誰もその答えを知らない。

「……私が話していることがすべて正解、という事ではありません。そこにはたくさんのお惑があったはずで、当時思い描かれていた本当の意図は違うのかも知れない。

かつてあった出来事を調べて、昔の人はきつとこう考えていたんじゃないか、って先生が思ったことを今日はみんなに伝えていきます。でもね、これは本当だと思うの。使い方を過り滅びかけた人類を、科学は見捨てなかった。それが今のこの世界を作り、私達が在る。たとえハイランドを作ったことが星にとって歪で人間のエゴだったとしても、これがその時一番の考え。もし間違いがあったら、見つかったら、これからみんな直していきましょう？」

子供達は無言で頷いた。助手の娘の視線はやや下がり、焦点は床板の板目にあっていた。視線を下げたまま鼻で大きく息を吸い、ゆっくりと吐いた。

—おまけ—

「長い長い旅が始まって、ようやく軌道に乗ってきたハイランドでの生活の中で、人はまたかつてのように平和に仲良く暮らし始めました。鉄に代わって個人個人にミスリルが普及するようになってからすぐに、ミスリルの持つとても大きな特徴が見つかりました」

黒板に白墨を使って大きく文字を書く。そしてぐるりと円で囲んだ。

『精神感応』

子供達が皆ノートに書き込む。

「ミスリルは人が触れることによって力を発揮します。使う人によって強く作動したり弱く作動したりする。これを精神感応性と言います。精神感応性は発見当時から分かっていたましたが、それだけでなくミスリルには人によって感応し易い、し難いという特徴があったんです。それを数字にした物を精神感応率と言います。とっても大事だから覚えておいてね。

もっとミスリルを巧く使いたい。

だけどミスリルの精神感応と言う性質上みんなが同じように使え

るわけではなく、はじめは誰が使っても同じように動くように研究していたのですが、それは困難を極めたようです。

やがて怖いことが始まりました。ミスリルを変えられないのなら、もともと精神感応率が高くなるように人間を変えることができないか。そう考えるようになって、実際に行い始めました。これを品種改良、遺伝子操作といいます。で、これを持って」

それは歯車の付いた単純な機械だった。先端に錘おもりの付いた紐が垂れ下がっている。しかし助手は再三酷い目に遭わされるのではないかと警戒を解かない。もー、と苦笑しながら黒髪の羽ありはくると先端の錘を振り回しながら黒板の前に戻る。皆が見ている前で錘を垂らし、機械をスイッチを入れた。歯車が回りだし紐を巻き上げていく。

「ね、たったこれだけ。何の変哲も無いおもちゃみたいなものよ」

もう一つを箱から取り出し、助手に手渡す。しかし腕組みをしたまま受け取らない。

「……」
「……」

片方は笑いかけながら、片方は睨みつけながら。

無言が周囲を満たし、二人の間にバチバチと火花が散るのが見える。

ハラハラして流れを見守っている子供達。

しばらくして助手の羽なしは、羽ありが右手に持つ最初に操作していた方を指差した。

「……用心深いわねえ。三度目の正直っていうじゃない」

「二度あることを三度でもやるのがアンタじゃない」

反省する素振りも全く見せない様子で頭を掻き、けらけらと笑いながら右手の物を手渡す。

…が、やはり受け取らなかった。

「なんでよ!」

「……やっぱり両方、今ここで同時に動かして。何とも無かったら、受け取る」

黒髪の羽ありがざくりとしたことに誰もが気付いた。机に肘を突いて両手を組み、羽なしの娘の強い双眸が相手を見据える。ちよつとした無言の後、ちつ、と舌打ちが響き、両方の機械の柄尻にあるカバーを外し、トラップを解除。溜め息を付いた羽なしの娘に手渡す前にもう一度動かして見せ、安全を確認させた。道具を手にして二人が並ぶ。

「巻き上げる! って強く思ってたね。それじゃあせーの、はい!」

合図と同時にスイッチを入れる。床に付くくらいに垂らされた紐は巻ききられるまでにそこそこの時間がかかる。羽ありの持つ方が早く巻き終わった。お互いの装置を交換してまた同じ事を行うが、結果は変わらない。

「ね。わたしが使った方が早く回ります。これが羽ありの特徴です」

実際にやってみて比べてみるように、と子供達に手渡す。

「訓練すれば多少ミスリルとの感応もよくなりますが、それでも羽なしは羽あり程にはなれません。」

……さつき話した遺伝子操作での品種改良によって羽ありが生まれた、と言われています。結果としてもとの人類、つまり羽なしよりも羽ありの方が強力に精神感応できて、ミスリルを介した力の有効活用が飛躍的にアップしました。その代わり羽ありの身体能力は羽なしに比べて弱かった。良いことばかりじゃないってことです。エディお姉さんはいいい人だったからあんなイタズラしてもふん縛るくらいで許してくれたけど、もし喧嘩になったら私達羽ありは絶対に勝てません」

ジト目で睨み、許してないわよ、とぼそつと呟くが誰にも聞こえていない。

「……そう、羽ありでは羽なしに勝てないんです。背中に生えた私達の翼は逃げるためのもの。

ハイランドには今、羽ありしかいません。どうしてもか分かりますか？」

ある程度想像を働かせているようだが、答えられる子はいなかった。

予想していた、と言った感じで羽ありの女は助手の方を見る。

「エディお姉さん、どうですか？」

羽なしの娘はかつて彼女の弟が父に聞いていた事を思い出し、答ええた。

「……なんでかしら。きれいになったアースに全員戻ってから戦争が起こって、羽ありが無人のハイランドに逃げていった、って感じ

？」

黒髪の羽ありは軽く二度頷いた後口を開いた。

「その通り、争いがあった。ただその争いはハイランドで起こりました。世界の浄化がかなり進み、地上に戻る人々が増えていった頃、理由は分からないのですが羽ありと羽なしの間でいがみ合いが起きました。」

それは酷い戦争だったようです。世界中で10あったハイランドが7つに減ってしまうほどの。羽ありの存亡をかけた、大戦争が起きてしまいました」

おまけ挿羽 「逃げて！ エマ先生」

「センサー、戦争つて、何？」

羽なしの男子の一人が問う。

この町は今も昔も麦穂が揺れ、鳥がさえずり、虫が舞う。

人々は笑い、行き交う通日も穏やかな豊かで恵まれたこの地域では、他の地域と争いが起きることなど考えられない。戦争という言葉聞いたことがあったとしても、子供達にはそれが一体どういうものなのか知る由もない。

「そうね……一言では言い尽くせないけど、簡単に言えば喧嘩よ、ケンカ。ただ、どっちかがごめんなさい、と謝っても終わらない、ずっとずっと続くケンカ。人も、物も、住むところまでも全部が壊されてしまう、そんな争い。……そんなの、誰かしたい？」

子供達は全員かぶりを振った。

「ですよ。だけど、それが起こってしまったの。今だつたらもしかしたら防ぐことができたかもしれない。だけど、当時はそれを抑えることができなかった。そしてそれがあったから、今のこの世界ができたんです」

—おまけ—

「この星の浄化がかなり進んで、人々はアースに戻り始めていました。ハイランドで生まれた羽あり達はほとんどがそのままハイランドに残りましたが、一部は羽なしと一緒にアースに移り住みました。当時ハイランドの人口の四分の一くらいが羽ありだったそうです。数は少なかったのですが、羽なしよりもミスリルを巧く使え、そして頭も良かったから、かなり高い地位にありました。」

羽ありは羽なしよりも優れている。

ミスリルを巧く使え、知能が高くなるように遺伝子調整されて作り出された羽ありは、いつの間にか自分達と羽なしは違う存在、というように考えるようになっていったようです。

……それは恥ずかしいことに、今も続いています。私達もそうだった」

かつて起きた諍いいさかのことを思い起こした壇上の羽ありは自戒の表情を浮かべ、わずかな時間押し黙った。

「羽ありが羽なしを嫌いはじめ、住む人全員が羽ありと言う極端なハイランドが三つもできました。羽あり達が全員出ていったため羽なしだけになったハイランドもできました。ほかのハイランドでも羽ありと羽なしは住む地域を別々にして、ほとんど関わりあわないように暮らすようになっていきます」

今のハイランドとアースの関係とあまり変わらないわね、と助手の羽なしが呟く。同じことを何回でも繰り返すのは昔も同じことがあったことを知らないからなのよ、と講師の羽ありが申し訳なさそうに答えた。

「突然争いが起こりました。何が原因だったのか、今でもわかっていません。火種は静かに、でも確実に育っていた。ほんの些細なことで爆発して取り返しがつかなくなるほどになっていたなんて、ほとんどの人が気づいていませんでした。」

羽なしだけのハイランドが羽ありだけのハイランドの一つを突然攻撃しました。いきなり攻撃されたハイランド『コロンビア』はひとたまりもありません。為す術なく墜落し、たくさんの羽ありが命を落としました。

戦争が始まってすぐ、また一つのハイランドが墜落しました。それは最初に羽あり達を攻撃したハイランド『アメイジア』でした。羽あり達の仕返しでもとても強力な武器が使われ、やはりたくさんの羽なしの命が奪われました。

羽ありを根絶やしにしろ

古い羽なしはこの星に必要ない

耳を疑うような言葉が当時の空を満たしていました」

子供達は全員固唾を吞んで黒髪の羽ありの言葉を聞く。あつてはならないことが大昔にあった、そしてそのことを誰も知らなかったのだと言う事実に身震いすら覚えているようだった。

「羽ありと羽なしの両方が暮らしていたハイランドではもっと酷い争いが昼も夜も繰り返されていました。体力に劣る羽ありがまともに戦って羽なしに勝てるはずがありません。アースに降りても結局羽なし達に追われるだけだから、アースに逃げることもできません。でもハイランドから羽なしを全員追い出してしまえば、羽なしの人

達は登ってこれない。羽ありにとって唯一安心できる場所、それがハイランドでした。

必死になって戦いました。羽ありはミスリルの機械を使って羽なしと戦いました。羽なしもミスリル製の武器を手にし、羽ありの操る機械と戦いました。戦いの場になったハイランド『ウルティマ』は戦いの影響で光子炉が故障し、アースに落ちました」

前の地禮祭の時みたいだったの？ と子供たちの方から質問が上がる。講師は大きく首を横に振った。

「長く、長く続いて比較にならないくらいたくさんの方が傷つき、たくさんの方が壊されていったの。」

そんな莫大な犠牲を払った争いの末、ついに羽あり達は羽なしを全員ハイランドから追い出してしまった、と言います。何とか勝ちましたが羽ありの人口は半分以上に減ったと言います。それから先、ハイランドはアースと関係を断ちました。またあのような戦争が起こったとしたら同じように自分達を守ることが出来ないかもしれない。必死になってハイランドに閉じこもるしかありませんでした」

「かわいそう……」

板書する手を止め、振り返る。一人一人の顔を見ていくと、最前列にいた一人の羽なしの男の子が彼女と目が合った瞬間にうつむいた。

「…どっちが、かな」

伊達メガネを外し、声柔らかに穏やかに問う。思わず呟いただけの羽なしの男の子は突然の問いかけに多少困惑気味ではあったが、

懸命に言葉を紡いでいった。

「…両方。お空に住めなくなった羽なしも、それまですごく怖い思いをした羽ありも…」

教師は教壇から降りて傍らに歩み寄り、中腰になって目線を合わせた後、答えた子供の頭を撫でる。

「それがわかるなら、君は立派だよ。大人になってまでする喧嘩なんてろくなことにならない。覚えておいてね。また、あんなことにならないように」

講師の羽ありは立ち上がり、講堂にいる全ての子供達に向って話しかける。

「それを感じて欲しくて、今日は歴史の話をしました。いがみ合って、お互いを分かり合おうとしない。自分を守することに必死になりすぎて他人のことが見え^{ひと}ない。そのままじゃ昔のことの繰り返しになってしまう。私だったら、そんな事嫌です。今のこの町のように、またいつか世界中で空と大地が手を取り合うことができるように、みんなもリユート君が感じたこと、覚えていて下さいね」

臆病な少年が驚いたように黒髪の羽ありに問いかける。

「え？ ふふっ、だってよく似てるもの。すぐ覚えちゃった」

その一言に、少し離れた席に座っていた助手の羽なしも大きく首肯した。

中断していた板書を続け、書き終わると羽なしの娘に教材の中にある紙の束を出すように促した。そこには数々の機械の絵が描かれていた。羽ありが乗っていた球体のビークルや農耕用の四足機、昇降機の付いた荷車、そしてゴーレム。他にも色々なイラストがあった。一ページ一ページめくりながら話を進める。

「羽なしがいなくなり、身体能力の劣る羽ありだけになったということもあって、当然ハイランドでは自分達の代わりに仕事をさせるためにミスリルを使った機械技術がさらに発達していきます。その最先端がみんなもみたあの巨人。でもあれは先生がいた『ロディニア』という国ではそうだっただけで、ほかのハイランドではもっと違うものが独自で作り出されているかもしれません。みんな奥の手は隠してるものだからね！」

いたずらっぽく笑った黒髪の羽ありは伊達メガネをはずし、上着の胸ポケットにしまう。右手に持った教鞭で左手の掌を軽く打つと、ピシッと小気味のいい音が広がった。

「それじゃあ、今日のお勉強はここまで！」

子供達と羽なしの娘が委員長系女子の号令で席を立ち、講師の黒髪の羽ありに礼をする。これが今日の最後の授業だったのでめいめに荷物を片付け、講堂を後にしていった。

「そう言えばセンサー、宿題は？」

「あ、そうか。それじゃあ」

シッと空気を切って白い影が黒髪の羽ありの額めがけて直進する。

さつと挙げた右手で受け止め、投げ返した。白い影が飛んできた先にいた羽なしの娘は、返ってきたチヨークを左手で受け取るのと同じ時に大きく舌打ちをした。

「……今日みんなが授業を受けて、昔にあったことに対してどんなことを思ったのか。それを明日までに出してください。みんなが思ったことをこれからも大事にしていくことが、きっと幸せな未来を作ってくれるからね」

今日の宿題のことや、これから遊ぶ約束を交わしながら羽のあるなしに関わりなく賑やかに、楽しそうに帰っていった。

……

…

今日使った教材を抱えた二人の女が歩いていく。台車に乗せたエンジンンは後日ゴーレムで回収する予定なので学校に置いてきた。まだ日は暮れないが、大分傾いている頃合だった。

「今日は勉強になったわ。エマ、あんた科学者だって言ってたのに歴史とかもちやんと教えられるんじゃない。先生に向いてるんじゃない？」

「向こうじゃ色んな発表とか講義とかやってたからねえ。それとわたくし、改めてハイランドの……っていつてもロディニアの歴史だけでなく、勉強しなおしたの。いつかこうやって話さないといけない

んじゃないかなって思ってたからね。

アースに暮らしながら史実だけを見直してみると、あそこの学校の授業で習うことって、すごく都合よく解釈された内容なんだって思ってたわ。やっぱり、降りてきて良かった」

とことごと二人並んで歩く。羽の無い背中の方がすこし背が低い。しかし荷物のお半を手をしている。今日この教材を用意したのは羽ありだった。学校に行く時は半々にしていたが、帰り道では自分が多く持つと羽なしの方から名乗り出た。

「急に助手して、って言うてごめんね。驚いた？」

「だいぶね。何あの装置。ホンキでビックリしたわ」

「きゃー！ だって。ぷーつくくくく！ エディ、チョーかわいいー。ウィン、エディってやっぱりオトメよー」

「るっさい！ また羽むしるわよ！」

またあんな目に遭うのはかなわないと一瞬だけ羽ばたいて隣から伸びてきた手をかわす。舌打ちをするが執拗に追うまねはしなかった。

「…あと、遺伝子とか品種改良とかよくわかんないけど、羽ありは作られたって話、あれホントなの？」

「もうはるか昔のことと誰も本当のことはわからない。記録に残っているだけよ。その記録が偽物かどうかわからない。でもはつきりとわかっているのは最初の羽ありが生まれたのは『パンゲア』というハイランドだったこと。あそこは今でも超科学を誇る異質の国。遺伝子操作で作られたってというのは多分、本当だと思うわ」

やはり理解の外ではあったが、声の調子から随分と深刻であることを感じ取っていた羽なしの娘は無言を通した。実際何と言ったら

いいのかわからなかった、という事もある。その意を汲み取り、黒髪の羽ありが続けた。

「でもわたしは、ウインはちょっと違うって思ってるの。多分あの子は本物の羽ありとして生まれてきた子なんじゃないか、って」

本物ってどういうこと？ と怪訝そうな顔で少年の姉が問う。

「羽なしの体なのに羽を持って、精神感応率に至っては通常の七倍訓練した羽ありだってあの域にまで達することなんて聞いたことがないわ。感応なんていうレベルじゃない。私たちのご先祖みたいに作り出されたんじゃないかって自然に出現した、本当の意味で次の人類じゃないか、って。考えすぎかしら」

羽なしの娘は学者の考えることは難しくってわからない、と肩をすくめて苦笑いを浮かべた。それを見て微笑んだ羽ありが続ける。

「いずれにせよ、あの子のおかげでわたし達は変わった。特別な存在なのは間違いないわ。あなたの弟、もっと誇っていいよ」

羽ありが不意に一步前に飛び出す。ぶつかりそうになって足を止めた少年の姉の方に向き直って笑顔で大きな声を出す。

「でも！ ほどほどにしておかないと色んな意味でピンチよ、婚期とか！ 科学的にも姉弟婚はあまりオススメできないからね！」

顔を真っ赤にしてわずかにうつむいた。よくよく見ると少し震えているようだ。覗き込む羽ありから顔を背け、噴火直前の火山のように体の底から沸き立つ感情を溜め込み、一気に解き放つ。

「だからいつつも……一言おおいのよ……！」

黒髪の羽ありは声高らかに笑いながら空高く羽ばたきあがり逃げていく。

「逃げんなー！」

大荷物を両手に、夕日に向かって飛んでいく羽ありを追いかけて大地を駆けていった。

おまけ挿羽 「逃げて！ エマ先生」(後書き)

ふー、長かったおまけも今回でようやく終了です。完ッッ壁SF
っぽいですね(汗)

そして結局最後まで主人公不在(爆)

次からは本編に戻ります。第二部もどうぞお付き合いくださいませ。

れいちえるでした。

第二十四羽 「変わりゆく世界」(前書き)

お待たせいたしました。ここから第二部の始まりです。

第二十四羽 「変わりゆく世界」

数人の人間が円卓を囲んでいる。この暗い部屋の中でただ一つ明かりを持つのはその円卓の中央。透明な半球状の物体の中に陸地が浮かび上がっている。

ふっ、とその陸地が消え、次にまた別の形状をした陸地が中に現れた。そのドームの中にあるものは現実の物ではなく、単に映像であるようだ。半球の中の陸地の周囲を雲が流れることから、どうやらその陸地はハイランドであると察せられた。はじめは浮き島のやや下を流れていた雲が徐々に浮き島を囲むようになり、そして浮き島を囲んでいた雲の波がだんだん高くなっていく。

静かだった部屋に最初に響いたのは、年齢を重ねた女の声だった。

「またハイランドが落ちたそうよ」

「今度は『ゴンドワナ』……」

「今回ののは未曾有の惨事…… 都市が丸ごと一つ壊滅したわ。……ゴンドワナが避け切れなかったそうよ」

映像は流れ続け、雲の層を抜けたゴンドワナと呼ばれた浮き島が進むその先に、高い塔をいくつも持つ大きな市街が見えてきた。

陸地はそのまま高度を下げ続けた。その進行速度が遅くなるようには見えない。むしろ吸い寄せられるようにどんどん速くなっていく。まもなく眼前にそびえる巨大な塔をガラス細工のように打ち砕いて瓦礫の雨を降らし、街並みのすべてを下敷きにしながら世界を揺らして大地に還っていった。

「……酷いな」

「音が聞こえないだけ、まだマシね……」

ドームの中には爆炎を上げる巨大な岩山と、天から降ってきたその岩山に挽き潰された瓦礫の荒野が出来上がっていた。先程まであったはずの文明の光はもうすでにそこにはない。

「証言だと、光子炉の出力が突然低下したらしい。あれだけの質量だ。光子炉無しではどう足掻こうと進行方向を変えることはできなからう……」

「我々と同じか……。……もしかして」

「……ああ。やはり黒いもやが発生したそうだ」

「……耐用年数の問題か？」

「わからん。だが、ロディニアもゴンドワナもローラシアも、起源は同じだがメンテナンスなどはそれぞれのハイランドで独自に行っている。それがほぼ同時期に機能不全を起こすとは到底考えられない」

「偶然じゃない、とでも？」

「……わからん」

炎と煙を映し出していたドームの映像が消え、部屋に暗闇が広がる。

「いずれにせよ、残るハイランドは4つ。何事もなければ……」

少年の家の前から帽子を被った初老の羽ありが飛び立つ。その後ろ姿に手を軽く振って、少年の母は戸を閉めた。彼女の顔は終始笑

顔だった。

「お母さん、どうかした？」

普段から笑顔の多い彼女がいつも以上に上機嫌な様子を見て、少年の姉が聞く。その胸には一つの封書が抱かれていた。娘が手を伸ばしてきたので取られないように子供っぽく体を翻してその手かわす。なにより、と抗議する娘を他所に、引き出しからはさみを取り出してうきうきと開封していった。

中に入っていた紙を取り出し、椅子に腰掛けることもなく広げて目を通す。年甲斐もなく……などと思いながら見ていた娘が、座っていた椅子の背もたれに身を預けたまま大きく伸びをして天井を見上げた時、手紙を読んでいた母が急に大きな声で呼びかける。びっくりしてバランスを崩し、後ろに大きく傾いていった。座っていた娘の脚が宙にきれいな弧を描く。椅子と床が勢いよくぶつかり、大きな音が家中にこだました。

椅子と一緒に床に倒れ伏すはずだった娘は、腰を落として両腕を開き、大の字ともやや異なる不思議な姿勢で立っている。

「……よく転ばなかったわね」

「……地姫の稽古のおかげさんで」

今年の地禮祭もつい先日無事に終わり、眠っていた虫たちも起きだす季節を迎えていた。地禮祭の舞いの振り付けは毎年その前年度の地姫と侍女に選ばれた娘が指導することになっており、少年の姉もその役割を果たしていた。特に去年の地姫と侍女の二人は男女を問わず人気が高く、信頼も厚かった

「アネーシャちゃんは天士の人と今もいい仲だって聞くのに……。アンタはまだなの？」

「さーねー」

「……ウインばかりかまってちゃダメよ。あの子だって年頃だし、多分エマちゃんのこと」

母が続きを言おうとした瞬間に非常に怖い目つきで睨みつける。呆れたように母はため息をつき、椅子を直して再び座るように促した。

「……で、何が書いてあったの？」

まだ微妙に眉間にしわを寄せて、頬杖をつき右手の中指でテーブルを小刻みにタップしている娘が、やはり若干不機嫌な様子で問う。台所に向かった母が、今朝買ったミルクを注いだカップを差し出す。会釈をして受け取り、こくりと喉に流し込んだ。

娘が一息ついたところで手紙の内容を告げると彼女の表情はすぐに明るくなり、自分も直接確認したいと手を伸ばした。目を通すと笑顔のまま手紙を母に返す。だが次に出た言葉は少し不満そうな感じだった。

「えーっでも、本当に明日なの？　いくらなんでも急すぎるよお」
「もう五日前に出たって書いてあるわ。きつとこの手紙は頃合を見計らって出してもらったのよ。……じゃあ、早めに準備しておかないとね！　エディ、いろいろ手伝うのよ」

へいへい、と気だるそうに返事をする。しかしそれとは裏腹に立ち上がった彼女の顔は明るく、不平は一つもないようだった。

片羽の少年は農地に出ていた。ロディニアの民が町に寄贈していた機械を操り、農作業の手伝いをする。片羽の少年のほかにも機

械を駆り、積極的に畑を耕し整えていく羽ありが見られた。また水路の工事など、これまでは羽なしに頼りきっていた土木関係の現場にも機械に乗った大人の羽ありがいる。

この町に暮らしている羽ありには他の町との物品の流通や商売を生業とする者が多かった。腕力、体力の必要な仕事に直接従事する者はない。設計や計画を立てることはあっても工事の現場では空から状況の把握をしたり連絡係をしたりする程度。若い羽あり、特に男の羽ありは直接その翼を使う仕事に好んで就いた。

だが不幸にも羽を痛めて仕事に差支えが出る者が少なからず現れ、本当にまれではあるが、二度と飛べなくなるような傷を負うこともある。そうなった者のなかには悲観して自ら命を絶ってしまう者がいた。

しかし、羽が使えなくとも機械を使うことには障害はない。人の手では時間のかかる作業でも機械を使えば従来よりも早く、広く行える。

多様な機械が増え体力に劣る羽ありでもできる事の幅が広がったこの町では今、羽なしが羽ありを必要とし、羽ありも羽なしを必要としていた。

「おいウィン、ちょっと来てくれないか」

太陽が南中する頃合い、片羽の少年の乗った四足機からやや離れたところで作業していた機械の方から一人の羽ありが飛んできた。呼ばれた片羽の少年は銀色に輝く機械を止め大地に降りる。すぐに戻るよ、と声をかけて動きを止めていたもう一台の機械の方へと駆けていった。

……

…

「うーん、動けないのはこの左前足の付け根が原因みたいですけど……」

運転席に座ってパネルに手を当てたまま、片羽の少年は難しい顔をしていた。片手で操縦桿をもう一度引き、その後近くのレバーを下げる。ゴウン、と低い音を立ててわずかに動くが前進するには至らなかった。

「これ以上は……。ここが痛いつて言ってるんだけど、中のことまではちよつと」

「そうか……。ありがとな。こいつはここに置いておくしかないか」

半身乗り入っていた羽ありの男が頭をかいてぼやいた。大きな障害物を農地に置いたままにすることに抵抗があるようだが、致し方ない。修理するためにも様々な道具をここまで持ってこなくてはいけない事も頭が痛かった。だがそれに応えるように少年が明るく言う。

「あ、でも動かないのはこの一本だけだから……」

両手で操縦桿を握り、手前に引いて右に切った。

「こうしてあげれば、後は三本足で歩いていきますよ。……大分揺れるけど」

器用に機体を傾け、左前足を浮かせて前進していく。確かにかなり揺れるため羽ありの男は操縦席からはなれ宙を舞っていた。

「それじゃあ僕はそのままこの子を連れて行きますからー。明日になればエマが帰ってきて直してくれると思いますー。向こうに置いてる子、よろしくお願いしますねー」

不恰好な歩き方で少し大きな音を立てながら格納庫に向かって進んでいく。空から見送っていた羽ありはさっきまで片羽の少年が乗っていたもう一台の機械に向って飛んでゆき、運転席に座って操縦桿を握ってパネルを操作する。ゴウンと音を立てて一歩一歩進み始めた。

「あいつが乗ると、本当にああ言う生き物がいるみたいに動くよな……。いったいどうなってんだ？」

三本足のまま片羽の少年が乗っていた物と比べて明らかにぎこちない歩き方をする四足の機体はそのまま農地を進み、少年のしていた作業の続きをしていた。

第二十五羽 「遠方より来(きた)る」(前書き)

穏やかな日常の中にもちよつとした変化が起こります。
それが幸か不幸か、起きたその時にはわかりません。

第二十五羽 「遠方より来(きた)る」

日も暮れ、片羽の少年も家に戻ってきていた。いつものように夕食前の祈りも終わり、皆が食事に手をつける。地禮祭も終わり確実に春の訪れを感じはするも、夜はまだまだ冷える。今日の夕食はミルクを使ったシチュー。体が芯から温まり一日の疲れが取れていく。空腹が満たされてゆくのと同時に談笑が部屋を満たしていく中、少年の母がまるでふと思ひ出したように口を開いた。

「去年の今頃はまだエマちゃんが家にいて、一緒に食べてたのよね。ワイン、たまにはまた食べに来るように誘ってあげなさいな」

「え…… い、いいの？」

少年の顔が少し赤らんだように見える。

「っ……！」

口に含んだシチューを飲み込み、何かを言おうとした少年の姉は突然背筋を伸ばし、出てくるはずの言葉も一緒に飲み込んだ。よく見ると隣に座る母に背中をつねられている。

「ね。おじいちゃんもおばあちゃんも、お父さんも構わないわよね？ …… もちろんエディも」

やさしい笑顔のまま娘を見る。口調も穏やかなのだが、指には先程よりも更に力が強く入る。無言のまま引きつった笑顔を浮かべた

娘もうんうんと頷いていた。家族全員の同意を得て、片羽の少年はうれしそうだった。

「今はゴーレムに乗ってロディニアに行ってるから、また今度伝えるよ。明日帰るって言ってたと思う」

「明日？ 明日ね。丁度良いわ、それじゃあ明日はしっかりご馳走を用意しておくから、エマちゃんにも来るように伝えるのよ。それではみなさん、重大発表がありまーす」

― 25 ―

翌日昼近く、少年はゴーレムが帰ったとの知らせを受けて町の工房に出かけていた。町の大型機械の格納庫と、隣接して作られたその工房はこの地を去った浮き島の民が建造していったもので、取り仕切っているのはこの町に残った黒髪の羽ありの女性だった。取り仕切っている、といってももともとこの町にいた技師も他の仕事と兼業して空いた時間に簡単な修理をしていた程度で、このような大型の機械、構造が複雑な機械を扱うことなどほとんどなく、実質彼女一人で切り盛りしていた。

女手一つでは、と事務処理など経営に名乗りを上げた数人の他、若者が何人か弟子としてこの工房に通っている。羽ありと羽なしが半々くらいの割合だ。若者の中には下心があつて、と言う者もいたが適当にあしらわれいつの間にか技師としての勉強に追われていた。

格納庫と工房の間にあるドックに入った片羽の少年は中をぐるりと見渡した。昨日彼が農地から乗ってきた左前肢に故障を抱えた大

型機が停めてある。まだ半年くらいしか稼動していないこの工房では本当に基礎的な機械の扱いができるものしかない。そのため人間よりも大きな物の修理はオーナーが戻ってくるまで保留とされていた。近くには2台、運搬用の台車をつけた小型のビークルがあった。それらには数々の工具が乗せられており、仕事をいつでも始められるように準備されていた。

工房の一角には昨日までなかった巨大なコンテナが置かれている。さらに昨日まで何も入っていなかった格納庫の奥に、銀色の翼を持つゴーレムが納まっている。

そして昨日まで暗かった、格納庫を一望できる場所にある部屋に明かりがついていた。

この場にあるものの全てが、彼女が戻ってきていることを確かに教えている。

片羽の少年は足取り軽く階段を昇り、扉をノックする。招き入れる声は聞きなれた人の声で、心弾ませながらドアノブをまわして扉を押した。

その頃、少年の家の前に馬車が止まっていた。一頭の鹿毛の馬が牽くほろを持つその中には色々な調度品のほか、大きな木箱や手提げ用の取っ手がついた金属製の箱がいくつかあった。玄関の前に立つのは羽なしの男性で、短い髪をしていた。筋肉質でそこそこ大きな体躯をした彼はしばらく扉の前に立ちつくし、一呼吸するとドアノックを持ち、3回叩いた。扉の奥から若い娘の声がする。一歩下がって招き入れられるのを待った。

開かれた扉の向こうにいた妹は外で立っていた男を爪先から順に

見上げていき、そこに立つ羽なしが以前よりもさらに遅しく凜々しい、精悍な羽なしの男性となって帰ってきた兄であることを確認すると大きく息を吸い、歓喜の声を上げた。

「うーわー！ ジュド兄、おつとこまえ！ お嫁さんの一人や二人いるでしょ！ 絶対いる！ え？ あの馬車の中？ みたいみたい！」

「バカ、あの中荷物だけだつて。それにいたら一人で帰ってこねえよ。そういうエディこそモテそうじゃなか」

「今ところ丁重にお断りさせていただいております」

「お前はホント、もったいないのな。母さんに似て美人だつてのに」

「だよねー、と軽口をきく妹の頭にゲンコツを落とした。力はまったく入っていない。

「エディの突つ走りっぷりは変わんないのな。安心したよ」

頭をさすっている妹の様子を笑って見ていると、奥から家族が総出で出迎えた。離れて四年経つ我が家に入る。わずかな変化はあるが変わらぬ空気を感じ、懐かしさを抑えきれなくなった羽なしの青年は姿勢を正し、改まった態度で帰宅の挨拶をした。

……

…

「へー、技師の勉強してたの。まあ今でこそ機械が増えたけど、どうして戻ってくることにしたのかしら。前みたいなこの町だったら技師だけじゃやっていけないと思うけど」

さっきまで着ていたつなぎを脱ぎ、余所行きに合わせてすこし見た目の整った衣服に身を包んだ黒髪の羽ありが、右手を歩く自分より少しだけ背の低い片羽の少年に聞いていた。少年はずっと跳ねる心拍を抑えながら傍らについて歩いていった。

馬車などもほとんど通らないが道路側に立つ。かつて姉に教えられたことがあった。そんなさりげない心配りができるようになっただけでなく、去年まではもっと小さかったはずの彼もいつの間にか背が伸び、彼の姉と同じくらいになっていた。

「改めてだけど、ウインも大きくなったわよね。わたしももうちょっとしたら抜かれそうね…… やっぱり男の子って感じ。お姉さんちよっとシヨック」

うまく返答できない自分を少し疎ましく思いながら、にこにここと笑顔のままで相手の話を聞く。もう少しで少年の家に着こうかというころ、鹿毛の馬に牽かれたこの町で見かけないほろをつけた馬車とすれ違った。積荷は下ろされ空になっているようで、それを見て片羽の少年はちょうど兄が帰ってきたのだと確信した。

扉を開けて家に入る。黒髪の羽ありの上着を受け取り、上着掛けに吊るしていたその時、奥の少年と姉の部屋から一人の青年が出てきた。少年の姉も一緒だ。すっかり大人の男性となり見違えたが、4年前に家を離れた兄の面影が確かにある。

「お帰り、ジウド兄さん！」

「おうウイン、でかくなったな！ 俺の荷物が入って狭くなったけどまたしばらくは同じ部屋で……」

不自然なところで言葉が途切れた。

「あ、エマ、この人が僕達の兄さんで」

右手で指して羽ありの女に紹介する。しかし黒髪の羽ありからの反応がない。対面した瞬間、二人の時間が同時に一瞬止まっていた。先に動き出したのは少年の兄。

「は、はじめまして。俺、ジウドと言います。エディとウインの兄で…… って、それは今ウインが言ったか。ええと、なんて言うか……」

わずかに遅れて黒髪の羽ありの時が動き出す。

「え、えつと、わたしエミールと申します。えつと、あのー、去年からここのご家族の方たちにとてもよくしてもらって……」

二人ともしどろもどろで巧く話せていない。兄はともかく、このようになっている黒髪の羽ありを初めて見る片羽の少年はわずかに首をかしげていた。

一方で二人のぎこちない様子を見逃さなかった片羽の少年の姉の目が、きらーんと音を立てて光ったかのように見えた。

第二十六羽 「傷心の翼」

整えられた畝の上に、規則正しく野菜の若芽が列をなす。日差しを求めて日に日にその葉を広げ行き、日ごとに強まる光を受ける。畝と畝の間に小鳥が一羽降り立って、大地を啄み再び飛んだ。

去って行くその先にある樹木の枝の間に小さく構えた巣があった。親鳥の帰還を待ちわびる小さく甲高い囀りが葉の間をすり抜ける。それを目指して戻った親鳥は大口を開けた雛の喉に咥えたミミズを放り込み、今日何度目になるかわからない農地と巣の往復へと出かけて行った。

町の工房では短い髪をした逞しい羽なしの男性と、長い黒髪をした羽ありの女性がにこやかに笑いながら農耕用大型機のメンテナンスをしていた。

彼が勤めるようになってから二か月ほど経つ。大型の機械の手入れも彼の手に任せることができるようになってから、彼女の細腕の負担も大きく減り、工房の仕事の幅も広がった。

古くなった機械の改良、羽なしでも使用が容易な農耕用小型機の開発。

本来彼女が為そうとしていた仕事も^{はかば}捗るようになってきた。

四年間大きな街で機械工として修業してきた羽なしは、最早この工房に欠かせない存在であり、彼女にとっての良いパートナー。

はるか昔から変わることのない命の輪は、今日もこれからも続いてゆく。

— 26 —

「しまったわねえ……」

少年の母が夫にぼやく。

「まさかエマちゃんがねえ……」

「仕方ないだろう。ウインはいたく傷ついてるみたいだが、こればかりは俺達がどうこうできる問題でもないからな」

片羽の少年は明らかに笑うことが少なくなった。いままで足しげく通っていた工房にもあまり行かなくなった。もちろん故障した大型機の運搬や起動は彼がいけないとできないこともあったので、頼まれた時は断ることなく協力していた。しかし、明らかに避けている。誰の目から見ても明白だった。

地禮祭の頃までよく一緒だった黒髪の羽ありの代わりに、栗色の髪をした羽なしがそばにすることが多くなった。一年前の騒動以来、片羽の少年は同世代の女の子達に好意を持たれることが多くなっていたが、隣にいる羽なしが目を光らせているため近づけない。

「まずはエディをなんとかするべきだな」

「できるならとつくにやってるわよ…… どうしてああなのかしら」

両親の悩みは尽きない。

……

…

今日も少年の姉は満面の笑みだった。後ろで組んだ両手に小さなカバンを持ち、自分と同じか少しだけ高くなった片羽の少年の横顔を見て、また笑顔になる。

「……エディ姉さん、どうかした？」

「んーん？ 別に何も？」

少年は母に頼まれお遣いに出ただけなのだが、どうしたわけか姉と街路でばったり出会い、そのまま一緒に歩いている。沿道に植えられた樹木が白い花をつけている。そろそろ時期が終わる頃だが、いまだその香りが町を満たしていた。

春の陽気にさわやかな香り。祖父と父のための晩酌用の酒を買いに行くだけなのだが、姉は明らかにデートモード。寄り道ばかりしていく。

雑貨屋に入って、棚に陳列された小さな黒猫を模した文鎮を見てかわいいと目を奪われた。なるほど凜とした姿に、長く伸びる尾が今にもしなやかに揺れそうなそれは、女性でなくとも猫好きであればだれもが目を惹かれる物だった。

花屋の店先に並んだ色とりどりの鉢植えを、愛でるように花弁を指でひと撫でして部屋に一つ欲しいとため息を漏らす。街路の芳香にも負けない、ふうわりと甘くさわやかな香りが広がる空間に散り

ばめられた鮮やかな花弁を前にし、少年の姉は右に左にと忙しそうだった。

結局鉢植えは買わずに花屋を後にし、ようやく目的の酒蔵に向かつて歩き出した。が、今度は角から漂う甘い香りにふらふらと誘われてまたしても道を逸れていく。弟を置き去りにして一人で流れて行ってしまった。少年が追いつくと、店頭で焼き上げるオムレットに目を輝かせている姉がいた。

焼きたてのそれにクリームをたっぷり乗せ、果実のシロップ漬けを自由に選んでその上にトッピングし、二つ折りにして挟みましよう。クリームを掬って食べる薄焼きのパリパリゴーフルがサービスでついてくるので、クリームを乗せすぎた欲張りさんでもご安心を。こちら店頭で焼かれ中。

思わずおながが鳴りそうだったが、ぐっと堪えて立ち去った。そんな姉の姿を見て、少々呆れたようにため息をつく。

「……やつと笑った」

え？ と少年が聞き返す。踵を返して先程の菓子屋に戻る。二つ注文し、トッピングのフルーツは別々のものを選んで作り上げる。上にゴーフルを乗せてもらったそれらを両手に抱えて戻ってくると、ずいっと弟に突き出し手渡した。戸惑いながら少年も受け取る。

「まったく、今日も一日しなびた力ボチャみたいな顔をし続けて。しゃきつとしなさいよ」

「別に…… そんなに変だった？」

変だった、と断言する栗色の髪をした羽なしは颯爽と少年の横を通り抜け、今度は惑うことなく歩き始めた。彼女の方からパキツと軽やかな音が弾む。

「あたしばかりにこにこして、アンタがしょげてたらあたしが何かひどいことした！　みたいに思われるでしょっ　前みたいな素直でいい笑顔してたウインに戻ってよね」

ばつの悪そうな顔をして、片羽の少年も歩を進める。今まで落ち込んでいたつもりはない。だけど、心がぽっかりと空いたような感覚は常にあった。姉はそれに気づいていたのだ。

そばにいた姉を疎ましく思った時はない。空いた穴を塞ごうとしてくれていたと言うことに気付いた今、少年はこれまで以上に姉の存在がうれしく、代えがたいものに感じていた。

そんな姉を悲しませたくない。いつも明るく華のある姉のように、自分も羽を広げて前に進もう。顔を上げて、目の前を歩く羽のないのびやかな背中を見つめ、いただいたオムレットにかぶりつく。あふれるクリームと弾けた果汁のさわやかで柔らかな甘みが体に広がった。

いつの間に隣に来たのか、そっちのもちよつと頂戴、と姉がゴーフルを伸ばして掬い取っていった。パリパリと愉快的な音が響く。それに釣られて自然な笑顔が少年に戻ってきた。

姉に負けじとゴーフルを少し割り、姉のトッピングを奪い取る。こらっ、と叱られたが、悪びれることなく口に運んだ。パリパリと楽しい食感が耳まで響く。

……ひどい事したのは、確かなんだけどね

そう呟いた姉の声は碎けるゴーフルの音に遮られ、少年の耳には入らなかった。

第二十六羽 「傷心の翼」 (後書き)

こーゆーお話、なにぶん書きなれないものでして。
こんなんで良いんでしょうか、がんばれウイン。

お姉ちゃん、やさしいなあ。

…やさしいか？ やさしいよね、多分！

第二十七羽 「滲み出す闇」

それは町にやってきた商人から聞いた噂だった。

この町の北、馬車で十日ほど離れた土地にあった街が、化け物たちに襲われ支配されたという。

その化け物は昔話や絵本の挿絵でよく見聞きした怪物。

一つ目の鬼。

空を舞う人面鳥。

王冠のようなとさかと赤い瞳を持つ毒蛇。

巨大な体躯と強靱な牙と爪を持つ人狼。

山中、荒野、人里を恐怖に陥れてきた怪奇があふれ出したかのようだったと言う。そしてその化け物達は後ろに羽ありを隷属させていた。

そしてその少し前、その街の近くには巨大な都市があったが、浮き島が墜ちたことで滅亡したと言う。

浮き島が彼の地に封じられた魔物を目覚めさせ、その浮き島の民は囚われたのだ、と実^{まこと}しやかにささやかれていた。

「……だそうだけど」

片羽の少年の家で、夕食に招待された黒髪の羽ありが今日仕入れた話を皆に披露していた。

「怖くないの？ エディって結構そう言うの、弱いと思ってたんだけど」

栗色の髪の羽なしはにこにこ笑顔で聞いていた。これまで黒髪の羽ありを家に呼んだ時、たいてい彼女は仏頂面であるか、警戒するような気配を出していたのだが、それはすっかり失われていた。隣には弟がおとなしく座っている。

「エマは信じてるのか？ いつもオカルトな事は話題にも上らないじゃないか」

隣に座る短髪の羽なしが怪訝そうに問う。

「そりゃー、信じるも信じないも、見てみないことには始まらないでしょー。ジウドは信じるの？」

そう言われると、少年の兄は押し黙ってしまった。信じられない、と片羽の少年が発言すると姉が、よねー、とにこにこ笑顔で同意する。

「アンタら、何があったの？ まさかと思うけど……」

越えてはならない一線を越えたりしてないか、黒髪の羽ありは心配して二人の顔を覗き込む。かつての敵にまじまじと見つめられても少年の姉の満面の笑みは変わらない。背筋に冷たいものが走る感じがした。

「ステイナさん、エディってこんなんでしたっけ？」

前からよ…… とため息をつく母。息子が立ち直ってくれたことに胸を撫で下ろしたのも束の間、やはり以前からあった問題がさらに大きくなって両親の頭を悩ませていることが明白だった。

「ジユドは……」

目を閉じたまま首を横に振る。恋人の質問に答えるまでもないと言う姿勢から、このことに首を突っ込んで時間も時間が無為に過ぎていくだけだと、黒髪の羽ありもついにあきらめた。

「……で」

脱線した話題を元に戻そうと、片羽の少年が口を開く。

「信じられないけど、本当だったら大変だよ。それにその怪物って、どんだんほかの町や村を襲ってるのかな。ここまで来たりしないのかな。もしそうなら……」

最後まで言い切らなかったが、その続きを察した聡明な羽ありが回答する。

「だーいじょうぶだって。ゴーレムが要るような危険レベルの化け

物が存在するなら、もうとっくに襲われてると思うよ。

それに万が一前みたいな争いが起きた時のためにAMF（注：アンチマテリアルフィールド。物理的な攻撃を遮る、ゴーレムの防御システムの一つ）を実はもう配備してるし。ゴーレムに搭載してるほどの出力はないけどね。それにここだけの話、羽なしのみんなでも戦えるような道具の構想も出来てるからねー。いざとなったら工房の総力を挙げて作っちゃうわよ」

そう言って身を乗り出して少年の頭に手を伸ばし、柔らかい髪を撫でた。

「だから、今度は大人達に任せておきなさい。あなたが戦う必要は、もう無いわ」

少年の目の前にはかつてより恋焦がれた慈しみにあふれた美しい笑顔があった。照れくさくなって視線を下すと、羽ありの豊かな胸が目に入る。一年前そこに抱きしめられた記憶が瞬時に甦り、より顔を赤らめて思わず横を向いてしまった。その様子を見ていた少年の姉がむっとして、羽ありの手を払う。

「誘惑すんなっ」

「どこがよー！」

「こらご主人！ この節操なしのしつけはどうなってるの？！」

なんでそこで俺に振る、と言わんばかりの兄の顔がおかしくて、弟は声を出して笑っていた。にぎやかに夜が深くなっていく。

……

…

ひとしきり言い合いがあった後、少年の兄が閉ざしていた口を開いた。彼の声質は父によく似ている。声質だけでなくあまり話題に割って入らない気質もよく似ていた。そんな彼が真剣な顔つきでゆっくりと語る。誰もが真剣にその言葉に耳を傾けた。

「……俺が戻ってきたのは、その噂のせいなんだ」

思ってもみない発言にその場にいた人間は全員息を呑んだ。

「その噂になってる化け物に襲われた街っていうのは、多分俺達で作った機械を都市に卸していた業者のある街と同じだろう。そこから逃げてきた羽ありの一報があつて、すぐに疎開するよう街中にお触れが出たよ」

間に割って入る者はなく、淡々と少年の兄からの報告を受ける。

「少なくともその取引があつたところは昔からここよりもずっと機械化が進んでいて、そんな迷信じみたことを信じないような連中の街なんだ。その住人が化け物に襲われたなんてことを言い出したんだ。ただ事じゃない、って誰もがすぐに理解した。

俺は修業して三年以上経ってたから、師匠もついてくる必要はない、好きにしろって言うてくれた。本当ならもっと居ても良かったんだけどな。

……帰ってきて、大正解だったけど」

黒髪の羽ありと短髪の羽なしの間の距離がほんのちょこっと近づいたような感じがした。はいはい、と妹が軽くあしらうと、咳払い

をして続きを始めた。

「こっちに帰ってきてから本当のことを言うかどうか迷ったよ。徒^{いたずら}に不安を煽るようなことは言えないからな。だけどこっちの方にまで噂が広がってきているっていうなら、もう秘密にしておけることじゃあない。

あいにく本当に化け物が出たのかどうかってことはわからない。だけど、何か重大なことが起きたっていうのは紛れもない事実だと思っ

「そこまで言っ

て長兄は椅子の背もたれに体を預け、視線を天井に向けた。壁に掛けられたランプの炎の揺らめきがやさしく映し出されていたが、ランプの一つが油を切らして不意に消えた。部屋の隅に潜んでいた闇が少しだけ広がる。

「……一応、準備だけは進めておくわ。ジウドは明日そのことを町長さんに連絡しておいて。わたしの方からも準備の話をしに行く。本当に万が一の時は、ロディニアに飛ぶわ」

一年前の浮き島の墜落の時とは異なる言い知れない不穏な空気が広がり始めたら、この小さな町を覆い尽くすまでにそれほど時間はかからない。

片羽の少年の拳は固く握られ、彼の決意を表していた。

第二十八羽 「銀と生き物」(前書き)

若干R指定？ いや、妄想族なだけです。

o r z

第二十八羽 「銀と生き物」

それは、少し離れた町からやってきた羽なしの夫婦から聞いた話だった。

自分たちの住む町が羽ありの一団に襲われたという。その羽あり達が出来てくると、町に季節外れの大風が吹き、今からまさに伸び盛りであるはずの草木の一切が枯れ果て、どこからともなく火の手が上がり焼け野原となったという。

突然のことに為す術なく、住む場所を奪われた者たちは散り散りになって逃げ延び、彼ら夫婦はこの町に住む友人を頼りにやってきたとのことだった。

それを聞いた町長は、以前片羽の少年の兄から伝え聞いた北の都市の噂と合わせ、万が一の時のための備えをしておくようにと、家々をひとつひとつ回って住民すべてに警告していった。

— 28 —

「……まったく、これは本腰を入れないといけないわね」

つなぎ姿で木製のデスクに座り、広げた図面に手直しを加えなが

ら黒髪の羽ありが呟いた。彼女の部屋から見下ろすと、彼女が育てた若い技師達が総出で新型機械の組み上げに取りかかっていた。

「……前あなたの言っていた化け物の事も心配だけど……ここまです害意むき出しだったら人間も人外も関係ないわ。まったく、羽ありの恥晒しね！」

不快感を包み隠さずちまける。彼女の部屋の中にはそれを受け止める羽なしが一人。棚に収められている機械の設計書を綴じたファイルを片手に開いて相槌を打っていた。

ページを捲り、ところどころで捲る手を止め、配置を指でなぞりながら構造の把握をしていく。一通り捲り終わって棚にファイルを戻しデスクの方に目をやると、いまだにぶんすかと苛立ったまま設計を続けている。

静かに羽ありの後ろに立った。ぽすつ、と彼女の頭に手をやる。特に声をかけることは無い。だが、幾分か羽ありの顔つきは和らいだようだった。

そのまま彼女の設計図を凝視していると、一つ何かに気が付いた。

「そこ十五度間違ってる。それだとリニアのライン配列が足りない。だが伸ばした場合も羽ありならいけるだろうが、羽なしだと多分動かない。この部分に歯車を入れて左側からの動力伝達を増やさないと不十分じゃないか？」

えっ？ と聞き返し、口元に手をやり反対の手で図面をなぞる。
件の箇所を見つけ、言われたとおりであることを認めると、おつと、と声を上げ若干猫背になっていた姿勢を正し、指摘された間違いに修正を加える。

「どうもまだ羽あり基準で考えちゃうのよね…… 癖って怖いわあ」

まだ自分よりも習熟していない者からの指摘も柔軟に受け入れる。驕ることのない彼女の性格は、この町にもともとあったハイランドの民への偏見とは大きく異なり、誰にとっても親しみやすく、誰もが信頼した。それはこの羽なしにとっても例外ではない。

「にしても、あなたってすごく飲み込み早いわよね！ ミスリルベースの機械の設計なんて手がけたことないって言ってたのに」

「機械の仕組みとしての基本は同じだろう？ ミスリルの基本的な理論さえ教えてもらえたらこれくらいのこと誰でもできる」

「そう？ 謙遜しなくなたっていいって。にしても、あなたがいるから羽なし目線での設計も楽ね…… ほんと、エディの言った通り」

短髪の羽なしが聞き返すと、な、何でもないのよっ！ となぜか慌てたようにはぐらかされた。顔を赤くしてまた図面に向かい合う。鼻からふつと息をつき、片羽の少年の兄は彼女の部屋のガラス窓から下階のドックを見遣った。若い技師達が協力し合って一機完成させたところだった。その光景に、逞しい羽なしが大きく二度頷く。

「大分手際もいい。あいつらもう二年もしたら俺よりもずっと役に立つかもしれないな。……それはそうと、起動はウィンに頼めばいいのか？」

「そーねえ。一から作り上げた機体だから、その方がいいと思うわ。あの子は本当にミスリルの扱いが上手いの。初めての起動でも事故を起こさないだろうし、それに細かな動作具合なんかも一発で把握しちゃうのよね。天才よ、天才」

黒髪の羽ありは今でも事あるごとに片羽の少年を絶賛する。兄として誇らしくもあるが、男としてはいささか面白くない。彼女は若

干そう言ったことに無頓着だった。しかし彼らお互いが全く異なるタイプであるため、争うことはない。もちろん弟と争って負けるはずがない、と言う無意識の優位が働いていることもあった。

「……ウインも大したものだが、ミスリル製の機械もすごいな。全体がシステムであり、動力源か…… サイズもこんなにコンパクトにできて、無駄がない」

アースの機械には鉄や鉛、銅がよく使われていた。合金としてニッケルやクロムが使用されることも多かった。動力には蓄電池が使われており、大きく出力を要される物には当然その蓄電池も大量に使われる。よって動力源を配置するためのスペースまで大きく要求され、必然的に大きさも重量も増していく。

それに対してミスリルはそれ自体にエネルギーを蓄えるため、ゴーレムのように兵器として尋常ならざる出力を要求される物でない限りそう言ったコストは生まれない。

だが機械全体の構造を縮小化することはそんなに簡単なことではない。しかしハイランドの技術の根幹に関わっていた黒髪の羽ありは、彼らの科学の粋によってこの町にある数々の機械を小型化し、扱いやすくしていた。

今の短髪の羽なしの言葉は、まるで彼女への賛辞。鼻高々に聞いていた。だが、黒髪の羽ありの興味を最も引いたのは、そのあとの一言。

「……もうこれは生き物だな」

今の一言に黒髪の羽ありは何かにはっと気が付いたようだった。目を閉じ、穏やかに頷きながら呟いた。

「……そっか、生き物…… そんな風に考えたことなかったな。ねえ、言ったっけ？ ウィンには機械の、いいえミスリルの声が聞こえてるって。うらやましいな…… ウィンくらいの桁外れな精神感応率があれば聞こえるのかな」

彼女の真意が一体何であるのか図りかねた短髪の羽なしは無言を通し、彼女が言葉を継ぐのを待った。

彼の家族は皆がそうする。無理に催促するのではなく、あえて相手が語るのを待つ。本当に伝えたいことを、その人の言葉で聞くために。そう言う気風を黒髪の羽ありはとても好み、彼らと居ることに常に安らぎを感じていた。

そんな無言のやさしさに甘え、十分に思索を巡らしたのちに口を開く。

「…… いったいミスリルってなんなのかしら。これほど長い年月使われ続けているのに、全く理解されていない。

どうして人の意思に反応するのか、どうして人によってその反応に差が出るのか。仮説はいろいろあってもどれも矛盾点が必ずあって、結論は出ていない。

……でも、ミスリルは生き物って言うその認識と、ウィンの存在をあわせて考えたら、きつとその本質につながるんじゃないかしら？ うー、学者魂が疼くわ」

深い深い思慮に満ちた声から途端に無邪気な子供のよ様な発言に変わる。間の抜けたような感じで思わず彼も吹き出した。

「それじゃあ、これからはこの羽なし用アームズを作っていこうかしら！ 蛮族に対しても備えておけば憂いはないってね！」

完成した図面をぱんつと叩いて黒髪の羽ありは立ち上がり、うー

ん、と大きく伸びをした。背中羽も大きく広がる。伸ばした手足に引っ張られて衣服の繊維も伸びる。つなぎに隠された体の線が少しはつきりと浮き出ていた。力を抜いた次の瞬間、後ろからやさしく抱きしめられた。

抱きしめてきた腕にそつと手を寄せ、どこかくすぐったそうな表情をして、無言の要求に応える。

「……やっぱり、もうちょっとだけ休んでからにする。その方がいいよね？」

下ではまだ技師達が組み上げたばかりの機体の螺子の緩みや固定不足、接続不良など、組み上げの不備がないかを入念にチェックしている。今日の作業はすべて彼らの手に任せるとしているため、声がかかるまで今しばらく時間はかかりそうだった。

部屋のカーテンを閉め、念のために外のドアノブに「起こすな！」といったものに札を下げ、扉の鍵をかける。

向き直って彼の首に両腕を回して抱きしめた。それに応じて彼女の腰と肩に手を回し、さらに強く互いの体を合わせる。もう少しでお互いの鼓動が伝わりそうだった。

やや潤んだ瞳で見上げ、穏やかな微笑みで見下ろす。

そして静かに、お互いの唇を合わせていった。

第二十八羽 「銀と生き物」(後書き)

あわわわっわわわわ、書けない、これ以上書けない！

くあ wse d r f t g y ふじこ p l ;

…… ウィンの惨敗です。どうしよう。大人の付き合いされたらねえと、とりあえず次羽あたりからまた波乱が幕を開けます。

ある意味今回のもウィンにとっては波乱なんでしょうけど(汗)

それではそれでは。
れいちえるでした。

第二十九羽 「砕けて、つないで」(前書き)

前羽に引き続きR指定？ 今回はさすがにまずいですか？

第二十九羽 「碎けて、つないで」

少年が来た時、工房のドックでは作業用の新型機の組み上げ作業が終わり、接続や固定不良がないか点検を受けているところだった。作業中の技師の一人に声をかけられ、挨拶をするのとともにその機械に近づく。まだ起動試験前だと言うことだが、まずは触ってみてほしいと頼まれた。機体の上ってみる。

「……今回の子、変わってますね」

そう言って操縦席のサドルに跨り、ハンドルに手をかける。

「ああ。この新型機、操縦席のデザインだけじゃなくって操縦も二輪車のイメージなんだ。体全体を使って操作する感じかな。機械だけの力で作業すると言うより、羽なしの体力をサポートするコンセプトなんだ。もちろん羽ありだって操縦できるぞー。ミスリルからの放射エネルギーが高い時は機械メインで、放射エネルギーが少ない時は操縦者のサポートに切り替わる。エマさんは本当にすごいよな！」

まだ起動前だが、片手で操縦席正面に位置する操作パネルに手を当てる。技師達はその様子を黙って見守っていた。少しの間目を閉じ、耳を澄ませる。鼻からゆっくりと息を吸い、穏やかに吐く。それを何度か繰り返したのち目をあけた。

「……すごく、力強い。生まれたばかりで早く動きたくてうずうずしてますね、この子。今までの中で一番ちゃんちやかもしれない」

ははは、と技師達の間で笑いが起きる。

「やんちゃか！ 確かにそうかもな！」
「ああ、よりスポーティーに動かせるように設計されてるからなあ！ 操縦に癖があるかもしれないな！」

笑いに包まれている中で少年は操縦席から降り、皆にまたあとで、と声をかけてその場を去った。兄に母から頼まれた届け物をするためにやってきたのだ。階段を上り、おそらく居るであろう部屋に向かつていった。

— 29 —

居るはずの部屋のドアノブには札が掲げられていた。以前よく来ていた時もたびたび見かけていた札だ。夜遅くまで仕事をしていることの多かった黒髪の羽ありがこうしてよく空いた時間に仮眠を取っていることを、彼はよく知っていた。下階に姿を見かけなかったので兄は別の部屋に居るのだろう、そう思い、彼女の部屋の前を通り過ぎようとした時だった。

部屋の中から上擦った声が聞こえる。それに続く、押し殺すような喘ぎ声。何が起きているのか一瞬分からなかった少年は不躰ながら鍵穴に目を当て、中の様子を覗いた。

窓から入るはずの光がカーテンに遮られ、仄暗くなっている部屋の中、黒髪の羽ありが仮眠にも使っているソファアの上に人影があ

った。一つではなく、二つ。

上下に重なる二つの人影の、下になる者には翼があつた。なめらかで細く、しなやかに長い肢は押し広げられ、一本は上になる翼のない者の背に絡められている。その肢が規則的に揺れていることから、上の者がわずかに動いているのがわかる。

片羽の少年の目は、その鍵穴から離れなかつた。彼もいつまでも子供ではない。今年で十七になる。直感では気づいているのに、理解したくなかつた。確かめたくないのに、確かめなくてはいけない、そんな矛盾に苦しんだ。

折り重なる二つの人影が一緒に起き上がる。上になっていた者はソファーに腰掛け、その上に翼のある者が跨る。二人の姿は暗がりであつたが裸体であることがよくわかつた。信じたくない光景が広がる室内に、少年は息をすることを忘れていた。

先程とは逆に上に乗る者を抱き寄せ、その豊かな胸に顔を埋める。翼のある者はその首に手を回し、さらに抱きしめた。腰を波打たせる度に、背中の翼がわずかに開き、声が上がる。

「あ…っ あ… ふ… あ… …愛してる、ジユド…」

「ああ… …言わなくても、わかつてる… …俺も… …愛してる…

…」

初めて直接聞いたその言葉に、遂に片羽の少年の心は引き裂かれた。さすがにその場に居た堪れなくなつた彼は、気付かれないように音を立てぬよう慎重にその場を離れた。

音を立てないように下階に降りると、そこからは全速力で走って去った。後ろから呼び止める技師達に振り返ることもせず、今までそんなに速く走ったことがないほどの速さで工房を離れていった。

……

…

「おかえ…… ちょっと！ ウィンどうしたの？！」

帰ってきた弟の様相に驚いて姉が駆け寄る。彼の手には兄に渡すはずの荷物が握られたままだった。そして涙が乾くことのない頬は歪みきっている。

「兄さんと…… エマが…… わかって…… わかってるんだ。だけれど……」

二人が一緒にいるようになってから、今日目にしたような事が何度も行われていたであろうことは、たとえ純情な彼だとしても気づいている。だが実際に目にしてしまった衝撃は、想像していたよりも遥かに強大に少年を打ち拉^ひいだ。

姉はそんな引き裂かれきった弟を抱きしめ^{なだめ}宥めながら、部屋へと連れて行く。未だ途切れることのない涙はベッドの上に腰掛けた彼の膝を濡らしていった。子供の頃に苛められて泣いて帰ってきた姿

を数え切れぬほど見てきた栗色の髪をした羽なしも、ここまでの姿を見たことはなく、尽くす手立ても思いつかず狼狽していた。

声を震わせながら、先程見てきた顛末を語る。他人の情事を人に語るなどそんな無粋な真似をするものではないと言う冷静な思考をすることが出来ないほど、片羽の少年は困惑しているようだった。だが、彼が耳にした言葉は、決して口にしなかった。もしも外に出そうものなら、彼の心は二度と戻らない位に砕け散ってしまうだろう。無意識に自分を守っていた。

まだ涙は頬を濡らしていたが何とか呼吸を落ち着け、正面で彼の手を取り床に膝をついて見守っていた姉の顔を見た。今度は弟の方が狼狽した。

「ごめん…… ごめんなさい……」

そう言う姉も弟のように涙でくしゃくしゃになっていた。いつも慰められる立場だった片羽の少年は、正反対の立場に立たされた今どうすればいいのかわからず困惑していた。あまりのことに彼の涙は止まっていた。

とりあえず握られていた手を握り返し、やさしく撫でてみる。さつきまで気が付かなかったが、火照りきった自分の手とは対照的に姉の手はひんやりと冷たかった。

「ね、ウイン。あたしさ、間違っただけみたい」

唐突の独白に思わず、そんなことないよ、と反射的に声をかける。しかし彼女は首を横に振り、さらに涙を流して続けた。

「そんなことない。間違っただけ。……盗られたくなかったんだ。い

つか離れないといけないその日が来るまでは、ずっと一緒にいたかったんだ」

声をかけることなく、姉の、姉自身の言葉が紡がれるのをひたと待った。

「ごめんなさい…… こんなことになるなんて、思いもしなかったんだ…… 大好きなウインが、こんなになっちゃうなんて…… あたしって、最低だ」

彼女の言葉を待つというよりも、本当にかける言葉が見つからなかった。そして、信じたくない言葉を耳にする。

「実はね、あの二人をくつつけたの…… あたしなの」

少年の頭はまた真っ白になった。ひたすらにごめんなさい、と謝り続ける姉の声もどこか上の空な感じで聞いていた。裏切られた、そんな感覚が少年の胸に湧く。

「ウインのことが、大好き」

何度目かになる言葉を耳にする。だが素直に聞き入れることができない。

「ほんとうに、大好きなんだ」

姉の手を握る力が強くなる。しかし受け入れられなかった。

「僕だつて…… 好きだつたんだ…… エマに見合うようになるまで、なれるまで、ってずっと我慢してたのに…… もう滅茶苦茶だよ！」

手を払い、立ち上がって部屋を出ていこうとする。その弟の背中に追いつがり、引き戻す。それは物凄い力で、成長した片羽の少年も抗うことができないほどだった。

「お願い！ 最後まで！ お願いだから最後まで聞いて……」

真剣な目で、真正面から見据える。力強いのだが弱い。そんなもどかしい表情に、少年も戸惑いながら再び腰掛ける。弟の正面で、床板の上に正座する。再び手を取ろうとしたが伸ばしかけた手を引っ込め、自分の膝の上に置いた。

「…… 大好きなウインがこんなに落ち込んだくらいだったら、初めからしなかった。結局ウインのことを全然知らなかったのは、あたしだったのね」

さっきまで涙が止まらなかったのは少年の方だった。だが今涙が後から後からあふれ出すのは姉の瞳から。

自分から愛しかつた人を引き離れた張本人が目の前にいる。許せないはずだった。しかし彼女の包み隠すことのない心から少しずつ湧き出す言葉に反感を持てないでいるのも確かで、ますます少年は混乱していた。

「初めてあの二人が出会った時からまんざらじゃない顔してたのよ？ 覚えてる？ だからさ、焚き付けちゃった。そしたらあつという間に大炎上。笑っちゃうよね」

やめとけばよかった、と呟きが聞こえたことから、自分に対しての嘲笑なのだと少年も気が付いた。自分の心は手酷く傷ついた。だがもう、その復讐をすることは考えられない。その相手は目の前で十分すぎるほどに傷ついている。

「……怒ってもいいよ。罵ってくれたっていい。ワインから笑顔を盗ったの、あたしだから」

無言ですつと聞き続けた。猜疑の心はすでない。

「もしそれでまた前のワインに戻ってくれるって言うなら、嫌われ たって全然かまわないよ。だから…… ね？ そんな苦しまないで …… お願い……」

とても苦しそうな声だった。喉は絞り上げられ、やっとのことで 滲み出した声。

弟は、姉が愛おしくてたまらなかった。
慈しみたくて仕方なかった。

ベッドから立ち上がり、ぎゅっと抱きしめる。
わずかの後、声にならないほどの慟哭が世界を満たした。少年は 自らの左だけの翼を大きく開いて、その涙と共に彼女の全身を包み 込み受け入れた。

「……僕も、姉さんのことが大好きだ。教えてくれて…… 本当に、 ありがとう」

声にならない響きはなかなか治まることはなく、少年は少し戸惑いながらも優しく微笑み抱きしめ続けた。

……

…

少年の心と共に彼の住む町もようやく平静を取り戻すはずだった。その日の夕方、少年の住む町に一番近いところにある村が、化け物を従えた羽ありの一団に襲われたという報告があるまでは。

第二十九羽 「碎けて、つないで」(後書き)

禁断の愛へようこそ…… っていうわけではないですが(汗)
波乱続きのウィン君をどうぞこれからもいたわってあげてください。
い。

次羽ではとうとう新たな脅威が現れます。

第三十羽 「幻想からの侵攻」

その日は曇りだった。

黒く分厚い雲が天空を覆いつくし、太陽の光が届かない。折しも今は雨の多くなる季節であつたため、町に住む人々は余り意に介しなかった。いつ空が泣き出してもおかしくないほど空気も湿り気を含んでおり、農地で作業している者達も降りこめられる前にできるだけ終わらせられるように少し急いで手入れをしていた。

成長した苗が花をつけ、多くの実をつけ倒れぬように添え木を当てる。

畝から所狭しと伸びた、白い根を持つ青菜を間引き、かごに入れる。

初めてついた花よりも下に位置するたくさんのわき芽を、二つだけ残して後を摘む。

人が適度に手を加えることで作物はより丈夫に育ち、収穫も多くなる。

毎年見られる同じ光景。

昼を過ぎ、そろそろ一雨来そうだと言う頃合いに、それは突然訪れた。

突如雷鳴が轟く。それと共に巨大な鳥が奇声をあげながら大挙して押し寄せた。同時に突風が吹き荒れる。それにあおられ材木や屋根瓦などが飛散し、家屋や人々を傷つけた。それを見た怪鳥はげたと非常に耳障りな声を上げて笑う。

何が起きたのかよくわかっていない町の人々が、上空を舞うその怪鳥に気付き見上げると、あまりの恐ろしさゆえに腰を抜かし、あつる者は気を失った。

広げた翼は一般の羽ありが持つその倍はあり、その脚は太く獲物を掴み引き裂く為の鉤爪が怪しく光っていた。しかし体は翼や脚とは不釣り合いに小さかった。

だが何より奇怪だったのは、その物の持つ頭部。それは醜く歪んだ人間の女性の顔。

げたげたと笑うその怪鳥は、通りの真ん中で腰を抜かして動けなくなっている若い羽ありの女を見つけると空から襲いかかり、その鋭い爪で女の肌を傷つけていく。泣き叫び助けを乞う羽ありをあざ笑うかのように、背中の羽を掴み空に舞い上がった。激痛と恐怖でさらに喚く女の声をかき消すほどの奇声をあげて飛び去った。

人を一人掴んでいるというのに悠々と羽ばたきあがっていくその後ろを、一人の羽ありが全速力で追いかけ、手にした工具で思いつきり殴る。その一撃で脚の力が緩み、怪鳥は掴んでいた女を落とすした。怪鳥に一撃を見舞った羽ありの男は、今度は落下していく女に向かって全力で飛ぶ。屋根に叩きつけられる前に掬い上げ、通りの真ん中にふわりと着地した。同時に羽なしの女が駆け寄る。一撃を食らった時に散った化け物鳥の羽毛が、一緒に地に落ちてきた。その形状を保っていたのはわずかな時間で、ふつと霞のように空気

に溶けた。

「ナイス！ オルランド！」

羽ありの男から女を受け取る。たくさんの生傷を負い意識を失っているが、一命を取り留めていることを確認すると、かけつけた羽なしの女は安堵のため息をついた。

「くそつ 何だつてんだ！ おい、アネーシャ！ みんなを避難させろ！ 教会でも工房でもいい！ ばらばらになつてると捕まるぞ！」

空では怪鳥が奇声をあげながら、まるで獲物を見定めているかのように旋回している。民衆はすでにパニックに陥つて、右往左往している。このままでは先程のように一人一人、弱い者から襲われてしまう。傷ついた羽ありに肩を貸していた羽なしの女は一旦彼女を下し、突風によって転がっていた材木を一本手に握りしめ、ごめんと呟いた。

近くの建物のガラス窓に向かって振り抜く。何枚ものガラスが一気に砕け散る音が甲高く広がり、その音がした方に一瞬皆の意識が向いた瞬間に叫んだ。

「落ち着いて！ 無事な人は怪我をしてる人、気を失ってる人を保護して避難所へ！ バラけてたらさらわれるわよ！」

突然の音と、的確な指示に正気を取り戻した町人達は散り散りになることなくひとまとまりになり、上空を警戒しながらできるだけ急いで逃げ始めた。

雨がぱらぱらと降り始めた。殿には男達がつき、空に舞っていた

化け物を見張る。怪鳥が再び襲ってこないかと気が気でなかったが、幸いなことに団体になった人間には興味が無くなったようで、ほどなくして飛び去って行った。その化け物が飛んでいく先に小さな点があったが、それが何なのか知れることは無かった。

一つの脅威が去ったのを見て胸を撫で下ろした次の瞬間、背筋を凍らせた。町の外に、巨大な人影が見えたのだ。それがゆっくりと町に向かって近づいてくる。今声を上げれば間違いなく再び群衆は混乱に陥る。懸命に心を落ち着け、それぞれ避難場所へと急いでいった。

……

…

「……事情は分かりました。すぐにAMF（注：アンチマテリアルフィールド。ゴーレムにも搭載されている防御システムの一つ。）を展開します」

緊急のサイレンが鳴り響く。それとほぼ時を同じくして、降っていた雨が突然止んだ。

町の外周に沿って八本の柱がある。その柱すべてを結んだ円の中心に向かって、柱は途中で折れ曲がっていた。その柱の間に光の膜が立ち上がり、まるで天幕のように町全体を覆い尽くしている。雨粒はその光のカーテンに遮られ、それを伝って地面に流れていた。

ちょうどその時、光の膜のすぐ近くまで巨大な人影が迫っていた。その肩には先程の怪鳥を何羽も携えていた。その異形の頭部には耳や鼻はなく、二つあるはずの目は真ん中に一つあるだけで、大きな口がにたりと口角を上げていた。

思い切り握りしめた拳を振り上げ、その膜に叩きつけた。どおんと太鼓を打ち鳴らすような音が響く。ただ、太鼓を叩くのは比較にならないほどの轟音だった。何度も何度も巨大な拳をぶつけ、これまた巨大な足で踏みつけ、果ては頭突きをしていったが、その光の壁は揺らぐことがない。

一つ目鬼の肩から飛び立った人面鳥が壁に向き合い、一斉に大口を開ける。空気を吸えるだけ吸い込み、そして一気に奇声を放った。近くに立っている樹木という樹木から葉が大量に落ちる。そして小さな枝が次々と折れていった。まだ怪鳥の奇声は止まない。ついに幹に亀裂が走り、次々に砕け散っていった。だが壁は健在だ。

「ふん…… ハーピイの超振動波やキクロプスのパワーで破れんとはのう。となると物質ではなく、フィールド障壁か。こんなちつぽけな町が大層なものを持つておるわ。……そう言えばこの地の近くに天が堕ちたんじゃったな。……なるほど、天の面汚しが」

町が光に包まれた光景を見ていた者が呟く。手には銀に輝く巨大な本があった。怪物達もこの天幕を破ることが容易なことではないことを悟り、引き返していく。その様を見て未熟者どもが、と吐き捨てる。

「若造どもに喝を入れたらまた来てやるわい。年季の差を見せてやらんとな」

……

…

「……治まりましたね」

黒髪の羽ありが呟く。自慢のシステムが期待通りの働きをしてくれたことに安堵しているようだった。しかしこれからの問題を一番冷静に把握し、危惧しているのも彼女だった。

「今は人が制御しているのでシステムに蓄積されたエネルギーのみで出力が安定していますが、この悪天候の中での長時間運転は……。エリクサーも十分にはありませんし、夜間に及ぶまで執拗に襲われたら堪えきれないでしょう」

「……」

町長の顔に苦渋が見える。

「申し訳ありませんが戦いの備えは、不十分です……。ゴーレムを使いたいのはやまやまなのですが、町に入り込んでくるような小型の敵を相手にすると、戦闘時に町を巻き込む可能性が強すぎます。加えて当工房にて現行使用できる試作アームズは二機。これでは…

……」

黒髪の羽ありもきゅつと自分の下唇をかみしめる。

「申し訳ありません」

「いえ、ビネ女史に落ち度などありません。相手が何者で、どれくらい居るのかもわからない。今は専守防衛に徹し、凌げるだけ凌ぐしかないでしょう」

下階を見下ろせば工房のドックには町から逃げてきた人々があふれていた。片羽の少年が台の上に加って少し高い位置から皆を落ち着かせようと声をかけているのが見える。

「……当面の避難場所として使わせていただきたい。もちろん作業のための場所は立ち入り禁止にしてもらって構わない。温情ある判断をお願いします」

工房の主人は即答で首を縦に振った。

……

彼女の部屋には今、モニターが備えられていた。それらには町の外の様子が映し出されている。有事の時はAMFシステムと直接連絡が取れるように音声通信もできるようにしてある。今のところ大きな変化はないようだ。それを確認した黒髪の羽ありはようやく落ち着いて椅子に腰かけた。片羽の少年の兄が憔悴した感じの彼女に温かい飲み物を差し出す。受け取ってこくり、と喉に流し込むと、大きく息を吐いた。

「……人面鳥？ 前聞いた噂の化け物だっというの？ 未だに信じられないわ」

「だが、実際に襲われ被害が出ている。……ロディニアに救援を頼めないのか？」

「今偶然農耕データ取りに来てる人に本国に連絡してくれるよう頼んでもらってる。でも、編成してこちらに来てくれるまでに三日から四日はかかると思う。……最短でもね。ゴーレムで飛んでも丸一日かかるんだから……」

ため息交じりに握った右手を額に当てる。

「どうしよう…… このまま押し切られちゃったら、わたしのせいだ。もっと早く始めてたら……」

「お前が悪いんじゃない。武器があっても使いこなせなかったらどの道一緒だ。みんなと一緒に戦えばいいじゃないか」

後ろに立っていた短髪の羽なしは、彼の大きな手で彼女の肩をぽんと叩き彼女の髪にキスをした。ちょうどその時、片羽の少年と栗色の髪をした羽なしがノックと共に部屋に入ってきた。

その光景を目にしても、もう少年は動じなかった。むしろ隣の姉の方が過敏に反応する。

「こ・の・エ・ロ・夫・婦が…… 白昼から何してんのよ！」

「なに？ って…… これからどうするか考えて……」

別段やましいことを何もしていない黒髪の羽ありはきょとんとしたまま友達の抗議を躲す。しかしちよつと勘違いした若い娘はそのまま詰め寄りガミガミと説教を始めた。

そんなことだからこの前すごく大変だった、とか、みんなが混乱して頼りにしてるのだから憤みなさい、とか。

あの時の辛い感情を思い出させないように気遣ってくれているのだらうと察した片羽の少年は、微笑みながらそつと姉を羽交い絞めにして黒髪の羽ありから引き離していった。別の人間がしたのであればおそらく抵抗が激しかっただろうが、後ろに立つのが弟であったため、栗色の髪をした羽なしもすんなりと引き剥がされていた。引き剥がされた羽なしも何だか嬉しそうで、そして照れ臭そうな顔をしている。

「……」
「……」

お互いの顔を見合せた後、ほぼ同時にため息をついた。

「……どうしたの？ 兄さんもエマも」
「……深入りしちゃダメよ？」
「？」

むしろ深入りして欲しそうな羽なしの娘は放っておかれた。

折角空気が和んだというのに、突如鳴り響くけたたましいアラーム音に、その部屋にいた者全員に緊張が走った。モニター枠の一つが赤く点滅している。同時に音声通信が入った。

『北西のAMF、攻撃を受けています！ 今度は巨大な鷲のような生き物が！ え…？ お、おい、ウソだろ…… 突破されるぞ！』

枠が赤く点滅するモニターに映し出されている光景が変わってい

く。光の壁が薄くなり、ぽかりと穴が開いた。その隙間を通って鷲の頭と翼を持った獅子のような巨大な生き物が入ってきた。それに続く一人の羽を持つ老人。

「まさかグリフォン……？　こんな幻獣が実在するっていうの……？　それにこの人は……？」

モニター越しだが目を疑うような光景に息を呑む。さらにその後も信じられないような場面が続いた。

「やれやれ、やっと入れたわい。……だが思った通りじゃて。一ヶ所に電子干渉を繰り返して位相を揃えてしまえばそこに穴が開く。まあ動かぬ壁でなければ難しいことじゃがの」

町の若い男達がミスリル製の道具を手に、侵入者を撃退しようと飛びかかる。だが老人はそれに臆することなく手に携えた銀色の書物を開き、手を当て何か文言もんごんを唱えた。怪物は鳥のように甲高く、そして獅子の咆哮のように周囲に響き渡るような声で一鳴きすると、右前足を振り上げ威嚇するように鋭い爪で薙ぎ払った。さらに鳥のような後肢で大きく立ち上がったかと思うと、両前肢で地面を強く踏みつける。すさまじい衝撃波が立ち、飛びかかってきた男達は皆吹き飛ばされてしまった。

幻獣は静かに、だが圧倒的な脅威を見せつけながら雄大な体を揺らして倒れた者の方へ近づいていく。体を強く打ち、しびれて動けなくなっている一人の羽ありの衣服に爪をひっかけて持ち上げた。

「さて……　この町にこれだけの物を作った者に会わせてもらえん

か？ 場合によってはこの町を『ゴンドワナ』の拠点として優遇するで。何、悪い話じゃなかるうて？」

年老いた羽ありは眼鏡の位置を直し、答えることなく呻く男の頭を手にした銀の書で平然と殴りつけた。

第三十羽 「幻想からの侵攻」(後書き)

一応、SFです。ただし独自理論のトンデモ科学なところがあり存在しますので今後も「おいおいそりや無茶だろ」となる点が多いと思います。

今回から登場する幻獣達も、この「羽」の世界ではちゃんとした科学の産物。その正体は次羽にて明らかになります。

「羽」の世界では「ミスリル銀」という未知の金属が媒介してはじめて成立する現象が数多くあり、今の科学ではとても説明ができないことが多いのですが、そんな世界も良いなあ、と思うのです。

ゆえにサイエンスファンタジー。

そんなものも嫌いじゃない、と言ったことでしたらこれからもうどうぞお付き合いくださいませ。

れいちえるでした。

第三十一羽 「闇を運ぶ聖獣」(前書き)

今回は七千字弱。今までの倍近くのボリュームがありますが、ご容赦を。

第三十一羽 「闇を運ぶ聖獣」

「四の五の言つてらんないわ！ 何なのよ一体！」

急きよゴーレムの起動を始める。操縦席のハッチをあけ、インダクションコンソールに手を通し起動プログラムを走らせる。暗かった操縦席内部に明かりが灯り、低く唸るような音が格納庫に響き始めた。

「僕も行くよ！」

開け放たれたハッチに向かって少年が声をかける。これ以上少年に戦わせない、そう決心していた大人達は彼の提案に首肯しない。

「でも、あの怪獣が一体何なのかわからないんだから、エマの他にゴーレムの扱いに慣れてる僕がいた方がいいと思うんだ」

少年の冷静な判断を黒髪の羽ありは否定することが出来ない。逡巡する時間もないことを知っている。

「……願うするわ」

ぱつと少年の顔つきが明るくなる。操縦席から降ろされてきたウインチに捕まり引き上げてもらい、黒髪の羽ありの下につく。

「ジユド！ あなたはアームズの試運転しておいて！ 問題なく使えそうだったらすぐに持ってきて欲しいの！ ほかにも小型の敵が入ってきたらゴーレムじゃ対応できないから！ 場所は北西AMF

ピラー、お願い！」

アラムと共に格納庫とドックを遮る隔壁が閉じていく。それと同時に格納庫の屋根も開いていった。

「もちろんウインも頼りにしてる。だけど一年ぶりの実戦だから、十分気を付けてね」

固定台に乘せられたまま銀の巨人は中央の発進位置に運ばれていく。停止するとともに安全装置が解除され、巨人は拘束から解かれた。

「ミスリルゴーレム・タイプ・フリーゲル、オルガⅡブロー起動！」

風を巻き起こすと銀に輝く翼を羽ばたき、空を舞った。

— 31 —

強力な衝撃波に当てられた身動きの取れない男は、老羽ありの問いに答えなかった。鷲の頭と翼を持った獅子のような幻獣は、その

前肢の爪に引つ掛け持ち上げていたその男を軽々と投げ捨て、くちばしを開く。大きく開けられたその口腔には雷球が生み出されていた。

「まったく、面倒な事じゃて」

銀に輝く書を開いた老羽ありはそう言い放ち、撃て、と命令する。巨大になった雷球が口から放たれ、炸裂した。雷鳴のごとく空気を裂いた音が鳴り響き、その後もバチバチと弾ける音が周囲を満たしている。倒れていた男の顔が青ざめた。

「ええか？ 次は当てるでの。もっと簡単に聞いてやるわい。この装置を作った者は、この町におるのかどうかだけでもええ。答えんか」

巨大な幻獣が歩み寄り、威嚇するようにその頭部を近づけてきた。雄大にて高潔。恐ろしいのだが偉大なその姿に男はさらに言葉を失った。答えたところで約束を守られる保証もない。しかし答えないままでいたらおそらく本当に命を奪われる。それであればおそらく工房の主人は答えると言ってくれるだろう。さんざん悩んだ挙句、男は首を縦に振った。

「それでええ。僕は命令を守る者には寛大じゃでな。なるほどのう、ではその者には我ら『ゴンドワナ』のためにひと肌脱いでもらうことにするか」

蓄えた白い顎鬚を撫でながらこれからの作戦を練っていた。その間に体の痺れが取れた一人の羽ありが、侵入者の目を盗んで事態を知らせるために飛び去った。だがそれを見逃さない。銀の書に手を当て、幻獣に命令を下す。羽ばたきあがった巨軀は決して鈍重では

なく、驚くほどの速度で羽ありに追いついた。追いつく際の翼の風圧でバランスを崩した羽ありを、すぐに旋回して戻って後肢の爪で捕えて主のもとに差し出す。

「逃げられるはずがなかつ。このグリフォンはな、我が軍の傑作なんじゃ。扱えるのも儼くらいじゃがの」

その場に倒れる者達全員が絶望にさらされた。いよいよこれまでかと思われたその時、ものすごい速度で空から巨人が現れた。

「何じゃとつ!? こんなものまで!」

飛来した銀の翼を持つ巨人はその右前腕の装甲を開く。そこから銀に輝く刃が飛び出し、着陸と同時に振り下ろした。

「うおおりゃあああああつ!」

ミスリルブレードが幻獣の翼を切り落とす。仰け反った獣から巨大な咆哮が上がる。しかし血は噴き出さない。切り落とされた翼は地面に落ちると、ふわっと煙が立つように空気に溶けてしまった。え? と黒髪の羽ありから疑問の声が上がり一瞬気を取られた。

「エマ! 前!」

大きく開けたくちばしの間に巨大な雷球が生み出され、放たれた。防御フィールドを展開する時間的余裕はなく、ゴーレムはその直撃を受けて弾かれた。幻獣も飛び退き、距離を取る。大地に響くような唸り声が満ちる。

「この程度の損傷で止められると思うてか?」

銀の書を開いた老羽ありはページを捲り、書に手を当て文言を唱える。書物全体が輝き、同時に切り落とされた幻獣の翼が再生していく。

「それ、もう一度じゃ。この程度で儼とグリフォンを退けられるわけがなかるう！」

再生し気迫が十分に漲るみなぎ獣は勢いよく大地を蹴り、突進してきた。正面から受け止めるがその膂力は想像以上の物で、抑えきつたもののかかなり後方に押し下げられた。

「エマ、柱の傍は危ない！ みんなが足元で倒れてる！」
「オーケイ、ちょっと離れるわよ！」

銀の翼を羽ばたき、羽毛の代わりに光の粒を散らしながら移動する。それを追って幻獣も飛んできた。

「ちょっと速さ比べしてあげようかしら？ ウィン、よろしく！」

その声に併せて少年はエリクシルリアクターの出力を最大にまで上げた。同時に最大速力で飛翔を開始する。久しぶりの飛行で、そして生身では到底実感することがないような加速を全身に受けた少年は、軽く意識を持って行かれそうになったが何とか耐えた。彼が意識を失えばゴーレムは途端に力を失うことになる。大きく息を吸い、腹の底に力を込めた。

「さすがに追いついてこれないみたいね……あのバカげた再生能力をどうするか、だけど……あれって本当に生き物なのかしら」「後ろ！」

少年の声にはっとする。大口を開けた幻獣が雷球を放ってきていた。翼を回転させ右に避ける。雷球は何発も連続して放たれ、巨人はそれを右に左に旋回しながら躲した。

「そりゃあ雷の方が速いわよね。こつちだつて手加減しないわよ！」

急旋回し、幻獣の方へ向かっていく。すれ違いざまに相手の後肢を掴み、そのまま大地に向かって飛翔する。

「せえ、のおつ！」

激突する前に獣を地面に向かって投げつけ、自分は減速して着陸態勢を整えた。

驚と獅子の混成獣は轟音を立てて大地に激突する。湿った大地からは砂埃が立たず、姿を見失うことは無かった。しばらく振盪しんどうして立ち上がることは無いだろうと思われたが、獣はすぐさま姿勢を正し、今まさに地に足をつけようとしていたゴーレムに向かって突進を仕掛けた。隙だらけの状態に一撃を食らえば、万が一のことも有り得る。搭乗者二名の背筋が凍った。

直後、幻獣の右側に強力な一撃が命中し、巨軀を吹き飛ばした。

搭乗者二名は同時に、その一撃が来た方角を見る。

「ジユド！」

「兄さん！」

数日前に片羽の少年が起動試験を行い、十分使用できると太鼓判を押した二輪車をイメージした新型作業機械に試作アームズを乗せた少年の兄がそこにいた。砲身からはかすかな放電と陽炎が上がっ

ている。

「おいおい…… 羽なし用でこの威力ってなんだよ…… エマ！
やりすぎだろうー！」

「それでこそこの試作機よ！ 試作で無茶しないでどこでするのよ！」

もったもな意見ではあったが、放置しておけばもっととんでもない物を作り上げそうであった。

「レールガン…… それも実弾ではのうてプラズマか…… 羽なしの操縦でこの威力とは、ますます作った者を知りとうなったわ！」

使役する幻獣を吹き飛ばされてなお、老羽ありの自信は揺らぐことがない。この場に居る者はすべて、それにある種の悪寒を覚えた。

「あら、お褒めいただけますの？ このフィールド障壁もゴーレムも、レールガンもわたしが設計して配備したものですのよ？ 分かったらさっさとこの町から出ていきなさい！」

得体のしれない相手に対し背筋に何かが這いずるような嫌な感覚を覚えるが、黒髪の羽ありは強い言葉で立ち向かった。

老人がふん、と鼻で笑うのと同時に吹き飛ばされていた巨躯が立ち上がる。

「ちょっと…… どれだけタフなのよ」

しかし先程の一撃を受けたその姿は決れ、歪んでいた。やはり血の一滴も流していない。歪み、わずかに霞むその輪郭は次第に修復され、元通りに回復した。老人の持つ銀の書がやはり輝いている。

「なるほど……　すごいわね、まさかミスリルにそんな使用方法があるなんて」

呟いた黒髪の羽ありは、下の席に座る少年に操縦を任せ、ハッチをあけて地上に降りた。

「あなた、ハイランドの方ですね？　どうしてこんなことをなさるのかしら」

「ほっほ、まさかこんなべっぴんさんとは思わなんだわ。儂も鬼ではないからの、ちいとは話をしてやるか」

軽口を聞く老羽ありは幻獣を傍に控えさせ、動かぬように命令を下す。やはり書物が輝いた。それを見て黒髪の羽ありは二度頷く。

「……柱を壊さないで下さったことには感謝いたします。お話しする場を下さったり、思ったよりも紳士でいらっしゃるのね」

「ふん、女狐じゃな。この柱一本を壊したところでどうせ別の柱との間に壁ができるだけじゃろが。柱をすべて壊さならんような面倒事は苦手での。この方がよっぽど簡単じゃ。まったく、難儀なモンをこさえよったな」

黒髪の羽ありがチツと舌打ちをする。

「儂はハイランド『ゴンドワナ』の軍人での。本来なら退役して司令部におればいいんじゃないが、余りに若造どもが情けないんで第一線にやってきたというわけじゃ」

「『ゴンドワナ』……？　この前落ちたあのゴンドワナだと言うの？　ハイランドの民がアースに侵攻するなんて、どうしてそんなバカげた真似を！」

「バカとはなんじゃ、バカとは。アースに迎合するなんぞ考えられんじゃろ？ もともと我々天の民は地を統べておるものじゃ。ならばハイランドを失ったとしてもその本懐は変わることはない。アースに我らが滞在するのが束の間としても、農らの領土は正しい姿にせねばならんからの」

「……わたし達とは相容れませんわね」

まるで聞こえていなかったかのように老羽ありは言葉を続けた。

黒髪くろがみの羽ありを懐柔するために惑わし囁く。

「……お主も元は天の民じゃろう？ どれ、悪いことは言わん。お主ほどの技術があればアースにいたのでは物足りなかるう？ 一緒に来なさい。その方がええ」

「そうですね…… まさかこのような幻獣を実際に生み出す技術があるなんて、思いもしませんでした。そちらでしたら、退屈なくて良さそうですね」

黒髪くろがみの羽ありの思いも寄らない発言を耳にして、片羽の少年は開かれたハッチから思わず身を乗り出していった。

「あるいは新種の生物として生み出したのではなく、本当に伝説上の幻獣を召喚する…… そんなことが本当にできるのなら、是非ともその仕組みを知りたいところです。そちらに帰依すれば、教えていただけるのですか？ それでしたら考えさせてもらいたいと思いますが……」

少年が今まさに黒髪くろがみの羽ありに向かって声をかけようとした時、振り向いた羽ありは心配する必要はない、と言いつつ聞かせるようににっこりと微笑み、老人の方に向き直り、きっぱりと言いつつ放った。

「ですが、もう手品の種も割れました。召喚ごっこにはもう興味はありません」

「ごっこ……じゃと？」

「ええ、ごっこ遊びです」

老人の顔つきが険しく変わる。自分持つの絶対なる力を見下された軍人のプライドがその一言を許せないのだろう。だが簡単に弾けるほど小さな器ではない。

「ふん、戯言を。これだけの力を見て強がり言うてないわ！ 少しやさしくしておれば付け上りおって…… お主は今自慢の鎧を脱ぎ捨てておる。線も露わな女の柔肌なぞ、その獣にいと簡単に引き裂かれてしまうような脆い物よ。美しいうちに死にたいのかも知れんが、そんなに生き急ぐことはないぞ？ お主のようなべつぴんさんが軀を晒すのを喜ぶ男はおりやせんでの」

柔らかい口調とは裏腹に、老人の眼は鋭く女を刺す。やろうと思えばできる、そう言っているも同然であつた。だが黒髪の羽ありは怯まず対峙し続けた。

「それでは当ててみましょうか？ ……その本、ミスリル銀で印字し装丁してあるとお見受けします。そしてあなたの幻獣は実際には生物ではなく、力場（フィールド）。違いまして？」

老羽ありは無言のまま、驚愕の色を浮かべた瞳を黒髪の羽ありに向けていた。しかしさも当然と言わんばかりに老人の驚きを意に介さず、黒髪の羽ありは若干うきうきしたような感じで自分の推理を披露する。

「仮説ですが表紙に用いているミスリルに蓄えらえたエネルギーで

力場を作り出し、『文章を読む』と言うことでイメージするよりも
確実に具体的な形状で安定化させる。しかしこれほどはつきりとし
た力場を使役するためには相当な精神感応が要求されるはず。でも
やはりここで『読み上げる』、という方法でそれをより確実なもの
にしているのですね？

そして幻獣という形で実像を与えられたその力場は、目にした相
手に生き物であるかのように錯覚させるため、プログラムされてい
る範囲である程度生命のような振る舞いをする。しかし基本的には
術者が手にしたその書に記載された通りの行動をとり、しかし書を
介さなければ例え命令を与えたとしても動くことはない。いかがで
す？

すべてを見透かされていた事に言葉を失い、老人は先程まで顔に
浮かべていた余裕を消していた。

「……その通り。この魔道書こそがこのグリフォンの本体よ。どこ
で気付いた？」

「初めに翼を切り落としたときに、おかしいと思いました。加えて
生命としてあまりにも頑強過ぎること、そして最後のアームズの一
撃でその力場に乱れを生じていたことが決定的でした。それにあな
たが幻獣に命令したりダメージを回復させたりする度に、手にした
その本が輝いていましたからね。気付かない方がどうかしています
わ」

核心を突いた黒髪の羽ありに対して、年老いた経験のある羽あり
が変化を見せた。最大限の注意と警戒を払う。そのような状況でも
女は相手を追い詰めるように、かつおどけて見せるように上目遣い
に見つめる。

「もしお手持ちに余裕があるようでしたら、その魔道書を一冊貸し

「ただいただけませんか？ 実際の仕組みを手にとってよく調べてみたくなって」

くつと老人がこみ上げてくる笑いを抑えた。この羽ありは自分達の脅威になる。だがここで殺してしまうのも惜しい存在であることを彼が一番よく理解していた。

「類稀な知性に満ちる美しき羽ありよ。今日はこれまでにしておこう。お主が居ると言うだけでこの地は我等『ゴンドワナ』にとって十分な価値がある。いずれその身をいただきにあがる。それまでその命を大事にせいよ。先程のように死に急ぐようなことは努々（ゆめゆめ）なさらぬようにの」

そう言い後ろに聳^{そび}える光の壁の方へと向かって飛び立つ。それに従い幻獣も飛び立った。

「……そうじゃ、お主の名を覚えてもらえんか？」

狙いを定められた事を自覚している黒髪の羽ありは、もう逃げ果^{おあ}せることができなくなった現実を毅然とした態度で迎え撃った。

「ハイランド『ロディニア』のエミール・ビネと申します。以後お見知りおきを」

彼女の姓と出身国の名を復唱し、わずかな時間考え込むと何かを思い出したかのように嬉々として大声を上げた。

「おお！ もしかしてエミリオの孫娘か！ 実にべっぴんさんに育ったのう。ビネの一族がまさかアースに肩入れしておるとは。文字通り地に落ちたもんじゃて」

黒髪の羽ありの顔色が俄かに険しくなる。それを一向に気にすることなく、老羽ありは魔道書を見せつける様に掲げ、眼下の者達に向かって警告する。

「ゴンドワナは地に落ちん。いずれ再び空に上がる。儂らの力は地を統べるに相応しい天の物じゃでな。エミリオとは旧知の仲じゃて儂のことを知りたかったら聞くとええ。シモン・パディクト、この爺の名を忘れるでないぞ。近いうちに迎えにあがるでの」

飛び立つ老人の背中を見送ると、ぺたん、と黒髪の羽ありは腰を地面につけてしまった。老兵の威圧に当てられ続けていたため、話の途中でいつこの様にへたり込んでしまってもおかしくなかった。息を切らして立ち上がるのもままならない。ウィンチに掴まってゴーレムから片羽の少年が、砲身を備えた小型機から短髪の羽なしの青年が飛び降り、駆け寄り支える。

一度退けたものの未だに脅威は去っていない。いずれすぐに現れる強大な軍勢に対し如何なる手段で立ち向かえばよいのか。彼らの心には今の空模様のように拭い難い暗雲がじわじわと広がっていた。

第三十一羽 「闇を運ぶ聖獣」(後書き)

狙われたエマ。押し寄せる軍勢。

今回は郊外だったためゴーレムが動かせましたが、これから……

波乱と混沌の次羽以降も宜しくお願いいたします。

第三十二羽 「悪意からの使い」

驚のような巨大な幻獣を退けたその日は、それ以上の攻撃がなされることは無かった。黒髪の羽ありが最も危惧した夜間の攻撃は無かったが、町全体が言い知れぬ不安と緊張感に包まれ、誰一人として枕を高くすることなどできなかった。そんな深夜。

「……きれいだね」

薄桃色を基調とし、虹色に輝く町を覆う天幕を見ながら、眠れなかった片羽の少年は呟く。避難所として提供された工房の敷地の中、大型機用の搬入路上に座っていた。傍らにいるのは栗色の髪をした羽なし。彼の姉。いつ弟がその背にある羽を広げてくれてもいいように、彼の左側に座る。

「そーだねー」

驚いた少年はきよろきよろと周囲を見渡した。彼の言葉に答えた声には覚えがない。後ろに振り返ると、そこには美しい黄金色の長い髪をした美しい羽なしの女が立っていた。その背後には背の高い男がついている。

「こおら、エディ！ いい加減にしときなさいって！ こんな夜中まで連れまわして」

少年の姉も、そう言う声の主の方を見た。

「……うえっ？ アネーシャ！」

ふっふーん、と、腕組みしたまま鼻を鳴らして、挑戦的な微笑みを浮かべて座ったままの彼女を見下ろす。

「寝付けないから外に出てきたんだけど、いい雰囲気つちひめの二人が居るからお邪魔しちゃだめかなーって思ったら…… まったく」

「え…… 去年の地姫の……？」

片羽の少年の脳裏に、あの時の舞台で煌びやかに力強くしなやかに舞う地姫の姿が一気に甦る。思わず頬が紅潮した。AMFの輝きは夜中でも町全体を照らしているため、その羽なしの女はそれに気づいた

「お？ 覚えてる？ ほらほら」

そう言つて下していた髪を手でまとめ、当時の様な髪形を作る。薄桃色に輝く町の光が、その女の姿を艶やかに照らし、少年は当時の記憶と重なるその姿に見蕩れてしまった。

「おーおー。立派に男の子だねえ」

「誘惑すんなっ！」

立ち上がって腕を引つ掴む。

「ちょっと、やめなさいよ！ あんたの馬鹿力はシャレにならないんだから！ そーだ。片羽君、今日も活躍ご苦労様！ 工房の若女将といっしょに戦ってくれたんだって？ あなたは前の時と言い町の英雄ね。ああ！ 女の子達の抱かれないランキング急上昇間違い

なし！ 私もフリーなら…… 痛たたたたつ！」

眉間に皺を寄せ無言のまま握る手に力が入る。掴まれた女は結構マジっぽくもがいてようやくその手から逃れることが出来た。そしてそのまま走って逃げる。それをやはり無言で追いかける姉。

「助けて、オルランド！」

呼ばれた羽ありの男は、はあ、と大きくため息をついて羽なしの娘たちの間に割って入り、黄金色の髪の毛の羽なしを抱き上げて飛び上がった。

「はあ、はあ…… いい？ 今みたいにあんたが色んな意味でそこのかわいい弟くんを掴んで離さないから飛び立てないってこと、いい加減に自覚しなさいよ！」

うるせー！ だまれー！ と汚い言葉を投げつける。真っ赤にした顔は走って追いかけたせいなのか、腹から声を出したせいなのか、それとも隣にいる愛し君が理由なのか。はつきりとしなかった。地団太を踏むが、相手はすでに自分の手の届かないところ。

ようやく優勢を取り戻した羽なしの娘が、下から見上げる少年にやさしい声をかける。

「いつも本当にありがとう。でも、まだ子供のあなたに辛い仕事を押し付けるわけにはいかないの。町のことは大人達で何とかするわ。それはみんながそう思ってる。

だけど、もしもの時はあなたも力を貸して。私達ではどうしようもないことを、あなたは切り拓くことができる。そのことにもっと自信を持つていいと思うよ！」

ちっ！ と大きく舌打ちが隣から響く。アデューと空からひらひらと手を振って遊覧飛行へと飛んでいく。わずかに戸惑いながら少年も微笑んで手を振りかえす。見送った後、自分の掌を見つめ、くつと握りしめた。

隣で姉が息を大きく吸い込んだことに気が付き、そつと姉の居る方の耳を塞ぐ。

「帰ってくんない！ 色ボケアーシェ！」

―― 32 ―

彼女のデスクに座ったまま、黒髪が大きくため息をついた。非常に難しい顔をしている。

「シモン・パディクト……」

それは彼女の身柄を押さえると宣言した幻獣の使い手。戦闘を終え、負傷者を回収しゴーレムを格納庫に戻した後、偶然町に来ていたロディニアからの使者に頼んでロディニアに連絡を取った。その老羽ありは彼女の祖父の旧知と名乗ったので、詳細を知ろうと思ったのだ。通信を受け取ったロディニアの代表から得た回答は、非常に深刻なものだった。

「まさか…… ただでさえハイランド至上主義のゴンドワナで、ゴンドワナの強硬派の將軍だなんて……」

かつてハイランド間でミスリルの原料となる鉱石の採掘権を巡り、会議では治まりがなくなることがあった。有する鉱山からの採掘量が減少していた「ゴンドワナ」と「ヌーナ」の間で争いが起きたが、一人の羽ありが率いた部隊によって甚大な被害が出たために、ヌーナが手を引いたと言う闇の逸話があると言う。

その部隊こそが、『パディクト』隊。

「エマや、悪いことは言わん。こちらからの部隊が間に合わなかった時は何かある前に投降しなさい。シモンは手加減を考えない。だがあるやつは命令に従い、実績を残せる部下には非常に寛大だ。お前のことが心配なのだよ」

彼女の祖父からの慈悲の言葉が何度も何度もこだまする。

「……ありがとう、おじい様。だけど、町を滅茶苦茶にされない保証がないわ。今日も布告なしに酷い真似をしてきたし。あのじじいが頭だつて言うなら、それを潰せば蛇は止まる。だけどあのじじい、絶対ヤバイ。飲み込まれる前に、何とかしないと……」

——うるせー！　だまれー！——

突如響く知った声。

「何だつてのよ」

いろいろ悩んでいたのが馬鹿らしく思えてきた黒髪の羽ありは、

こみ上げてきた笑いを抑えることが出来なかった。ひとしきり笑った後、大きく息をつく。

「やる前から向こうに投降するわけにはいかないわ。精一杯やって、追い返してやるんだから！　ここでみんなと生きるって決めたんだ」

―帰ってくんない！　色ボケ。。。！―

なんともタイミングが悪かった。

「くっそ……　色ボケはどっちよ。あーあ、十七年の片思いが実りそうで舞い上がってるのはアンタじゃない」

大きく伸びをして肩を回す。緊張の糸が少しだけ緩んできたように欠伸がもれる。少し仮眠を取ろうと、ソファ―に倒れこんだ。

「まずはあのレールガン、量産決定ね。多分三つは作れる……　チ
エインサイズは……　作ってみたけど重くてまず無理かも……　ブ
リード部分をフィールドエッジに替えよっかな……」

そう呟いた羽ありは、うつ伏せになったまま寝息を立て始めた。

……

…

町が幻獣の攻撃にさらされた次の日。昨日の暗雲は去り、陽光が世界を照らしていた。強い光をエネルギー源として蓄積させるミスリルの性質から、日中のAMFシステムの稼働は問題がないと思われた。このまま展開が続ける。人々は一旦我が家に戻り、避難の準備を整えていた。いつもの仕事を始めることはさすがに出来ない。しかし信頼できる城壁があることは、皆に幾分かの平穏を取り戻させた。

昼を過ぎてても何もなかった。壁を作り出すだけでなく、見張り台としての役目を持つ八本のAMFピラーからの緊急連絡もない。一つ目鬼やグリフォンが現れた北西方面はとりわけ厳重に警戒されていた。

巨大な人影が現れることもない。
空を翔る巨大な獅子が現れることもない。

連日の進撃は不可能なのかもしれないと思い始めていたころ、突如警報が鳴り響き、西と北西の二か所から慌てふためく声が届いた。

『大変だ！ か、枯れていく……』
『……おい、煙が上がってるぞ！ 燃えている！ 何とかしてくれ！』

北西のモニターには集落の外が映し出されていた。何かが蠢く。それを中心に映像が拡大された。その異形が体を擡げる。

それは王冠のようなとさかをつけた大蛇。

それが吐く息に曝された作物はみるみる萎れ、変色していく。大蛇が這ったその痕は無残な砂漠が広がった。

西のモニターにはまた違った物が映っていた。小さな赤い輝きが楽しそうに農地を跳ねる。それが触れる物はすべて黒焦げ、たちどころに火を噴いた。

その狂妄の主は炎に包まれた小さな蜥蜴。

火は火を生み、蜥蜴はどんどん大きくなった。

アームズの量産を急いでいた黒髪の羽ありがモニターにしがみついて歯ぎしりを立てる。何をされたのかを瞬時に悟った彼女はモニターを叩き、悔しそうに言葉を吐いた。

「最低だ、あのじじい……」

上空に待機している銀色に輝く球体ビークルから眼下に広がる農地が枯れ果てていく様子を嬉々として眺めている老人が一人。

「いくら天の技術があつたとしても、要するにここは農村じゃ。何より作物が大事じゃろう？ ほれほれ、籠城しておつては守れんぞお」

その手には銀に輝く巨大な書があつた。青い宝石で装飾されたそれは他にも二冊ある。それぞれをまだ若い羽ありが手にし、使役していた。

「バジリスク砂漠の王とサラマンダー炎の竜。お前たちが最も恐れるのはこやつらじゃろ？ はようせんと皆飢え死にじゃ。ああ言う嬢ちゃんにはこういうやり方が一番効くでの」

しばらく窓からにやにやと見下ろしていたが、少しずつ笑みが消えていく。一つ大きく呆れたようなため息をつき、自分の目の前で魔道書を開く部下の方を睨みつけた。

「……しっかし何じゃお前ら。影響範囲はまだあれだけか？ まったく、多少慣れてきとるようじゃったから上級書を渡してみたが、早すぎたわ。もうちいと手早くやらんと幻獣形態を維持することだけにエネルギーを持って行かれるぞ？ 期待させてこの程度か、やれやれ。後でエリクサーを使わんでもええ下級書からやり直せ」

厳しい上官の言葉に反論することなく、二人の羽ありは短く返事をした。興味なさそうに一瞥を投げた老人は再び眼下に広がる悪夢の観覧にいそしんでいた。

「……さてさて、べっぴんさんはまだ出てこんか？」

町長の他、彼女に近しい人間も彼女の部屋に集まっていた。

「わたし…… わたし……」

この場にいる人間すべてが昨日の報告を受けて、ゴンドワナの要求を知っている。そして黒髪の羽ありが何に苦しんでいるのかを理解していた。両肩を包む短髪の羽なしの大きな手に自分の手を添え、苦渋の決断を下す。

「……あいつらが欲しいのは、わたし。ごめん、わたしが居たら町みんなの命を危険に晒してしまう……」

悔しさに打ち拉がれた顔を上げ、怒りに震える声でも毅然とした態度を崩さず全員に伝える。

「わたし、行きます。たった一年半だったけど、すごく楽しかった。今まで…… 本当にありがとうございました」

誰も引き止めることが出来ない。誰よりも頭の良い彼女の導いた選択を覆すような提案を、この場にいる誰一人として提示することが出来ない。片羽の少年と、その兄すら、無言で彼女の背中を見送るしかなかったのだ。

これ、お願い

部屋を出る際、彼女のパートナーに一枚のメモを手渡した。

黒髪の羽ありは町を覆う天幕を解除するよう指示すると、町の中央広場に向かって飛んで行った。虹色に輝いていた障壁が消え、彼女の姿を確認した老羽ありは彼女を追うように命じ、中央広場に球体ビークルを着陸させると扉を開けた。

唇をきゅつと噛み、両手を強く握りしめる。すべては計画通り、とほくそ笑む老人の顔を睨みつけ、黒髪の羽ありは老羽ありに招かれるまま、ピークルに乗り込んでいった。

おまけ挿羽 「雪の降る日」(前書き)

クリスマス特別企画！

ちよいと長めになりますので前後編になります。

第三章が始まるよりも前の、冬のある日が舞台です。

おまけ挿羽 「雪の降る日」

珍しく雪が降っていました。この町は豊かな農村ですが、農地は今すっかり枯草模様。刈入れが終わった秋の終わりごろから背の高いアワホツツと呼ばれる草がたくさん茂っていましたが、今では風になびいてかさかさと音を立てています。

風はすっかり冷たくて、首元までしっかり隠しておかないとせっかく厚着していても凍えてしまうような、そんな時期。暗くて厚い雲に覆われた空からふわりふわりとやわらかな冷たい綿が舞い降りてきます。

「さむっ」

吐く息を白くして、真っ黒で長く、艶やかな髪の毛の女の人が呟きました。一体今日の朝から何回同じ言葉を口にしたでしょう。首をすくめて着ている服の襟元を締め直し、さらには毛糸のマフラーを巻きなおします。手にはミトンタイプのムートン手袋をはめ、履いているブーツの履き口にはファーがあしらわれ、防寒対策ばっちりです。

「もうそろそろ年末か。こっちに来てから九か月。思えばあつという間だったわね」

聞く人は居ないのですが独り言を呟きます。そうした方が感慨深

いところがあるでしょう。てくてく歩いて町中を行きます。その女の人の背中には翼がありました。今日は空を飛んでいませんでした。

「さ、て。今日はちょーつとおつきあいしてもらいましょかね」

と言った女の人は、夏になるまでお世話になっていた家族の住む家のドアの前に立ち、ドアノックで三回叩きました。

――おまけ　くクリスマス特別編――

「こんにちは、ステイナさん」

「あら、エマちゃん。おひさしぶりね。ちゃんと食べてる？ 痩せてない？ 女はもうちょっとふくらしても問題ないんだから。あなた根詰めるとずっとこもりつきりになるから心配なのよ」

出迎えてくれたきれいな中年の女の人が矢継ぎ早に聞いてきます。それに対して嫌な顔をすることもなくにこにここと、エマと呼ばれた黒い髪の女の人は答えていきます。

料理はやっぱり苦手なままだということ。

痩せてはいないから安心してほしいということ。

最近では冬で機械が使われることが少なくなったから仕事も落ち着いているということ。

うんうん、と頷いて、ステイナさんはエマを家の中に招き入れ、

暖炉のそばの席に案内しました。コートを受け取り上着掛けに吊るす。と今度はお茶を煎れる準備をし始めます。

手袋を外し、マフラーを取って、暖炉の火に緩やかに手をかざして体を温めます。防寒装備を整えていても、やっぱり寒いこの季節。だんだんと手先にまで血が通っていくのを感じてエマの顔も緩みます。

ステイナさんは台所にある薪ストーブの上で温められたケトルに入っているお湯を注いだティーポットと、湯煎して温められたミルクを入れたミルクポットを乗せた木製のトレイを運び、二つのポットをテーブルに乗せるとまた台所に戻っていきました。次に苺のジヤムの入った瓶といろんな形をしたクッキーと、それから白色を基調としたカップとソーサーをさっきの木製のトレイに乗せてきました。カップとソーサーをエマの前に置くと、ステイナさんがちょうどいい感じに蒸らし終わったお茶を注いでくれました。

カップには赤い三角帽子をかぶった雪だるまの絵があらわれ、ソーサーは緑色の葉っぱの模様が鮮やかでした。

クッキーは星型やハート型だけでなく、モミの木のような形や、ベルのような形、ステッキのような形をした物など様々です。

煎れてもらったお茶にミルクを適量加え、ふーっと少し息で吹いてすります。芯から冷えていた体がぽかぽかと温まり始めるのを感じたエマは、ほう、っと息をつきました。

「レトロってのもいいですねー……」

そのまま溶けていきそうな感じではけーっとしながらクッキーを摘まみます。初めに手にしたのは星型のクッキー。それを見つめて

いると、自分の目の前に置かれたカップとソーサーが目に入ります。

「なんだ、アースにもちゃんとクリスマスってあるんですね」

やっぱりなー、と何だかつまらなさそうな顔をしてクッキーを頬張り、お茶をすすります。もともとハイランドで育った彼女は、この町の教会が彼女の知っているようなものではなく、アース、とくにこの町ではハイランドにはない独自の宗教が広く信じられていることを感じていました。それでアースにはクリスマスの習慣がないのでは、と想像していたのです。なので今日はいきなりやってきてびっくりさせるつもりでした。だけど失敗の予感です。

「え？ クリスマス？ なあにそれ」

ステイナさんの返事は意外や意外。どうやらアース、とりあえずこの町にはクリスマスという行事はないようです。エマの顔が少し輝きました。またお茶を少しすすります。

「クリスマスは、もとは大昔に世界中に広まっていた宗教の教主の誕生を祝う祭儀です。旧時代の文化も引き継いでますけど、科学礼賛のハイランドでは熱心な信者はほとんどいませんから、形だけですなー。今日はその前日なんです。『クリスマス・イブ』って呼ばれてます」

「へー。それでその宗教ってどんな教えだったの？ 私達の場合は父なる天と母なる大地への『感謝』だけ……」

「えーっと…… たしか『愛』だったかな…… それも敵味方なくあまねく全ての者への…… っておーい」

そうなの？！ となぜかステイナさんまで顔を輝かせて嬉しそうにしていました。最後まで聞かずにパタパタと駆けていき、裏の庭

に向かって声をかけました。

「ウィンー、早くいらっしやい。お父さんの手伝いもう終わるでしょ？ エマちゃん来てるわよ！」

はい、といい感じの返事が返ってきました。少しすると裏口から一人の男の子が入ってきました。お母さんが用意してくれた温かいお湯に浸して固く絞った手拭いを受け取って顔を拭き、仕事で汚れた手をきれいに拭きあげます。体を使う作業だったのでしょう。雪が降って風の冷たい天気でしたが、厚着していません。

「いらっしやい、エマ。うちに来るの、ひさしぶりだね」

さわやかな感じの男の子は片羽でした。体が冷えないようにもう一枚上着を羽織りました。左側の裾を引っ張り、背中に空いた羽通しにその片方だけの翼を通します。ボタンをしめて整えました。振り向いた時のにやかな笑顔は、可愛いオトコノコに目がないおねーさん達を捕えて離さなさそうです。

「ウィンにはいつも頼んで工房に来てもらってるからね。今日はちよつと二人で出かけない？」

申し出に驚いたウィン君の顔は少し赤らんでいました。思わず母親の方を見ます。ステイナさんは両手をパンッと打ち鳴らして、うんうんと笑顔で答えます。

「いいわね！ そーよ、そうしなさい！ お茶飲んで体を温めてる間に準備しておいてあげるから。いつも忙しいエマちゃんが来てくれたんだから、今日は楽しませてこなきゃダメよ！」

息子の返事は完全に無視です。でもウィン君の答えは当然YESなので、待つまでもありません。ノリノリのお母さんは全力で支援の方向です。敵が帰ってくる前に何としても二人を送り出してあげなくては いけません。ステイナさんはまたパタパタと、ウィン用の防寒セットの準備を始めました。

ウィン君はエマの隣に座ってお茶をいただいています。ステイナさんがそこにカップとソーサーを用意したからです。ふうっと吹いて冷ます姿を横で見ていたエマの顔もほころびます。

「はい、ウィンこっち」

ん？ と無邪気な顔を声のする方に向けると、エマがクッキーを指でつまんでウィンに差し出してきました。

「あーんして、あーん」

ウィン君のハートは爆発寸前です。エマが取ったクッキーの形もハート型です。わざとなのか、偶然なのかわかりません。色んな意味でウィン君はドキドキしています。

真っ赤な顔を見られて恥ずかしい。

……でもうれしくて。

だけど本や友達の話に聞く限り、こんなことをするんだったら立場が逆なんじゃないか。

いろんなことが頭の中を駆け巡ってもう何が何だかわかりません。

とりあえず言われたとおりに口を開いてクッキーを放り込んでもらいました。目は泳ぎまくってとてもじゃありませんが相手の方を見ることなんてできません。クッキーの味もわかりません。

「おいしいね、これ。ステイナさんが焼いたの？」

「う、うん。最近あついお茶を煎れることが多いから、よく焼ぎゅ、げほげほっ！」

からからになった喉をクッキーの粉が直撃しました。むせて大変です。お茶で流し込もうとしましたが、慌てて飲み下そうと口にしたお茶はあつあつで、舌をやけどしてしまいました。踏んだり蹴ったりです。恥ずかしくて顔を上げられません。ちらりとエマの方を見ると、とても穏やかに見つめて微笑んでいました。とても恥ずかしくてたまらなかったのですが、そんな彼女の笑顔を見れてとても幸せな気分になりました。

そんなこんなをしているうちに、ステイナさんプロデュース『ウイン君お出かけセット』が準備万端整いまして、そろそろ出かけることになりました。

コートを受け取り羽織ります。手袋はエマがしてきたミトンタイプとは異なり、指先が分かれたグローブタイプです。表は革仕立てですが、内側はふわりとした肌触りの生地できていて、とてもあったかです。エマも自分の着てきたコートを着て、マフラーを巻きます。

丁度その時、ノックなしに玄関の扉が開きました。ステイナさんの顔が、まずいっ！ といった感じに変わります。

「ただい…… あ、アンタか…… 一体どうしたのよ、久しぶりじゃない。来るなんて聞いてないわよ」

そこにいたのは栗色の髪の毛をした女の人でした。髪の毛の長さは肩くらいで、そんなに長いわけでもありません。美少女と言った感じの残る器量良しさんでした。ステイナさんに似ています。入ってきた時は普段通りの顔つきでしたが、黒い髪をした女の人がうちの中にいるのを見た時から、若干警戒するような表情になりました。暖炉の方に目をやると、コートを着込んで手袋をはめたウィン君が立っていました。

「あつ！ ウィン、どこ行くの？！」

「お、おかえり、エディ姉さん。これからエマと……」

さっきのステイナさんと同じで最後まで物を聞きません。きつ、と彼女の方を睨みます。両目は吊り上り、白い歯をむき出しに、怒りの表情が相手を刺します。

「アンタ！ ウィンを惑わすなって言ってるでしょ！」

つかつかとエマに詰め寄るエディの首根っこをステイナさんが掴み上げ、阻止しました。じたばたと暴れますがそう簡単には離してもらえそうにありません。

「それじゃー息子さんをお借りします」

そう言い残してウィン君の手を取り、エマは外に出ていきました。身を掬よじってお母さんの手から逃れたエディは扉を乱暴に開けて二人を追いかけます。しかし時すでに遅し。黒い髪をしたきれいな女の人はその背中の翼を開き、自分よりもまだ背の低い男の子を抱えて

飛び立ったところでした。

「待ちやがれ！」

「いやですよー。必ず返すからそれまで我慢しな〜」

寒さをものともせず全力で走って追いかけてくるエディの姿に戦慄を覚えたエマは、追ってこれないように道路の続いていない方向に向かって飛んでいきました。

「エディ姉さん、今度は姉さんに行くから、今日はごめーん！」

ウィン君の声が響きます。もうとても追いつけないことを悟ったエディはがくと膝を折り、地面に手をつきうなだれていました。べしん、と頭に衝撃を受けます。頭をさすって体を起こすと、そこにはステイナさんが腕組みをして立っていました。その顔には文句の一つどころか十も百もありそうな感じが満々です。めっちゃ怖いんです。

「お母さんはウィンを応援しています。アンタはいい加減自分の相手をみつけないさい！」

そう言って首根っこを引っ掴むと、そのままずるずると引きずって家に帰っていきました。

おまけ挿羽 「雪の降る日」(後書き)

「愛してると言いなさい」、「天人伝承」、「神は崇る」の安芸様からのリクエストで、クリスマスでのラブコメ仕立ての「羽」をお贈りしております。

忙殺されて荒んだれいちえるからの一足早めのクリスマスプレゼント。いかがでしょうか？

みなさまのお目汚しになっていないことを祈りながら、現在後編を作成中。

クリスマスまでにお届けできないかも…… というリアルな心配もありますが、どうぞ後編をおまちくださいませ。

それではそれでは。

れいちえるでした。

おまけ挿羽 「あたたかな光に照らされて」 (前書き)

クリスマス特別企画、後編！

時期が遅れましたがきつとまだ賞味期限内！

おまけ挿羽 「あたたかな光に照らされて」

パタパタと羽ばたき、雪の降る寒空を黒い長い髪の女の人が飛んでいきます。その腕には一人の少年を抱えています。雲は黒くて厚く、昼ごろからずっと降り続けていて、建物の屋根屋根を、木々のてっぺんを白で彩っていました。

「『ホワイト・クリスマス』だね、ウィン」

ウィンと呼ばれた少年は、今まで目にしたことのない光景を見て心奪われていました。この女の人と初めて出会った日、やはり今と同じように一緒に空を飛びました。その時に見た景色よりもずっと美しく、こんな景色をいつでも見ることで空を飛べる羽のある人達をうらやましく思いました。それにウインは初めて一緒に飛んだ日からずっとこの女の人のことが好きでした。

「エマ、『ホワイト・クリスマス』って何？ こうやって雪でいるんなものが覆われてること？」

ウインを抱えて飛ぶエマと呼ばれた女の方は、さっきのウインの家でのことを思い出しました。この町ではクリスマスの風習はありません。

「えっとね、雪が降ったクリスマスのことを、『ホワイト・クリスマス』っていうの。クリスマスっていうのは、大昔の、最初の羽ありが生まれるよりも、ハイランドが出来るよりもずっとずっと昔の、それこそ数千年前に生まれた聖人様の誕生を祝う日のことよ。今日はその前日、クリスマスイブ」

「聖人様？ 父なる天のような人？」

「うーん…… どうなんだろう。三位一体論っていうのがあったと思うけど…… ごめん、宗教のことはわかんないや」

時刻は大体夕方です。もう少しで日も落ち暗くなる少し手前。だけれど今日は雪が降っていて、いつもよりも明るい感じです。吹雪と言うほどの降り方ではなく、ただ深々（しんしん）と、音を捕えて静かに降り積もっていききました。

町の家々に明かりが灯り始めます。暖かな光が窓から漏れ出し、寒い雰囲気溶かし始めました。やさしく降り積もった雪の上にその光が伸び、さらに町全体を明るく照らします。

その景色を、二人は空から見ていました。とても幻想的で、寒いのに温かい景色が広がっていました。いつもならそれぞれの家の中から笑い声がしてくるのが聞こえるのですが、今日はやけに静かです。まるで今日と言う日の幸せが漏れてしまわないようにと、深々と降り積もる雪が包み込んでしまっているかのようでした。

―おまけ ―クリスマス特別編：後編―

エマはワインを抱えたまま、農地に向かって飛んでいきます。

小さな丘のてっぺんの、一本の常緑樹の根元に下りました。そこはワインのお気に入り場所でした。目の前に広がる広い広い農地

の緑に囲まれた一本の立派なその樹の下は、緑の濃い季節は駆け抜ける風が立てる葉擦れの音が体に染み込んで、とてもさわやかでとても気持ちのいい場所です。ですが今農地はすっかり枯草模様。そして今日は白い世界に埋め尽くされています。とても孤独でさみしいところでした。ほかの命を感じられないこの場所に一人では長い時間居られそうありません。

今はこの場所には男の子と女の人の二人しかいません。他の誰も居ません。

ふたりつきりです。

とてもさみしい、孤独なはずのこの場所には、

二人以外の何者もなく、

それは確かに孤独でさみしいはずなのですが、

それが何よりぜいたくで、

目の前は一面ただ白いだけなのに、

遠くに見える町明かりがやわらかくて、

とても寒いはずのこの場所は確かにあたたかで、

ぴったりくっ付いた二人の間には幸せの温度が感じられました。

「……さむっ」

「……そう？」

「さむいよっ ……でもそうでもないかも」

「……ねえ、エマ」

「何？」

「えっと…… その……」

この丘の樹の下で想いを告げ、一緒に過ごした男と女は近い将来に結ばれる。そんな他愛のない、どこの町にもあるそんなジンクス。この町にやってきてまだ一年も経っていないエマは知るはずありませんでした。ましてや彼女は科学者で、もともと非科学的なことは口にしても、それを真に受けたり信じたりすることはありません。

けどウインは違います。今一緒にいる人は、年は離れていても

出会った時からずっと好きだった人。ましてやこの場所はこの町で伝えられる特別な場所。

そして今日はクリスマスイブ。

知ってか知らずか、今を逃してはいけないと思っていました。

……だけどこの町では一人前の大人、男として認められるのは十九歳から。彼はまだ今年十七歳になる子供でした。相手は仕事もあり、町中から信頼される立派な大人の女性です。とても釣り合わない、おもひ錘になるだけだという引け目があって、なかなか言い出すことができません。

「……えっと」

「？」

「す……」

「す？」

「……」

ウインはうつむいてしまい、結局言い出すことはできませんでした。二人ともが何も言わないまま、時間が経っていきます。

ウインがエマから離れて振り返ります。やさしい雪明りが照らし、そしてほんのりコートと彼女の翼の羽毛に積もった白く冷たい綿が、いつもの彼女をさらに美しく魅せました。

「す……　　すぐ、きれいだね。こんな雪の日に空の上から町を見たり、この樹の下に来たりすることなんて、絶対なかった。エマと一緒にだから、こんなにきれいなものをたくさん見れる。すぐくうれしいよ」

主語をあえて言わないで伝えるのが精いっぱいでした。それに気付いているのかいないのか、エマは本当にやさしく微笑んで、

ありがとう、どういたしまして

と、答えてくれました。

ばたばたと飛んで、町に戻ってきました。戻ってきたそこはエマの工房です。

「ちょっと待っててね」

そう言つてエマは裏口の鍵を開けて中に入っていました。中に入ると、かちゃん、と音が響きます。どうやら中から鍵をかけたようです。深々と降り続いていた雪は、今は止んでいます。雲は晴れていませんが、雪に光が反射して町は明るく照らされています。静

かな静かな時間が流れていきました。

なかなか扉が開かれないので、ウインは表の方へと回ってみました。

きゅむ、きゅむ、と雪を踏みしめる音が静かに鳴ります。その音がとても愉快で、ウインはあえて歩幅を狭く、なるべく足跡を多く残しながら歩いて行きました。

きゅむ、きゅむ

きゅむ、きゅむ

きゅむ、きゅむ

きゅむ、きゅむ

たくさんたくさん足跡が残りました。

ウインが足跡を残すことに夢中になると、ごうんごうんごうんごうんと音を立てて、工房の正面の大扉が開いていきました。振り返ると工房の中はほのかな明かりに照らしだされていきました。中の機械たちがその揺らめく光を受けて、いつもと違った景色を作り出していました。

小さな器の中に入れられた、それはそれはたくさんのろうそくが、

通路に沿って

階段の手すりに沿って

机の上に

荷台の上に

機械達の上に

ゴーレムの上に

それはそれは所狭しと置かれて、ゆらゆらと炎をたたえていました。

扉の陰からちよいちよいと手招きして、外にいたウインを呼び寄せます。招かれるままにウインは工房の中に入っていました。見慣れた世界のはずなのに、今ではとても幻想的な空間に様変わりしています。

「えっへへへ…… 町で売ってたろうそく買い占めちゃった」

時々いたずらをするこの大人の羽ありも、さすがにやりすぎたか？と感じているようです。でもウィンが見惚^{みと}れているのを見て、満足気でした。

扉の陰に隠れたエマの方を見ると、ウィンは真っ赤になりました。

赤い帽子と赤い服。

それらの縁取りには白いふわふわとした綿があしらわれ、帽子の先端と上着の合わせの部分には白いポンポンがついています。

さつきまで着ていた服とはまるで違います。とてもかわいらしく仕立てられたその衣装に純情なウィン君はすっかりノックアウトです。

「ふっふっふ、サンタさんですぞー」

赤い衣装に身を包んだエマは満面のどや顔です。

ウィンはずっとドキドキ。うれしいんだけど戸惑って、もう何がやら分からなくなってます。ぷしゅーっとな音が聞こえてきそうな感じに茹で上がっていました。

「ね、ウィン。手を出して」

言われたとおりに手を出すと、はめていた手袋を脱がされました。エマも手袋を外していて、直接肌が触れ合います。何をされるんだろっ、とドキドキしていると、リボンをつけた小さな小箱をその手に乗せられました。

「クリスマスイブの夜に、その一年行いの良かった子のところにサンタクロースがやってきてプレゼントをくれるのよ。これはわたしからのクリスマスプレゼント。いつもお世話になってるウィンへの贈り物」

そのリボンを解き、箱を開けるとその中には褪せた銀色をした輪が入っていました。それを手に取ると、輪は見事な光を取り戻しました。

「ミスリル製のブレスレット。ウインの規格外の精神感応率だったから予想できないような色んなことが起きるんじゃないかな。作ったわたしも想像できないような、奇跡みたいな何かが」

ウインは早速その腕輪を自分の左腕にはめました。桃色に近い淡いオレンジ色の輝きがウインの体を照らします。それをみて、やっぱりそっか、とサンタさんが呟きました。

「まあ、期待しすぎないで！ 機能なんてあつてないようなものだから。体調や気分に合わせて光る加減や色が違つとか、その程度。あははは。お守りよ」

そう言うつとエマサンタはウインを引き寄せ、ウインの頬に軽くちゅつとキスをしました。ウインの胸は跳ねあがり、一瞬で耳まで真っ赤になりました。ぼんつと音が聞こえてもおかしくない位です。腕輪の光は強いピンクです。

「……ねえ、ウイン。ウインが大人になって、わたしが一人でいてその時まだウインが同じ気持ちだったら、その時はちゃんと saying ね。わたしは、受け止められるから」

くらくらとのぼせきったウインは何と言われたのかよくわかって
いませんでした。どきまぎしっ放しのウインの髪を撫で、エマはま
たにっこりとほほ笑みます。

「メリー・クリスマス、ウイン。あなたの未来に、祝福があらんこ
とを」

ウインも言われた台詞を復唱します。たどたどしかったのですが、
何とか言葉になりました。ろうそくの光が揺らめいて、寄り添う二
人の姿を優しく照らし出しました。

聖なる夜はだんだんと深く、町中を包んでいきます。

たとえ未来に苦難があつたとしても

その背にある翼を広げて

その足で乗り越えてゆく強さを持つ人に、

そして

愛のあるすべての人に向けて

メリー・クリスマス

おまけ挿羽 「あたたかな光に照らされて」 (後書き)

クリスマス特別編、いかがでしたでしょうか。

第三章を読んだ方々が今回のおまけをご覧になると、とてもやるせない気持ちになるかと思います。

でもこんな幸せだった時間があつたから、それを胸に強く生きていくこともできるんじゃないかと思うのです。

それでは、時期がすぎてしまいましたが、れいちえるからも

M e r r y C h r i s t m a s !

第三十三羽 「絶望、諦観、希望、意志」（前書き）

クリスマス特別編を挟みましたが、再び激動の第三章の再開です。
「ゴンドワナ」に屈したエマと、彼女を守りたい人々の想いをどうぞ。

第三十三羽 「絶望、諦観、希望、意志」

二人の若い男の羽ありに挟まれ、正面の老いた羽ありを睨みつけながら、黒髪の羽ありの女は抵抗することなく座っていた。膝に置かれた両手はきつく握りこまれている。威圧を抑えた老羽ありは素知らぬ顔で、蓄えた白髭を右手でいじり穏やかに笑顔を浮かべている。

「よくおいでなすった。アースで這いまわるよりも天の民らしく空から整える方がやつぱりええじゃろう？ 特にお主のように優れた知性の持ち主は、操り従える方が向いとる。正しい道はこつちじゃて」

黒髪の羽ありは全く答える様子がない。しかしその事も予測の範囲内であり、老人にとって気分を害するものではなかった。そのままビークルを出すように命令する。きいんと響く音とともに浮遊し飛び立っていく。眼下には枯れ果て、燃え盛る農地が見える。すでに王冠を持つ毒蛇と紅い蜥蜴は居なくなっているが、それらが及ぼした被害は留まるところを知らない。

毒蛇の吐き出した毒息は風に乗って緩やかに広がり、それは次から次へと草木の命を絶っていき、近くの空を行く小鳥が突然ふらふらと力なく落ちていく。それを見た人々は北西の農地を諦めた。

西の農地の火の勢いは主が居なくなつた為に落ち着いていた。まずは火災を消そうと町の人々がわらわらと農地に集まっていく。銀色の球体はそれを意に介することなく飛び去って行こうとする。

「待つて！ わたしは言われたとおりに貴方達のところに来たのよ？！ どうしてそのままにしていくなさいよ！」
「何故そんなに激昂する？　すでに魔道書は解除しておる。それに儂がやっておつたらこの程度では済まんで。未熟なこやつらに感謝せいよ？　これ以上は無い。あの程度の被害じゃつたらあとは天災とそう変わらなからう？　まあ確かに完成したばかりの砂漠バジリスクの王は制御できるか少々不安もあつた。じゃか見る限り戦略的に非常に有用じゃな。解除してもその毒の効果は薄れんし、過去の仕様とは大違いじゃ。これは如何なる地域にとつても脅威になるじやろう。ますます我ら『ゴンドワナ』の栄光がゆるぎないものになつたわ」

冷徹な老人の一言に黒髪の羽ありは凍りつき、青ざめた表情のまま彼女は大声を上げた。

「バカ！　なんてものを持ち出すのよ！　そんな無差別大量殺戮兵器作つて、それを何も知らない人達に使うだなんて……　アンタ、どれだけアースが憎いの？！　みんなが何をしたつていうのよ！　貴方達が本当に困つていると言つてくれるのなら、みんなはそれを受け入れてくれたわ！　ロディニアが落ちた時も、わたし達が散々ひどいことをしたつて言うのに許して、受け入れてくれた！　彼らが何をしたつていうのよ！」

お世辞にも広いとは言えない車内で黒髪の羽ありは立ち上がり、テールを叩く。両端の羽ありの男に肩を押さえられ、無理やり座らされた。その眼には悔し涙が浮かび、まるで無力な彼女自身を呪っているようだ。

「奴らは何もしておらん。憎くもない。何もしておらんからこそ、使えるというものじゃ。憎ければこの程度で済まさん。そもそもア

「スに憎しみなぞ湧くはずもなかるう。お主は憎くて草を刈るか？それとおんなじじゃ」

老人はさも当然と言うように何の感慨もなく言い捨てた。黒髪の羽ありは奥歯を噛み締め自分の膝を何度も何度も拳で叩きつけていた。その様子を見ていた老人は呆れたようにため息を一つ付き、頬杖をついて気怠^{けだる}そうに手を出して目の前の部下に指示を出した。察した部下が青い宝石のはめ込まれた一冊の魔道書を取り、手渡す。

「まったく、エミリオは孫の育て方を間違ったとは思えん。手のかかる娘じゃ」

そう言い放つと魔道書を開く。読み上げると同時に窓の外の景色が陰った。同時に下から悲鳴が上がる。

天から巨大な岩のような物がゆっくりと落ちてくる。四枚の鱗^{ひれ}を持ち、それらを大きく扇ぎ、ゆっくりと大地に降り立った。

それは岩ではなかった。巨大な亀のような甲羅を背負い、長い首をしていた。そして顎と鼻は細く尖った巨大な竜。

「まったく……。炎の竜^{サラマンダー}を制御できんかった時のために持ってきた大河の主をこんなことで使うとはのう……。エリクサーの無駄遣いにもほどがある」

嫌そうに吐き捨てた老人は頁をめくり、手を当てた。同時に文字が輝く。

「天に向かって吐き出せ」

同時に眼下の竜が上空に向けてその喉を膨らませ、あぎと 罅を開ける。
一気にその口腔から大量の水を吹き出し、農地全体にまき散らした。
その水量は物凄く、町全体が豪雨に襲われたのとはば変わりがなかった。
西の農地で起きた火災は瞬時に消し止められ、北西の農地に
広がっていた毒霧は雨に溶かされ流れていった。突然の雨に、外に
出ていた町の住人達は全員例外なくしとどに濡れて、呆然としていた。
天を仰いでいた顔をゆつくりと戻すと、竜の姿は薄くなり空気に溶けていった。

竜が眼下から姿を消したのは、騒ぎが落ち着いたことを確認した
老人が魔道書を閉じたのと同時だった。見事です、と部下が賞賛するが世辞はよい、とあしらう。

部下に渡す前に青い宝石がはめ込まれていた表紙を正面に座る黒髪
の羽ありに見せつける。中央の宝玉は依然その美しい輝きを放っていたが、
周りに散りばめられていた小さな光はすべて失われている。

「ほれ、せつかくのエリクサーがあと半分じゃ。もったいないと思
わんか、この程度の騒ぎに使うなんての」

彼女をたしなめるかのように呟くが、黒髪の羽ありはその事よりも
下で起きた物理現象をまるで無視した現象のことで頭がいっぱい
になっていた。

「嘘…… でしょ…… 何、あの水量…… 一体どこから……」

「儂のことを侮つとるようじゃから言つとくがの。儂の精神感応率は
122%じゃ。ゴンドワナにも歴代で100%を超える者は他に
おりやあせん。意識せんでも最大出力であらゆるミスリル兵器を操
れる。エリクサーを使用した兵器じゃったら奇跡を意図的に行える

「思つてええぞ」

……目の前にいる老人の存在こそが絶望。そのことを悟った黒髪の羽ありは力なく俯き座席に身を預けていた。

もしも対抗できる存在があるとすれば、彼しかない。

だがそれは叶わぬことだと、諦めていた。

— 33 —

町全体に驟雨があつて、銀色の球体がこの町を離れる少し前。

片羽の少年は下唇を噛み締め、黒髪の羽ありが工房正面の大扉の前で翼を広げて飛び去ったのを彼女の部屋の窓から見ていた。少年の兄は仕事のパートナーであり、自分の恋人でもある女性が発つのを見守ることもせず、メモを片手に探し物をしている。その姿に片羽の少年はわずかながらに苛立ちを覚えていた。

「兄さん、これでいいの？ エマがこれが一番だと言ったからつて、納得できるの？」

振り返ることなく兄が答える。その声は静かで落ち着いていた。だがそれは時化の前の風の時間のようで、その奥底には激しく渦巻く嵐が眠っていることが見て取れる。

「……できるわけないだろ。ウィン、俺がな、この町の連中の中で

一番はらわた煮えくり返って、ねじ切られるような気持ちになったよ。わかんねえか？」

続いて、くそつ、と吐き捨てた。乱された気持ちを抑えるように書庫にしまいこまれた設計図を探し出して取り出していく。その姿は一心不乱と言うにふさわしかった。

「それじゃあ、どうして行くなつて言わなかったの？」

「あ？ 俺が言えるわけが無えだろうが。何言つてんだよ」
「だけど！ エマは絶対に引き止めてほしかつ」

弟のその一言にとうとう苛立ちの頂点に達していた兄は感情を抑えきれず、少年が今まで聞いたことが無いような荒げた声を発した。

「バカ野郎！ だつたらなんでお前が言わないんだよ！ 俺が言っても効かないんだ！ 大人で、事情を把握して冷静に対応することをあいつに一番期待されている俺が引き止めちゃいけないんだ！ 行つてほしくないに決まつてんだろ！ なんでわかんねえんだよ！ 引き止めるのは、お前の仕事だつたんだ！」

「そ、れは……」

自分もどこかで引き止めることを諦めていた、そんな弱い気持ちを見抜かれていた事に片羽の少年は動揺を隠せない。つなぐ言葉を見出せず、押し黙るしかなかった。兄は書類探しを中断して向き合い、弟に詰め寄る。

「だからお前は選ばれなかったんだ、あいつに。お前は自分ができることをわかつちゃいねえ。もっと大人にならなきゃ、可愛い弟止まりだろうよ。もしお前が大人になつても絶対負けねえけどなっ」

一番痛いところを突かれた片羽の少年は拳を握りしめ、腹の底に力を入れて声を絞り出す。彼が滲み出すのを押さえ続けてきた醜い思いの奔流がとうとう堰を切ってしまった。

「兄さんが…… 後から来た兄さんなんか！ 僕がどんな思いだったか分かるわけが無い！ 僕の方が初めに好きになったのに、後から盗っていった兄さんがそんな風に諦めるなんて許せるわけが無いよ！ 兄さんに僕がどんなにエマが好きだったかなんて、分かるわけが無い！」

温厚な少年が、思わずかっとなって兄に掴みかかっていた。しかし腕力の差は歴然で、平然と払われむしろ逆に襟元を掴まれ睨みつけられていた。普段の喧嘩だったら片羽の少年は怯み、目を逸らしていたかもしれない。だが今日は違った。真正面から睨み合い、退く気配を見せない。兄の知る弱弱い弟の姿はそこには無い。

「ああ分かんねえよ、わかってたまるかよ。同じ女を好きになつて、お前のことを理解して情が湧こうもんならやつてられねえよ。お前だつてそうだろ？ だから……」

その目に弟の本当の強さを見た兄は、荒げていた気持ちと声を再び抑えていく。自分達がなくてはいけないことはこんな事ではない、それを弟に伝えるかのように。

「今はそんなことで争うのを止めよう。エマを取り返す。ただその事だけを考えようぜ？ 俺達二人ならきつと…… いや、絶対出来る……！」

決して微笑まず、力強く言い切る。険しい顔つきではあったが、

それは苦難であるからではなく信念があるからこそ。掴み上げていた片羽の少年の襟元を離し、再度書庫を探り始めた。

「僕に…… 何ができるんだろう。わからないよ……」

まだ自分の持つ力に、自分の芯の強さに自信を持っていない片羽の少年は弱音をこぼした。それを支え、導いてくれた羽ありは今はもう居ない。

「それを、精一杯考えろ！ 俺だけじゃダメだ。お前だけでもダメだ。だから…… 頼む。エマのために……」

少年は自分の両手を見つめ、ぐっと握りしめる。そのまま目を閉じ、一呼吸つくと両脇を開いた。

そこには先程まであった弱さは消え、決意を固めた強い男の眼があった。

第三十三羽 「絶望、諦観、希望、意志」(後書き)

次からは奪還編。

今回のサブタイは愛読書「ARMS」(著：皆川亮二氏)の一節から拝借しました。

「人の足を止めるのは絶望ではなく、『諦観^{あきらめ}』、人の足を進めるのは希望ではなく、『意志』」

残されたウィン達の置かれた状況はまさにそうだと思います。
クリスマス編とのあまりにも激しい温度差(笑)

シリアス展開が続きますが、新年もよろしくお願いいたします。

おまけ挿話 「教えて! エマ先…… あれ?」 (前書き)

久しぶりの更新です。

4 か月ぶりになるので、もう大分忘れ去られていると思いますので
ここらで総復習させていただきたいと思います。

おまけ挿話 「教えて！ エマ先…… あれ？」

「はいはい。みなさんお待ちかね。「羽」本編の更新……のま・え・に！ これまでのお話と、忘れられてる世界観の復習をしましょうね！ ナビゲーターは私^{わたくし}」

「職場でも welcome！ 節操無しの色情羽ありエミユール・ビネがお送りいたします」

「おんどれあ！ ここから初めて見た人に何て先入観植えつけとんじゃボケエ！」

「何凄んでんのよ！ 実際そうじゃない！ 色事^{いろこと}見せつけられたうちの弟がどれだけパニクったかわかってんの？！」

「え？！ 何言って…… え……？」

「あーあ。自覚無いの？ しっかり見られてんのよ、やってた現場！」

「……」

「（終了）」

「（再開）そ、そう言うアンタは規格外ブラコンじゃない！ 一線超えてんじゃないわよ！ 近親婚は学術的にもダメだってあれほど言ってるのに！」

「こ、超えてないわよ！ でかい声でなに言ってるのよ！ あたしは今でもアンタと違って純潔ですよーだ！」

「でも明らかに見てる目が誘ってるんですけどぉ？ 今か今かと待ち望んでんでしょ？ 襲^うってくれないかなって。あーやだやだ。よっぽど不健全だわ！」

「ち、違！ やめてよ！ 聞かれたらどうするのよ！」

「あー、狼狽^{うつろた}えてる。やっぱり思ってたのね、やらしー！」

「やらしー、はこっちの台詞だっつーの！」

ぎゃーぎゃー（フェードアウト）

「……えっと、そう言うわけで。ここからは僕、ウインがエマの用意してた資料をもとに皆様にご紹介をしていきたいと思います」

はい、よろしくお願いします。

「……えっと、姉さん聞こえてないと思ってるのかな……（赤面）」

―番外編―

この世界には、二種類の人間がいます。背中に羽を持って空を飛ぶことができる『羽あり』と、羽を持たない『羽なし』。羽なしの方が人口が多く、基本的に羽ありは少数です。羽ありよりも羽なしの方が体が丈夫で体力もありますが、機械を使うことになったりすると、羽ありの方がとても上手に使えます。

それからこの世界を大きく分けると二つになります。浮遊大陸の『ハイランド』と、僕達が暮らす『アース』。ハイランドは『浮き島』と呼ばれていることもあります。

アースには羽なしと羽ありの両方が生活していますが、ハイランドには羽ありしかいません。そしてアースとハイランドは全く異なる文明が作られています。残念ながら今現在ハイランドとアースは仲があまりよくありません。だけど、少しずつ変わってきているように思えます。

ハイランドを空に浮かべているのは『光子炉』と言う巨大なエネルギー発生装置だそうです。これはかつて滅亡寸前だった人類を救った奇跡の発明で、今もこの世界に無くてはならない機械だと言うことです。

世界にあるハイランドは七つ。大昔には十大陸あったと言われていますが、戦争があつて七つに減ってしまいました。

そして今、原因不明の光子炉の故障によつて更に三つのハイランドが墜落。現在では四大大陸が残るのみになっています。

基本的にハイランドは大昔からの『旧文明時代』から受け継がれた高度科学技術が今も息づいていて、アースの生活からは想像できないほどの機械文明が発達しています。アースも工業地域だったり、ハイランドの恩恵を強く受けていたりする地方にはある程度機械があります。僕達の住む町みたいな農業地域では機械はあまり普及していません。機械を維持する為の技師さんがいないですし。

また、アースの機械とハイランドの機械には決定的に大きな違いがあります。

それは使っている金属。ハイランドの機械は『ミスリル銀』と言う特殊な金属でつくられています。

このミスリル銀は本当に不思議な金属で、エネルギーを蓄える性質があります。その為ミスリル製の機械はアースの機械と違ってエンジンやバッテリー（……って何だろう。今度兄さんに聞こう）が必要なく、とてもコンパクトです。

ミスリル銀を作るのには『エリクサー』と呼ばれている高純度凝縮性光子エネルギー結晶体（……やっぱりよくわかんないや）が不

可欠で、現在ではこれは光子炉が無いと得られないそうです。このエリクサーは澄み渡った青色で、すつごくきれいなんだよ！　ひびが入る時に響く音もとても澄んできれいだった。宝石みたい……と言っても宝石自体見たことがないんだけど。でもそのまま置いていたり、特に人が触れていたりするとそれだけでどんどん分解が進んでしまうから保存や利用にはかなり繊細な装置や仕組みが必要だそうですね。

こんな風にハイランドで科学技術がすぐ発達している一方、僕達アースはのどかに穏やかに、ちよつとした道具、簡単な機械を使いながら自然と共に暮らしています。でも僕達はそれでも不便を感じていないし、十分楽しく暮らしている。父なる天と母なる大地に感謝を捧げて、毎日を家族と一緒に生きています。

この世界には二種類の人間が居る、初めにそう言いましたが、僕ウインはそのどちらでもありません。……いや、どちらなのか分からない。僕の背中には、左側にしか翼がありません。これは生まれつきで、子供の頃はそのことでよく虐められていました。でも羽ありの子供達のように体力が無いわけでもなく（もちろん、姉さんや兄さんに比べたら無いんだけど）、どっちつかずに生きてきました。だけど、ある日僕の世界が変わりました。

僕が十六歳になった年の冬の終わりの日、エマが暮らしていたハイランド『ロディニア』が、僕達の暮らしていた町のすぐ近くに墜落しました。原因は光子炉の故障。自分達の生活の場と、文明の根源だった光子炉、エリクサー、ミスリルを失った空の民は、僕達の町と交渉を進めていましたが決裂。強行手段に出ました。

ミスリルゴーレムと呼ばれる巨大なミスリル製の巨人を使って、僕達を武力制圧して強制的に支配下に置こうとしました。ミスリル

ゴーレムの力は絶大で、僕達、人の力では太刀打ちが出来なくて蹂躪されるしかないときらめていた時、同じロディニアの民だったエマがもう一体のミスリルゴーレムと共に立ち上がってくれました。でも一人ではゴーレムを上手く制御できなくて、逆に追い詰められてしまう。その時、彼女が僕を呼んだんだ。

怖かったけど、何もしないまま町が壊されて、奪われてしまうことの方が怖かった。エマの呼びかけに答えて、僕もゴーレムに乗って、エマと一緒に戦った。僕自身、こんなことができるなんて夢にも思わなかった。初めてミスリル製の機械に乗って、空を飛んだ。そして、ゴーレムが僕達に話しかけてくる声を聞いたんだ。

戦いを止めたい。だから力を貸して。

……

僕はその声が言うとおりに動かしした。そうしたら巨人同士の戦いはあっけなく終わって、浮き島と僕達が分かり合うための会議をもう一度開くことになりました。

そんなことができたのも、エマが言うには僕の精神感応率が普通の羽ありの七倍くらい高いからだそうだけど、難しい理屈のことはよくわからなかった。精神感応率と言うのはどれだけミスリルを上手く扱えるのかを数字にしたものだ、って言ってました。

そもそもどうしてそんなに精神感応率が高いんだろう。エマは僕に特殊な何かがあると言っていたけれど、一体何なのかさっぱりわからないそうです。

父さんも母さんも、祖父も祖母も、兄さんも姉さんもみんな羽な

し。そんな羽なしの家系で僕一人だけが、羽を持つ。片方だけ。エマは、それが有り得ないと言ってた。どれだけ理想的に計算して高く見積もっても一万人に二人いるかないかだそう。実際もつとずつと低くて、一千万に一人いたら良い方じゃないか、とも言っていた。三十万分の一以下の確率は、統計学的に（統計学って何だろう……）ゼロと言って良い、だそう。

和平会議のあとは、僕達とロディニアの民は特に争うこともなく平和に暮らしていました。僕は時々エマの実験や理論検証のために協力して、ついにはあきらめなくてはいけないと言われていた光子炉を修理することに成功したんだ。ロディニアの人々は遠く離れた土地に移住し、別れの時が来たけれど、エマは僕達と一緒に暮らすと言って、この町に残ってくれた。

…… 本当につれしかった。

でも僕は浮かれていただけ。僕は今でもエマのことが好きだけど、僕は選んでももらえなかった。悔しくて苦しくて、僕は逃げた。そんな僕を姉さんは支えてくれて、愛してくれて。僕も好きだけど……
って、そんな話はあとあと！

そして今。僕達の町はまた新しい危機にさらされています。墜落したハイランド『ゴンドワナ』が、自分達の勢力圏としてアースを治めようと侵攻を始めました。彼らの武力は僕達がお伽話ときで聞いたことがあるような幻の生き物、『幻獣』。エマはあれは生き物じゃないって言うていたけれど、僕にはどう見ても生き物にしかみえなかった。

鷲の頭と翼や爪をもつ獅子や砂漠を広げる毒蛇、全身が炎に包まれている蜥蜴とかげ、人面鳥、一ツ目鬼、大量の水と共に現れた亀のよう

な竜。

そのすべてが、空の民が開く本から現れる。本当に物語の世界をつなぐ扉を手に行っているようだった。エマと一緒にまたゴーレムに乗って戦ったけれど、それだけでは駄目だった。狡猾な戦略と圧倒的な脅威の前に僕達は屈するしかなくて、エマの身柄を交換条件として「ゴンドワナ」は一時町から手を引いた。

……僕は諦めていた。エマが町を去るのを止められない、と。

それが許せなかった。兄さんに負けただけじゃなくて、初めから自分自身に負けていた。そんなみじめな思いはもうたくさんだ。大好きな人を取り返す。取り返して見せる。僕が出来る事、それを最大限に生かして戦う。

これから先は、僕達が前に進むための戦いだ。

……

えっと、一応これで今までの振り返りは終わりなんだけど……
姉さんとエマはどこまで行ったんだろう。

……あ、戻ってきた。まだロゲンカしてる。すごいなあ。

「何よ！ もうこうなったらエロキャラで行きなさいよ！」

「やめて！ 言わないで！ 見られたってホント？　ねえ、ホントなの？　ねえウイン！」

え、直接僕に聞くの？！　いや……　正直目が離せ……　いや！　ごほごほっ！

「ホントよホント！　ウインが泣くくらいエゲツなかったのよ！　いい加減にしてよね！」

「いやーっ！　もう帰る！　もう帰る！　ゴンドワナに行く！」
「もうあっちから帰ってくんな！」

……

あーあ。せっかく戻ってきたのに、また行っちゃった。

でも大丈夫、必ず連れ帰るから。僕はもう自分に負けたりしない。

それにしてもあの二人、すごく仲がいいよね。姉さんは絶対に否定するだろうけど。

第三十四羽 「雷鳴の如く」(前書き)

お待たせいたしました。第三章再開です。

第三十四羽 「雷鳴の如く」

侵攻を受け、住む者の居なくなつた街の太い道路を一台の二輪車のよつな機体が後ろに砂煙を巻き上げて進んでいく。

二輪車に乗るのは男性二人。運転するのは筋肉質で体格の良い青年で、後部には左側だけの翼を持った少年が乗っていた。片羽の少年のすぐ右側には銀色に輝く砲がある。その砲は二輪車に備えられた台座に乘せられ、操舵者の思うように360度どの方向にも向けられるようになっていく。

「ウィン、どうだ？ スレイプニルの状況が少しでもおかしくなつたらすぐに教えてくれ。あとグングニルはいつでもいけるように起動したままにしておく。使い方は教えておいたとおりだ。暴発させないようにセーフティはこっちでかけておく」

伝説の神馬しんめの名を冠するのは二人の乗る二輪車様の作業機。名付けたのは製作者である黒髪の羽ありの女だった。もともと一人乗りの設計であつたが、アームズを搭載したため使用者用に座席を一つ増設し二人乗りとなつている。片羽の少年が起動試験を行い問題のないことも確認しているが、今回のように実戦に登用されるのは初めてであるため、常に車両状況を把握せざるを得ない。

今回この機体の操縦管理にもっとも精通するのがこの二人であつたため、そして二人の強い希望もあつたため、軍関係の者ではないが尖兵として出てきている。

「……ウィン、ここは俺が修業していた街の、すぐ北の街なんだ」

運転手の青年が後部座席の少年に話しかける。走行音にかき消されて聞き取れないといけないと思い、少年は少し前のめりになって、

運転手の声に集中する。

「人っ子一人いなくなるなんて、俺だつて想像したことない。それくらいにぎやかな街だった。それなのに……」

運転手の青年が悔しそうにつぶやく。片羽の少年は口を結び、耳に意識を集めていたが、続きは一向に始まらなかった。二人を乗せた車両は前方のカーブをほとんど減速することなく曲がっていく。曲がりきるとさらに車両の速度が上がる。口をつぐんだ青年の心の奥に湧いたであろう悔しさと苛立ちを表したかのように、後輪から上がる砂煙が増した。

「……兄さん、わかってる。その為に来たんじゃないけど、やらな
いと」

「ああ、あいつを取り返すだけじゃない。俺達の町が、こんな風にならないように止めるんだ」

— 34 —

およそ四ヶ月前にハイランド『ゴンドワナ』が墜落した。それ以来この近辺で数々の怪物が目撃され、街が襲われるという噂が立つようになった。噂が噂でなくなり、各地で怪物が現れ、少しずつ制圧される街が増えていくと、浮き島だった巨大な岩山の周囲に住む人々は伝手^{つて}を頼りに住み慣れた自分達の街を捨てて離れざるを得なくなった。

「……ちくしょう、浮き島の連中、本当に何考えてやがる」

現実を目の当たりにした少年の兄が吐き捨てる。

「……不安なんだよ。自分達が暮らしていたところを突然失って、見ず知らずの土地に放り出されて。エマ達だって、同じだった」

片羽の少年が答える。

「でも一緒に生きられるんだ、ってみんなで感じたんだ。だからきつと、今度も」

「けどよ、これとそれは話が別だろ？ 自分達が不安だからって、その不安を他の誰かに押し付ける？ ふざけるんじゃない！ これだけの科学力があるんだ。伝説やおとぎ話の化け物達を実際に作り出すような力があるくせに、自分達ができることを見誤ってる連中の行動なんて許せるわけねえだろ！」

二人の脳裏に、鷲の頭と翼、そしてするどい鉤爪を持った巨大な獅子と、それを使役する大きな銀色に輝く書を携えた老人の姿がよぎった。彼らの最大の戦力であるゴーレムと対等とも言える幻獣を自在に操る脅威。ゴーレム一機に襲われただけで、彼らの住む町は手も足も出なかった。今度の敵は炎の中で生きる蜥蜴や、息を吐くだけで砂漠を広げる毒蛇、戯れに洪水を起こす竜など、災厄の塊でもある幻獣を無数に飼っている。放っておくことがどういうことを意味するか、考えるまでもなかった。

「そうだったね、ごめん。来る前にも言い合ったばかりだったのに」

「……すまん。お前はホント、争いに向かない性格だな。いっつも自分じゃない誰かのために考えてる。」

だからあいつも好きなんだろうな。俺にはできん……」

二人分の沈黙を乗せたまま、二輪車は走り続けた。

突然二人の周囲が陰る。それとほぼ同時に瓦礫をまき散らし、巨大な塊が目の前に現れた。片羽の少年が上を見上げると、はるか頭上から彼らを見下す巨大な一ツ目と目が合った。あまりに巨大すぎて、眼前のそれが巨大な鬼の足であることに気付くのはその少し後だった。

この廃墟の街はすでに「ゴンドワナ」の勢力圏内であり、いつ攻撃があってもおかしくない。踏みつぶされぬよう、またその巨大な塊に衝突せぬよう少年の兄はハンドルを切り、重心を左に傾け後輪を滑らせる。片羽の少年は急激な重心移動に負けて振り落とされないうよう、スレイプニルに搭載した迫撃砲「グングニル」にしがみついた。鬼のつま先と建物の壁の隙間をくぐり、倒れることなくスレイプニルが駆け抜ける。そしてそのまま、もとの進行方向に向けて加速を始めた。

「くそっ 何だよありゃあ！ 鷲の化け物以上のデカブツじゃねえか！」

少年の兄が悪態をつく。上空から口角を持ち上げたにたと笑いを浮かべた顔の持ち主が、走り去っていく二輪車を追って歩き出した。廃墟であることを良いことにその異常な脚力で建造物を破壊して迫る。

「撃つよ！」

「ああ、お見舞いしてやれ！」

片羽の少年がその操縦桿を握り、迫撃砲の砲身を後方に向け、一ツ目鬼の胸部に狙いをつける。セーフティロックを解いたと報告する兄に、放つ合図をかけるとともに引き金を引いた。

同時に近くに落雷があつたかと思うほどの衝撃が起き、車体が前方に大きく傾いた。再び振り落とされないように、片羽の少年は砲台にしがみついた。想像以上のあまりの衝撃に彼の翼も思わず大きく広がり、毛羽立っていた。

さらにその数瞬の後、爆風が押し寄せる。二輪車が巻き上げる砂煙とは違う、小さな砂礫を含んだそれは少年の視界を奪い、何が起つたのか理解するのを妨げた。次第に景色が晴れてくると、そこには息を呑む惨状があつた。

後方に迫っていた一ツ目鬼は上腹部から上が消し飛び、バランスを失つた下半身が後ろに倒れていく。大きな音を立てて地に落ちた鬼の体からは煙が立ち、そのまま空気に溶けていった。射線上の建物は弧状に決り取られている。石造りの物は溶け落ち、木造の物は燻っていた。

「おいおいおいおい…… エマのやつ、何を作ったんだよ！」

二人の乗る車両に搭載された、雷を放ったがごとき砲口からは今なお放電が続き、一撃のみで極限まで熱を持った砲身は空気に冷やされていくに従い、キンキンと高い音を立てた。射線上の空気はいまだに歪んでいる。

片羽の少年が生み出した衝撃の直後、スレイプニルを停止させていた少年の兄はその光景を理解し、一つの結論を出した。

「ウイン、操縦代われ。お前が撃つとグングニルももたない。くそ、羽なし用ってのはこういう事かよ、ちゃんと言っておけよな！」

自分の一撃に恐怖を覚えた少年は兄の提案に二つ返事で従った。操縦席を互いに代わり、ハンドルを握る。少年の兄が操っていた時よりも機体から響く音が高く、そして銀の光が強くなった。一体の巨人の姿が完全に霧散したのち、後方と左右から新たに巨人が三体現れる。またしても同じような耳まで裂けたような大きな口を持ち、鼻が無く、頭頂部が尖った一ツ目鬼だった。

「くっそ！ 相手してられねえ！ ウィン、走れ！ 言われてるとおりここを突破して基地を押さえるんだ！ デカいのは任せて、他の連中と合流しよう」

兄の提案に同意し、片羽の少年はアクセルを全開で吹かす。熱を持った砲身が冷えるまでは砲撃は出来ない。攻撃手段を失っている彼らができることは先を指すことのみだ。少年の兄が後部で砲座にある砲身固定レバーを引くと歯車が回りだし、砲身が真上を向いた。砲口から上がる陽炎と相まって、まるで小さな煙突が立っているように見える。重心の関係上、砲身を前方に倒す必要があるのだが、今なお強い熱を帯びるそれを片羽の少年の隣に位置させるわけにはいかない。40度ほど倒したところが限界と思われ、そこで固定したが、片羽の少年も、少年の兄もこの状態で運転をしたことはなかった。しかし運転を代った少年は何一つ動じることはない。

「……いけるか？」

「うん、大丈夫。この子が全部教えてくれる。行こう！」

ギアを入れ、スレイプニルを発進させる。先程までよりもずっと速度を上げて、巨大な鬼を置き去りにしていった。この速度で飛ばしても風防のおかげでゴーグルをしていなくても粉塵などで目を傷めない。

集中して運転をしている中、後方の巨人の動向に意識を払っていた兄が声をかけてきた。

「後ろは大丈夫だ。ゴーレムが二機、今来た。デカブツはゴーレムが何とかしてくれる。合流を急ごう」

ミラーで後ろを確認すると、翼を持たないミスリルゴーレムが一つ目鬼の一体を殴りつけていた。大きくよろめいた鬼が街並みに倒れ、砂煙を立てた。おそらく以前少年の住む町を襲った物と同型機と思われたが、今はこれほど心強いものはない。

大きく頷いた片羽の少年は視線を前に戻し、さらに速度を上げて郊外へと向かってスレイプニルを走らせた。

第三十四羽 「雷鳴の如く」(後書き)

第三章、奪還編がはじまりました。

長らくお待たせしましたこと、お詫び申し上げます。

サイエンス・ファンタジー(↑開き直った)「羽」をこれからも
よろしく願いいたします。

第三十五羽 「荒野の王者」

廃墟、とまではいかないが、人の気配が消えた街路を、艶消しを施した灰白色の輸送用のカーゴが進む。車輪を持たず低く宙に浮いた状態で走行しているため、車内には全く振動はない。前方の運転席と後方の積荷部は隔壁で分けられており、後部には窓は設けられていなかった。積荷部には照明はなく、車内を確認するのは前部と後部を分ける隔壁に備えられた格子窓から入る光が頼りだった。

積荷部にあるのは複数の木箱と、壁に収納可能な備え付け座席に座る十人足らずの人員。一人を除き背中に翼を持ち、統一された迷彩色のジャケツトを身にまとい、銃器を思わせる銀色の金属塊を一律に装備していた。

「……何でこんな低く道路に沿って飛んでくの？ 来た時みたいに上空をびゅーんっ！ ていけば早いのに」

まだ若い女の声が響く。それに対して回答を与える声は無く、女は不機嫌そうに口をとがらせた。もとより羽ありのことをよく思っていない彼女は、何よ、と不満を漏らした。

「……出発前に説明があつたはずだが」

もつとも隔壁に近い座席に座っていた羽ありの男が口を開く。この男はこの車両に乗り込んでいる部隊のリーダーであり、部下は全員任務中の私語は慎むようにと訓練を受けていた。

「この空域に送った無人の偵察機が攻撃を受けて落とされた。記録には人の顔を持つ怪鳥が多数認められている。攻撃方法は不明。ただし近距離からの物理的な攻撃ではないこと、および撃墜の直前の

採取データから異常なまでの高周波数音波が確認されていることから、中距離からの多方向性超振動波攻撃だと思われる。ゆえに」
「あー、ストップ、ストップ！ 難しいこと言われても分かんないわよ……」

どうして浮き島の人間はみんな……、と眉間を押さえながら口元をゆがめて独り言ちた。その姿にリーダーの羽ありはため息を漏らした。

「要は有効な攻撃手段、防御手段を持たない状態でこのゴンドワナの制空圏に入るとは危険すぎるということだ。陸路が安全と言う保障は一切ないが、このビークルが飛べない貴女の棺桶になるよりマシだろう？」

それもそうね、と栗色の髪をした女も同意した。彼女の背中には羽は無く、他の隊員と異なり彼女が持つのは銃器ではない。布に包まれ、明らかに他の者が持つ物よりも巨大で重量がありそうだ。

「……それにしても、貴女達兄弟は一体何なんだ？ ただのアースの農村の民じゃあないのか？」

「ただの人間よ。あたし達はのんびり暮らせてたらそれでいいの。それを邪魔するんだったら容赦しない！ それに二人がああなバカを取り戻そうって必死になってるのに、あたしだけ指をくわえて見てられるわけないわ」

「死ぬかもしれないんだぞ？ 曲がりなりにも今回は両国の会議も決裂した上での戦闘行為。つまりは戦争だ。ゲームとは違う」

「戦争って何なのか、よく知らない。けどもしも負けたらあたし達の暮らしがめちゃくちゃにされてしまうんだってことは分かる。それならやるだけやるしかないじゃない！」

彼女の持つ決意がそう簡単に曲げられない確かなものであると確信した隊長は、それ以上何か横槍を入れるようなことを言わなかった。

ただ一度、彼女が手にした物をちらりと見て、ただの人間だとしても選ぶ武器がおかしいだろう、と呟く。隣に座る部下が小さく頷き、同意した。

— 35 —

「2時方向、キクロプス一体出現！ 『馬』の予想進行ルートです！」

車内に緊張が走る。隊員全員の目つきがさらに鋭くなり、全身の神経が研ぎ澄まされていく。いよいよ相手にとつての警戒ラインに近づいていることが感じ取られた。

「やはり出現は突然だな。いいか貴様ら！ ビネ女史の推察通りであればあれは生き物ではなく実体化したフィールドだ。目一杯ぶち込んでやれ！」

隊長が檄を飛ばすと隊員全員から大きく関とぎの聲が上がる。戦闘準備を整え士気を高めていく中、突如雷光が走った。同時に響く爆発音に全員がわずかに身をすくめる。少し遅れて衝撃波がビークルを襲った。シートベルトを締めていたため席から放り出される者は無かったが、動揺が広がる。

「き、キクロプス消滅……」

俄かに信じがたい運転席からの報告に、本来は銃口を覗かせるためにある、開閉可能な小さな間隙から銘々が外の光景を見る。砂塵が晴れたのちに現れた光景は目の当たりにした者達をさらに驚愕させた。

「お、おい街が半壊したぞ……」

「今の衝撃、『馬』の砲撃か？ そんなバカな、アースにあんなものが……」

今は衝撃波のために急停車している。それだけでなく乗組員全員の思考も一時停止してしまっていた。その中でただ一人、その光景を作り出した元凶に対して文句を言っているものがある。

「あのバカ女、何作ってんのよ！ ウィンは大丈夫でしょうね？！

あーもう、二人と一緒に行けばよかった！」

混乱のいち早く冷静を取り戻した隊長が発進させるように指示を出す。発進すると同時にまた報告が入る。ゴーレムが二機、当初の予定通りに後方支援に到着したとのことだった。退路を断つために現れると予想される巨大な敵性物に対する切り札。強力な援護を得て、隊全体の士気がさらに高揚していった。

しばらく進んでいくと、カーゴの壁面に何かが強く当たる音が響きだした。

「左右から当機と並走する物あり！ 数、4！ あれは…… 馬？」

彼らの乗るビークルは、街中と言うこともあつて最大速度では走行していない。しかし決して遅いようなものではない。それを生物が走って追撃してくるとは考えにくかった。新手の幻獣であることが予想され、全員に迎撃態勢を取るように指示が飛ぶ。シートベル

トを外し、銃器のセーフティを外して攻撃指示を待つ。狙撃窓はいつでも開けられるようにしている。

「民間人なし、応戦可！」

「よし！ 貴様ら、臆するな！ あれは古の化け物でも、呪いの産物でもない！ ただの臆病者の妄想だ！ 貴様らの特大級の目覚まし時計で寝惚けたチキンボーイを起こしてやれ！」

隊長の言葉と同時に狙撃窓から銃口を出し、トリガーを引き絞る。その先端から光の筋が乱射され、追撃者を射抜いていくように見えた。しかし追撃者はその光の矢を手につつ盾で防ぎ凌いだ。撃ち方を止めると追撃者は右腕に着けた盾をおろし、左手に持つ弓を構えて矢をつがえた。

灰白色の乗り物を追ってくるのは馬の四肢。

そして弓矢を操る屈強な肉体をした、長髪で口髭と顎鬚を蓄えた粗暴そうな顔貌。

艶やかな被毛に覆われた、見事な筋肉の曲線を描く下半身を持つ歴戦の猛者の半人半馬のその姿は、神話に生きる荒野の支配者そのものだ。

「撃ち方止めるな！ 弾倉切れるまで撃て！」

指示と同時に狙撃を開始するが、ほんのわずか半人半馬の射る矢の方が速かった。これほどの速度だと言うのに射撃は正確で、わずかな小窓から覗く銃を射抜いた。

「くそつ 無事か！」

「何とか！ 別のヤツを！」

狙撃窓を閉め、急いで予備の銃器を取り出す。他の隊員も狙撃を続けるが、小さな窓からでは十分に狙いがつけられず、有効な攻撃ができていない。弾倉が尽きる直前で撃ち方を止め、狙撃窓を閉め、新しい弾倉を込めて再び狙撃する、この繰り返しだ。なかなか撃退できないまま市街を走行し続ける。

キュウン、キュウンとエネルギーを光線に変換する際に起きる発砲音と、外から射撃される矢が壁面に当たる音が絶え間なく車内に響き、遠距離の攻撃手段を持たない栗色の髪をした羽なしの女は焦る一方だった。どうしてこれしか使えないのか、と憎らしげに布に包まれた大きなそれを見て思った。

「前方に巨大な物体出現！ 緊急停車します！」

運転席からの報告に全員が攻撃を止めて狙撃窓を閉め、急減速に備えた。一気に減速し、静止するまでわずかに五つ数える程度だった。急停車の衝撃に耐え、車内の人間は再び戦闘態勢に入る。

「ケンタウロス、前方に4！ さらにその奥、あれは……」

四体の戦士を束ね、奥に佇む^{たたず}その威容。

白いたてがみを揺らし、蹄が地を掻きむしる。
^{いみな}嘶きが空気を揺らし周囲の者を威嚇する。

額に生える巨大な一本の角は天を突き、その荘厳さに見る者すべてが畏敬した。

圧倒的な威圧感を示すその巨大な馬は、眼光鋭く明らかに灰白色のビークルに対して敵意を示している。後方には敵がいなことを確認し、いつでも降りられるように積荷部の扉を開いた。

「各自フオートンボムを用意。デイ、指示と同時に前方に投げろ。それに続いて全員前方に一斉掃射。ケンタウロスは足を狙え。十数えたらライオスとヒューゴは俺に続いて飛べ。上と下からで一氣に片を付ける。ただ、空には氣をつけろよ」

隊長の指示に隊員全員が首肯する。それとほぼ同時に前方の巨大な一角馬が前足の蹄でもって地面を叩く。一際高く嘶くのと同時に半人半馬が弓矢を構えて走りだした。

「行け！」

号令と同時に隊員の一人が爆弾を投げる。そして掃射が始まった。爆弾そのものは命中しなかったが、半人半馬は弓矢の構えを解き、防御の姿勢を取った。一体、防御が間に合わなかった物があり、爆弾の衝撃波に姿勢を大きく崩されたそれは掃射を受けて散っていった。

残った三体のうち二体が盾を構えたまま接近してくる。おそらく接近戦の方に分があると踏んだのだろう。三人の羽ありが空を舞い、上空から掃射を始めた。地上に残った隊員の一人が半人半馬の足元に転がりこむように、フオートンボムをアンダースローで投げる。狙い澄ましたかのように真下で炸裂し、さらに一体を撃破。さらに一体も上空と地上からの攻撃を集中して受け、消えていった。しかし残った一体が急加速して突っこんでくる。狙撃のダメージを度外視し、蹴散らすつもりようだ。

槍を構え、接近と同時に横に振り払う。体格差から見ても明らかに

に分の悪い羽あり達は上空に逃れ、上から銃撃を続けた。散開し多方向から狙い撃つが、一所にとどまらず馬の脚力を生かして走り回る相手に対して上手くダメージを与えられないでいた。次々と弾倉が空になっていく。その奥に控える巨大な一角獣がいつ痺れを切らして攻め込んでくるか分からない状況にも焦りが募る。

上空を警戒しながら徘徊する半人半馬が停車中のビークルに近づいた時、それは起きた。突然前肢が二本とも切り飛ばされ、前方につんのめる。両手を着いて体を起こそうとしたがそのまま背後から袈裟切りにされ、首をはねられた。

静寂の中、声が響く。

「……生き物じゃないのよね？」

活動を停止し、空気に溶けていくその背部に立つ一人の女。

その背中には羽は無く、肩に丁度届くくらいの長さの栗色の髪が風になびく。

右肩に長大な柄を持ち銀色に輝く三日月状の巨大な刃を担いでいた。

縁の輝きが一際強いその刃から、絶え間なく回転音が聞こえてくる。

「やっとあたしの出番ね！ あの節操無しの作った武器だって言うからちよつと不本意だけど、こう言うのがやっぱりあたし向き！……さーて、ちよーつとイライラしてるから手加減なんてできないわよ？ ずいぶんきれいなお馬さんだけど、可愛い弟がお姉さんの来るのを待ってるんだから。……どいてちよーうだいね？」

饒舌におどけたような口調とは裏腹に、彼女の視線が前方の巨軀を鋭く射抜く。

長大で重量のあるアームズを右腕一本で振り回し、両手に持つのと同時に一角獣に向かって走り出した。

第三十五羽 「荒野の王者」（後書き）

「いきなり何だよこの展開」

ええ、そう仰られるのも無理はありません。れいちえるが張っていた伏線が密か過ぎて、あまりにも超展開に見えてしまったことかと思います。と言う事でここでサブストーリーを……

あとがき挿話 「強いね！ エディ姉さん」

「痛たたたた……」

「ん？ おい、どうした」

「いやまたちよつと」

ふう、と短い髪の体格の良い羽なしの男が呆れたような顔で見る。黒髪の羽ありは左手で鼻を、右手で翼をさすっている。またむしられたようだ。

「飛び立つ寸前に足をつかまれて、びたーんっ！ だもん。受け身もとれないわ…… くっそー」

「いや、またお前が何かしたんだろ？ いい加減やめとけって言ってるだろ？」

「でもでも！ 面白いんだって！ かわいいんだって！ これくらの被害を覚悟でチョッカイ出したくなるんだって！」

頭が良いはずなのに、どうにもそうは感じさせない性格の彼女に、もう一度呆れたようなため息が出る。

「それにしても、ホント容赦ないわ。あの子につかまると逃げられないし、ある意味こっちも命がけの遊びよねー。でもあの子、ホントきれいな顔して性格もメンタルも強いっていうかキツイって言うか」

「エディは強いぞ」

「まあステイナさんの子だしね、芯も通ってて、凜とした感じはホント強い女性って感じ」

「いや、そんな気質じゃなくて、純粹に」

黒髪の羽ありは彼の言葉をいまいち把握できないようで、首をかしげた。その様子を見て彼はもう一度端的に言った。

「強いんだよ、腕力が。だれも勝てない。子供のころから年上の男子を泣かせてきた。ウィン絡みが多かったような気がするが……やりあったら俺だってわからんぞ」

思い返せば思い当たる。授業中にふざけて逃走した自分を拘束した後、肩に担いで平然と講堂に戻っていった。持つて行った大量の教材のほとんどを顔色一つ変えずに持ち、そして結構な速力で追いかけてきた。

「……こ、これからは怒らせないようにする。羽ありは羽なしに勝てないもの……」

同じ羽なしでも怪しいけどな、と言う余計な一言が妹の耳に入っていたと気が付いたのは、次の日のことだった。

―その他証言―

一人目：金髪の羽なしのAさん（去年の地姫^{つちひめ}）「まったく！ あの女のバカぢからはハンパないわ！ 腕をつかまれて握られたらほら！ 痣になっちゃったわよ！（音声は変えてあります）」

二人目：羽なし女性Sさん（年齢不詳）「そーねえ、あの娘いつもあの子のことになると大変って言うか。前の冬も弟がデートに行くのを邪魔するためだけにドアも壊して出て行っちゃうし。最近じゃもう私の力で抑えても巧く逃げ出しちゃうのよ。もう年かしら（音声は変えてありm（ry）」

三人目：少年W（17才）「ええ、いつも驚きます。前も全く身動きできませんでした。体を後ろからホルドされたかと思っただけのまま振り回されてベッドの上に放り投げられて。僕の抵抗も虚しく…… あ、いえ！ 僕達そう言う関係じゃなくてですね！ いえ、だからそうじゃ（音（ry）」

……

描写の量が微妙すぎる……。気付けと言う方が無理ですか。それではこれからもよろしくお願いいたします。

第三十六羽 「疾風の騎士」

栗色の髪をした羽なしの娘が、長大で重量のある白兵戦用アームズを下す。肩で息をして、額にはうっすらと汗がにじむ。

「術者三名、確保しました！ 二名は逃走、現在ライオスとヒューゴが追撃しています！」

「魔道書は？」

「三冊確保。それぞれが捕虜の所有していたものです。ユニコーン1、ケンタウロス2」

「……起動はできるか？」

「いえ、現在ロックがかかっているのか、それとも形成したフィールドを破壊したためか不明ですが、操作不能です。蓄積エネルギーが乏しい可能性もあります」

「了解した。よし、貴重な資料の確保も出来た。引き続きこの先の中継基地の制圧任務に取り掛かる。ライオスとヒューゴに連絡。後五分で捕えられなかった場合は帰投すること。両名の帰投と共に本隊も再進行する！ 気を引き締めなおせ！」

隊長の宣言が終わると、羽なしの娘は再び彼女には全く不釣り合いな長大なアームズを片手で持ち上げ、その肩に担ぎなおした。彼女に屠られ、その巨躯を横たえていた一角獣もゆっくりと大気に溶けていき、その存在が幻想であつたように完全に四散してしまった。だがしかし周囲の家屋の損壊は著しく、大地にも数多くの大穴が開けられ、無数の巨大な蹄の痕が残されている。たとえその主が実体のないモノだったとしても、目にした者達の心の底には強大な存在感を残し、今まで感じたことの無い脅威を植え付けたことは間違いない。

合流ポイントに最後にやってきたのは二機のゴーレムだった。殿^{しんがり}を務め、追撃を退けていた巨人はここでも役目は変わらず、この先の基地へ向かうのは武装した羽ありの兵士達と、羽なし用に開発された新型アームズを携える三人の兄弟。お互いの無事に安堵^{へいたん}していただける時間は短く、すぐに次の作戦についての説明を受ける。兵站部も今現在こちらに向かっているが到着したチームのすべてが補給を受ける必要はなく、反撃の態勢を整わせる間を与えず速攻をかけた方が得策と判断された。それぞれの役割を確認すると全員が持ち場につき出撃の合図を待つ。

この地に作られた基地は要塞ではなく、交通の要所である地の利を生かした兵站基地だった。周辺地域で収穫された作物や生産された建築材を集め、周囲の制圧地域に送り勢力を拡大する。当然司令部と思われるゴンドワナ落着地点も目と鼻の先であり、ここを制圧することはゴンドワナに対するプレッシャーを与えるためにも非常に重要な作戦であった。

しかし当然ゴンドワナにとっても要所であるこの基地を放棄することなどあるはずがなく、十分な防御布陣が成されていることも予想されている。本来なら空からの急襲も考えるところではあるが、未知の攻撃手段を持つ幻獣が存在するために空軍の出撃は控えられていた。ロディニア司令部がゴーレム部隊の動員にも慎重を要すると判断したことから十分に兵装した地上部隊を主軸に今回の作戦が行われている。

ぴぴぴつ、と手元から電子音が鳴った。それと同時にスレイプニルをはじめとして銀色に光るビークルが何台も出撃する。スレイプニルの速度は群を抜いており、一気に加速して基地周囲の防御壁に迫った。当然ゴンドワナ基地も無抵抗であるわけではない。幻獣を操る魔道書が彼らの主力兵器であるのに変わりはないが、防壁にはミスリル製の銃火器も備えられていて射撃がはじめられた。だが打ち方が始まってすぐに防壁は爆撃を受け、崩れ落ちた。プラズマキヤノン、グングニルによる遠距離からの砲撃だ。一撃だけではなく第二撃、第三撃と続く。次々に着弾し、防壁を何ヶ所も破壊する。

「やっぱりウインには撃たせない方が良い。確かに羽なし用だな」

短髪でたくましい体つきをした羽なしの青年が砲座で呟き、援護射撃を続ける。本隊が十分に侵入できるだけの穴を作成した後は、基地内の比較的建築物の少ないところを狙って砲撃を行った。片羽の少年が撃った時とは異なりある程度連射が利くものの、やはり砲身が帯びる熱の問題と、そしてエネルギー残量の関係から本隊が基地に入り込むと同時に砲撃を止めた。

崩れ去った防御壁と敵軍基地から上がる煙を見、奥歯を噛み締める。トリガーに添えた手がわずかに震えていた。まだ戦闘が終わったわけではない。これから始まる。力を振るうと言うことが何を意味するのか。その片鱗を本当にごくわずかに実感した青年は、その光景を目に焼き付けるかのように瞬き一つしなかった。

迫撃砲を下し身軽になったスレイプニルは本来の速度を取り戻し、運転手の意思に答えるように迎撃をかわ躲して前進する。もともと砲座があった後部座席には巨大な三日月を担いだ羽なしの娘が座っている。先程とは異なり、風防用のゴーグルをしていた。高く聳え建つ

防壁が近づいても速度を落とさない。激突を承知しているように接近するその後方から一閃、光が来たかと思つた次の瞬間、防壁ははじけ飛んだ。そして二名を乗せた機体はそのまま欠損部に向かつて飛び込んだ。

敷地内に侵入した後、やや速度を落として走り回る。次第に基地内警備の幻獣が集まつてきた。飛び込む際に車両前方底部に装着させた障害物プロテクターも今は解除している。今回はジャンプ用スロープの替わりとして利用した。瓦礫がある中では非常に有用だが、平坦地では機体の性能を制限してしまう。先陣を切つて突入した彼らの役割は陽動。十分にひきつけ、しかも捕えられない距離を保つ。しかし今現在この機体には迎撃用の射撃用火器は備えられていない。時間と共に包囲する幻獣が増えていった。周囲が幻獣達の殺気に飲み込まれていく。

「……怖くないの？」

ややあつて片羽の少年が答える。

「怖いよ」

「……そうよね。でもね、あたしは怖くないよ。ううん、怖さよりもやってやる！　って気持ちがあるかな。だから……」

弟の運転と速度に慣れてきた羽なしの娘が後部座席から立ち上がり、長大なアームズを構えた。そして一つ大きく息をして、声を張り上げる。

「攻撃はお姉ちゃんに任せな！　あんたは絶対を守る。アースの民を馬鹿にしたことを後悔させてやろうじゃないの！」

その姿はまるで、馬に跨り鞍上で聖剣を構えた戦乙女のように
た。

第三十七羽 「幻想への進撃」

異形が群れを成していた。左手に武器を、右手に盾を持った後肢で直立するトカゲや仔牛ほどもあるつかと言う黒々とした毛をした犬や、肉の一片も付かない骨格のみの人間がわらわらと集まり、周囲には唸り声や威嚇音が響き渡っている。その中心には片羽の少年と、栗色の髪をした羽なしの娘が居た。

黒犬が飛びかかるとその体軀は空中で輪切りにされ、二つになったそれは大地に落ちると煙となって消えた。それを皮切りに、一斉に怪物達が襲いかかる。

「行くよ！」

「はいよ！」

手すりを掴む左手に力を込め、急発進に耐える。巨大な三日月を肩に担いだ羽なしの娘は、弟が操るミスリルの馬の鞍上から右手一本でその三日月を振るい、すれ違いざまに数頭の異形を薙ぎ払った。その一瞬の質量移動で重心がぶれるが片羽の少年は意に介さず運転を続ける。急激な重心変化による転倒はなく、その手綱捌きは実に見事だった。

飛びかかってくる異形を薙ぎ払い続ける銀塊が、速度を上げて異形の群れに突っ込む。相手の突然の突進にひるんだ異形達は、飛び退いたり転がったりして衝突を躲したが、いくつかはその回避が間に合わず跳ね飛ばされた。魔物の包囲網を強行突破し、今度は集まった魔物の群れの外周を時計回りに、速度を上げながら走らせる。近づく魔物はすべて後部座席の羽なしの娘が持つ三日月の餌食になっていた。

「ウイン、そろそろ行こ！ 全滅が目的じゃないわ！」
「うん！ 派手に暴れてどんどん集めよう！ エディ姉さん、つかまって！」

まるで皮むき器のように異形の塊を外周から削っていたスレイプニルはさらに速度を上げ、壊滅寸前の群れを置き去りにして走り去っていった。

— 37 —

銀色のビークルが全部で十二台、崩れた外壁から突入した。突入直後、他の物より二回りほど大きなトレーラー型のビークルの上部が開き、そこから円盤状の機械が射出された。

「ヘイムダル、発射成功。起動開始！」

「よし、一号から三号はヘイムダルの防衛に専念！ 当基地の統括部を早急に確定せよ！ 他のは前進し、中型が現れた場合は必ず二隊以上で応戦すること！ 小型は威嚇射撃程度で極力無視せよ！ 『馬』が引きつけているから少ないだろうが、まだまだ居るぞ！ キクロプス、ユニコーン級の巨大幻獣出現時は早急に報告せよ！ いいか、敵はタフだ！ 消耗戦覚悟でいろ、だがレーションまで使い切るなよ！」

「ハッハーっ！ 隊長、戦闘中に早弁するほど食い意地張った奴はいねえよ！ つまんねえジョークで気を削がんでくださいよ」
「よし、それじゃあベルムの分は俺達の方で分配しておく！ スモーク・サンドイルはヨハンとニベルとデイ、ポラーチーズは俺とサージ、ライオスがいたでいておく！ 安心しろ、カロリークラッカーは残しておいてやる。いいか、聞こえてるな、ヒューゴ！」

お前の好きなウイスキー、ボトルでおごつてやるから協力しろよ！」

「ひつでえ！ 俺の好物ばつかじゃねえか！」

「嫌だったらさっさと終わらせて、いの一番に確保しとけ！ 遅れたらクラッカーだけだ！」

「ウィルコ！（注：了解、実行する。の意。無線用語）」

十メートルほどの高度を保ち、ヘイムダルと呼称された円盤が回転している。その回転速度は一定していて、風鳴りにも似た穏やかな音を立てていた。円盤の起動とほぼ同時に内壁にこの基地の360度鳥瞰図が現れた。このトレーラー全体が巨大なモニターであるようだ。他にも内部にはいくつも小型モニターを備える装置が設置され、そのオペレーター役の羽ありが着席している。

「西、『馬』の戦闘を確認。多数の小型幻獣に取り囲まれています。

『月』によるアタックにより現在損耗確認されず」

「フィールド発生、全域にて確認。大型幻獣フィールド、現在発生認めません」

「……やはり小型を哨戒用として使っているな。大型は戦闘専用と考えていいだろう。あの規模の戦闘力だ、施設内では無許可の使用を控えるわな」

「施設全域に小隊と思しき熱源確認。およそ五名ずつ。馬に誘導され集まっています」

モニターをまじまじと見て隊長と呼ばれた羽ありが確信を得る。

「フィールドを発生源から切り離して固定すること自体が信じられんが、おそらく遠隔操縦もある程度の制限があるだろう。話によれば自律行動はできないと言っしな。術者が無くては機能せず。まさに手品か。ビネ女史も言いえて妙だ」

腕組みをしてモニターを見、報告を受けていた羽あり腕組みを解き、左手を腰に当て右腕を前方に出して全体に指示を飛ばす。

「司令部を特定し次第、突入！ 屋内戦では大型は出せない！ 速攻で決めるぞ！」

「サー・イエッサー！」

「特定急げ！ 新種的大型が出たら本部にまで辿り着けんかもしれん。反撃の隙を与えるな！」

はっ！ と言う短い返事と共にトレーラーの中でも慌ただしく装置の操作が始まった。

八台の車両が二列になって前進する。射撃窓は開け放たれ、そこから銃口が覗いている。すれ違う小型の幻獣に追撃させない程度に射撃を行いながら目的地を目指す。途中トレーラーからの指示で、東と北東の二手に分かれた。存在する人が多い施設が二棟あるそうだ。現在どちらが司令部なのか調査中とのこと。少しでも早く制圧を開始するために、戦力を分散することにしたようだ。

「幻獣フィールド発生を確認！ 左翼部隊方面です！」

トレーラーからの報告を受けた北東に向かう分隊に緊張が走る。わずかの後に、行く手を遮るように一頭の獣がその身を起こした。

その姿は巨大な犬だった。

鋭利な牙は剥かれ、鼻先と視線には圧倒的な敵意が漲る。

地の底から響くかのような低い唸りを生み出すそれは、地獄を守護する三つ首の魔犬。

その六つの瞳には燃え盛る炎が宿され、三つの口からそれぞれ大きな咆哮があがった。

その咆哮に応えるように、仔牛ほどもあろうかと言う黒い毛並みの犬が何頭も集まってきた。行く手を完全に塞がれた分隊は停車し、大型幻獣出現の報告と同時に応戦の構えを見せた。黒犬が遠吠えをあげると同時に車両に向かって襲いかかり、乗車していた羽あり達は射撃で迎え撃つ。しばらくその状態が続いていたが、先頭から二番目の車両の屋根が開き砲台が現れた。そして同時に正面の魔犬に向かって一撃を発射する。命中した砲弾が炸裂して発生した衝撃波が周囲の黒犬の動きを一瞬止め、湧きあがった爆炎が魔犬の視界を奪ったその隙を見逃さず、先頭車両が急発進し全速力で魔犬の脇をすり抜けていく。それを援護するようにもう一発砲撃が行われた。味方車両と幻獣を後ろに置き去りにして、先頭を切っていた車両は目的地に向かって走っていった。

風に煙が払われていく。そしてその煙の奥から怒りの炎に満ちた六つの瞳が現れた。その砲弾を正面からまともに受けたにも関わらず、大したダメージを受けているように見えない。通過した車両を追うことなく、正面に残る三台に対して明らかに敵意を向けていた。

「各車両に通達。作戦デルタ、大型と小型の混成部隊遭遇時における作戦を実行。各人、被害を最小限に努めよ」

指示と同時に後部扉が開き、乗り込んでいた武装した羽ありが外に飛び出し空中から黒犬に対して掃射を始めた。飛び出したのは全部で十六人。黒犬を駆逐するのに十人が、残りの六人が魔犬に向か

って攻撃を始めた。掃射によって何頭か黒犬が撃破されていったが、魔犬は全く動じる気配がない。しばらくすると黒犬が車両から距離を取り、物陰に潜んでいく。不審に思った一人が魔犬の方を見ると、口元の大気が歪んでいることに気が付いた。

「おいおい、まさか……」

大急ぎで車両を出すように、車外の味方の羽あり達に魔犬の口から急いで離れるようにと大声で指示を出す。直後、中央の口から火炎が吹き出し、正面の物すべてが業火に飲み込まれた。

第三十八羽 「砦の守護者」

「トリラムが攻撃されている？」

執務机に向かつていた白い顎鬚を蓄えた老羽ありが聞き返した。報告に来た若い羽ありの下士官が短く返事をする。一旦手を休め、椅子を引いて立ち上がり窓の方へと歩いて行った。

「ロディニアもなかなか行動が早い。トリラムからか。落とされると厄介じゃのう」

眼下に広がる大地を歩いている人の姿が小さく目に入る。それを見て老人はやや満足気に口元を緩めた。本来警戒するべき報告の後で見せた不謹慎とも言えるその表情は、この者が軍の高官でなければ処罰の対象でもある。

「いやのう、ようやく元に戻り始めたと思うての」

幾分か上機嫌の老人が、訝しんでいた若い羽ありに答えた。初めに占拠したこの地を本拠地として彼らは行動していた。以前は急ごしらえの避難用緊急家屋をいくつも連絡し合った平屋造りの集合住宅のような物が彼らの本部であった。この建築物は完成してまだ日が浅い。だが設備の導入は順調であり、それが済んでしまえばさえずれば新たななる中枢として機能する。そして上空から大地を見下ろすことが出来るこの塔は、以前彼らが暮らしていた浮き島からの光景をわずかにだが思い出させた。

「して、状況は？」

士官の若者は本来の厳しい顔つきに戻った老将校に報告を続けた。

「高機動戦車二個小隊と虎の子の人型兵器二機か。この後大隊で押し寄せるつもりじゃろう。あの人型はそれだけで相当な戦力。まあ乗り手にも因るじゃろうが。ユニコーンはどうじゃった？ この数を相手にするにはちいと力不足じゃろうが」

「そ、それが…… 一個小隊に敗れたと報告が。そして魔道書が拿捕されたとのことです」

老人の顔つきが一気に険しくなる。それを見た下士官は自分の事ではなくとも極めて強い恐れを感じた。この老人の命令を遂行できず、失敗を犯した将校が何人も厳罰を受けてきたことは、この国の軍部に属する者であれば誰もが知っている。たとえ自分が犯した失態でなかったとしても、怒りの矛先が自分の方に向く可能性があった。だが予想に反し、老人はため息を一つ吐くと表情を戻し、再び窓の方を見た。

「ふん、まあよい。使えん駒はこちらに回さんだけじゃ。どうせ奴らには扱えまい。……で、基地はどうなっておる」

胸を撫で下ろす間もなく下士官は報告を続けた。

「げ、現在外壁を遠距離射撃によって破壊され、戦車十二台およびデータに無い特殊車両の突入を許しています。小型幻獣部隊は特殊車両と応戦中。人型は今のところ基地内に入っていないません」

「人型で大型幻獣をけん制し、その間に精鋭部隊で速攻をかけ基地司令部を押さえる気じゃな。先に基地内で人型が暴ればこちらに出る損害を甚大にできると言うのに…… エミリオも甘いわ。じゃが、それが間違いよ。何のために小僧にアレを持たせたか、その意味を恐怖と共に知るとよからうて」

薄ら笑いを浮かべながら白い顎鬚を撫でた後、余裕を見せつけるかのようにゆったりとした歩調で窓から離れ、進路を譲った下士官の隣を通過する。扉を開き振り返ることなく部屋の外に出る。

「さて、また催促に行くとするかの。『プロジェクト・ワイルドハント』の約束の期日まで、もう少しじゃでな」

すでにいくつもの策を練り終えた老人は、仕上げとなる鍵を得るために、ある場所へと向かっていった。

— 38 —

「左翼、被害不明！ 九から十一号まで応答取れません！」

「くつ、司令部の割り出し、急げ！」

彼らの誇るゴーレムと並ぶであろう敵方の大型幻獣の戦闘力に皆が戦慄を覚えた。トレーラー内は一瞬騒然としたが、指揮官の一喝ですぐに皆冷静を取り戻した。戦況は刻々と進行し、わずかにも気を緩められない。

「八号、現在北東施設に接近。41秒で到着します！」

「四から七号、東部施設に到着、制圧を開始！」

「東部施設内、小型幻獣フィールド少数確認！ 警戒されたし！」

現況報告が飛び交う。それに対し指揮官からの指示が出、オペレーターがそれを各隊に伝達していく。直接の戦闘が行われているわけではないが、このトレーラー内も戦場さながらの喧騒だ。もしもこの指揮系統に乱れが生ずれば部隊は容易に混乱し機能をなさなくなるだろう。このゴンドワナの基地にも同じことが言える。殲滅ではなく頭部の制圧こそが最優先だ。

「……出ました！ 司令部は北東施設！」

今まで不明だった頭部を確定したことでロディニア側が大きな動きに出た。大型幻獣の脅威を目の当たりにし、戦闘が長期化すれば確実に不利であることが明白となった以上、もとの作戦通り速攻を仕掛ける他に良策は無い。

「六号と七号をすぐに送れ！ 残りは施設制圧を続行！ 左翼部隊の被害把握は？」

「九号、大破！ 十号、中破！ 走行可能ですが、兵装に障害があります！ 十一号小破、稼働に問題ありません！」

「ケルベロス移動開始、北東施設に向かっていきます！ 左翼部隊負傷者多数、ヘルハウンドに囲まれ応戦中！」

「負傷者を保護し、撤退を指示しろ！ 急いでゴーレムを回せ！ 屋外の敵はゴーレムに任せて施設の制圧を最優先だ！」

戦況が動き出す。巨人の動員を即決し相手にプレッシャーを与え、そして少しでも味方にかかる負担を減らして勝率を上げる。だがゴンドワナも良いようにやられるはずがない。現場ではさらなる混沌の渦が巻き起こり始めていた。

「八号車、制圧開始！ ケルベロス急速接近！ 警戒せ…… い、

いえケルベロス、ロスト！」

「何？ 消えた？」

「はい、突然……」

「『馬』か？」

「いえ、『馬』は現在北部にて交戦中です。撃破ではありません！」

撃破ではない以上必ずどこかに潜んでいると考えられた。あの巨大な体ゆえ司令部の中に入ってしまった分隊をこれ以上追撃できないと判断したとしても、増援の阻止や退路の遮断と言った役割は大きく、魔犬を消す意味などない。だと言うのに巨大な地獄の門番は姿を消した。その脅威を目にすることは無くなったが、目に映らないその禍々しき巨躯が心の底に大きな不安の影を落とす。

「……六号、七号に通達。大型幻獣が司令部付近に潜伏。警戒を怠るな」

警告を伝えたのは良いが魔犬に対しては全くの無策とも言えるこの現状に、指揮官の羽ありの握り拳に力が入る。現在有効と考えられる対抗手段はゴーレムのみであろう。前線へと向かう巨人は、翼を持たないタイプ・ギガンテ。移動速度は決して速くなく、搭載したスラスターによるホバリング移動を駆使しても到着までに時間がかかる。それまでに魔犬による被害が拡大しないことを祈るばかりだった。

北東施設に到着した装甲車から武装した八人の羽ありが飛び降りた。全員が銃器を構え、二人が後方を警戒しつつ潜入する。侵入した施設内には赤い警告灯が明滅していた。赤く照らし出された屋内には緊張感が満ちていたが、妙な静けさが漂い違和感があった。素早い行動で深部へと向かうが、警邏用の幻獣にも遭遇しない。しかし隊員は全員警戒を解くことなく、むしろより強く押し寄せるただ

ならぬ不安を前に緊張を強めていった。

そのような張りつめた空気の中、彼らの後ろから笑い声が響く。
殿しんがりの隊員の銃口が後方を捉えるがそこには誰も居ない。

「『幻獣はおるか、防衛部隊すら姿を見せない。誘導されているのか？ まさか罠が……』 そう思ってるだろう？ ばつかじゃねえ？ お前ら生身を相手に罠なんか必要ねえよ。何人も魔道士を置いておく必要もねえ。この司令部の警備は俺一人で十分ってことよ」

人を見下した調子の、若い男の声だった。先程曲がつてきた通路の角に、赤い警告灯の明かりに人影が映し出された。その影には羽はなかった。影だけを見ても屈強な姿を想像させる。だが、「人」と言うにはおかしい陰影。そしてその角から姿を現した。

全身を銀灰色の被毛で覆われた筋肉質な肉体。

長い吻部に深く切れ込んだ口唇の奥に隠された輝く牙。

逞しい四肢の先には研ぎ澄まされた長い爪が備えられ、耳は頭部の高い位置にあり鋭く尖る。

猛獣独特の唸り声がその喉の奥から響いていた。

それは人の形を成した、古くから人々の傍に在った山林の神。

「お、狼男?!」

「はっ、無粋だな…… 格調高くライカンスロープ、またはワー・ウルフって呼べよなっ」

その声と同時に、獣人が駆け出し部隊に襲いかかる。羽あり達はわずかに遅れて射撃を始めた。確かに光線は標的を射抜いているが、

そんなことに構わず獣人は突進してくる。跳躍と同時に体をひねって右後肢で強烈な蹴りを浴びせてきた。最後尾にいた隊員はとつさに銃器を盾にしてそれを受けたが、その銃器は簡単に損壊され、蹴りの勢いを殺しきることが出来ずそのまま吹き飛ばされた。彼の後ろに立つ隊員が三人巻き添えを食らい、通路に転がされてしまった。獣人は低い唸り声を立てたまま、蹴り飛ばした隊員の隣の者に左腕で裏拳をみまう。腕で防いだがまたしても簡単に防御を崩され、飛ばされた。側壁にぶつかり、跳ね返ってきたところを転ばされ、肉球のついた脚で頭を踏みつけられる。

「小型だから雑魚とでも思ったか？ このワー・ウルフを舐めんじやねえよ。この状態で中級書の最上位クラスなんだぜ？ それこそ街の最終防衛ラインに置いてたユニコーン並さ。戦い方次第じゃあよっぽど戦略的だ。羽ありがどれだけ武装したところで勝てるわけないだろ！」

声の主はこの獣人ではなかった。銀に輝く書を携えた羽ありが通路の奥から姿を見せる。にやにやと見下した表情をしたその男は見た目まだ二十代の若い男だった。特に文言を唱えるわけではなかったが、獣人の傷が無くなっていく。

「見るよ、この再生力。そしてパワー、スピード。大昔から人間が恐れてきた魔獣そのものだ。それにな」

書物の頁をめくって手を当て文言を唱えると、彼の目の前に立っていた大柄の獣人に変化が現れ、少しずつ小さくなって狼に変化した。一つ遠吠えをしたかと思うと同時に跳躍し、側壁、天井を蹴って侵入部隊の真後ろに回った。振り向く間もなく、残った三名はそれぞれ翼、腕、足を切り裂かれて倒された。

「別に人型の形態をとることもない。パワーに劣って攻撃手段が咬みつきくらいになっちまうが、こっちも速くて厄介だろ？」

獣の唸り声に混ざって負傷した人間のうめき声が屋内に響く。侵入者を物ともせず駆逐した羽ありの男性は満足気に雄弁に語る。

「中でも外でも、俺にかなう奴なんていない。じじいくらいさ。この完成した特殊魔道書でこれから手前らを散々弄^{なぶ}ってやるからな。いい気になってたことを後悔していくといいさ。はっはっは」

口調は満足気であつたが、まだ物足りないと言った感じもつかげる。それに同調するように、流れる血が足りないと言わんばかりに、再び人の姿を成した狼からまた一つ遠吠えが上がった。

第三十九羽 「人の力」

遠くで火柱が上がった。その業火は天を焼き、黒煙が周囲を包む。その光景にわずかに遅れ、爆音が二人のもとに届いた。

「ちょっとウイン、何よあれ！」

「わからない、でもジユド兄さんじゃないよ！ 何かすごく悪い予感がする……」

北東の方角で生まれた地獄の業火を目にしたスレイプニルに乗った二人に戦慄が走った。彼らの周囲には人間くらいのサイズをした数多の小型の異形が地に横たわり、霞のように風に溶けている。

「行こう、エディ姉さん」

「そうね、十分役目も果たしたでしょ！」

砂煙を巻き上げ二人はその場を急速に離れていく。集まっていた銀の書を手にした羽あり達が、銀の小型車両とその乗り手が残したその惨状を遠巻きにして無力に打ちひしがれていた。

— 39 —

「司令部潜入部隊、信号途絶！」

「何だと?!」

「幻獣フィールド確認数、1！ 小型です！」

司令トレーラー内が再び騒然とする。この兵站基地の司令部が割り出され、精鋭部隊による制圧が始まって数分と経っていない。くそっ、という罵声と同時に指揮官がテーブルを拳で叩く。あまりにも早い全滅の報告は敵方の戦力の強大さ、そして幻獣の底の知れなさを皆に瞬時に刷り込ませた。

「六号と七号はまだか？ 増員を急げ！」

「北東施設周辺、大型幻獣フィールド確認、キクロプス4！」

「増援の妨害か！ 六号、七号は待機！ ゴーレムをそっちに回せ！ ヘイムダル一時回収、左翼部隊の救援には我々が向かう！」

上空で静止し緩やかに回転していた円盤が、トレーラーの開かれた上部ハッチに回収されていく。回収しハッチを閉じると、隊列を組み直して四台の車両は北東施設方面に向けて発進した。大型トレーラーの正面と左右を挟むように高機動戦車が配置され、攻撃に備える。四台の車両が立ち去った直後、巨大な人影が外壁を乗り越えて現れた。ロディニアのミスリルゴーレムが到着したのだ。だがゴーレムは先行した四台を追わず、別のルートで司令部に向かう。割り出された最短ルートをすでに受信済みであるためだ。戦局が大きく動き出し、さらなる混沌が生まれようとしていた。

魔犬の業火に包まれた場所は今もなお小さな炎が周辺に咲いていた。大破した先頭車両は放棄し、負傷者を二番目の車両に乗せる。その作業も彼らを取り巻く仔牛ほどもあるうかと言う黒い毛並みの犬達に阻まれ、思うように進まない。さらに彼らの頭上には醜く歪んだ人間の顔を持つ巨大な怪鳥が集まり、げたげたと大きく気味の悪い笑い声をあげていた。禿鷹のように傷ついて弱った獲物を狙っているかのような。銃器で犬と鳥をけん制しながら一刻も早い脱出を目指す。しかし時を追うごとに少しずつ集まってくる小型の幻獣

は数を増していく。小型と言え、明らかに人間よりも力があり、猛なそれらが一斉に襲い掛かれれば、負傷者を抱える部隊など一網打尽にできてしまうことは火を見るよりも明らか。隊員達の絶望が深くなつていく。しかし諦めることなく救護を続けた。

しばらくすると攻撃の手が止み、彼らを取り囲む黒犬の輪の一部が欠けた。車外の隊員達の注意は当然そこに向けられる。その奥から現れたのは人影だった。しかも美しい女性。髪が長く、妖艶な上半身が目惹いた。だがその背中には羽は無かった。羽ありの国の砦の中で、羽ありが従える幻獣の群れが羽なしに道を譲るなど考えられない。疑問が浮かぶと同時に、隊員達は全員息を呑んだ。

美しい女性の姿に反した下半身のその異形。

人の身をもたげ、鱗をくねらせ大地を滑る。

それが紡ぐ言葉は妙に音色がよく、耳にした者の心を甘く捕えた。薄く、だが形の良いその唇の奥には鋭い牙が見え、奥底に持つ敵意を映し出す。

かつて人の身でありながら、神に愛されたがゆえ呪われた禍々しき蛇。

黒犬が道を譲り平伏^{ひれふ}していることから、おそらくこの蛇はこの場に居る幻獣の中で最も位が上だと考えられた。大型の蛇は鹿をも容易に絞め殺す。人の姿を持つとはいえ、その下半身は彼らが知る大蛇のそれをはるかに上回り、上半身も片手に剣を有して危険度は極めて高いと察せられた。現状ですでに数においても不利であるうえ、さらに上位の幻獣の出現は隊員全員の焦燥感を煽る。

事態の収束は見込めず、これまでかと思われたその時、幻獣の群れに乱れが生じた。黒犬の隊列が後方から崩され、両断され空に溶けていく怪物の半身が降ってきた。新たに現れた半人半蛇もそちら

に意識を取られる。

「きつとここよ！」

「怪我人がいるかも！ 突っ切るよ！」

「アイサー！」

妙にテンションが上がった女の声が響く。それとほぼ同時に黒い輪を突き抜け、銀塊が現れた。滑らせた後輪に巻き上げられた砂塵が風に流され、輪の中心に広がる空間に三日月が輝く。風防のためにかかけられていた四角いレンズのゴーグルを額に上げて、後部座席の羽なしが立ち上がった。

「おーおー、居るねエ。命知らずのお客さんが一杯一杯！」

「ね、姉さん、何かおかしいから……」

「見渡す限り犬、犬、犬！ よくもまあこんなに集まったものね！ 犬が嫌いになりそうよ。しかもデカいっ なにこれ！」

「……」

愛想笑いをしている片羽の少年の笑顔は引きつり、もはや彼女の印象が丸崩れになるのを諦めたようだった。後部で相変わらず騒いでいる栗色の髪をした羽なしの娘を適当に相手しながら、同じ隊の仲間に声をかける。

「幻獣は僕達が相手をします。急いで避難の準備をしてくださわつ！」

「うわっ、ウインは見ちゃダメ！ 目つむって！」

「見なきゃ運転できないよ！」

「心！ 心の目！ ウインはミスリルの声が聞こえるんでしょ？ 大丈夫よ！ 見てなくてもいけるわ！」

「無理！ 無理だって！ 姉さん、手離して！ 一体何なんだって

ば！」

「いーの！ 見なくていーの！」

「や、でも離してよ！ 離さないと姉さんも攻撃できないよ！」

「ダメ！ 絶対！」

呆れた片羽の少年は諦め、再びスレイプニルのアクセルを開放する。

「とりあえず行きます！ エディ姉さん、フォローしてよ！」

隊員に声をかけると目隠しをされたまま正面に向かって突進した。全速力であればもし小型の幻獣に衝突しても転倒したり弾かれたりすることはない、ここまでの経験で悟ったことからくる行動だった。万一本当に姉が目隠しをし続けたとしてもこれならばまず問題ないだろうと判断している。両手で目隠しをしていた栗色の髪をした羽なしの娘もいざ出発するとすぐに弟の目を押さえていた両手を離し、傍らに置いていた三日月を持ち上げ右肩に担いだ。左手でゴーグルを再び目の位置に下して、手綱のような手すりを掴み、正面を見据える。視界を取り戻した片羽の少年は彼らを取り囲む群れの内周を描くように銀の馬を走らせた。それと同時に羽なしの娘が持つ三日月が光の軌跡を残す。一振りで何体もの小型幻獣を屠り、そのアームズの強力さとそれを扱う彼女の卓越した腕力を見せつけた。本来の軍人ではない二人の活躍に引け目を感じながらも、羽ありの兵士達は負傷者の救助と撤退準備を整えていく。

銀の馬が駆け巡る中、一個の幻獣がその道を塞いだ。まだ距離があるがその幻獣が動いた。どずん、と重量のある一撃が車体の左側から響く。

「ぐっ！ よいっしょおっ！」

後部に立つ羽なしの娘が手にしたアームズの柄つかでその一撃を受け止め、上方に逸らした。直撃ではなかったがその衝撃にさすがの銀の馬もバランスを崩し、あわや転倒となるどころだったが、運転手が何とか姿勢を保ち後輪が多少滑った程度で収まった。そのまま正面に立った幻獣の横をすり抜け走り去る。

「何よあの尻尾！ アレやばいわよ！ 力が尋常じゃない！」

受け流した後部座席の娘が右手首を振りながら叫び、すれ違った半人半蛇の方に振り返った。そしてぎよつとした後、運転手の肩にしがみつく。

「ぎゃー！ キモい！ 何アレ！ 速いし！」

「姉さん、危ないって！ どうしたの？」

尋ねてもあうあうと唇が動くだけで上手く言葉にできないように、ただ後ろを指さすだけだった。少年がミラーで後方を確認すると、人の身を起こしたまま蛇の部分を巧みにくねらせて、想像以上の速度で静かに二人を追いかけてくる異形の姿が目に入った。

「……姉さんって、蛇苦手だったけ？」

今までそんなことを聞いたことが無かったが、この異常な嫌がりようを目にするとそうとしか言えなかった。うんうんと激しく首が縦に振られる。

「でもアグロアナヘビの蒲焼き好きでしょ？」

「食べ物と違うし！ あんなデカいの見たことないし！ あんな動きで迫られたことないし！ きゃー！ 来た！ 来たーっ！」

片羽の少年は後部座席で叫び続ける姉に対し失笑してしまった。

必死な顔で、何で笑うの！ と叱責され、謝った後に表情を戻した。だがしかし姉が忌み嫌うからと言ってこのまま距離を保って走り続けるわけにもいかない。または完全に振り切ってしまうこともできない。おそらくある程度の速度で走っていれば先程のような尾の一撃は繰り出せないだろう。速度を落とし近距離戦に持ち込むことに話がまとまり、実行に移ったが二人が速度を落とすのに合わせて蛇もその速度を落とし始めた。止まってしまうかと思われた直後、蛇の部分を一気に収縮させ、そしてその巨体からは想像もつかない行動に出た。

長い体が宙高く舞い、銀の馬の頭上を通り越す。進行方向に着地し相對する。その見事な跳躍に息を呑んだ片羽の少年はスレイプニルの速度をさらに落とし、次の行動を警戒して停止させた。尾の一撃の射程からは十分に距離を置いている。その時少年は初めて敵である半人半蛇の姿をよくみた。その美しい人の部分に目を奪われる肌を覆う生地が少ない衣服がその妖艶な女性の体つきをさらに強調している。頬を染め、魅入ってしまいかけていたが、ごちん、と頭に衝撃を受けて正氣に戻った。むっとした表情で姉が睨んでいる。

「……で、さつき目隠しをした、と」

「戦争の最中よ！ 油断しないの！ それだけ！」

ツーンとした態度をとってはいたが彼女の真意は明らかに別にあった。

すぐに正面の敵に集中を戻す。美しいが鋭いその両瞳が一層冷たい光を放つと同時に、筋肉の塊である蛇が獲物を捕らえる如く、たゆませていた下半身を一気に伸ばす。右手に構えていた剣を左から右へと振り抜いた。羽なしの娘がとつさに三日月状の刀身部で受け止めたが勢いを殺しきれない。そのまま押し倒され、銀の馬から落とされてしまった。

「滅茶苦茶速い！ ダメ、ウィン走り続けて！」

「だけど！ 早く乗って！」

「いいから行きなさい！ 逃げろってわけじゃないよ、一緒に戦って！」

あれほどの速度と力を誇る蛇を相手に、姉を大地に一人置いていくことに不安を消せるはずがない。しかし姉の強い語気と態度を信じ、走らせた。

先程の跳躍や突進からは想像できないほど緩やかに蛇が大地に残された娘に迫る。

「まったく、こっちはほりまみれの泥まみれだったのに…… きれいなまんまでホントにイヤミね」

立ち上がって尻に着いた砂をぱんぱんと払い、ゴーグルを外して首にかけ、腰に手を当てて睨みつける。体を起こした半人半蛇の顔は羽なしの娘よりも遥か高い位置にある。自然と見下されるような形になるが、それよりも無表情に冷たく蔑視をくれることの方に腹が立ったのだろう。

「何か言ってみなさいよ、この蛇女ア！」

同時に三日月を振るう。幻獣も無表情のまま手にした剣で防御したが弾かれた。人間部分の単純な力では羽なしの娘の方が強いようだが、問題は蛇の部分。この巨体を支えるだけでなく自在に跳躍したり高速で走行したりと有する力は想像を超える。これに捕まれば抵抗を許すことなく絞め殺されることは確実だった。お互いに必殺の力があるが、優位にあるのは明らかに蛇の方。

するりと羽なしの娘の脚元に尾が伸びるが、それに気付いた娘は

アームズの長い柄^{つか}を地に突き、それを支えとして跳躍して蛇の頭部に渾身の蹴りを見舞った。ぐらりと上体をよろめかせたところに、着地した娘はすかさずもう一撃蹴りを腹に向かって放つ。剣を持たない腕でそれを防いだ蛇は上半身をとぐろの中心に引き込んだ。この渦の中に入り込むことは死を意味すると容易に理解され、羽なしの娘も距離をとった。

上半身は位置を変えなかったが、その太い蛇の尾で打ち付ける。太く素早い鞭が連続して襲い掛かる。一度防いだ経験からまともに受けると危険と判断した羽なしの娘は、しゃがんだり横に飛んだりして躲し続けたが、いつまでも続けられるとは思えなかった。いずれ窮地に立たされるだろうと誰が見ても明らかとなったその時、突然蛇がとぐろを崩し、盾を作るように身を固めた。その直後銀の塊が蛇に激突する。片羽の少年が操るスレイプニルだった。蛇の標的が銀の馬に瞬間的に切り替えられ、尾の鞭が振るわれたが、タツクル後崩れた姿勢を素早く立て直した少年は速度を上げ走り去り、すでにそこにはいなかった。

片羽の少年のおかげで仕切りなおされ、何度か呼吸をする間があったがまたしても蛇の眼光が鋭くなった。直後、すさまじい速度で下半身を伸ばし突撃する。先程彼女を落馬させたのと同じ一撃だ。

「二度も同じ手を食うわけないでしょ！」

などと言いながら、同じように受け止めた。跳ね退けられないように踏ん張るが、その突進力はやはりすさまじく地には羽なしの娘の足が刻んだ跡が長く残された。突撃に耐えきった娘は人間の部分を無視して、元居た場所へと走って戻る。一本に長く伸びきった蛇の体を、三日月を下から振り上げて切断してしまった。後ろの方から悲鳴が上がる。

「あたしだつて考えてんのよ。羽なしだからって馬鹿にしていると痛い目にあわせるわよ」

きつ、と鋭くにらみつけた蛇は残された下半身を収縮させ再び跳躍した。三日月を片手に持つ羽なしの娘の正面に着地すると手にした剣でもって切りつける。その力は女性の姿から考えると十分すぎる強さであったが、栗色の髪をした羽なしの娘にとっては脅威となるほどではなかった。だがその速度は速く、剣捌きも巧みで、特別な稽古を受けてきたわけではない羽なしの娘に反撃の隙を与えず追い詰める。

しばらく一方的な攻撃が続いていた。両者の距離が近すぎて片羽の少年も割って入ることが出来ず、このまま反撃の糸目を見つけれないまま倒されてしまうのか、と最悪の予感が脳裏によぎった。このままでは、と意を決し、再び蛇に向かってスレイプニルを走らせようとしたその時、突如周りを囲む幻獣の群れに乱れが起きた。四台の車両が突撃してきたのだ。

この場にいたすべての者の例に漏れず、予期せぬ参入者に術者の集中が途切れたのだらう。蛇の動きがわずかに止まり、隙が生まれた。それを見逃さなかった羽なしの娘は両腕に力を込め、体を回転させてアームズを振り抜く。遠心力をつけた三日月の刃が、防御が間に合わなかった人の身に食い込み、横断した。切り飛ばされた部分が宙を舞い、大地に落ちる。どんつと音を立てて少しだけ跳ね、うつ伏せに倒れた。わずかに顔を持ち上げたがそのまま力尽き、大気へと溶けていった。

「エディ姉さん、乗って！ 退却するよ！」

強敵を打ち取り、緊張が解けて腰を落としてしまっていた羽なしの娘に片羽の少年が手を差し伸べる。その手を取り、アームズを担いで後部座席に上がる。

「つ、疲れた……」

そう言つて弟の背中にもたれかかる。彼の羽はたたまれた状態で、上質な布団を思わせるように柔らかかった。

「お疲れ様」

片羽の少年は疲れを癒している羽なしの娘の火照つた体温を感じながら、彼女にかかる負担が少ないように運転には細心の注意を払つて本隊の後を追つた。

第三十九羽 「人の力」(後書き)

今回6千字強。敵はラミアでした(↑一応)。

つ、疲れた… 丸々半日かかりました。アクション書くの大変です…

これがいばらく続く…？ なん… だと…

第四十羽 「閃光の翼」

六台の車両の後をスレイプニルが走る。運転手の片羽の少年の背中には彼の姉がもたれかかっていた。彼女の座席の傍らには、長い柄をした、やはり巨大な三日月の形状をした刀身を有するアームズが固定されている。今は輝きを失い、先程まで絶えずしていた回転音は鳴りを潜めていた。

本隊の目的地はこの基地の司令部。前方の車両に従ったまま進む少年の耳に高い音が聞こえてきた。それは耳障りな鈍い不協和音で、聞く者の心に言い知れぬ焦燥を与えた。勢いよく金属が擦れ合う音だ。姉の隣にあるアームズからではない。その音は遠く離れていくことなく、だんだん近づいてきた事から、目的地の近くで何かが起きていることが容易に想像された。合わせて炸裂音が響くが、本隊車両の陰になってしまつて何が起きているのか分からなかった。突如耳に声が響く。周囲を満たす車両の起動音や進行音、そして前方の混沌を告げる轟音の中、ヘッドフォンもしていないのにはつきりとノイズ無く聞こえる人の声。今回の出撃の前にスレイプニルに取り付けられた通信機からだ。そこから伝えられた停車命令に従い、少年は銀の馬の速度を落として停車させた。羽に感じる姉の重みが少しだけ強くなる。先程のラミアとの激闘を制した直後に荒かった姉の胸の動きも今は穏やかになっていた。停車することは後部座席の栗色の髪をした羽なしの娘にも伝わっており、不意な動きで振り落とされないように弟の腰に回していた腕に込める力が少しだけ強くなった。十分に速度が落ち停車寸前になったところで少年は右手をハンドルから離し、姉の腕に添えた。もうすでに十分減速し、クラッチを切つて右足のペダルで軽く制動している程度だと言うのに背中にかかる姉の重みが増す。

「あー、幸せ…… 来てよかった」

「え？ 何、エディ姉さん？」

何も言っていないわよ、と惚けてみせる彼女の顔は明らかに赤く染まっていた。

— 40 —

合流した残り部隊を含めて八両の車両が集結したが、目と鼻の先にある司令部にはまだ突入していない。停車した一台の車両の中で負傷した羽ありの兵達が手当を受けていた。司令トレーラーを警備する第一から第三号車に乗っていた隊員が周囲の警戒に当たる。

小型の幻獣の襲撃は今のところ無いが油断はできない。負傷者の救護のためでもあるが、司令部への突入を見合せているのは近くで行われている一機のゴーレムと四体のキクロプスの戦闘のためだった。先程から響いていた金属音はゴーレムの戦闘音だった。

巻き込まれて要らぬ損害を被らないようにキクロプスが殲滅されるまで待機と指示があり、各々が決戦のための準備を整えていた。特に、司令部の中には先行部隊を瞬く間に全滅に追いやった正体不明の小型幻獣が居る。戦力を集中させるため出撃を依頼されていた羽なしの娘は、先程のラミアとの戦いで負傷したところの治療を受けていた。幸いすべて軽傷で本人も特に問題を感じていない。屋内の制圧となることからスレイプニルを運転する片羽の少年は外で待機とされ、待機中の襲撃に備えて小銃の操作法を一通り教わっていた。

すでに一体のキクロプスは撃破され、地に横たわって風に還って
いつていた。三体のキクロプスに囲まれていたが一機であってもゴ
ーレムは勇敢に戦っていた。キクロプスは力こそ非常に強いが鈍重
であったため、ゴーレムを翻弄することが出来ていない。しかしゴ
ーレムのパイロットもゴーレム同士の模擬戦闘訓練は積んでいても、
実戦経験は乏しく圧倒することが出来なかった。

一ツ目鬼の一体が輸送用車両を一つ鷲掴みにして投げつける。投
げつけられた車両をゴーレムが左腕で払い落とすと、積荷の何かが爆
発を起こして黒煙が覆った。それを皮切りにして残りの二体が同時
に銀の巨人に飛びかかった。巨人の視界を奪った鬼達は嬉々として
襲い掛かったが、黒煙を割いて掌が赤く輝いた腕が現れ、一体の鬼
の頭部を掴んでそのまま地面に押し倒した。地面に押し付けたまま
自重を預けて鬼の頭部を押し潰す。赤色に輝く掌が触れた地面から
は火柱が上がり、頭を失った鬼は動きを完全に止めて溶けていった。
二体を屠った銀の巨人が立ち上がる途中、左側から体当たりを受け
た。不安定な姿勢では力自慢の鬼の突進を防ぎきる事は出来ず、轟
音を立てて倒されてしまった。当然追撃が予想されたが、すぐに光
の半球が巨人を包み込む。その球体に対して鬼が何度も拳を振った
が全く突き破ることが出来ずにいた。

「まるで終末だな……」

その光景を見ていた隊員の一人が呟く。それが聞こえていた片羽
の少年は小さく頷いた。

「何言ってるの、去年のアンタ等とあたし達のドンパチと同じじゃ
ない」

「……そうだな、すまない。あの時は希望と信じていた。だがこう
して見るとわかる。あれは二度と繰り返してはいけない事だとな」

治療を終えて外に出てきてすぐに弟の代弁をするかのように苦言を呈した羽なしの娘は、真っ直ぐにスレイプニルに向かった。彼女のアームズの固定を解除し、起動を確認した。輝きを取り戻して小さな回転音を立て始めたそれを担ぎ、踊るように振り回し始め、体に全く支障が無いことを確かめていく。彼女は先程までとは違い銀糸で編まれた手袋をしていた。弟が訊くとアームズの振り回し過ぎで手の皮を傷めはじめていると忠告され、それで糸状に加工したミスリル製の手袋を与えられたのだと言う。

「しっかし何だ、お前の姉さん。あんな美人なのになあ。気も強いし腕っぷしも男以上。お前さんもフリーユージェルに乗れるし、精神感応率は飛び抜けているなんてレベルじゃない。兄さんも羽なしと思えない位に機械に精通して改良も得意。変な一家だな、ははは。」

……本来こんな汚れ仕事は軍人である俺達の仕事でなくてはいけなののに一般人の君達にこれほどまで支えられているとは、申し訳ない限りだ。だが、ありがとう」

かつてアースを卑下していたハイランドの民の姿はそこにはない。片羽の少年が笑顔で応えたとほぼ同時に、どおん、と大きな音が立った。音がした方を見ると、胸の辺りを蜂の巣にされた一ツ目鬼が膝を折って倒れたところだった。ゴーレムが伸ばした左手から陽炎が上がっている。展開されていたAMF（注：アンチマテリアルフィールド、ゴーレムの防御フィールド）は消失していた。ゴーレムが体勢を整えて立ち上がるのと同時に左掌から乱射した熱線に射抜かれたようだ。次いで右腕の装甲が開きミスリル製の誘導ミサイル、ガエボルグが射出された。広範囲に被害を及ぼす可能性があるため使用を躊躇^{ためら}っていたのだらう。射出された槍はすべて最後の鬼に突き刺さって炸裂し、それを受けた対象は跡形もなくなっていた。

「やるじゃないか、二体まとめて、だ。これは勲章ものだらうなあ。」

……さあ行こう、もう一息だ」

キクロプスを殲滅したことを確認し、外に出ていた隊員は全員乗車し、片羽の少年と彼の姉はスレイプニルに跨った。

最初に突入した部隊が乗りつけた車両が見えてきた。すぐに発進できるように運転手が居るはずだが、見えない。おそらく^{だほ}拿捕されてしまったのだろう。

全員の安否が気遣われるが、あと一步で司令部と言うところで再びキクロプスが三体现れゴーレムと交戦を始めた。しかし部隊は止まることなくそのまま行軍を続ける。この基地の部隊にとっても正念場だろう。おそらくこの後は基地にある全勢力が周辺に集められ、消耗戦覚悟の混戦となるはずだ。そうなると敵陣の中心に近いほど危険が増す。そうなる前に一気に頭を掌握し戦闘を終結させなくてはいけない。乗組員を失った車両を扇状に取り囲むように全車両が停車し、各運転手を残して隊員全員が降車した。先程と同様、周囲を警戒する部隊と突入部隊に分かれて作戦を開始した。

まず五人小隊が一つ潜入。無線にて状況報告を行っていたが、交戦開始の報告があった後すぐに連絡が付かなくなった。先行部隊と同様だ。増員して次の部隊を送り込もうとしていた時、入り口に人影が現れた。その背中には一対の羽がある。しかし取り囲む隊員達のような武装はしておらず、普段着同様で至って軽装だった。まるで近所の友人からお茶に誘われて出かけて行くようなそんな危機感のない恰好。

遠くではない場所から響いてくるゴーレムとキクロプスの戦闘音も相俟^{あいま}つて、言い知れぬ不安を煽った。

「やあ、よく来たな。わざわざ倒されに来るなんてご苦労さん」

見た目二十代の若い男だ。服装から見ても軽薄な感じが否めないが、一匹の狼を従え銀の書を携えていた。今さっき途絶えた通信を聞いていた指揮官が察し、全隊員に構えを維持したまま待機するよう指示を出し、現れた男に問いかけた。

「ゴンドワナの者だな？ 貴様一人か？」

「そっちはそれで全部か？ 少ねえんじゃね？」

「質問しているのはこちらだ！ 質問を質問で返すな！ 貴様一人で何とかできると思ってるのか？ 大した自信だな！」

「ああ、お前ら程度ならな。俺がこのベースのボスだ。格が違うぜ？」

「ほう、それではその一匹の犬がお前の幻獣か？」

「そうそう。俺、犬好きだからよ、気に入ってんのよ。こいつは特別だぜ」

「ずいぶん可愛いボスだな。今投降すれば無傷で済むが、その気は無いな？」

「まあな。その言葉はホントなら俺の台詞だったんだけど……。言い残すのはそれで全部か？ それじゃ行くぜ？」

この状況を見ても和解を申し入れる気など全くなかった。宣戦布告と同時に狼の姿が消えた。それは疾風と言うのがふさわしかった。初速からほぼ最高速とも言えるほどの加速を見せた一匹の狼は、近いところにいた者からその牙の餌食としていった。羽ありの兵達はるくに抵抗することもできず、次々と倒されていった。一瞬で接近し咬み倒していく相手に対して銃撃はできなかった。もしも撃てば

同士討ちとなりかねないからだ。部隊で戦う者達にとって最も相性が悪い敵と言えよう。しかし駆け回る旋風にも一点だけ弱点があった。それに気付いた一人の隊員が躊躇ためらわず引き金を引いた。対象は銀の書を持つゴンドワナの羽あり。しかしその銃弾は青く光る壁に阻まれ届かなかった。そして引き金を引いた隊員もその直後に狼の牙の前に倒れた。

「ははは、ご名答！ 魔道士を倒せば幻獣は消える。俺を殺やるのが一番早い！ でもな、ご覧のとおり。この魔道書には防壁発生機能もあるのさ！ この辺も特殊書の所以よ！ けどな、機能を付加すればするほど扱えるヤツは少なくなる。選ばれしハイランドの民のさらにエリートの俺様に敵うと思うなよ！ どうしても俺を殺やりたかったらシモンのじじいくらい連れてこいよ。あのクソじじいくらいだぜ？ 俺がどうやって勝てなかったのはな！」

勝ち誇るゴンドワナの魔道士の声が響く。仲間が次々に倒されていくにも関わらず、ロディニアの兵士達は打破の糸口を掴めないままだった。このままでは全滅しかねない。

そのような人を喰らう旋風の渦の中へと果敢に飛び込む者がいた。その背中には羽は無く、代わりに巨大な三日月が輝いていた。長い柄を自在に振り回し、三日月の輝きがもう一つの渦を作る。先にあった旋風は治まり、狼がその姿を現した。次いでもう一つの渦が消え、栗色の髪をした羽なしの娘が銀糸の手袋を嵌めた手で髪を掻きあげながら呟いた。

「何でまた犬なわけ？」

「犬じゃねえよ、狼さ！」

言うのが早いか再び狼が飛びかかった。羽なしの娘は素早く体を開いて鎌鼬かまいたちの如き牙を避け、すれ違いざまに三日月を振るったが狼の

速度を捉えることは叶わなかった。縦横無尽に駆け回る狼の咬撃を躲しながら度々反撃するがやはり相当に相手は速い。何度か危ない局面があつたがしかし、前方からの突進を先読みし、躲した瞬間に刃とは逆方向の柄を振り下ろす。ついに正面から飛び込んできた狼を地面に叩き伏せた。

「じゃあこれはどうだよ！」

すぐさま姿勢を立て直した狼が輝き姿を変えていく。後肢で立ち上がり、筋骨隆々の逞しい姿をした人狼の姿となると一声遠吠えを上げて駆け出した。先程までの速度は無いが力が強く、拳や蹴りを巧みに操り、息をつかせぬ連撃を繰り出す。羽なしの娘もアームズの柄で防御し、蹴りや柄尻での小刻みな打撃で反撃するが、本命の刀身での一撃を繰り出すことが出来なideいた。一度始まるとなかなか治まることの無い人狼の攻撃にじりじりと追い詰められ、ついには右足での蹴り上げを受けることが出来ずアームズが弾かれてしまった。しかし彼女は悲観することが無かった。宙を舞い大地に落ちたアームズを拾う余裕はなかったが、むしろ両手が自由になったことで素手での戦いを挑む。素早さが増した彼女の攻撃は間違いない人狼の手数を抑え、そして致命傷を与えるほどではないが少しずつダメージを与えていた。

なかなか倒れない相手に痺れを切らした術者が人狼を後ろに飛び退かせ、間合いを取らせた。その直後、人狼は低いが速度のある前方への跳躍と同時に体を捻り、後ろ回り蹴りを放った。それを羽なしの娘は両腕を交差して防御する。歯を食い縛って腹筋、背筋、下肢の筋肉すべての力を集中。かなり後方まで押し込まれたが、防御を崩さずに衝撃をこらえきった。お返しとばかりにそのまま人狼の蹴り足を掴み、地面に向かって力任せに叩きつける。そしてその手を離すことなくもう一撃同じように地面に叩きつけた。最後は足を掴んだまま自分を中心に振り回して、十分遠心力が着いたところで

放り投げた。そのまま飛んで行った人狼は、無人の車両の横つ腹にぶつかり倒れ、地面を嘗めていた。

術者の持つ銀の書が輝いて、立ち上がるように命令が下されるよりも先に背中を踏みつけられ、さらにその首筋には巨大な三日月の刃が突きつけられた。羽なしの娘だ。人狼を車両に向かって投げつけた後すぐに、地面に転がっていた自分のアームズを拾い上げてきたのだ。

ほぼ同時に離れたところで大きな音が立った。ゴーレムが悠然と立っている。周囲には何も無く、微かに煙のようなものが大気に散って薄くなっていくだけだった。キクロプスを全て打ち倒したのだ。周りの兵士達から歓声が上がる。

羽なしの娘が呼吸を整えながら術者に向かって呼びかけた。

「羽ありのくせになかなかやれるみたいだけど……　ここまでよ。降参したら？」

「くそつ、なめんな！　上級書の真の力を見せてやる！」

苛立ち叫ぶのと同時に飛び上がり、銀の書を開くと文言もんごんを唱えた。それと同時に人狼が四つん這いとなり黒ずんだかと思うと、ただでさえ大柄だった体躯がさらに膨れ上がっていく。その異変を目にした羽なしの娘は飛び退いた。咆哮を上げながら巨大化する狼の左右の肩の辺りがさらに膨れ、形を成していった。

伸びた先端が大きく裂けていく。それは紛れもなく巨大な牙を持つ口で、見開かれた目には燃え盛る炎が宿されていた。

「はっはははははは！　どうだ、地獄ケルベロスの番犬がワー・ウルフの真の姿だ！　今まで制限してやってたんだよ！　ここからは全開で戦ってやる。女もその人型も俺の前じゃあ相手にならねえことをはっきりさせてやる！」

三日月を構える羽なしの娘の眼前に、牙を剥いたその巨大な鼻面が近づく。それは巨大な三つ首の魔犬の正面の顔で、周囲には肉食獣独特の唸り声が満ちていた。地獄を守ると言われる圧倒的な威圧感の前に、どのように抵抗したところで次の瞬間には一口に噛み千切られてしまう事を瞬時に理解した女の諸手はわなわなと震え、奥歯がカチカチと鳴る。呼吸は乱れ、最早足は竦みきつてしまい、立っていられることが奇跡とも思えるくらいに膝が笑っている。

「はっ！ 後悔してももう遅え。これが本当の俺の力！ 全部燃やして飲み込んでやる！ 俺が、負けるわけがねえんだよ！」

魔犬の口が大きく開かれ緩やかに近付く。まさに彼女が立つ地面ごと羽なしの娘を飲み込んだとした時、彼女の後ろから一筋の太い光が走り魔犬の正面の頭部に命中し、直後に周囲に閃光が走った。その目も眩むほどの光に反射的に目を閉じてしまった羽なしの娘はしばしばと瞬きまばたをして今何が起きたのか確認しようとしたが、奪われた視覚が回復するのには時間を要する。背後でがしゃん、と金属製の物を地に放った音がした。

目を擦り、瞬きを繰り返しているうちにだんだんと、まだ多少はちかちかとするが何とかぼんやりと見えるようになってきた。見えるようになってきた彼女の目に初めに飛び込んだのは、あざし 罅を上から丸ごと失い、支えとなる歯牙を半分無くし舌をだらしなく垂らした魔犬の姿だった。きよんとする彼女と同じく、魔犬も動きを止めている。数秒経つと、残された左右の口から大絶叫とも言える咆哮が上がった。それとほぼ同時に再び太い光線が放たれ、向かって左側の頭の頸部を貫いた。強烈な閃光が周辺を満たす。一瞬早く目を閉じていた羽なしの娘は、今度は正面ではなく自分の背後、すなわち光が来た方を見た。

そこにあつたのは、一撃を放った後に大輪の花を咲かせた一丁の高出力レーザーライフル。

放った一撃の負荷に耐えきれずバレルが弾けている。狙撃手は一撃で使い物にならなくなったそれを彼の左傍らに放り、自分の右に置いていた同型の最後の一丁に手を伸ばし、狙いを定めた。教わった通りに右足を後ろに引いてしゃがんだ状態で左膝を立て、その上に左肘を置き、銃身がぶれない様に固定する。ストックを右肩にしっかりと当て狙撃した反動で吹き飛ばされないように全身に力を込めた。左だけの翼も微動だにしない。

彼の視線の先にあるのは正面の顔を失い、右肩を挟まれ、同じく右の首をもがれて崩れかけている魔犬。狙いをつけているのは魔犬の前胸部。胸骨を貫き心臓を挟む射線だった。これ程の巨大な怪物であろうと先程のような威力の一撃は致命傷となろう。

「姉さん、伏せて！」

片羽の少年の呼びかけと同時に頭を押さえて地面に腹ばいになる。一瞬のチャージの後、前の二発と同じ光が放たれ、狙いを付けた通りに魔犬の胸を貫いた。巨大な魔犬は先の一撃で挟まれ支えの利がなくなつた右側によるめき、二歩前に進んだところで完全に崩れ落ち、轟音とともに大地に倒れ伏した。

銀の書を開いて空に立っていた男は眼下の光景に呆けており、手にしていた魔道書を落としていた。同時に彼を包んでいた青い光の壁も消えた。

息を吐いて片羽の少年が立ち上がる。一撃で花開き、廃品となつたライフルを下すが、撃ち倒した後も残心を忘れる事無く、力強く前方を見据える。その顔は決意に満ちて鋭く引き締まっていた。

このような凛々しい姿を今まで一度として見たことが無い。胸に湧くこの想いを言葉に表すこともできない。羽なしの娘は腹ばいの状態からごろりと姿勢を変えて天を仰ぎ、胸を押さえて恍惚としていた。

第四十一羽 「従える者」

「全機、出力正常に戻りました」

「エネルギー残量低下も停止。現在すべて平常です」

突然高度を落とし、あわや機能停止に陥りかけた円盤状の万能レ
ーダーシステム、ヘイムダルも正常に稼働し始めた。ヘイムダルに
限らずミスリル製の機械類のおよそすべてが、一時的に制御不能と
なったために騒然とした司令トレーラー内の状況も平穏を取り戻し、
接近中の本隊との連絡および捕虜の管理をはじめとした事務的な作
業を再開した。戦闘行為終了後の平定作業にすべての労力を割かな
くてはいけない今、一つでも混沌の種があつてはいけない。二機の
ゴーレムが悠然と聳え立ち、八台の高機動戦車によって東西南北の
城壁の門を制圧している事に加え、グングニルを搭載したスレイプ
ニルが物言わぬ圧力を放っているが、現在は数の上で言えば間違
いなくロディニアの方が不利。僅かな綻びから蜂起が起こり一気に瓦
解しないとも言いきれない。一時的とはいえ突如生じたすべての機
器の原因不明の機能不全、蜂起の引き金となりかねなかったそれは
幸いすぐに治まったため、波紋が広がらずに済んだ。

「何だと言っただ、今の現象は……」

そう呟いた司令官が見つめる先のトレーラー内壁のモニターには
銀に輝く書を抱えて明るく笑う片羽の少年と、何やら喚わめいている彼
の姉、そして彼女を羽交い絞めをしている少年の兄が映し出されて
いる。それは彼らが来てからこの隊にとっていつもの光景ではあつ
たが、司令官の視線は片羽の少年に注がれていた。ロディニア側が
確保した魔道書はすべて輝きを失い、くすんでいたはずであった。

「どうしました？」

「……今の、似ていると思わないか？」

上官の呟きにオペレーターの一人は一瞬小首を傾げたが、すぐに小さく、あつと声を上げた。

「……彼らの監視を怠るな」

「仮にも我々の恩人の彼を疑う、と？」

「……疑いを晴らすための監視だ。時系列的にも彼が原因とは考えられない。だが今の現象をもしもあの少年が意図的に起こすことが出来るとなれば、とてつもない事になる。それこそ世界を揺るがしかねないほどの、だ」

指示を受けたオペレーターは無言で小さく頷き、手帳を取り出した。それを開き付属のペンを手に取ると、開いた手帳から飛び出すように目の前の空間に画面が浮かび上がった。手際よく流れるような手つきで画面に触れて操作していくと、画面に内壁のモニターと同じ映像が縮小された状態で現れた。手にしたペンで片羽の少年に丸を付け、やはりまた流れるような手つきでいくつかのアイコンにタッチしていくと、開かれた手帳に吸い込まれるようにして画面が消えた。畳んだ手帳を軍服の胸ポケットにしまうと、再びコンソールに向き合い自分の作業に戻った。モニターを凝視する司令官は右手を口元に当て、今度は誰にも聞かれないように意識して再度呟いた。

「それとも…… 他に在ると言うのか？ あの少年と同じような存在が……」

すべての機器、計器の類が異常を示した数十分前。

「で、次は何を聞きてえんだ？」

腕を後ろに回されて手錠をかけられたこの男の名前は、ネフュー・バズと言った。トリラム兵站基地護衛幻獣一個師団師団長。若干二十三歳にして階級は中佐だった。素行や態度の軽薄さに問題が多々あり、また極めて自尊心の強い男であるため、年代の近い軍部の人間からは疎ましがられ易い人物だった。しかし重要拠点の護衛の責務を任されていることから、その実力は確かで、上層部から高く評価されている事が伺いしれる。

そんな彼がぺらぺらと Gondwana の情報を漏洩するとは考えにくかった。実際、尋問が始まった時もたとえ拷問を受けようとも何一つ喋らないと宣言し、あらゆる質問に対して黙秘を貫いていた。自白剤の使用も懸案事項として上がったが、国際規約に違反する内容を行っては後々の不利となるため実施されなかった。勿論暴力による自白強要も同様だった。彼らは国を代表とする存在であり、犯罪者、ならず者の類ではない。その為取り調べは難航したが、最終的に Gondwana の羽ありは自ら口を割った。一向に進まないヨハンとニベルの取り調べに業を煮やし、交代すると名乗り出たライオスとヒューゴがこう言う類の人間を挑発し、誘導する事に長けた男達だったのだ。

「時間の無駄だ。自分の名前を聞かれても、分からない、の一点張りの9番への尋問タイムは終了」

「……何だよ、9番って」

「あ、知らねえのか？ なあどう思うよ」

「ああ。こいつは間違いないく9番だな。9番に聞くことはないぜ」
「だから何だよ、9って」

「お前、自分の名前も分らないだろ？ 腕が立つてもそんなやつが今後の作戦展開、ゴンドワナ本国へのルート、この基地がどこから資材を搬入して、どう分配するように管理していたのか、資材を加工する工場群の場所がどこか、なんて軍略として必要な情報なんてわかるはずがない。9番以外なんだってんだ、なあ」

「ああ、全く持って9だな」

「9番」

「9番さん」

「わかったぞ、バカって言うてんだな、お前等！」

「バカなんていつてねえぞ、9番」

「俺等の持ち物に9がつく物ってなんかあったっけ？」

「ないな」

「ないか」

「不吉だしな」

「そう言や、さっき九号車が大破したな」

「パねえ。9、まじハンパねえな」

「で、9番。とりあえず当たり障りのない世間話からしよう。当たり障りって言葉はわかるか？」

「あー、うつせえ！ ネフュー、ネフュー・バズだ！」

彼の自尊心の高さが今回の仇となった。はじめは極めて強情な態度をとり、一切の黙秘を貫いていたのだが。ある意味性根は裏表を持たない、素直な青年のようだ。

彼らの現在の主要兵器、魔道書の起動法を問う。このネフュー・バスが有していた特殊上級書「地獄の番犬」^{ケルベロス}をはじめとし、吸収した数冊の魔道書のいずれもがどう操作しても全く反応を示す事無く、

輝きを失ったままだった。ミスリル銀製の書物から発生する力場フィールドに形を与え、それを発生源から切り離して操作するこの超兵器の解析は、軍事的な理由だけでなく、科学的探究心を酷くくすぐ撥る。しかし口ディニアのゴレム同様、その存在自体ゴンドワナ特有のものでさらに重要機密そのものだ。その事は魔道書を有するゴンドワナの人物であればすべての者が認識しているため、当然簡単に口を割ることが出来るはずがない。しかし予想に反して一つの交換条件を提示した上で承諾した。その条件に尋問をしていたライオスは小さく困惑した。意図がややつかめない。

「だからよ、その羽なしの女に教えるって言ったんだよ。両手縛られてるから変に手エ出したりできねえから良いじゃねえか。そもそも野郎相手の趣味なんかねえし。こっちだつて機密を漏洩ろうえいしてやるうって言うんだ。少しくらい我が儘聞いてもらつていいんじゃない？」

ライオスとヒューゴの両名は逡巡し、トレーラー内の上官に許可を求めた。一分足らずの時間があり、電磁錠による拘束を強化した状態であれば認めると回答が得られた。ライオスが立ち上がらせ、ヒューゴがゴンドワナの羽ありを後ろ手に拘束するミスリル製の手錠の、左右をつなぐ枷の部分にあるパネルに触れた。するとそこから輝く輪が五本現れ、ネフューの胸から腰にかけて等間隔に並び締め付けた。その状態で上半身を自由に動かせなくなった事を確認した後、先程と同じように地面に座らせた。

「はあ…… わかったわ」

どうか要求通りに相手をしてやってほしい、と懇願された羽なしの娘はしぶしぶ拘束された羽ありの傍らに寄った。拘束された羽ありはそんな状態であってもそこそこ上機嫌になったようだ。しかし

とても小声で、傍らに立っているだけでは聞き取ることができない。必然的に耳打ちされるような形になった。しばらく大人しく聞いていたが、だんだんと彼女の眉根が寄っていくのがわかった。痺れを切らして立ち上がり、文句をつけた。

「ちょっと、細かい専門用語とかわかんないわよ。『しきべつあい
でいー』？ 『せいたいにんしょう』？ 『ぱすこーど』？ 分かるように喋りなさいって」

「はあ、本当にアースは遅れてんだな。こいつらと付き合うとかマジでストレスだわ、考えらんねえ。あー、もういいよ。理解しろ何て言わねえからとりあえず俺の言った通りに繰り返せよ、な？」

「腹立つわね！ いちいち偉そうに！ あたしもうイヤよ！」

「あーそうかい。それじゃあトップシークレットの色々は諦めるんだな」

そんな事は知った事ではない、とその場を去ろうとした羽なしの娘を慌てて引き止め再び懇願する。ここで一つでもゴンドワナの手の内を知る事が戦局を左右し得る事、これからの被害を抑える手立てを講じられる可能性に繋がる事。羽なしの娘もそれを理解できないわけではなかった。

「そうそう。別にいいじゃねえか、やらせてくれて言ってるんじやねえし。ま、時代遅れの野暮ったい羽なしなんて願い下げだけだな」

「マジムカツクんだけど、こいつ…… あーもう。ゆっくり言いなさいよ」

ゴンドワナでは魔道書を「グリモア」と呼称する者が増えているとの事だ。そのグリモアに関して彼が吐き出した内容は次のようだ

った。

一・グリモアにはそれぞれに登録された識別IDがあり、それを入力することでセキュリティロックへのアクセスが開始される。

二・生体認証として入力者の指紋、声紋、および生体エネルギー波長の三項目があり、うち二項目以上が一致することでロック解除のパスコードアクセス権が得られる。

三・パスコードは登録者が任意に七つ登録しており、それは数字のみならず単語での登録も可能。

四・パスコードを一つ解除することで次のパスコードの入力が可能になり、パスコードを連続で四つクリアすることでロック解除となる。

五・なおコードの出現は登録された物からランダムで決定され、入力ミスは三回で登録者のアクセス権の失効およびパスコードも初期化され、外部からのアクセスは不可能になる。

「……随分と用心深いな。実質所有者以外は扱えない、ってわけか」
「幻獣が倒された時は、な。敵軍の手に落ちて解析されることを防止するのが目的だ。つまりお前らが持つてるグリモアは全部ガラクタ同然ってことだ。本自体は読めるんだけどよ、起動すらしねえよ」

初めからその事を分かっていた為、魔道書の再起動条件を漏洩したのだろう。おそらく彼の性格上、自身が持つ魔道書のパスコードを教える事はない。それこそ命と引き換えにしても教えないだろう。彼は自分の持つ力に絶対の自信を持ち、そしてそれを国から認められているのだ。彼にとって、彼に与えられたその幻獣は軍人としての彼のすべてと言っても良いのかもしれない。その事を察しているロディニアの兵士達は全員言葉を継ぐことは無かった。その様子を見渡したネフューは鼻で笑い、傍らに控える栗色の髪をした羽なしの娘に呼びかけた。

「それと最後に、一番重要な事だ。バカじゃねえってんならしくかり聞いて伝えるよ」

しかたない、とため息を一つ吐いて、腰に手を当てていた羽なしの娘はしゃがみこんで再び耳をネフューの方に近づけた。相手もわずかに首を伸ばし、そっと、穏やかに呟いた。

「アンタ、本当にイイ女だな」

「アンタ、ほん…… って、何バカなことやって」

耳だけ向けていた栗色の髪をした羽なしの娘は、顔を顰^{しか}めながら相手の方に向き直ってしまった。その瞬間を狙っていた羽ありの顔が一気に近づき、軽く吸う音を立てた。一瞬の出来事で羽なしの娘も避けることができなかった。唇を奪われた彼女は驚き、左手の甲で口を押さえながら一気に離れるしかなかった。

「ははは、サンキュー！ これくらいはサービスしてく」

言い終わる前に両手を後ろに縛られた羽ありの男が軽く三メートルくらい吹き飛び、地面に転がった。天を仰ぐような形で倒れていた男の胸の上に何かが乗っかる。逆光のために男からはよくわからなかったが、それは人だった。さらに吹き飛ばされた衝撃で、眼前の景色はちかちかと瞬いているような状態だったため詳細は分からなかったが、上に乗る者の背中に羽は無い。電磁錠による拘束だけでなく、上半身を完全に制されてしまっているのに起き上がること、跳ねのけることもできない。押さえつける者が拳を握り振り下ろすのを受け入れるしかなかった。絶望に近い感情が支配する中、拳の雨が降るのを見続けた。

顔を紅潮させきつた羽なしの娘は、目を見開き、齒を食いしばり、息を切らしながら組み伏せた男を殴打し続けた。ただ、ただ殴打し続けた。

「やめろ、エディ！ 死ぬ、死んじまう！」

兄の声を聞き入れる事無く、ただ殴打し続ける。彼女が拳を振り上げる度に赤い飛沫が辺りを汚した。彼女の嵌めていた銀系の手袋も血の染みが出来始めていた。

見かねた兄が走り寄って妹を羽交い絞めにして引き剥がした。組み伏せられて殴り続けられていた男はすっかり顔を腫らし、鼻と口からは多量の血を流している。すっかり抵抗する意思を失っている彼は、ロディニアの兵士達に両脇を抱えられて引きずられて安全域に連れて行かれた。真っ赤になって鬼と言つのがふさわしい形相で息を荒げていた羽なしの娘は、兄に取り押さえられてから次第におとなしくなっていき、俯いたまま小さな声で呟き始めた。

「羽ありなんか…… 羽ありなんか……」

突然の惨劇に言葉を失っていた片羽の少年も慌てて駆け寄ってきた。そして俯いていた姉の顔を覗き込み、次の瞬間弟も立ちつくしてしまった。ぼろぼろと大粒の涙が紅潮しきつた姉の頬を流れていく。口をへの字に固く結ばれ、肩が震えるのを必死に耐えている。

「何だよ、キスくらいで大騒ぎしやがって…… まさか初めてだとか言うんじゃねえだろうな？ マジかよ。はっ ごちそーさん」

「……それだけボコられての減らず口は大したもんだな、テメエ。悪いことは言わん、黙れ。後で俺にも一発ぶん殴らせろ。それくらい良いだろ？ 俺が今エディを離れたらお前は間違いなく殺されるんだからな」

「はっ、やれるもんならやれよ。捕虜を私情で殺害って記録が残るだけだぜ？ そうなったらまずいのはお前らロディニアの方だろうが。知ったこっちゃねえけどよ」

確かにその通りだった。戦闘行為での殺傷は不可抗力として認められるが、捕虜に対しては一切が認められていない。しかも査問を行う場合は記録の改ざん、削除が不可能なメディアに記録することがハイランド間の国際法で義務付けられており、万が一捕虜の負傷あるいは死亡が起こった場合、それが避けようのない事故であったとしても記録が無い場合は如何なる事情があろうとも立証能力は皆無とされ、すべての罪、賠償責任を課せられることが明文化されている。その事はハイランドの正規軍に属する者にとって周知の事実であった。その事を逆手に取り、このゴンドワナの羽ありは今のようない行動に及んだのだ。彼の誤算は、軍事行為に関わるハイランドの者であれば常識的な事を羽なしの娘達が認識していなかったことと、彼の取った行動がまさかここまで彼女の逆鱗に触れる事になると思ひもしなかったことだった。

瞬時に沸点に達し爆裂した後も彼女の全身に満ち溢れていた怒りは、今ではすっかり感じられなくなっていた。代わりに落胆と失望喪失感が支配している。目は焦点が合わず、どこを見ているのか分からない。髪が顔を覆って影を作っていた。ぶつぶつと呟く声に皆が耳を傾けた。

「嫌い…… 嫌い、大嫌いよ…… いったも、いったもあたしが大切にしている物を平気な顔をして盗っていく…… なんて？ あたしが何をしたって言うのよ…… 羽ありなんか…… 羽ありなんか、大っ嫌いよ！」

必死に堪えていた嗚咽が堰を切り、周囲を慟哭が満たしていた。

そんな姉の姿を沈痛な面持ちで見守っていた片羽の少年がその場を慣れる。今までの彼であつたら姉を宿め、慈しむために留まっていただろう。そう予想していた兄が少年に呼びかけるが、小さく首のみ振り向いただけで口を開くことは無かった。魔道書を一冊手に取るとページを捲り、一節を読み上げた。

「四肢は太く力に漲り、その^{あきと}顎に輝く鋭き牙はすべての物を食い千切る。大蛇の尾を持つその体は青銅の毛に覆われ何物も貫き通すと能^{あた}わず。業火をその身に宿す巨大な犬の姿をした三つ首の^{けもの}獣の名はケルベロス。彼の^か巨獣の守る門をくぐる者よ、恐れよ、一切の希望を捨てよ。ここが、こここそが地獄。地獄を訪れた生者、地獄から這い出す亡者はすべてこの^{けだもの}獣の目を逃れる事叶わず」

「俺のグリモアに触ってんじゃねえよ！ だから、聞いてなかったか？ 読むだけならできるんだよ。あー、ホント馬鹿が多くて吐き気がする」

咳き込みながら両手を縛られたままの羽ありが凄むが片羽の少年は全く意に介さない。吐き捨てるように嫌味を言う羽ありの男に一瞥をくれると本を閉じた。その眼は今まで彼が見せたことが無いほどに冷たく怒りに満ちており、それは彼の兄の背筋すら凍らせた。直後に書が輝く。

「まったく、何でロディニアもアースに居つ……」

その先は言葉にならなかった。片羽の少年の背後にははっきりと三つ首の巨大な魔犬が姿を現していたからだ。肉食獣独特の唸り声が周囲を満たす。

「おい…… おい…… ウソだろ？ なんて起動するんだよ、さっ

きお前が撃破したじゃねえか…… フィールド形成維持のためのエネルギーだってまだ回復してねえはずだぞ！」

上級魔道書の象徴であるかのように銀の書の中心に輝く青い宝石はすでに砕け、消失していた。莫大なエネルギーの供給源を絶たれていると言うのにその姿を現した魔犬は、少年の呼び声に従い魔界から召喚された本物の魔物のようで、拘束されている羽ありは、本来の持ち主であるはずなのにその威容に圧倒されてしまっていた。

「……知らないよ、そんなこと」

羽ありの質問に答えるつもりはない。片羽の少年の怒りを具現化したかのような、光沢のあるダークブロンスの被毛に覆われた地獄の使いは一步を踏み出し、その重量のある足音が響き渡った。それと同時に周囲に様々な異変が起こっていた。ゴンドワナの羽ありを拘束する電磁リングが数を三本に減らし、司令トレーラーの上空で起動していたヘイムダルが突然高度を落とし、その回転も一時的に停止しそうなほどに低速になった。その突然の異変に、トレーラーの内外でざわめきが起こっていた。この場に居るロディニア側の者達は、この現象を引き起こしているのがたった一人の少年であろう事を直感していたが、それを止める手立てがない。

周囲の人間が全て、今目の前で起きている異常事態に圧倒されている中、片羽の少年の兄が叫ぶ。

「おいお前！ 謝れ、謝れって！ 俺じゃそつちまでは止められん！」

「え？ え、俺？ な、なんで？」

「この流れでお前以外いねえだろ！ 他の誰にウインが怒るんだよ！」

まさか第三者が、しかも自分を打ち破った者が突如矛先を己に向けてきたことに困惑を隠せていない。しかも今少年が手にしている物の危険性は、持ち主である彼が最も理解している。直前の自分の言動に問題があったのだろうと言う推測は容易く、拘束された羽ありは頭を下げて謝罪した。突然の出力低下のために電磁錠から発生する拘束リングの本数を落としているとは言え、その拘束力は人を一人抑えつけるのには十分だ。上体の自由が利かない状態だが、下げられるだけ頭を下げる。

「す、すまねえ！ もうアースを馬鹿にしねえよ！ アースにもお前みたいなやつが居るなんて知らなかったんだ！」

「どうでも良いよ、そんなこと。アースが嫌いならそれでいいと思うよ。嫌いな事を無理に隠してるような人と仲良くしたって、お互い辛くなるだけだし。それに僕はお前を絶対に許さない。お前なんて、姉さんの涙一滴の価値もないよ」

虫も殺さなそうな程に優しげで、戦場におよそ似つかわしくないと誰もが思っていた少年が、今ここにいる誰よりも、どの兵器よりも鋭く切り裂く刃となって迫る。最大の危機に不正解を出した羽ありは、顔を腫らし、狭くなった視界のまま、この少年の怒髪が天を突いた原因を必死に探した。羽なしの娘が涙を浮かべたまま睨みつけているのが目に入った。二人の容姿は違えども、その意思、姿が重なって映る。少年の行動はこの娘の怒りの代弁であることによりやく気が付いた。

「すみませんでした！ 俺、一目惚れだったんだよ！ こんな状況だったからあんな風に…… ごめん、許してくれ、な？」

片羽の少年の顔がさらに険しくなった。完全に地雷を踏んだ捕虜の羽ありの突然の告白に周囲が凍りつく。誰もが覚悟した。目を瞑

り黙禱を捧げる者、十字を切る者までいる。そして、正に決死の告白を受けた栗色の髪をした羽なしの娘が大きく息を吸い込んで叫んだ。

「羽ありの男なんてお断りよ、バーカ！ 死ねーっ！」

僅かの間があつて、明るいテノールの笑い声が響き渡った。ずばつと爽快に切り捨てた姉の返答は、片羽の少年の先程までの、触れた物を見境なく引き裂く氷のような表情を融かし、いつもの少年の顔を呼び覚ました。叫んだ事でまたスイッチが入ったのか、兄に羽交い絞めにされたまま、妹は再び両腕を振り回して、ジタバタと暴れ出す。

それとともに禍々しい魔犬も姿を薄くし、光の粒となつて風に溶けていった。

第四十一羽 「従える者」（後書き）

この回を書いている途中にふつと浮かんだ一場面。本編では出ないでしょうし、もったいないので後書きに残しておこうと思います。

「お手！」

「ハッハッ」

「おかわり！」

「ハッハッ」

「伏せ！」

「クウーン」

「ちんちん！」

「ハッハッ」

「おおー、いい子いい子。すごいすごい。幻獣も捨てたモンじゃないわね」

栗色の髪をした羽なしの娘が抱き寄せて撫でると、灰白色の大きな狼の姿をした幻獣が彼女の頬を舐める。フィールドであるため唾液が付くことは無いが、生き物のようなぬくもりが伝わり、幻ではなく確かにそこに存在がある事を実感した。

「僕はケルベロスに乗ってみたいんだけど。でも今はケルベロスにしちゃいけないって言われたんだ。エネルギーが足りなくなるんだって」

「良いんじゃない？ これで十分かわいいし」

「おい、遊び道具じゃねえぞ。ってか何でグリモア開いてねえのにそんなに動くんだよ」

「そう言えばこの子、すごく速いのよね！　きつと棒を投げたら落ちる前に取ってくるわよ！　ウイン、やってみよ。投げるから指示してあげてね」

「って、ちょい待ち！　マジか？！　やめ　うおおああああああっ
！」

未だに後ろ手に拘束された状態の羽ありを、キラキラと輝く笑顔で蹴り倒し、彼の両足をつかんで、自分を中心にぐるぐると振り回し始めた。

「そーれ、取ってこーい！」

投げっ放しジャイアントスイングを受けた羽ありが遠くに飛んでいく。受け身がとれないこの状態で、この勢いで何かに激突すれば、good　bye　現世　間違いなし。

片羽の少年の傍らに「おすわり」の状態で控えていた狼の姿が消え、狼の居たところには大きく砂煙だけが残された。空に向かってどんどん遠ざかっていく羽ありと、その下を太く長いふさふさとした尾をなびかせて追いかける狼の姿が微笑ましい。

「こんなんでも許してもらえんかと思っただけじゃねーぞー！　バーカ
！」

罵声を浴びせ、羽なしの娘は立てた親指を勢いよく地面に向けた。その直後、追いついた狼が高く飛び上がり、空中で見事にキャッチした。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n1679i/>

羽

2011年12月15日12時45分発行